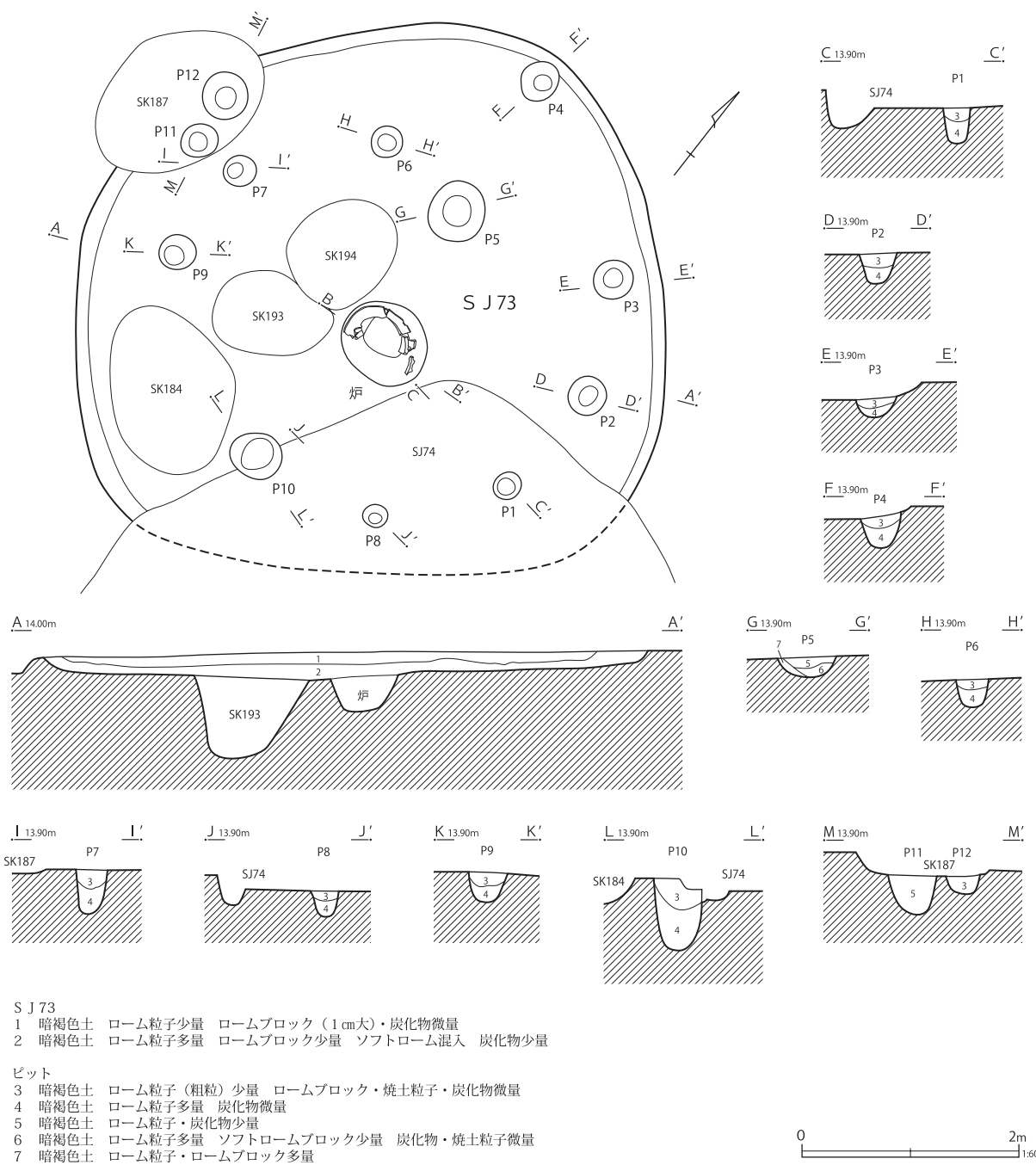


第 395 図 第 73・74 号住居跡

第 73 号住居跡 (第 395 ～ 403 図)

第 73 号住居跡は、X・Y－19・20 グリッドに位置する。南側で重複する第 74 号住居跡は床面下から検出された。第 184・193・194 号土

壇を壊している。第 187 号土壇に壊されている。平面形態は隅丸方形である。平面形態と炉を基準とした主軸方位は、N－37°－W である。規模は長径 5.42 m、短径 5.00 m、深さ 0.25 m である。



第 396 図 第 73 号住居跡 (1)

柱穴は 12 本が検出された。いずれも規模が小さいもので、壁に沿って配置されている。

炉はほぼ中央から検出された。第 399 図 4 の浅鉢形土器が埋設される埋甕炉である。平面形態は楕円形である。規模は長径 0.86 m、短径 0.71 m、深さ 0.38 m である。

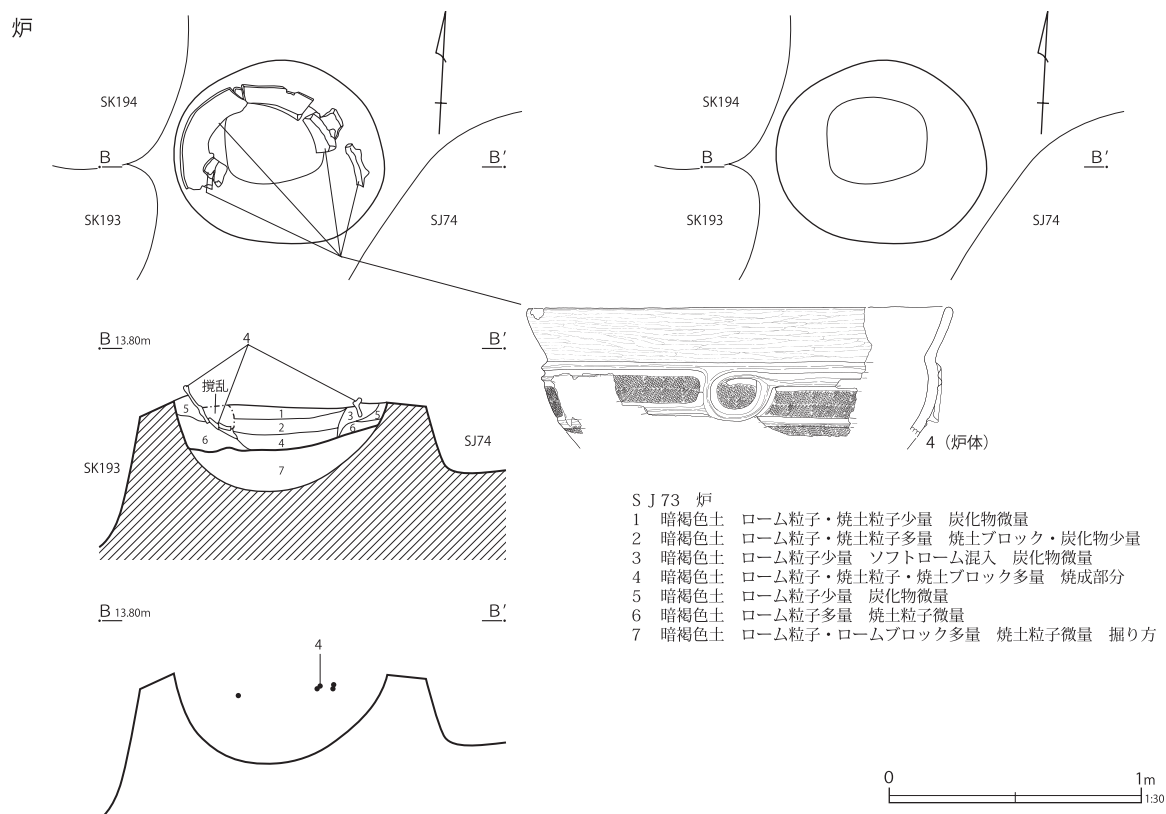
遺物は主に第 1 層中から少量出土した (第 398 図)。

住居跡の時期は炉体土器と出土遺物から中期末葉の加曽利 E III 式期である。

第 399 図～403 図は出土した遺物である。

第 399 図 1～4 は器形復元が可能であった土器である。

1 はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁から胴部が残存する。口縁の内湾はごく緩やかで胴部の括れも少ない。口縁は 4 単位の突起が貼付される。



第 397 図 第 73 号住居跡 (2)

第62表 第73号住居跡柱穴計測表 (第396図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	26.0	32.4	P 2	38.0	26.9	P 3	38.0	21.3	P 4	40.0	30.1	P 5	58.0	18.7
P 6	30.0	26.5	P 7	30.0	40.2	P 8	22.0	22.6	P 9	32.0	27.7	P 10	48.0	73.3
P 11	34.0	22.5	P 12	46.0	36.5									

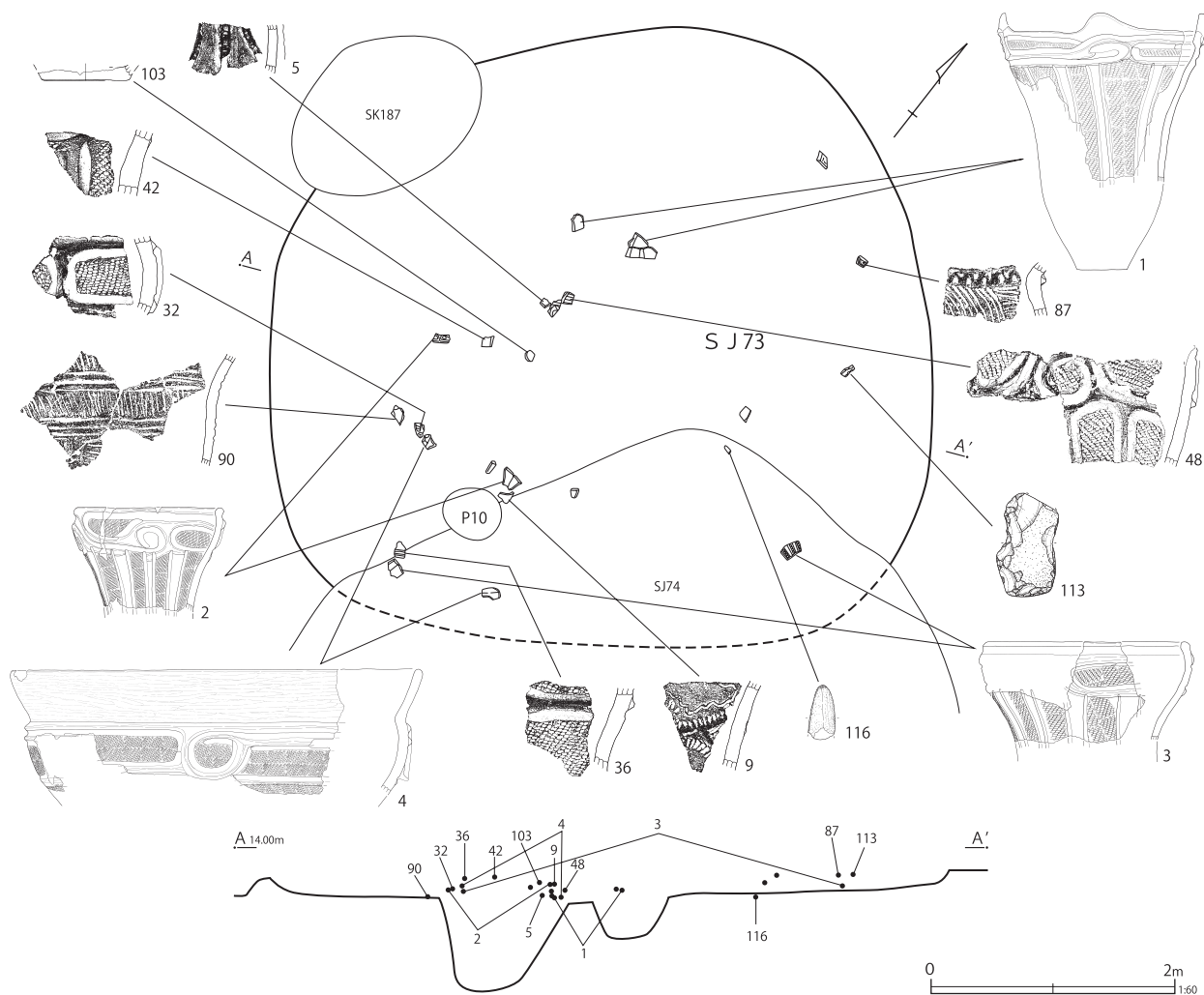
口縁部文様は隆帯とそれに沿わせる沈線で施文されている。文様は入れ子状に連続して施され、突起下では渦巻文が施される。胴部は口縁の隆帯と連結させ2本1組の沈線による磨消懸垂文が垂下される。地文は単節R Lの縄文で口縁は横方向、胴部は斜めから縦方向に施文される。推定 26.5 cm、残存高 23.0 cmである。

2はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁から胴部が残存する。口縁の内湾は緩やかで、胴部の括れがほとんどない。口縁部文様帯は隆帯とそれに沿わせる幅広の沈線によって区画文や渦巻文が施文される。胴部は2本1組の沈線による磨消懸垂文が施される。地文は単節L Rの縄文で、口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文される。推定口径

19.4 cm、残存高 14.1 cmである。

3はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁から胴部が残存する。口縁部文様帯には隆帯で楕円形状の区画文が施される。胴部には2本1組の沈線で磨消懸垂文が垂下される。地文は太い撚りの単節R Lの縄文が口縁は1部横方向に施文される。他は斜めや縦方向に施される。推定口径 27.0 cm、残存高 13.3 cmである。

4は炉体土器として使用された浅鉢形土器である。大型品で口縁から胴部が出土した。無文の口縁部は丁寧に磨かれた痕跡がある。肩部に文様帯があり、渦巻文と楕円区画文が施される。地文は複節L R Lの縄文で、文様内は横方向に、胴部は縦方向に施文される。推定口径 69.4 cm、残存高



第 398 図 第 73 号住居跡遺物出土状況

21.2 cmである。

第 400 図 5 ～ 44、第 401 図 45 ～ 84、第 402 図 85 ～ 107 は出土した土器の破片資料である。

5 ～ 16・19・20 は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。

5 は阿玉台式系の土器で、口縁の把手部分である。胎土には金雲母が多量に含まれる。

6 ～ 8 は新道式で、6・8 はペン先状の三角押文が施文される。7 は角押文が施される。

9・10 は隆帯脇に爪形文を沿わせ、それに波状文が沿って施文される藤内式である。

11 ～ 16・19・20 は隆帯脇に沈線が施文される勝坂式終末の土器である。隆帯上には刻みが施される。11 は半截竹管で沈線が施文される。沈線

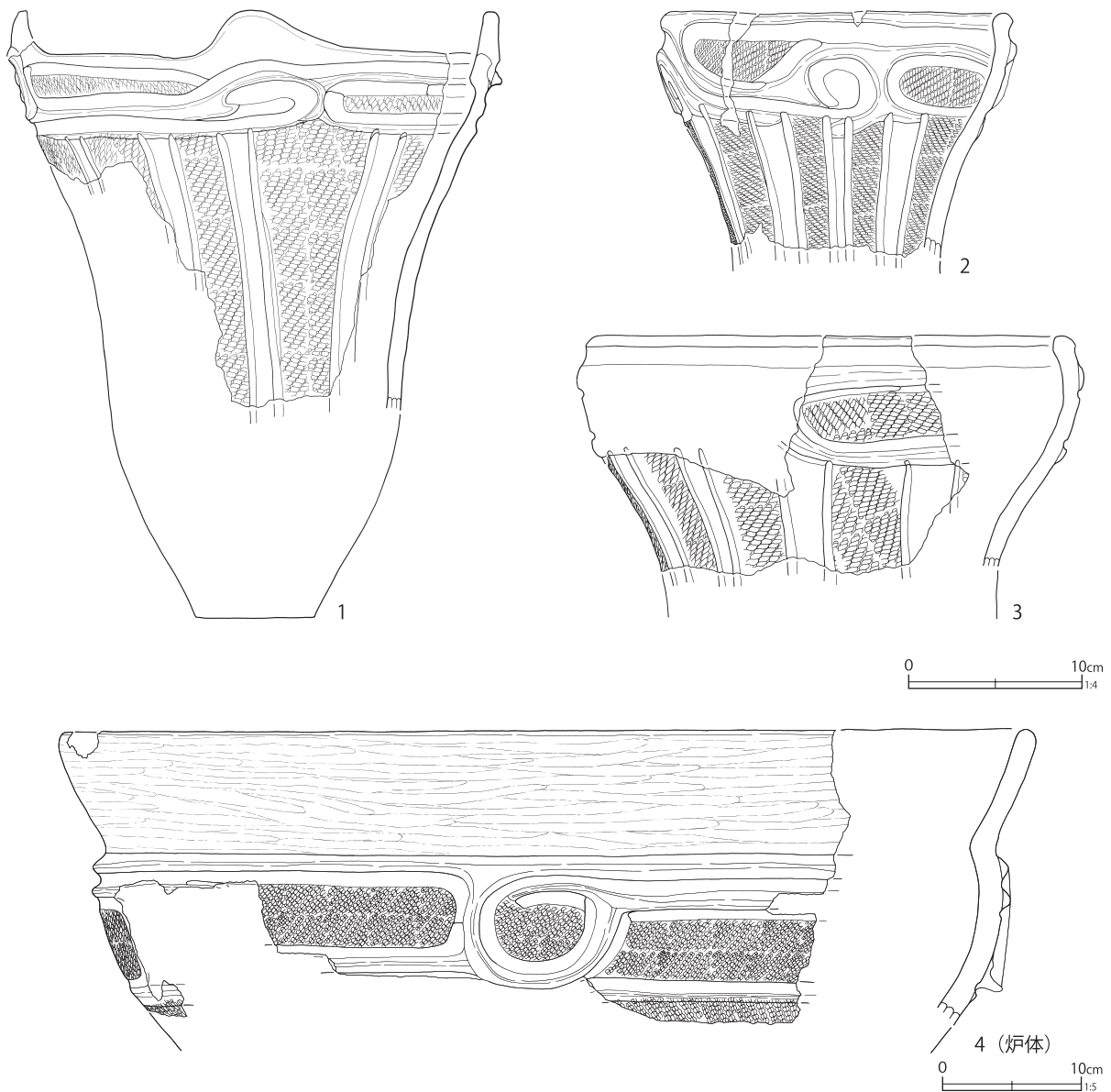
脇には爪形文、それに沿って蓮華文が施され、藤内式の要素が残る。20 は地文が施文される土器で、単節 R L の縄文が施される。

17・18・21 ～ 92・100・102 は中期後葉から末葉の加曽利 E 式期の土器である。

17・18 は中峠式系の土器で、口唇下に隆帯が巡らされている。

21 ～ 73 は加曽利 E 式系のキャリパー形の土器である。

21 ～ 44 は口縁から胴部の破片である。31 は補修孔が認められる。22・23・25・35・37 ～ 40 は古い要素を持つ土器で、25・35・39・40 には無文の頸部が認められる。37 ～ 39 は胴部文様に隆帯による懸垂文が施文される。22・23 は撚糸



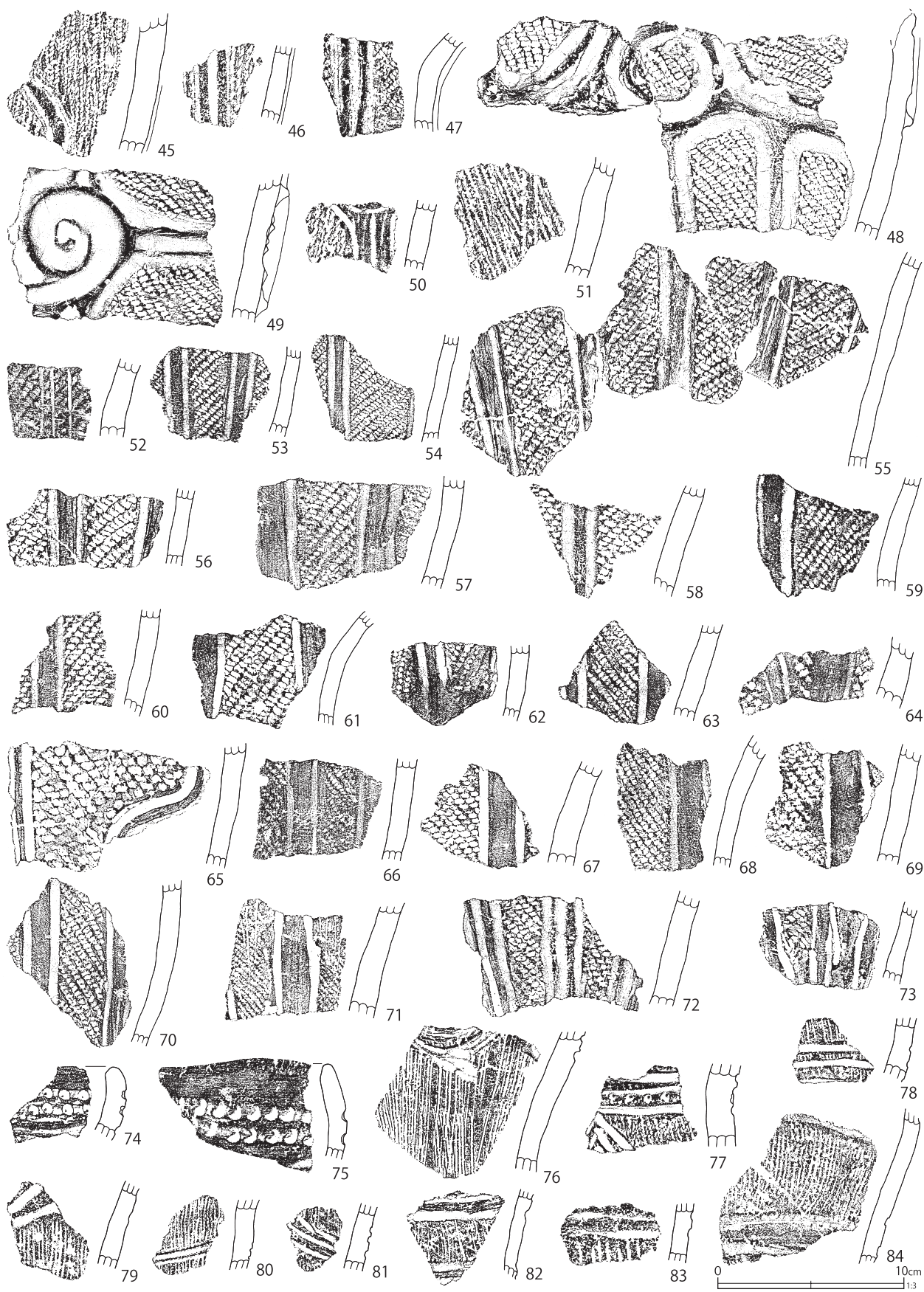
第399図 第73号住居跡出土遺物（1）

文Lが、24は無節Rの縄文が、35・39は撚糸文Rが、37は単節RLの縄文が、40は無節Lの縄文が地文として施される。他は胴部文様に磨消懸垂文が施される。地文として24・30・34・41・44が単節RLの縄文が、26は0段多条RLの縄文が、27・28は単節LRの縄文が、31・33・43は複節LRの縄文が、32・36・42は複節RLの縄文が施されている。27・31・41・44の地文が口縁部に横方向で施文される。他は口縁・胴部ともに縦方向に施される。

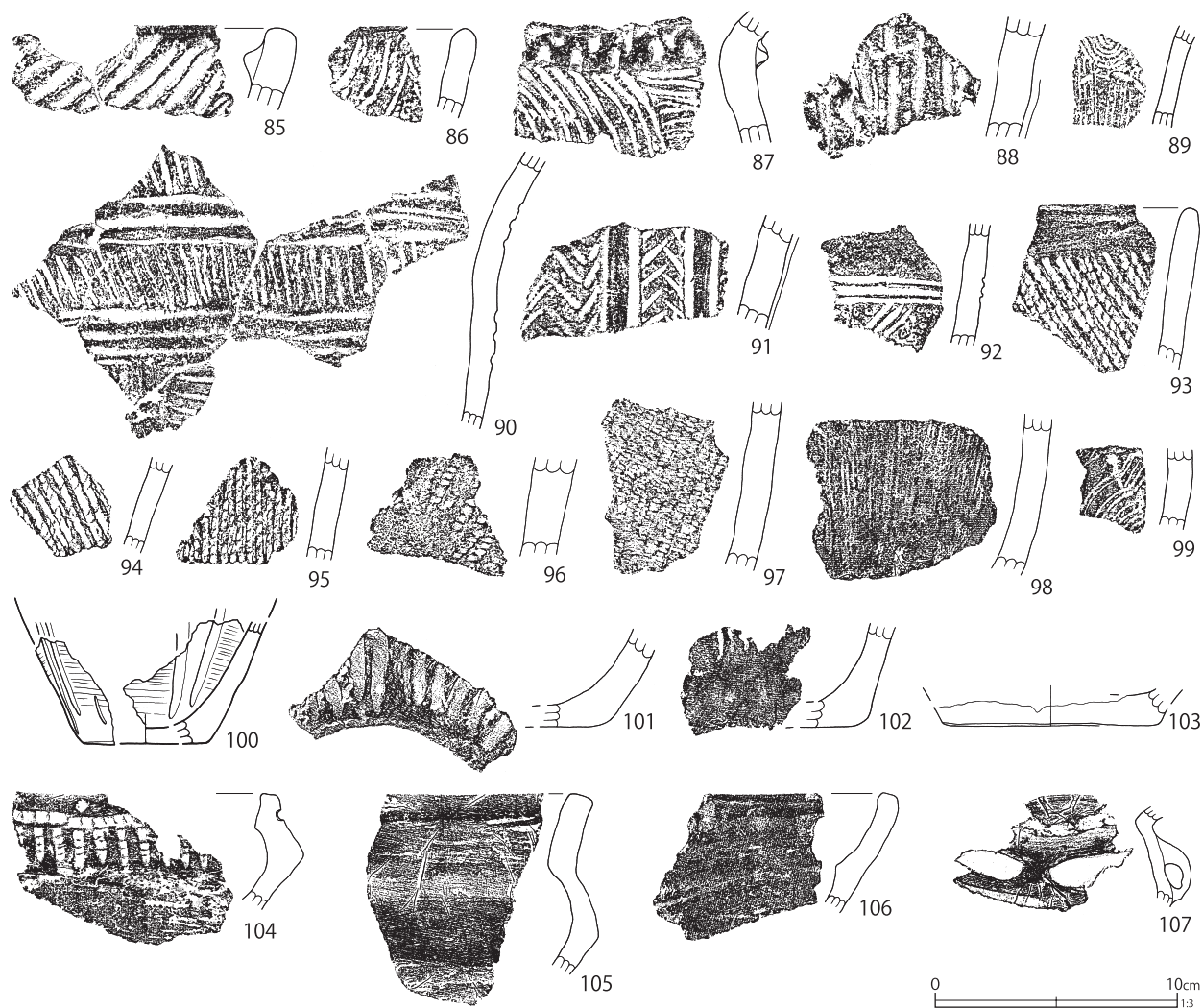
45～73は胴部である。45～49の文様は隆帯で施文される。48・49は渦巻文が施される。地文として45～47が撚糸文L、48・49は単節LRの縄文が縦方向に施文される。52～73の文様は沈線で描かれる。52以外は磨消懸垂文が施される。2本1組の沈線で施文されるが、72は3本1組である。65は蛇行懸垂文が施文される。磨消懸垂文間は狭く多く施される。沈線間も幅広の土器はない。地文として52～54・57・59・61・62・73は単節RLの縄文が、55・56・58・



第 400 图 第 73 号住居跡出土遺物 (2)



第 401 图 第 73 号住居跡出土遺物 (3)



第402図 第73号住居跡出土遺物（4）

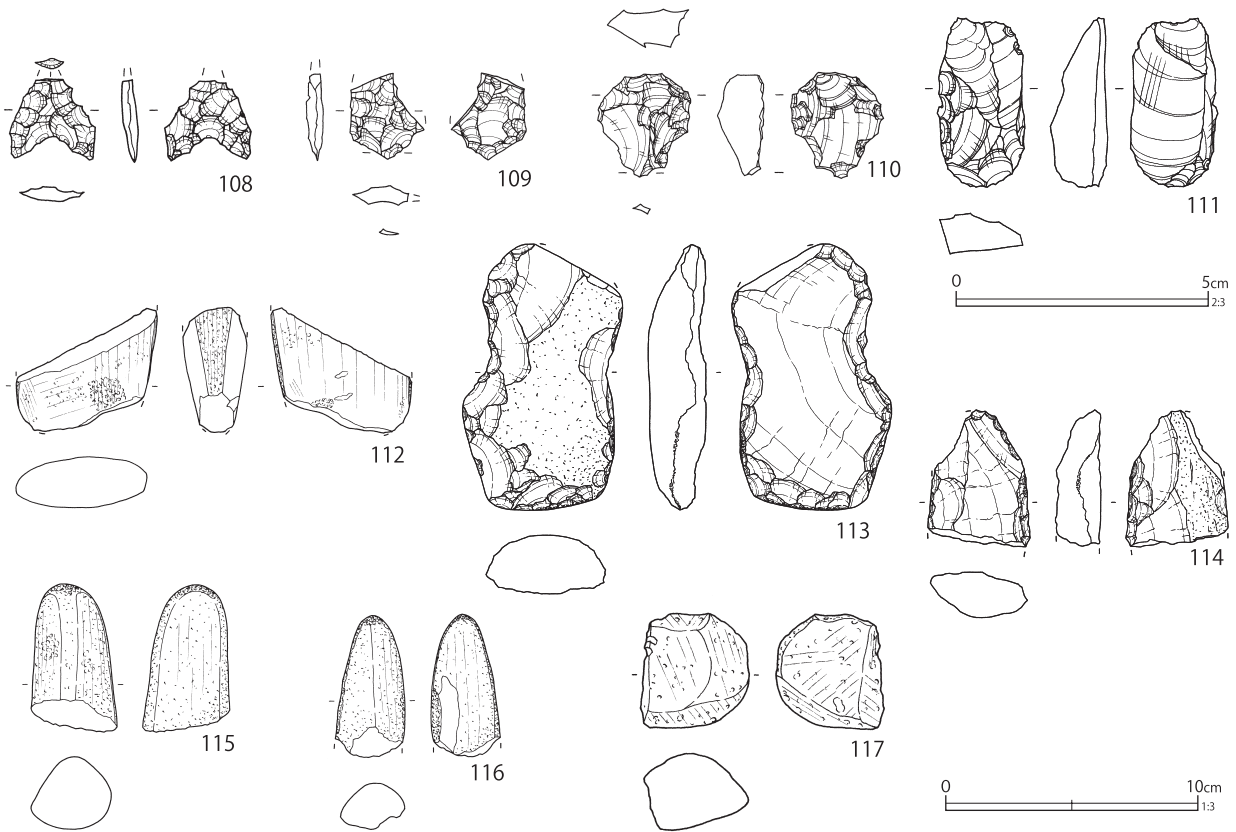
60は複節R L Rの縄文が、63・66～68・70・72は単節L Rの縄文が、64・65・69は複節L R Lの縄文が縦方向に施文されている。71は異なる原体が施される。上部に条線が、下部に0段多条L Rの縄文が縦方向に施文されている。101は底部である。残存する胴部には、2本1組の沈線で磨消懸垂文が施文される。地文は単節R Lの縄文である。

74～84は連弧文系の土器である。文様は2本1組や3本1組の沈線で施文される。74・75は口縁部で、施文される沈線内に円形刺突文が施されている。口縁は狭い無文となっている。地文は77・80が撚糸文Lで、他は条線が施文される。

85～92・100は地文が条線となる曽利式系の

土器である。85～88は斜行文が口縁部に施文される口縁部から胴部の破片である。87は胴部の括れ部分で、隆帯が巡らされる。隆帯上は交互刺突が施される。89は楕歯状の条線で、同心円文が施文される。90・91は沈線区画内に短沈線が充填されるものである。90は括れ部分で、沈線で横方向に分割される。91は隆帯で懸垂文が施され、懸垂文間にハの字状に短沈線を施文する。92は無文の頸部から胴部の破片で、3本1組の沈線で区画文や懸垂文が施される。100は胴部から底部で、2本1組の沈線で磨消懸垂文が施文され、地文は楕歯状の条線が横方向に施されている。

93はバケツ状の器形で、胴部に地文のみが施文される。地文は撚糸文Lで、斜め方向に施され



第403図 第73号住居跡出土遺物(5)

ている。

94～99は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。94は撚糸文Rが、95は撚糸文Lが、96は単節RLの縄文が、97は0段多条RLの縄文が斜めや縦方向に施される。98・99の地文は条線で、99は、櫛歯状の条線で流水文が施文されている。

102・103は深鉢形土器の底部である。

104～106は浅鉢形土器である。104は屈曲する肩部に文様が施文される。文様は角押文で口縁部下を区画し、肩部には縦方向に角押文が施される。105・106は無文の口縁部である。いずれも赤彩の痕跡は認められなかった。

107は注口土器の把手部分である。屈曲する肩部に貼付されている。

第403図108～117は出土した石器である。

108は石鍬である。無茎で基部には逆V字状の抉りが入る。先端部が欠損する。

109・110は石鍬である。109はつまみ部を欠損する。先端の突起は短い。110は先端部を欠損している。

111は使用痕を有する剥片である。縁辺に微細な剥離が認められる。

112は磨製石斧である。ごく1部が残存し、基部、刃部ともに失われている。側縁と器面には敲打痕が残される。

113・114は打製石斧である。113は基部の1部が欠損するがほぼ完形である。側縁は左右非対称で歪んでいる。表面には自然面が残り、裏面には1次剥離面が大きく残る。114は基部の1部である。裏面に部分的に自然面が残存する。

115・116は敲石である。棒状の形状で、いずれも破片である。基部先端に敲打痕が顕著に残されている。

117は軽石である。使用によって、器面が面取り状に磨り取られている。

第74号住居跡（第395・404～413図）

第74号住居跡は、Y-20グリッドに位置する。第73号住居跡、第151号土壇に壊されている。また、奈良時代の第50住居跡に壁の一部が壊されている。平面形態は楕円形である。南壁は中央がやや突出しており五角形に近い。平面形態と炉を基準とした主軸方位は、N-17°-Eである。規模は長径6.56m、短径4.90m、深さ0.44mである。

柱穴は24本が検出された。主柱穴はP1・P2・P6・P10・P13・P19の6本と考えられる。炉が2基あることや、複数の柱穴が残されていることから、建て替えが行われたと考えられる。

炉1は中央やや北よりから検出された。炉2と重複しており、同じ深さまで掘削した後に埋めて形を整えている。炉には礫が残されており、石囲い炉であったと考えられる。炉は平面楕円形である。規模は長径0.90m、短径0.78m、深さ0.25mである。

炉2は炉1の北側から重複して検出された。地床炉で、平面不整円形である。規模は、長径1.00m、短径0.96m、深さ0.19mである。

遺物は多量に出土した（第406図）。1層から3層にかけて出土したが、主に2層から出土した。また、第408図8は、第54号住居跡内から出土した土器と接合された浅鉢形土器である。第54号住居跡は東側に隣接している。

住居跡の時期は出土した土器から、中期後葉の加曽利EⅡ式期である。

第407～412図は出土した遺物である。

第407図1～7、第408図8は出土した器形復元が可能であった土器である。

1はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁から胴部が残存する。口縁の内湾は緩い。文様は方形区画が6単位施されるが、区画幅は統一されていない。区画間には渦巻文が施文される。渦巻きの向きは5箇所が時計回りに、1箇所のみ反時計回りに施される。頸部は無文帯となっている。胴部文様は隆帯で施文される。垂下する懸垂文と蛇行懸垂文が交互に4単位ずつ施されると推測される。地文は0段多条RLの縄文で、縦方向に施文される。口径27.6cm、残存高11.9cmである。

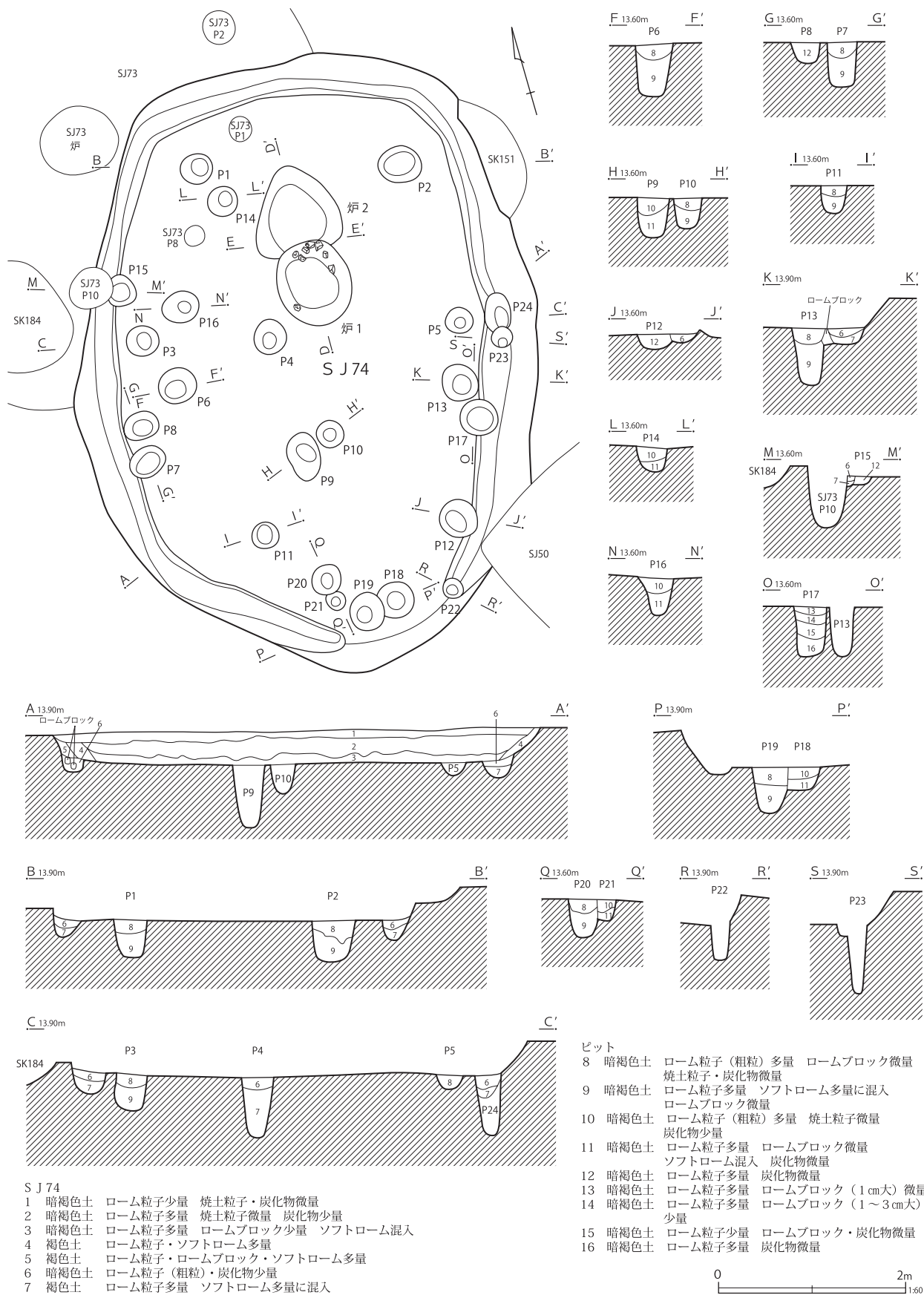
2はキャリパー形の深鉢形土器である。胴部が残存する。胴部文様は隆帯によって施文され、2本1組の垂下する懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に施される。隆帯には沈線を沿わしているが、浅いもので複数撫で返されている。地文は0段多条RLの縄文が縦方向に施文されている。残存高17.6cmである。

3はキャリパー形の深鉢形土器である。胴部が残存する。胴部文様は沈線で描かれ、垂下する懸垂文と蛇行懸垂文が交互に施文される。蛇行懸垂文は2本1組で垂下する懸垂文は3本1組で、粗雑に施されている。地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文されている。残存高21.7cmである。

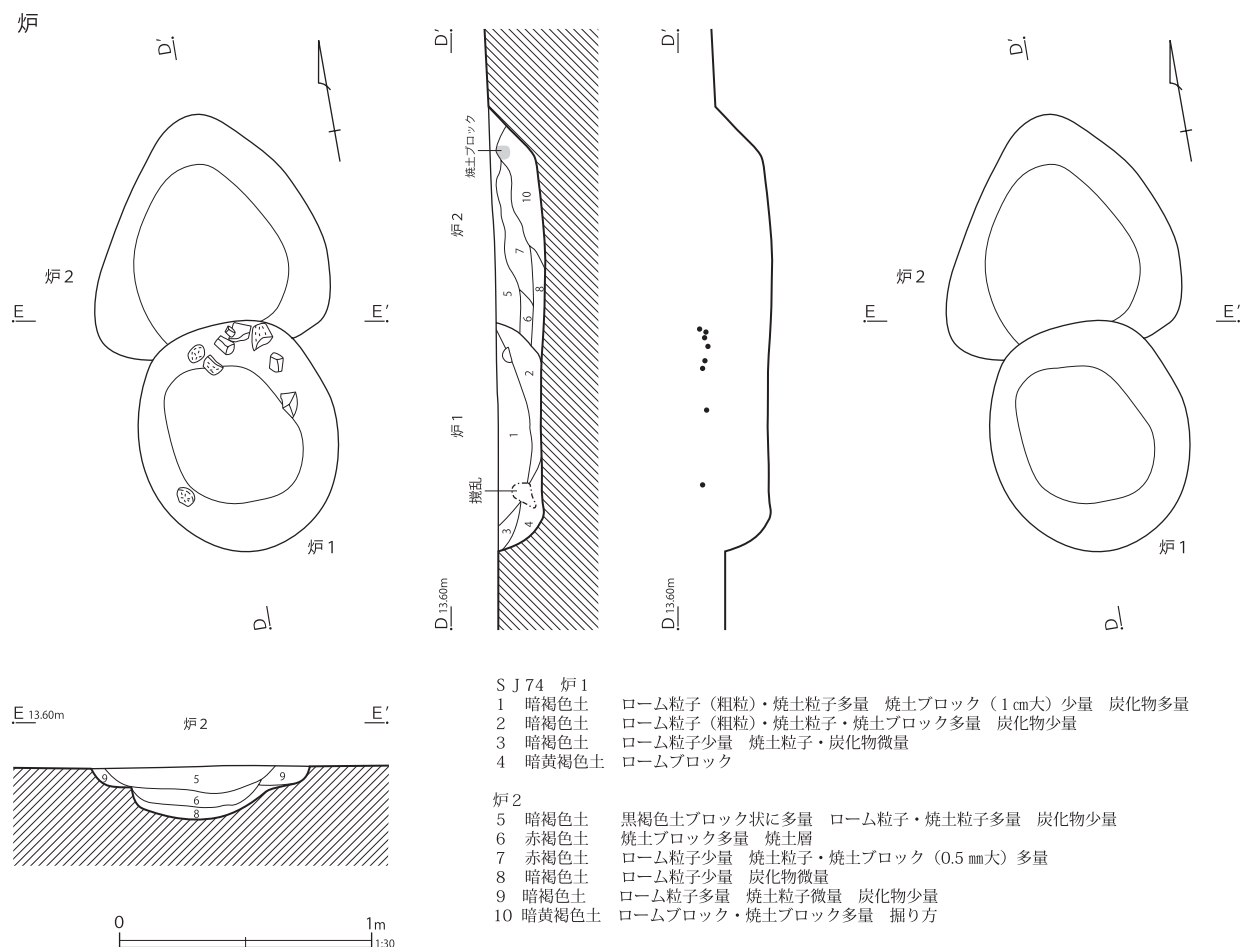
4はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁から胴部が残存している。口縁と頸部を区画する隆帯は舌状にせり出させて施文されている。また隆帯中央に沈線を巡らし2本隆帯の効果が上げられている。口縁部には渦巻文が5単位施文されると考えられる。その間の区画も5区画であるが、その内1区画のみ中央に2本の沈線を剣先文状に突き出させて分割されている。剣先文内には円形文

第63表 第74号住居跡柱穴計測表（第404図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P1	34.0	37.5	P2	46.0	62.0	P3	38.0	38.8	P4	40.0	59.7	P5	30.0	15.6
P6	42.0	56.9	P7	40.0	54.1	P8	38.0	21.0	P9	52.0	70.6	P10	28.0	32.0
P11	28.0	10.8	P12	44.0	15.7	P13	40.0	57.7	P14	34.0	26.0	P15	34.0	12.5
P16	42.0	42.1	P17	40.0	51.1	P18	40.0	25.0	P19	42.0	45.8	P20	34.0	38.5
P21	22.0	20.5	P22	20.0	36.6	P23	22.0	74.6	P24	42.0	62.3			



第 404 図 第 74 号住居跡 (1)



第 405 図 第 74 号住居跡（2）

が沈線で施文されている。胴部文様は沈線で懸垂文が施される。無文の頸部と2本の沈線を巡らせて区画される。懸垂文は垂下するものと蛇行懸垂文があるが、交互の部分と連続させる部分がある。垂下する懸垂文は3本1組の沈線だが、1単位だけ2本1組である。地文は単節RLの縄文だが、施文が浅い部分があり、器面の乾燥と関係すると推測される。口径29.5cm、残存高15.5cmである。

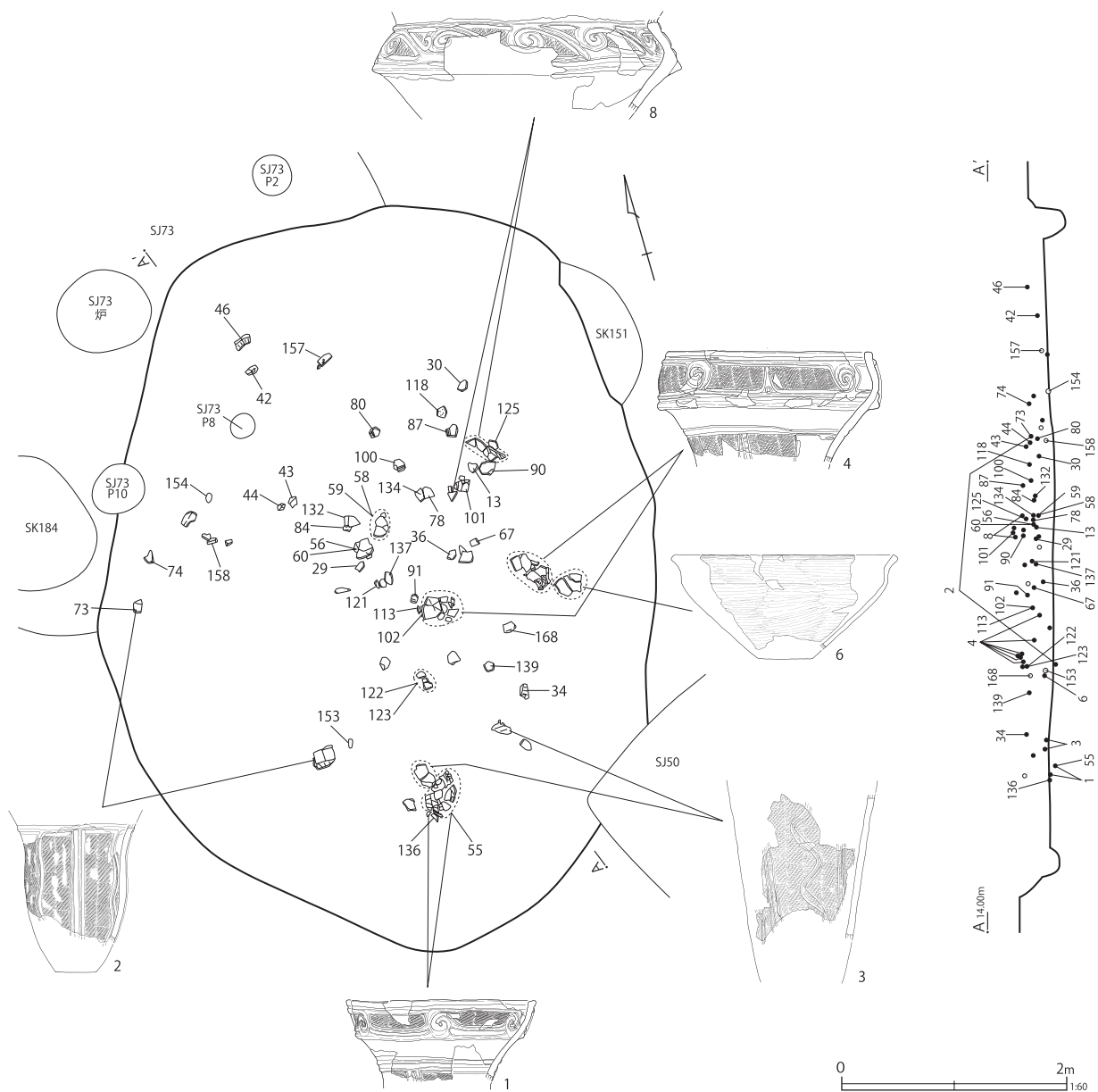
5は連弧文系の深鉢形土器である。口縁から胴部が残存している。口縁部には3本1組の沈線が粗雑に巡らされる。1本目と2本目の沈線間に刺突を1列巡る。胴部の括れに近い部分には、3本1組の沈線で連弧文が粗雑に施文される。連弧文の波底部からは、蛇行懸垂文や垂下する懸垂文が施されている。地文は単節RLの縄文が斜め方

向に施文される。推定口径19.0cm、残存高11.7cmである。

6は浅鉢形土器である。口縁から胴部が残存している。器面は無文で、粗いミガキ状の調整痕が認められる。1部赤彩の痕跡がある。推定口径32.0cm、残存高13.9cmである。

7は小型のキャリパー形の深鉢形土器である。口縁から胴部が残存し、地文のみが施される。地文は口縁部の屈曲部の輪積痕までは横方向、それより下は縦方向に施文される。口縁部には小突起がある。地文は単節RLの縄文である。推定口径17.6cm、残存高8.3cmである。

8は大型の浅鉢形土器である。第54号住居跡出土土器と接合された。屈曲する肩部が残存するもので、肩部に文様帯を持っている。文様は隆帯



第406図 第74号住居跡遺物出土状況

と沈線によって施文されるが、隆帯は偏平に撫で付けられている。文様は左端部が渦巻く区画文を10単位施していたと考えられ、単位内には単節LRの縄文が横方向に施文される。肩部の張り出し部の径は45.8cmである。残存高14.0cmである。

第408図9～36、第409図37～74、第410図75～120、第411図121～140は出土した土器の破片資料である。

9～20・22～24・26は中期中葉の勝坂式期

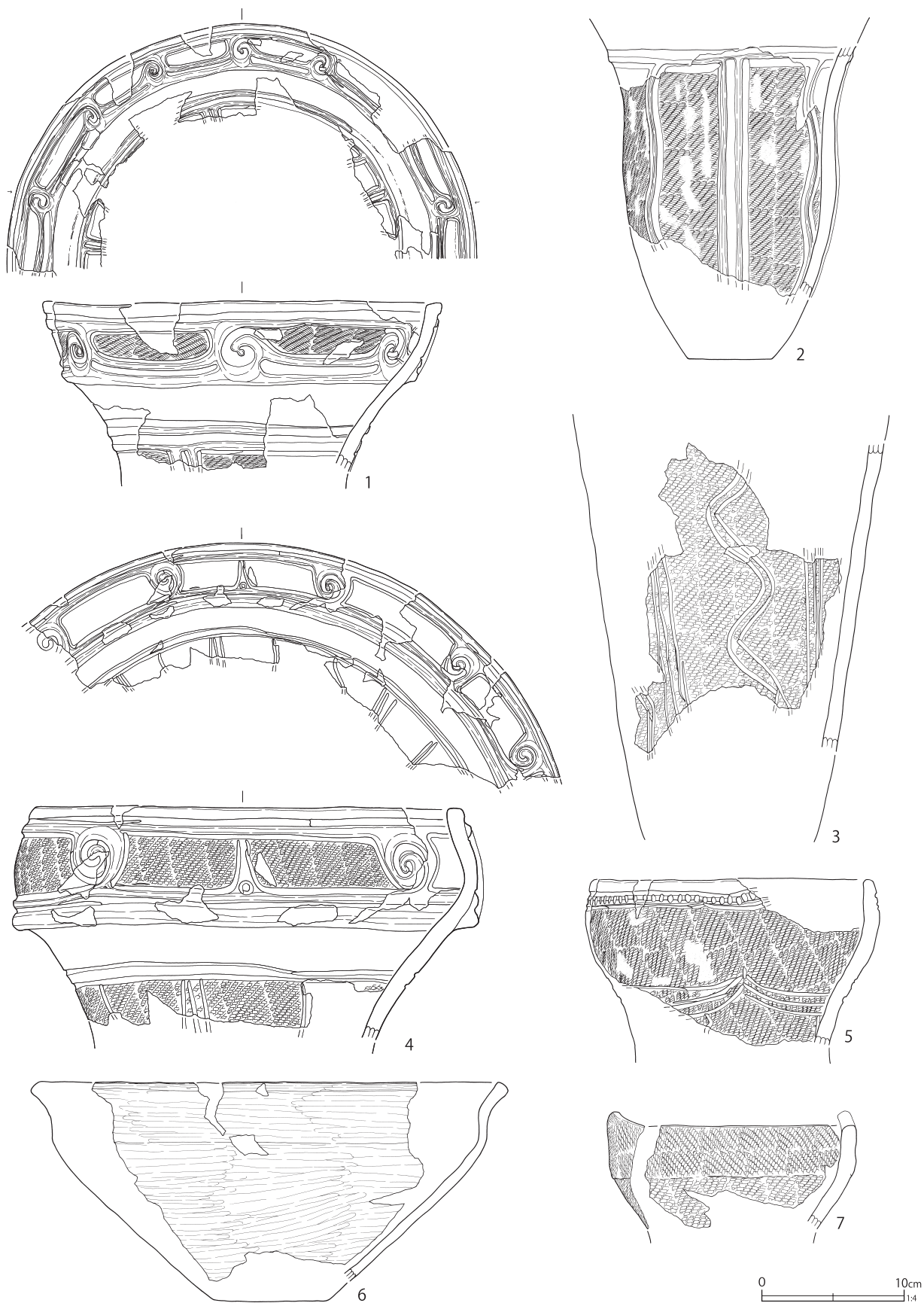
の深鉢形土器である。

9～14は阿玉台式系の土器で、胎土に金雲母が多量に含まれる。断面三角形の隆帯が施文され、9は隆帯に沿って角押文が施されている。

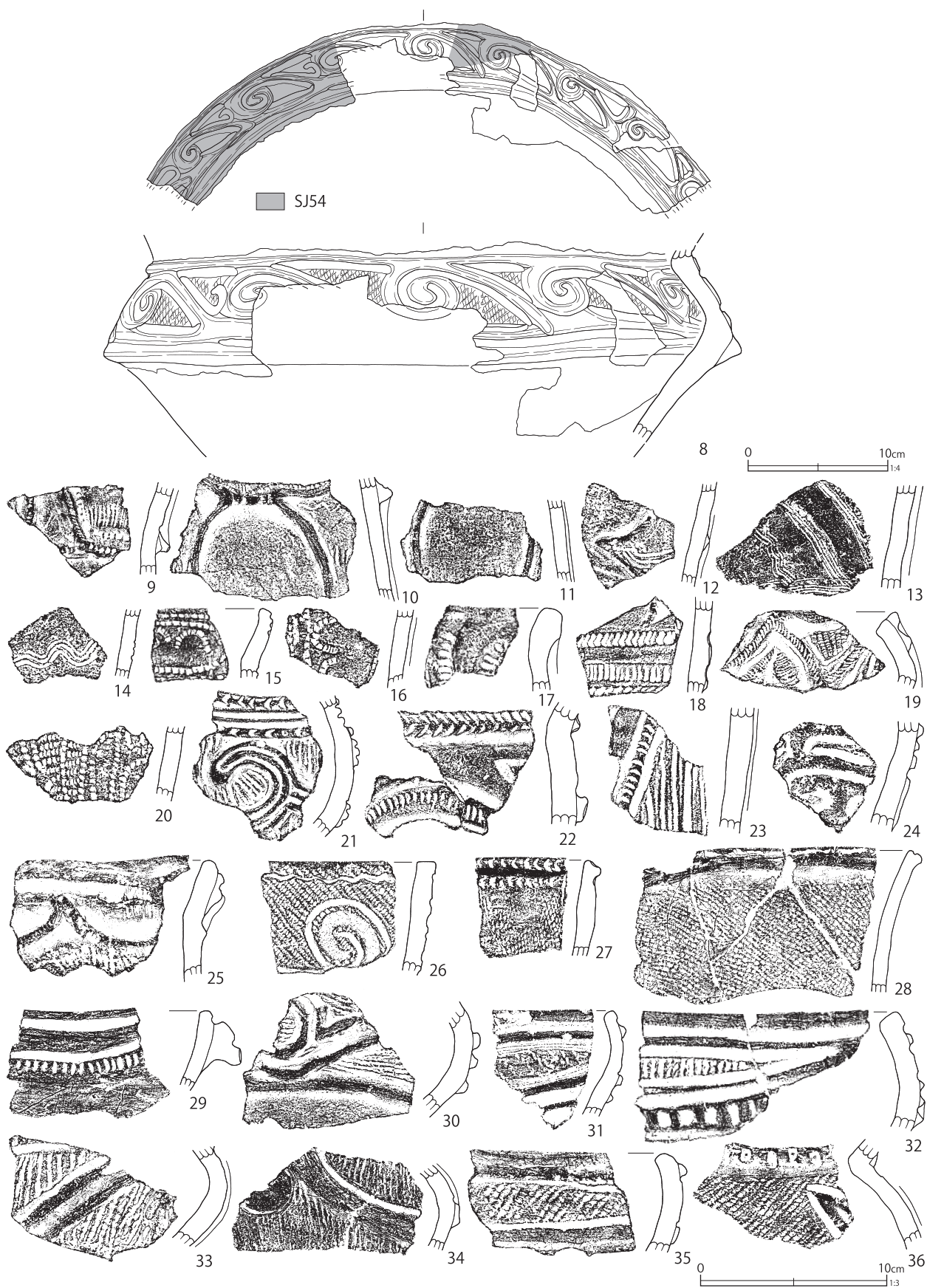
15・16・20は文様が細かい角押文によって施される。新道式である。

17・18は隆帯脇に爪形文が施文される。藤内式である。

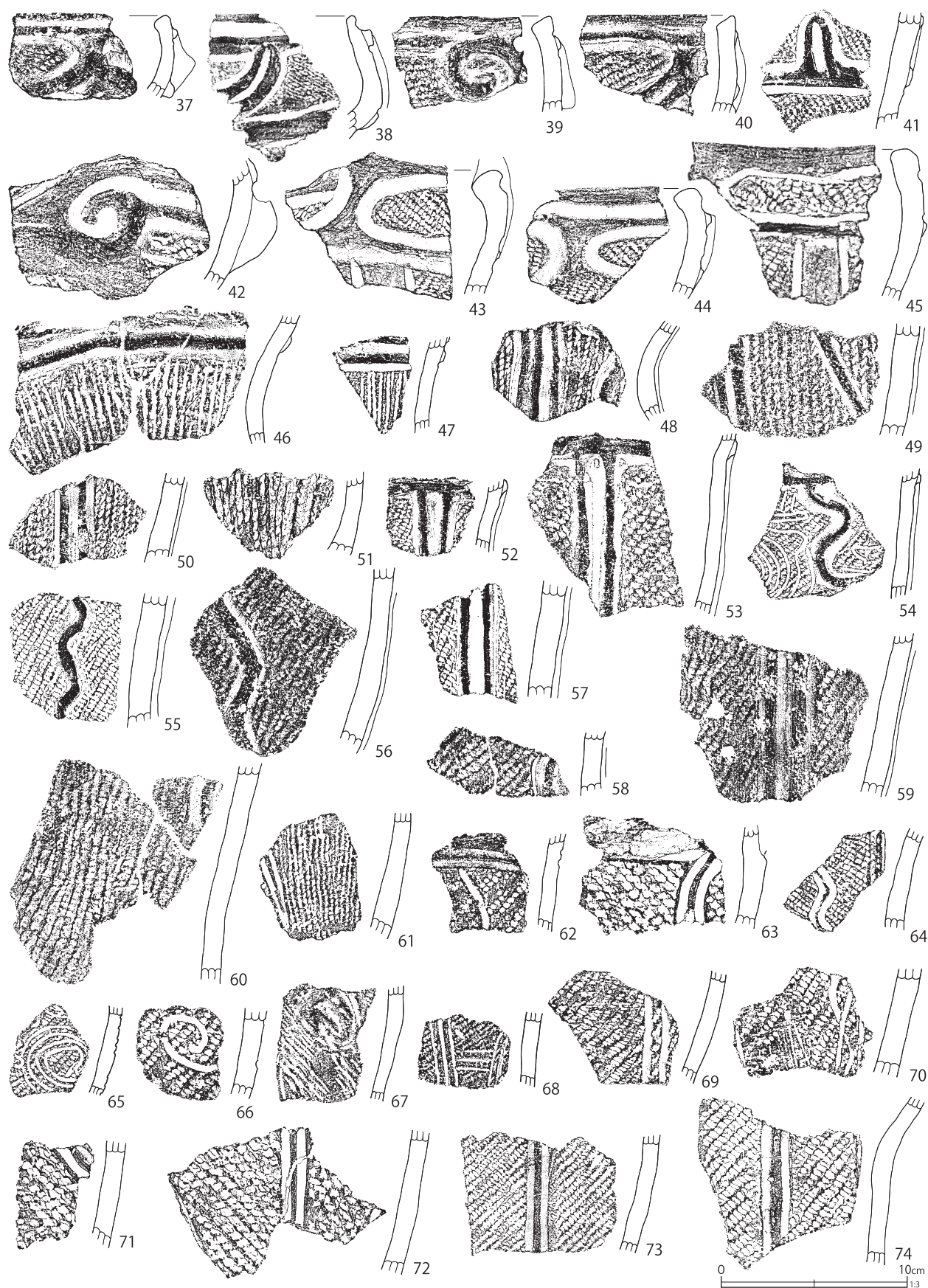
19・22～24・26は勝坂式末葉の土器で、隆帯



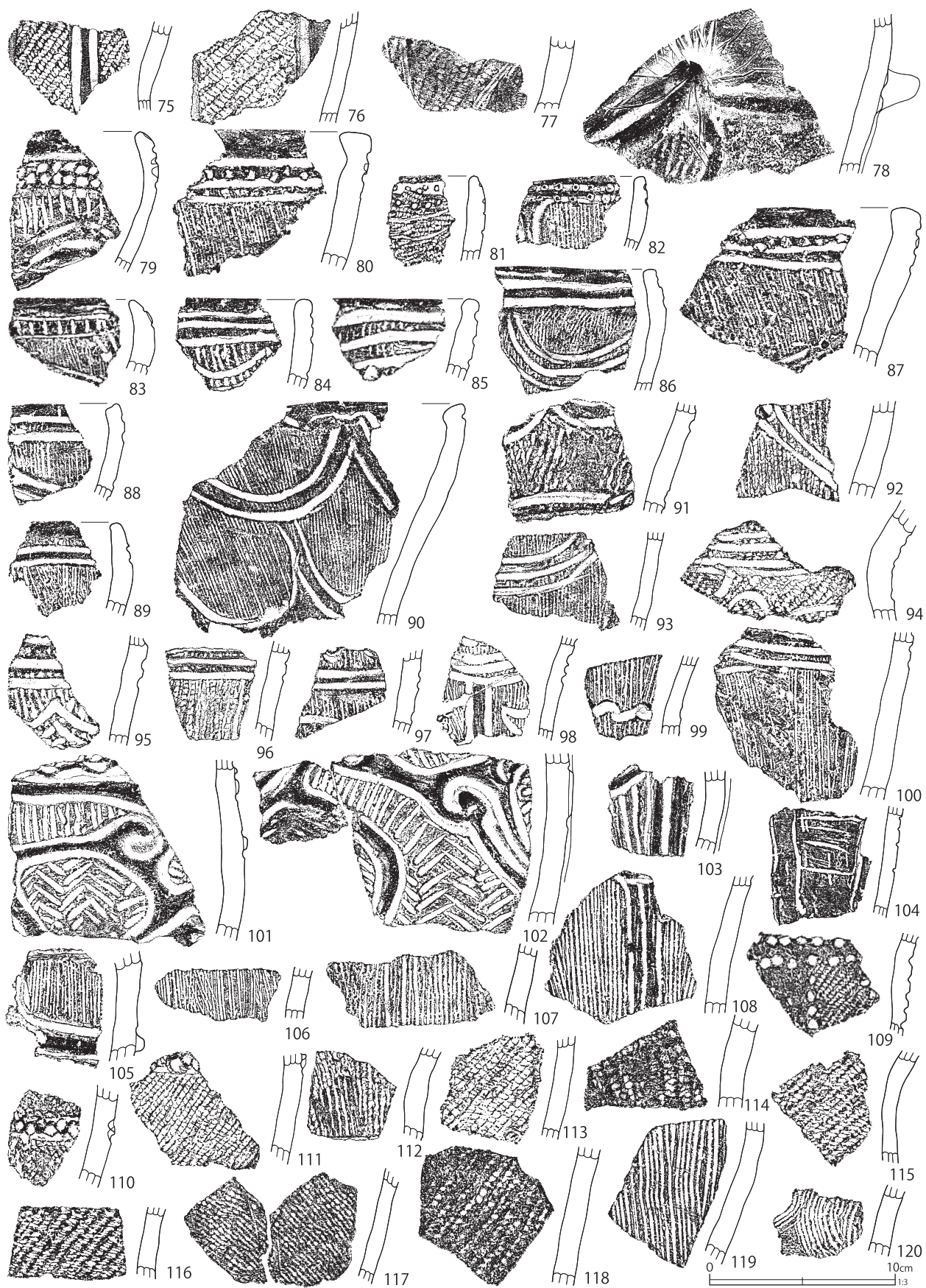
第 407 図 第 74 号住居跡出土遺物 (1)



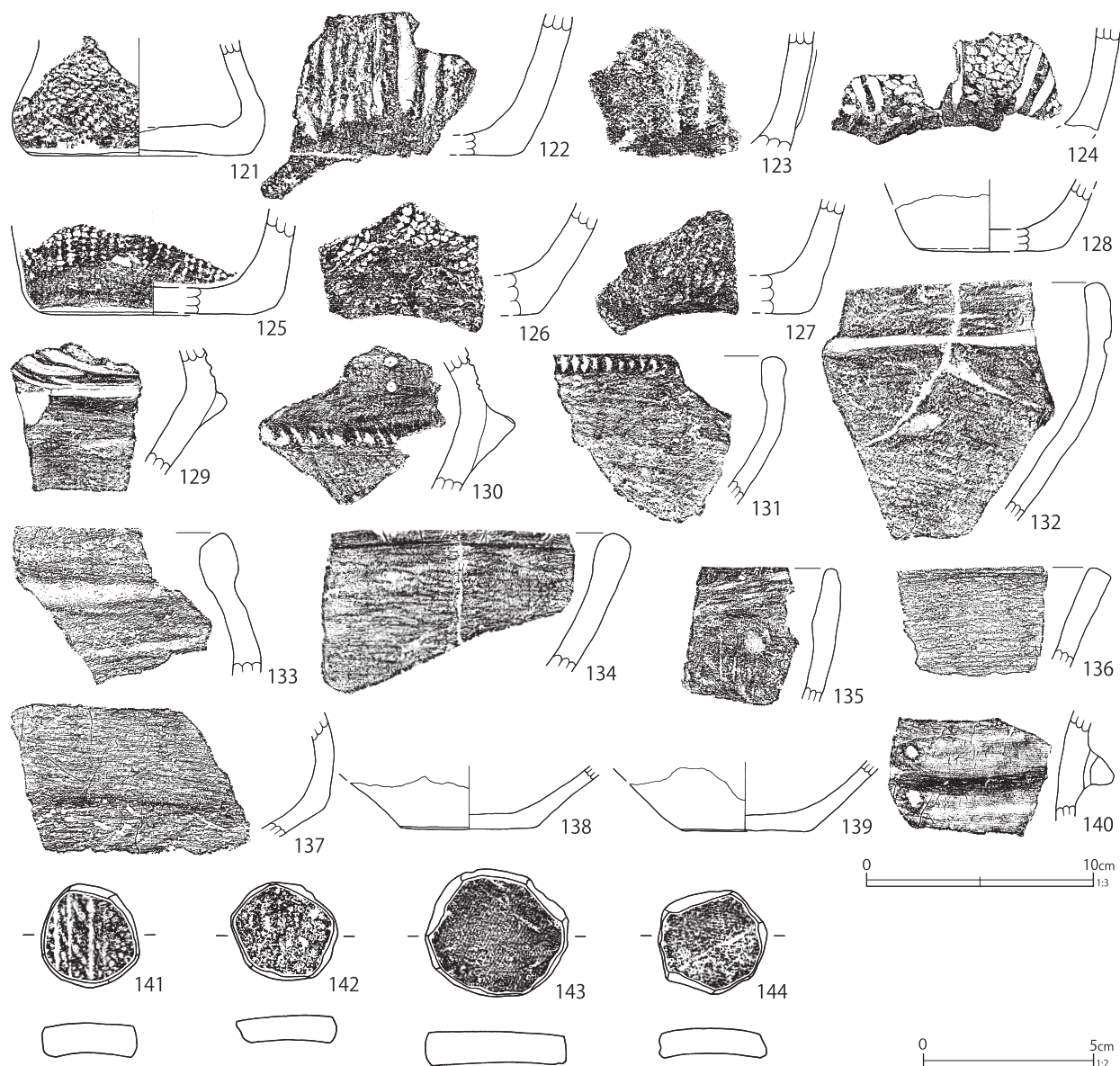
第 408 图 第 74 号住居跡出土遺物 (2)



第 409 图 第 74 号住居跡出土遺物 (3)



第410图 第74号住居跡出土遺物(4)



第411図 第74号住居跡出土遺物(5)

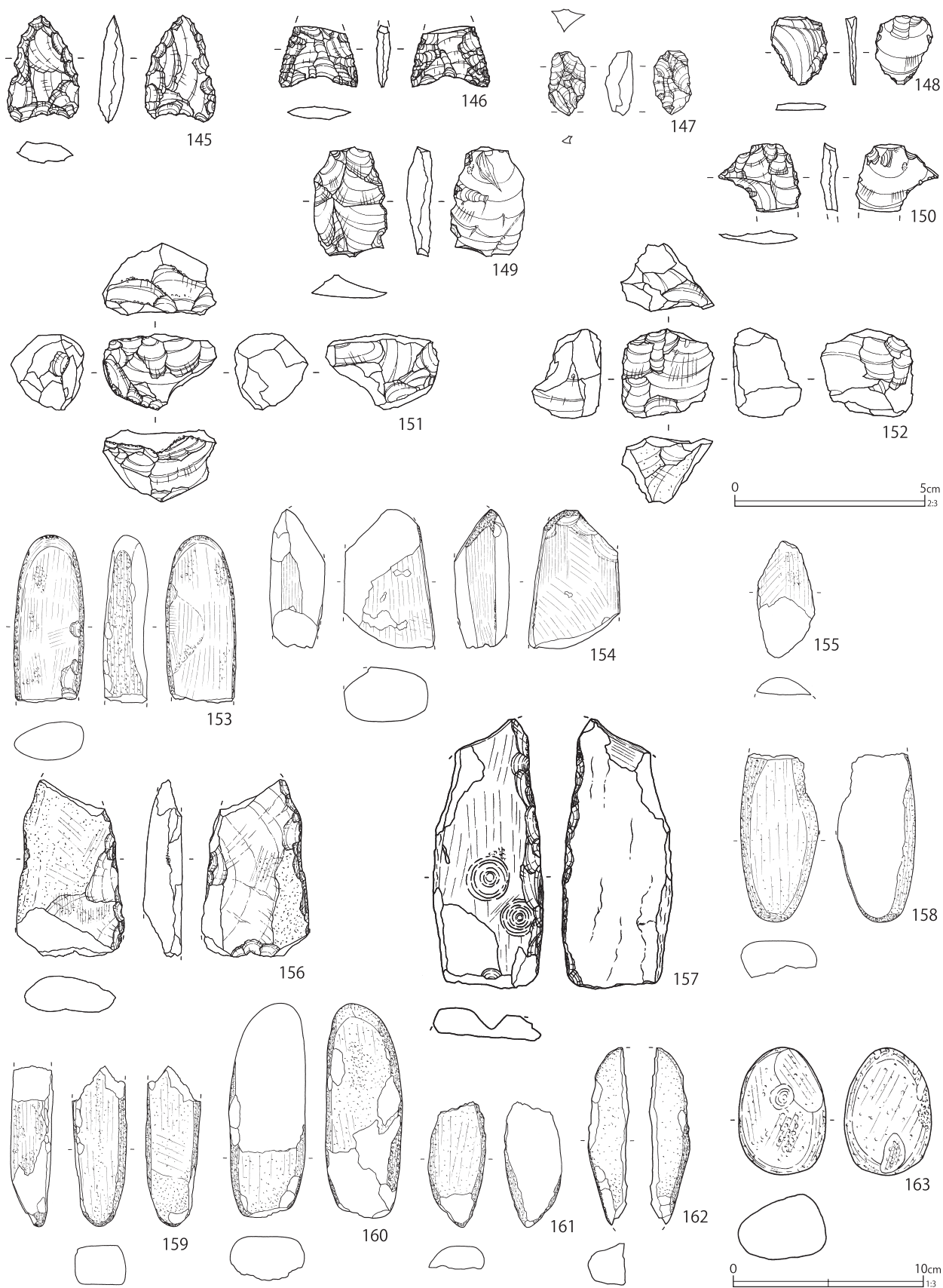
脇に沈線が施文される。隆帯には刻みが施される。26は円筒状の土器で、文様は沈線で施文される。地文は0段多条LRの縄文である。

21・25・27～111・122～124は中期後葉の加曽利E式期の土器である。

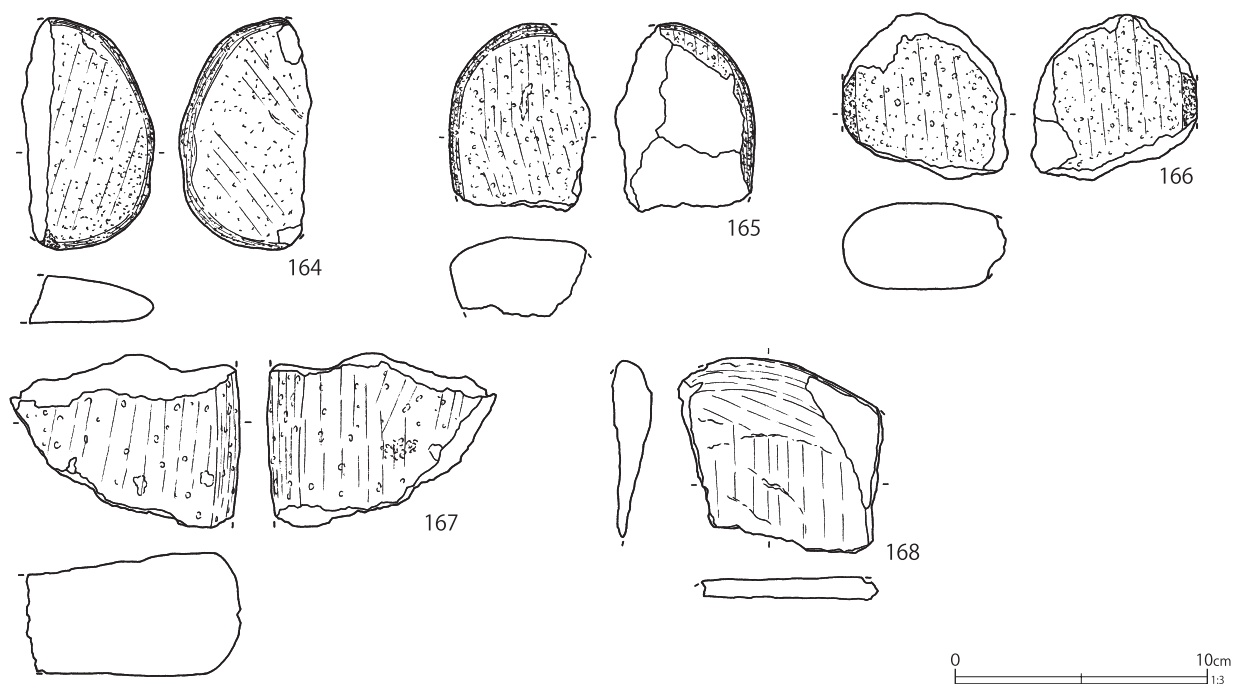
21・25・27～29は中峠式系の土器で、肥厚する口縁や、口唇直下にエラ状に張り出す隆帯が貼付される。

30～77は加曽利E式系のキャリパー形の深鉢形土器である。30～45は口縁部で、隆帯によって渦巻文や繫弧文などが施文される。36は剣先文が

施される。43～45は胴部に磨消懸垂文が施文される。地文として30～33は撚糸文Lが、35・36は0段多条RLの縄文が、37・43～45は単節RLの縄文が、38は無節Lの縄文が、39～42は単節LRの縄文が施される。42～45の口縁部で横方向に施文される以外は縦方向に施文される。46・47は頸部を区画する隆帯が施され、胴部は地文のみである。地文は撚糸文Lである。48～59は胴部で隆帯による懸垂文が施文される。地文として48～51は撚糸文Lが、52～57は単節RLの縄文が、58・59は、無節Rの縄文が縦方向に施される。54は地文



第 412 图 第 74 号住居跡出土遺物 (6)



第 413 図 第 74 号住居跡出土遺物（7）

上に細沈線で流水文状に文様が施文される。60～77は沈線で胴部文様が施される。文様は懸垂文の他、65～67の渦巻文などが施文される。74～77は磨消懸垂文が施される。地文として60・62・65・66・70・73～77は単節R Lの縄文が、61は撚糸文Lが、63・71・72は複節L R Lの縄文が、64は単節L Rの縄文が、67は無節Lの縄文が、68・69は0段多条R Lの縄文が施文される。122～124は底部で、沈線による懸垂文が胴部に施されている。124の地文は複節L R Lの縄文である。

78は口縁部が無文となる土器で、胴部との区画に貼付された隆帯から蛇行懸垂文が施文され、連結部は瘤状の突起が貼付される。

79～100・110・111は連弧文系の土器である。90・91の沈線間は磨消状となっている。110・111は沈線内に交互刺突文が施される。地文として91・92は撚糸文Lが、94・110・111は単節R Lの縄文が施文される。他は条線であった。

101～108は地文が条線となる曽利式系の土器である。101・102は地文として単沈線が羽状に施文される。104は横方向に粗雑に地文が施され

ている。105～108は櫛歯状の条線が施文される。

109は円形刺突文が沈線文の代用として施される。地文は単節R Lの縄文が施文される。

112～120は地文のみが施される深鉢形土器の胴部である。地文として112は撚糸文Lが、113は無節Rの縄文が、114は単節L Rの縄文が、115・118は単節R Lの縄文が、116は0段多条R Lの縄文が、117は無節Lの縄文が、119・120は櫛歯状の条線が施文される。120は流水文状に施文されている。

121・125～128は深鉢形土器の底部である。121は勝坂式期と考えられる。121・125・126は地文として単節R Lの縄文が施文される。

129～139は浅鉢形土器である。129・130は肩部に文様が施される。131は口唇部に刻みが施文されるもので、胎土に金雲母が含まれる。132・133は口縁と胴部の区画に沈線が施文される。赤彩は136のみ確認できた。内外面ともに残存し、口唇部は残りが良好である。

140は有孔罎付土器の罎部分である。円孔は罎部分を貫通させている。

第 411 図 141 ～ 144 は土製円盤である。深鉢形土器の胴部の破片が円形に加工されている。

第 412 図 145 ～ 163、第 413 図 164 ～ 168 は出土した石器である。

145・146 は石鏃である。無茎で、基部には浅い抉りが入る。146 は先端を欠損する。

147 は石錐である。先端部はわずかに突起状に加工される。

148 ～ 150 は使用痕を有する剥片である。いずれも縦長剥片を利用しており、縁辺に微細な剥離が認められる。

151・152 は石核である。152 は風化面が残る。

153 ～ 155 は磨製石斧である。153 は刃部を欠損する。器面には磨面が残る。側縁には敲打痕が顕著に残されており、敲石として再利用されたと考えられる。154 は部分的な破片であるが、先端部に敲打痕が見られ、153 と同様に敲石として再利用されたと考えられる。155 は器面の一部が剥落したものである。

156 は打製石斧である。基部と刃部を欠損する。器面には擦痕が認められる。右側縁は敲打が加えられている。

157 は砥石である。石皿の破片を再加工したもので、表面には漏斗状の凹部が残されている。

158 ～ 162 は敲石である。側縁や端部に敲打痕が残されている。いずれも棒状の素材である。

163 ～ 166 は磨石である。楕円形状の素材が使用される。165・166 の側縁には敲打痕が認められる。163 は表面に凹部や敲打痕が認められる。

167・168 は石皿である。小破片である。

第 75・76・88・90 号住居跡（第 414・415 図）

第 75・76・88・90 号住居跡は重複して検出された。他に奈良時代の第 50・52 号住居跡、多数の土壌と重複していた。当初は、縄文時代の住居跡は第 75・76 号住居跡の 2 軒と考えて調査に着手したが、調査の進行に伴って第 76 号住居跡の床面下から第 88 号住居跡と、第 90 号住居跡が検出された。土層断面からは第 88 号住居跡が最も古く、第 75 号住居跡、第 76 号住居跡の順に新しい。第 90 号住居跡は、第 75・76 号住居跡の調査が終了した後に検出された。炉が検出されたことから住居跡としたものである。小型の住居跡で第 88 号住居跡と規模が類似している。

第 75 号住居跡（第 414 ～ 421 図）

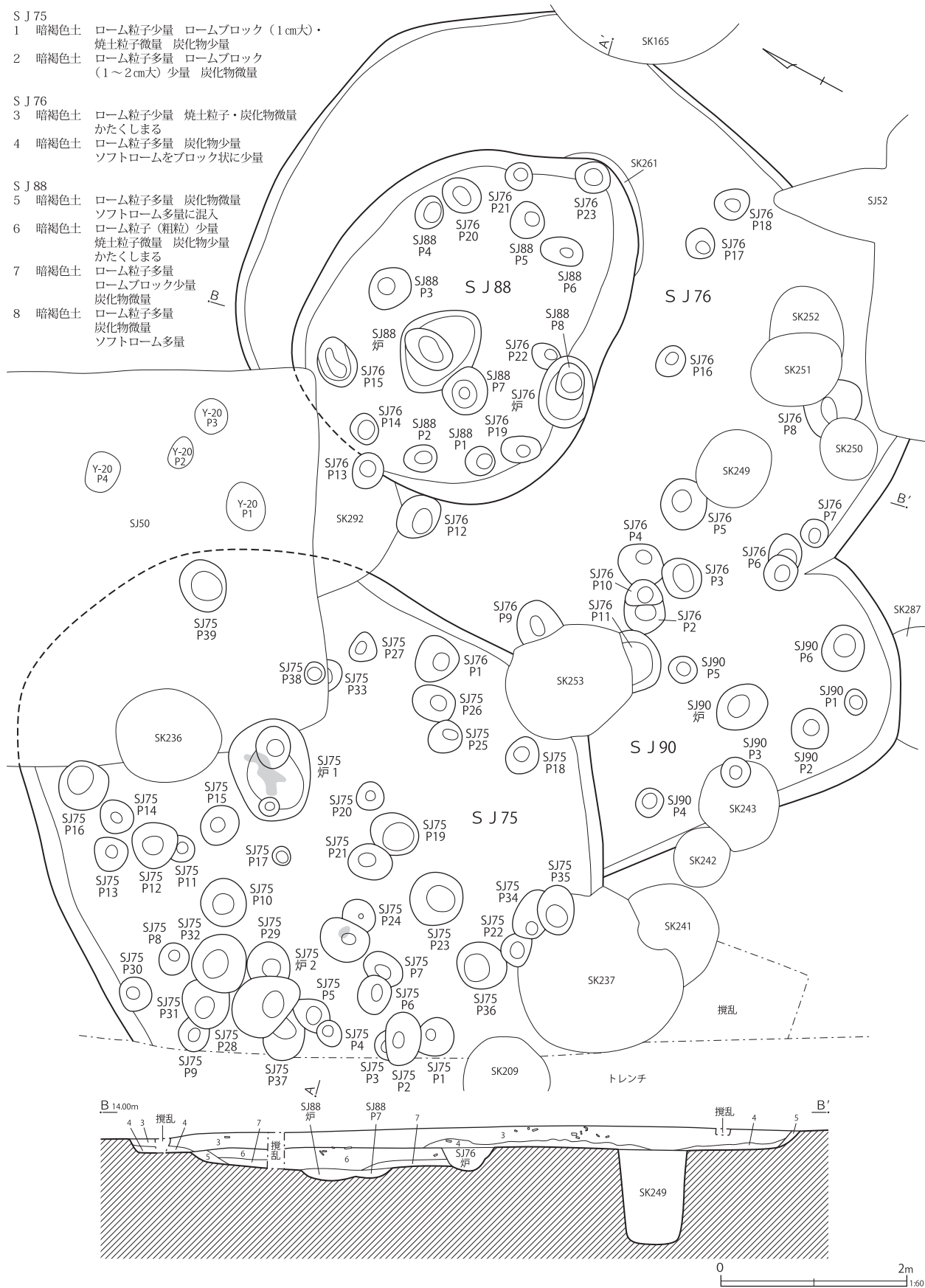
第 75 号住居跡は、Y・Z－20 グリッドに位置する。奈良時代の第 50 号住居跡、縄文時代の第 76 号住居跡、第 237 号土壌に壊されている。第 90 号住居跡、第 236 号土壌を壊している。第 209・253・292 号土壌と重複しているが、新旧関係については不明である。平面形態は不整楕円形である。炉と柱穴を基準とした主軸方位は、N－37°－E である。規模は長径 6.60 m、短径 5.58 m、深さ 0.29 m である。

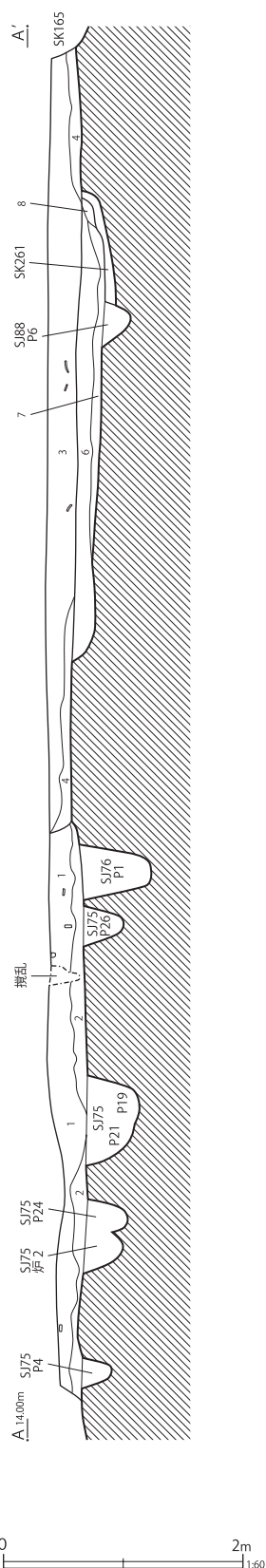
柱穴は 39 本が検出された。主柱穴は P 2・P 16・P 26・P 29・P 35・P 39 の 6 本と考えられる。多くの遺構が重複するため、すべての柱穴が住居跡に伴うとは限らないが、多くの柱穴や、炉が 2 基検出されたことから、複数回の建て替えが行われたと考えられる。

P 36 の上部からは第 418 図 1 の深鉢形土器が

第 64 表 第 75 号住居跡柱穴計測表（第 416 図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	44.0	39.0	P 2	56.0	41.5	P 3	30.0	24.0	P 4	30.0	27.6	P 5	42.0	25.6
P 6	42.0	17.1	P 7	44.0	18.2	P 8	38.0	25.6	P 9	38.0	18.4	P 10	52.0	47.1
P 11	30.0	18.2	P 12	50.0	38.0	P 13	38.0	26.7	P 14	38.0	30.0	P 15	46.0	42.2
P 16	54.0	61.7	P 17	20.0	24.3	P 18	42.0	29.2	P 19	54.0	44.3	P 20	30.0	17.4
P 21	50.0	44.4	P 22	38.0	10.6	P 23	60.0	54.0	P 24	36.0	34.9	P 25	38.0	44.5
P 26	46.0	37.6	P 27	32.0	24.2	P 28	80.0	52.8	P 29	48.0	46.4	P 30	38.0	14.0
P 31	56.0	30.8	P 32	62.0	34.5	P 33	36.0	12.3	P 34	56.0	28.9	P 35	52.0	44.7
P 36	56.0	65.8	P 37	56.0	29.7	P 38	24.0	21.4	P 39	58.0	39.3			





第 415 図 第 75・76・88・90 号住居跡（2）

逆位に検出された。口縁部側を差し込むように埋設されていた。P 36 の上部はやや広く掘り広げられており、土器埋設のためと考えられる。逆位のため、口縁部は設置当初から欠損していたと考えられる。底部も欠損するが、土器自身が確認段階で飛び出て検出されており、後世に壊された可能性がある。

炉は 2 基検出された。残存状態から炉 1 が新しく、炉 2 が古い。炉 2 は南側の偏った位置から検出されていることから、建て替え時に主軸方向を大きく変えたと考えられる。

炉 1 はほぼ中央から検出された。北側の落ち込みからは、同一個体の深鉢形土器（第 420 図 82～90）の破片が出土した。本来は埋甕炉であったが、埋設土器が抜き取られたと考えられる。平面楕円形である。規模は、長径 1.12 m、短径 0.88 m、深さ 0.26 m である。

炉 2 は中央南よりから検出された。地床炉で、平面楕円形である。規模は長径 0.56 m、短径 0.42 m、深さ 0.21 m である。

住居跡の範囲内の遺物には、重複する遺構のものも多数混入していると考えられる。

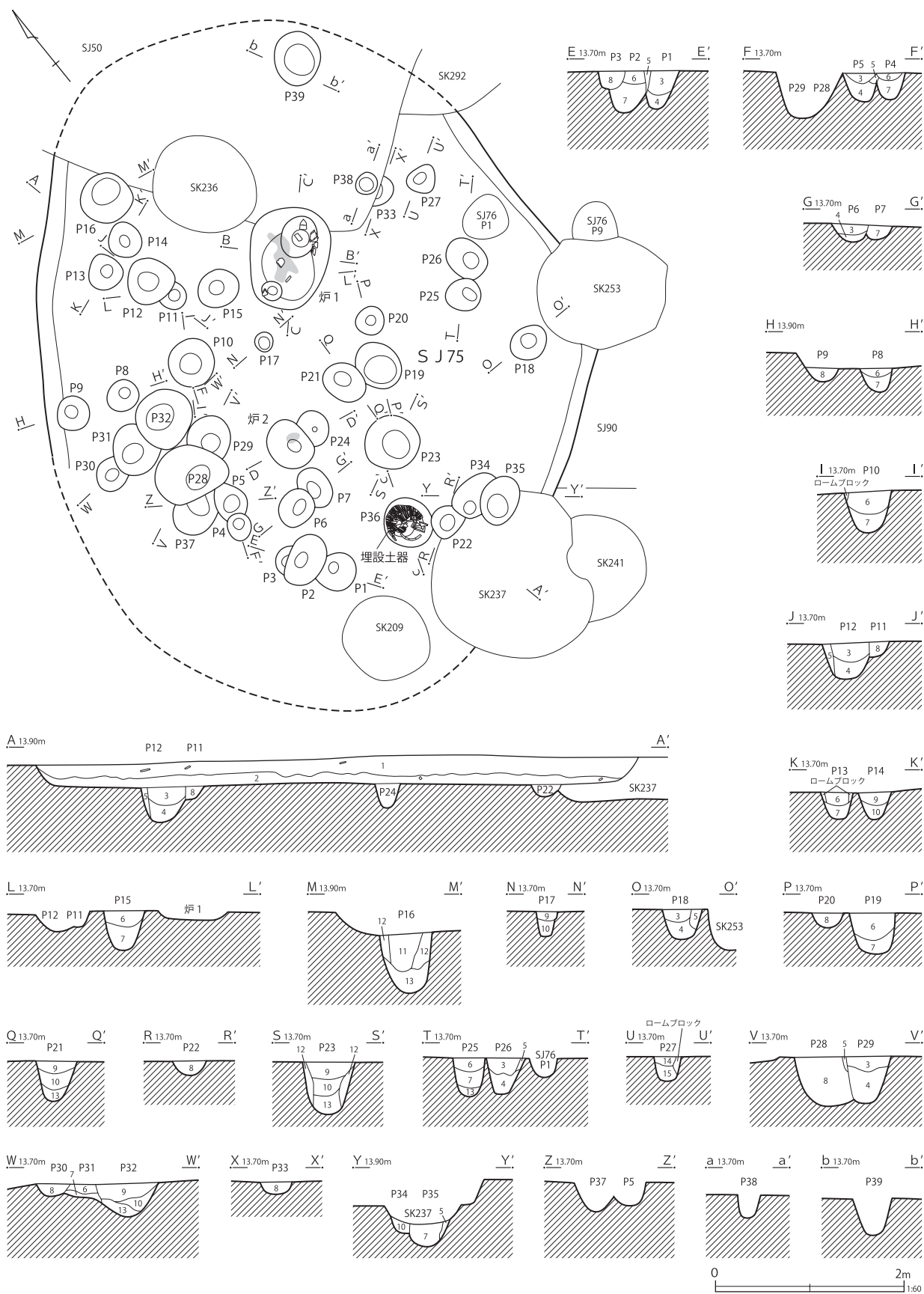
住居跡の時期は、炉内から出土した土器からすれば中期中葉の加曽利 E II 式期である。また、埋設土器の時期は中期末葉の加曽利 E III 式期である。

第 418～421 図は出土した遺物である。

第 418 図 1・2 は器形復元が可能であった土器である。

1 は、P 36 に逆位に埋設されていたキャリパー形の大型深鉢形土器である。胴部のみが残存している。文様は 2 本 1 組の沈線で、磨消懸垂文が 14 単位垂下させている。器面の半分近くが著しく風化している。地文は複節 R L R の縄文が縦方向に施文され、粗雑である。残存高 44.7 cm である。

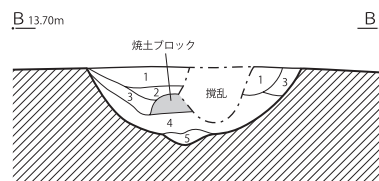
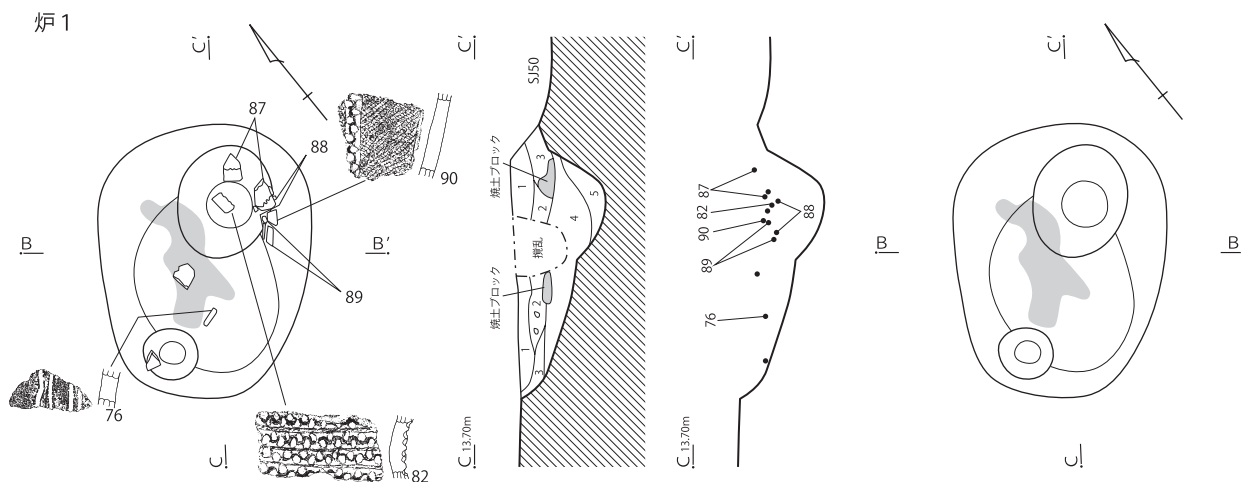
2 は深鉢形土器の胴部と底部が残存するものである。文様は地文のみが施文される。地文は単節 R L の縄文が斜め方向に施文される。底径 6.6 cm、



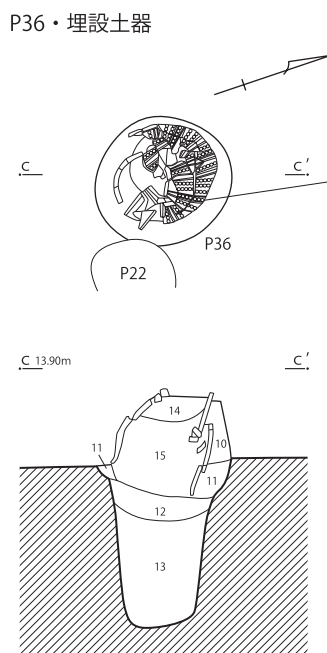
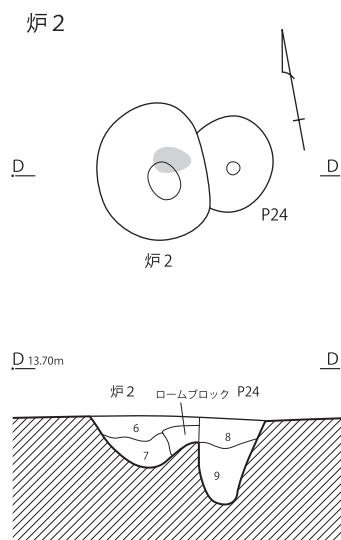
第 416 図 第 75 号住居跡 (1)

- S J 75
- | | | | |
|--------|---------|------------------------|-------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子少量 | ロームブロック (1 cm大)・焼土粒子微量 | 炭化物少量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1~2 cm大) 少量 | 炭化物微量 |
- ピット
- | | | | |
|---------|-----------------|------------|-------|
| 3 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 焼土粒子・炭化物微量 | |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 炭化物微量 | |
| 5 暗黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量 | | |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 少量 | 焼土粒子微量 | 炭化物少量 |

- | | | |
|----------|--------------------------|-----------------------|
| 7 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1 cm大)・炭化物微量 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 多量 | 炭化物少量 |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 少量 | 炭化物微量 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック (1 cm大) 多量 | |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 少量 | 炭化物多量 色調暗い |
| 12 暗黄褐色土 | ロームブロック少量 | ソフトローム多量 炭化物微量 |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ソフトローム少量 |
| 14 褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 少量 | 炭化物・焼土粒子微量 黒色強い |
| 15 褐色土 | ローム粒子多量 | ソフトロームブロック状に少量 |



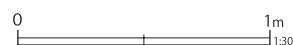
- S J 75 炉
- | | | | |
|---------|--------------|------------|----------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 焼土粒子少量 | 炭化物微量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子多量 | 焼土ブロック少量 | 炭化物微量 |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒子多量 | 焼土粒子微量 | ソフトローム主体 |
| 4 暗黄褐色土 | ロームブロック多量 | 焼土粒子・炭化物少量 | |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロック主体 | | |



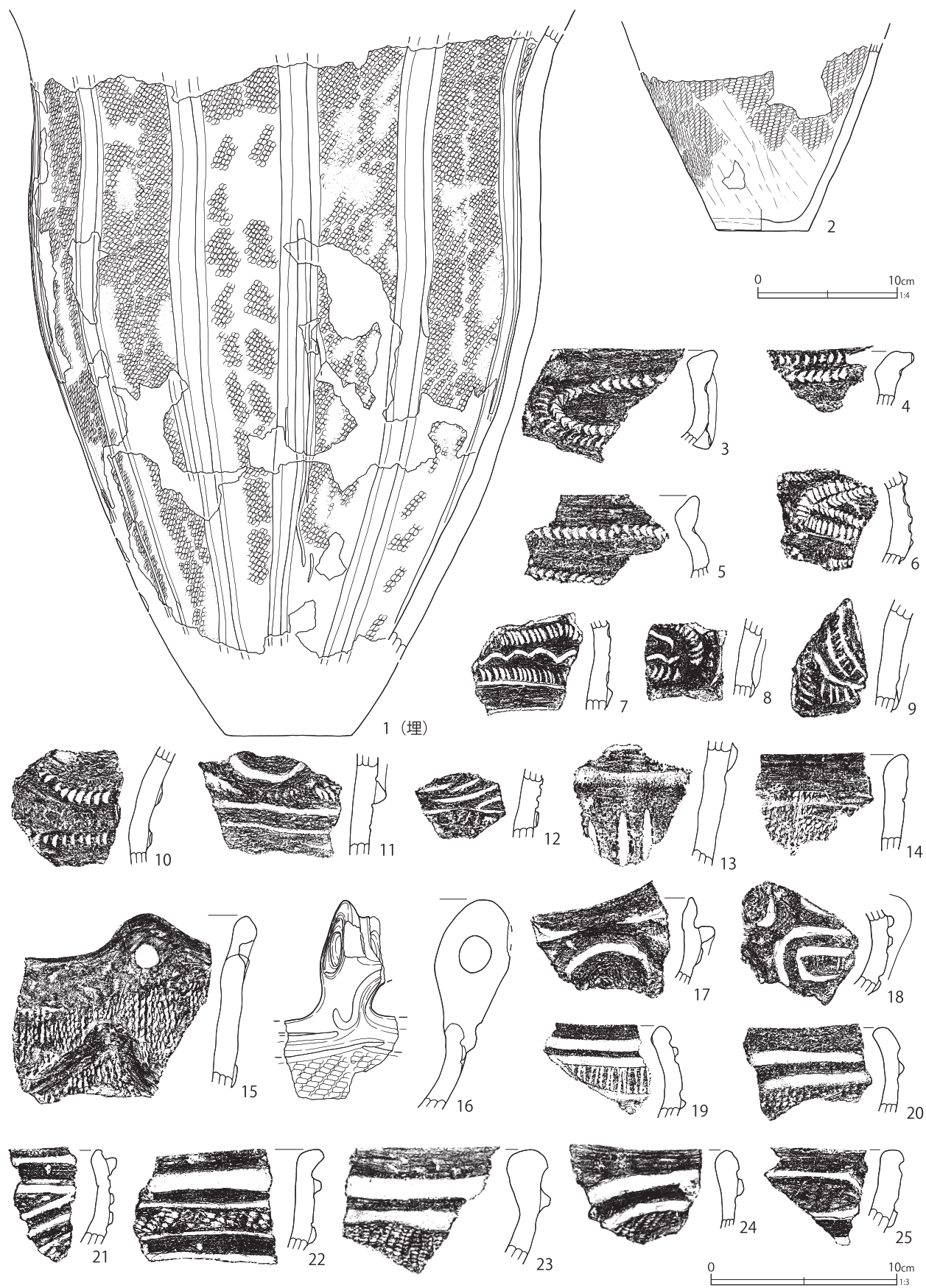
- 炉 2
- | | | |
|--------|---------------|------------|
| 6 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 少量 | 焼土粒子・炭化物少量 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 焼土粒子・炭化物微量 |

- ピット 24
- | | | |
|--------|---------------|-----------------------|
| 8 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 少量 | 焼土粒子微量 |
| | 炭化物少量 | |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1 cm大)・炭化物微量 |

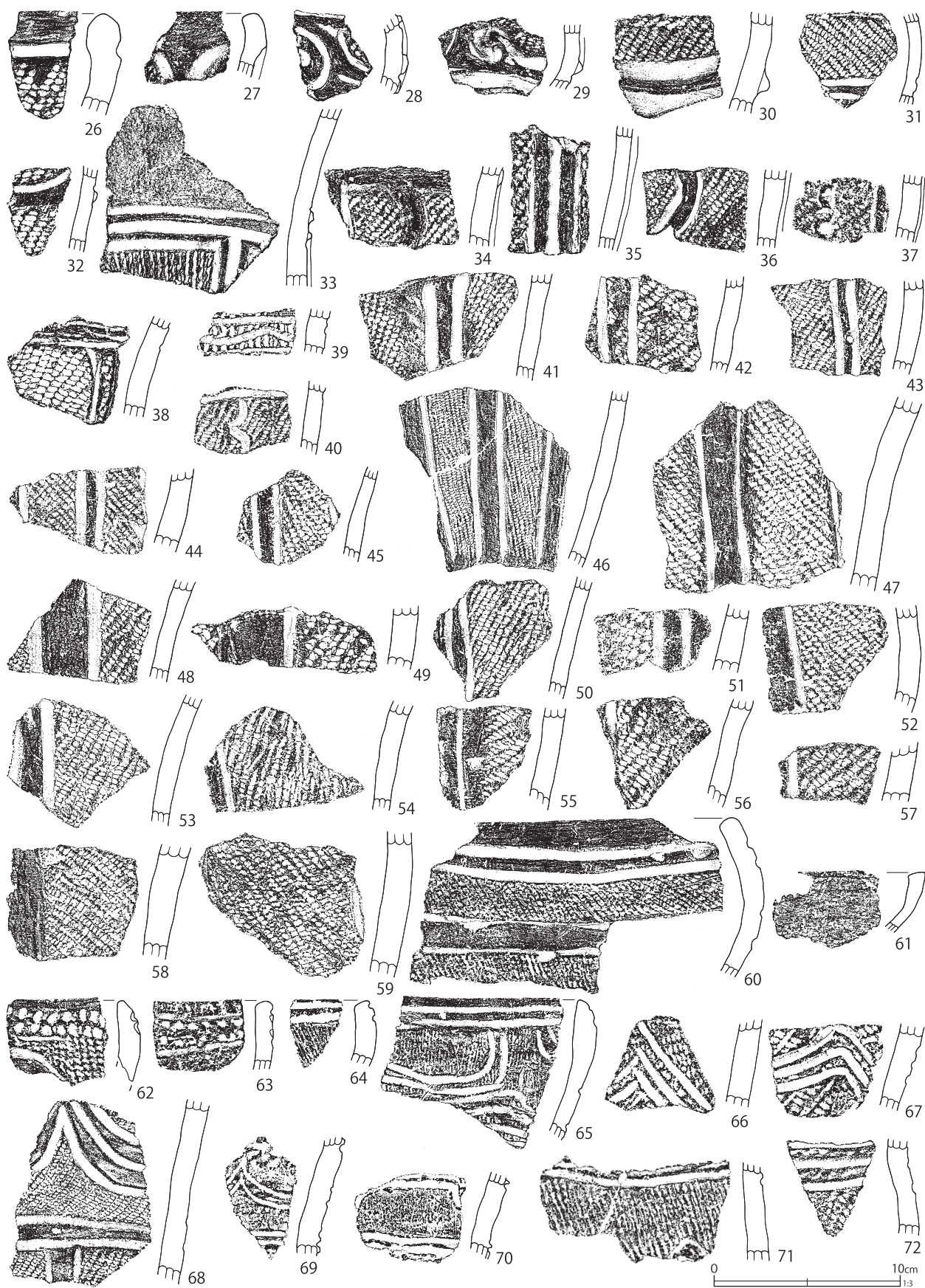
- ピット 36・埋設土器
- | | | |
|---------|---------------|------------------------|
| 10 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物少量 | |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 炭化物微量 |
| 12 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1~2 cm大) 微量 |
| | 炭化物少量 | ソフトローム混入 |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子多量 | しまり弱い |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 焼土粒子・炭化物微量 |
| 15 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 多量 | ロームブロック (1 cm大)・焼土粒子微量 |
| | 炭化物少量 | |



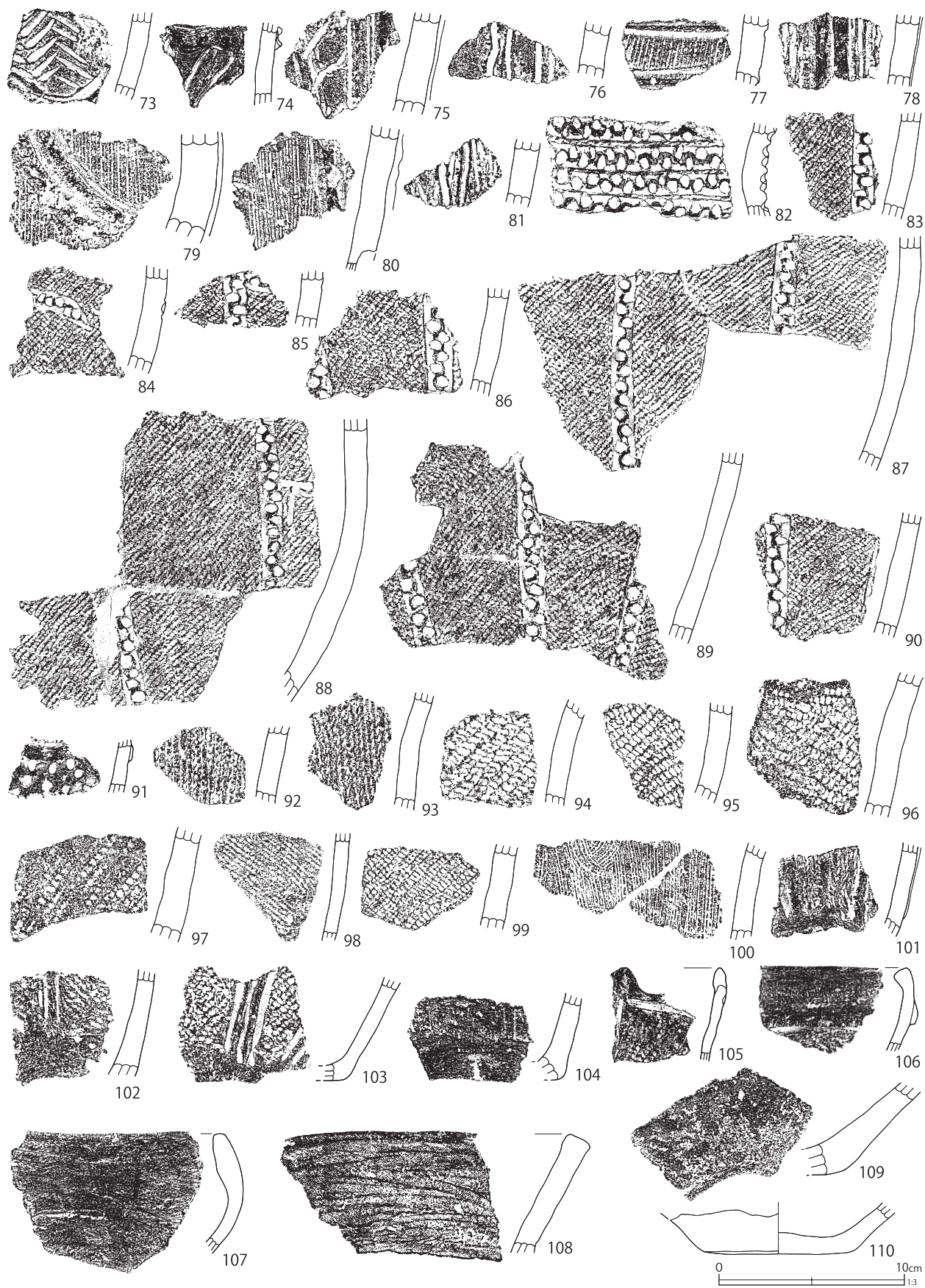
第 417 図 第 75 号住居跡 (2)



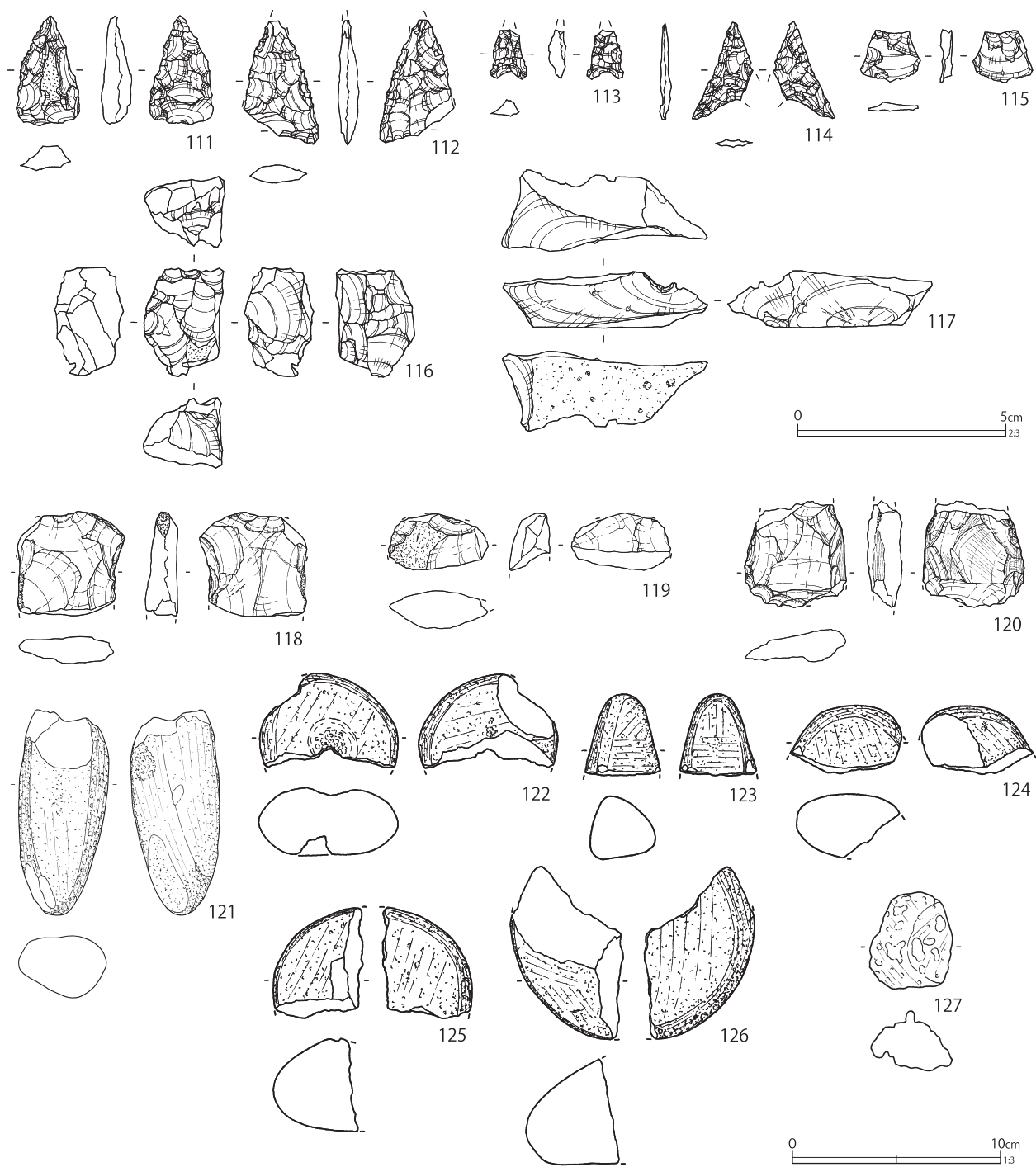
第418図 第75号住居跡出土遺物(1)



第419图 第75号住居跡出土遺物(2)



第420図 第75号住居跡出土遺物(3)



第421図 第75号住居跡出土遺物（4）

残存高 13.5 cmである。

第418図 3～25、第419図 26～72、第420図 73～110は出土した土器の破片資料である。

3～14は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。

3～6は阿玉台式系の土器である。隆帯などに

沿って、爪形文やペン先状の三角押文が施文されている。

7～14は勝坂式系の土器である。7・8は爪形文が施文される藤内式である。9～14は隆帯脇に沈線が施される勝坂式末葉の土器である。14は地文として撚糸文Lが施文される。

15～91・101～103は中期後葉の加曽利E式期の深鉢形土器である。

15～59は加曽利E式系のキャリパー形の土器である。15～32は口縁部で、隆帯で波状文や渦巻文などが施文される。15は把手部分に円形の盲孔が施される。16は眼鏡状の突起が貼付されている。地文として15・17～19は撚糸文Lが、16・21～23・25・26・29・30・32は単節RLの縄文が、24は0段多条RLの縄文が、28・31は単節LRの縄文が28は横方向に、他は縦方向に施文される。33～59は頸部から胴部である。33～37は隆帯で懸垂文などの文様が施される。地文として33は撚糸文Lが、34～37は単節RLの縄文が縦方向に施文される。38～59は沈線で懸垂文などの文様が施される。39は頸部に波状文が施文される。43～58は磨消懸垂文が施される。地文として39は無節Lの縄文が、41は複節RLRの縄文が、47・51は複節RLRの縄文が、44～46・58・59は単節LRの縄文が、55は0段多条RLの縄文が、他は単節RLの縄文が施文される。101～103は底部である。

61は口縁部が無文となる。

60・62～72は連弧文系の土器である。60は単節LRの縄文が、66・68・72は単節RLの縄文が、69は無節Rの縄文が、71は撚糸文Lが、他は条線が地文として施文される。67は太細の原体を撚り合わせる単節RLの縄文が施される。

72～81は曽利式系の土器である。

82～90は炉から検出された同一個体の土器である。82は頸部で沈線内に交互刺突文が施される。83～90は胴部で、交互刺突文が施文される沈線を垂下させている。地文は単節RLの縄文である。曽利式系と加曽利式系の折衷的な土器である。

91は円形刺突文が地文の深鉢形土器である。

92～100は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。

104は深鉢形土器の底部である。

105はミニチュアに近い小型の深鉢形土器の口縁部である。

106～110は浅鉢形土器である。

第421図111～127は出土した石器である。111～114は無茎の石鏃である。111の基部に挟りは入らない。115は使用痕を有する剥片である。116・117は石核である。118～126はいずれも破片である。118～120は打製石斧である。121は敲石である。122～126は磨石である。122は器面中央に敲打による凹部が残されている。127は軽石である。

第76号住居跡（第414・415・422～430図）

第76号住居跡は、Y・Z-20・21グリッドに位置する。奈良時代の第50・52号住居跡と第165・250・252号土壌に壊されている。第75・88・90号住居跡、第249・251・253・261号土壌を壊している。床面下からは第88号住居跡が検出された。第292号土壌と重複しているが、新旧関係については不明である。平面形態は楕円形である。平面形態を基準とした主軸方位は、N-15°-Eである。規模は長径7.36m、短径6.60m、深さ16.8mである。

柱穴は23本が検出された。柱穴の規模は小さく壁柱穴化している。

炉はほぼ中央から検出された。東側から礫が検出されており、石囲炉であった可能性がある。平面楕円形である。規模は、長径0.80m、短径0.54m、深さ0.15mである。

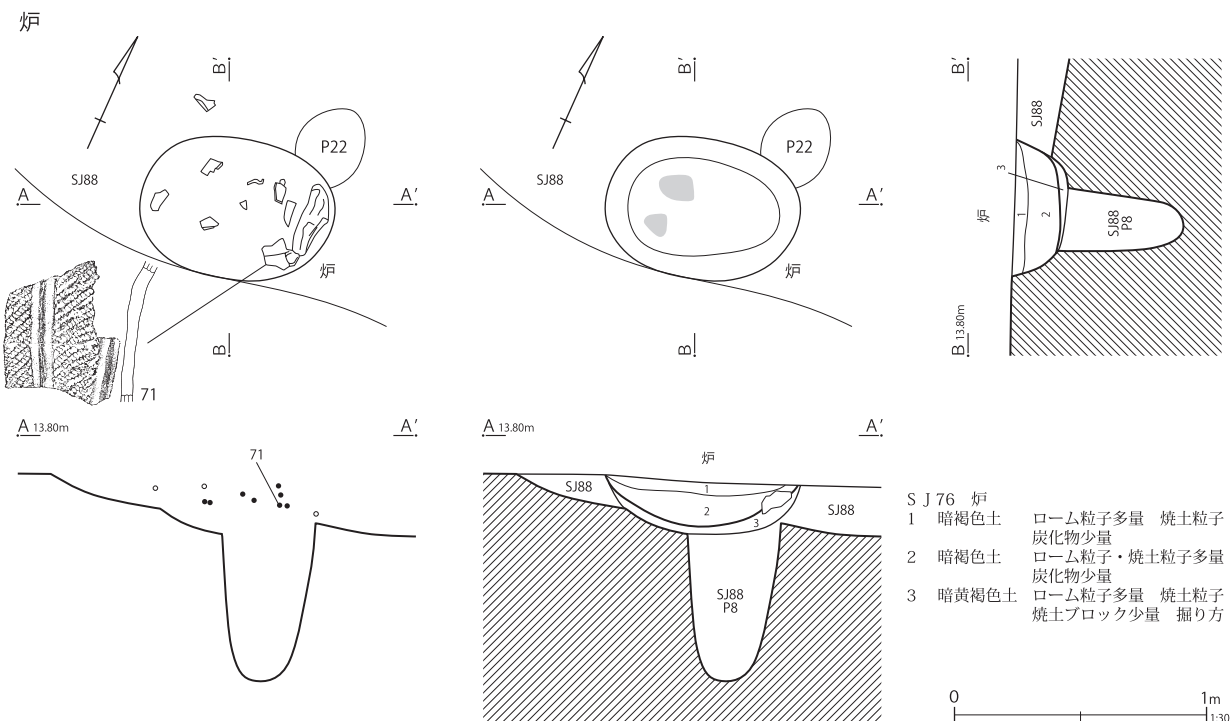
住居跡の時期は炉から出土した土器などから中期末葉の加曽利EⅢ式期と考えられる。

第424～430図は出土した遺物である。

第424図1・2は器形復元が可能であった土器である。

1は浅鉢形土器である。口縁部は下で屈曲させて肩部を作り出し、底部に至る器形である。肩部には隆帯で端部を渦巻かせる横S字状文が施文されている。器面は内外面ともミガキ状の調整が行

- S J 76 ピット
- | | | | | | |
|---------|----------|--------------------|---------|-------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 炭化物微量 | 7 暗褐色土 | ローム粒子(粗粒)少量 | ロームブロック (1~2cm大)・炭化物微量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 炭化物少量 | 8 暗褐色土 | ローム粒子(粗粒)少量 | ロームブロック (1~2cm大)微量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ソフトローム混入 | 9 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 炭化物少量 |
| 4 暗黄褐色土 | ソフトローム主体 | | 10 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1~2cm大)少量 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 焼土粒子・炭化物微量 | | | |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1~2cm大)少量 | | | |
| | | 炭化物微量 | | | |



第 423 図 第 76 号住居跡 (2)

第65表 第76号住居跡柱穴計測表 (第422図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	50.0	59.7	P 2	46.0	30.1	P 3	46.0	22.4	P 4	52.0	47.3	P 5	54.0	57.0
P 6	60.0	62.2	P 7	30.0	20.8	P 8	64.0	48.5	P 9	50.0	34.0	P10	38.0	41.3
P11	68.0	23.4	P12	54.0	48.7	P13	40.0	32.8	P14	34.0	13.2	P15	56.0	54.1
P16	36.0	37.4	P17	34.0	20.0	P18	38.0	73.3	P19	44.0	50.9	P20	42.0	33.8
P21	32.0	29.6	P22	30.0	27.5	P23	40.0	46.0						

われている。赤彩の痕跡は認められない。推定口径 11.0 cm、底径 8.0 cm、器高 13.5 cmである。

2は器台である。半分ほどが残存する。器面は荒れており細かな調整不明である。2個1組の円孔が4単位穿孔されていたと考えられる。台上部径 11.8 cm、台下部径 16.8 cm、器高 8.0 cmである。

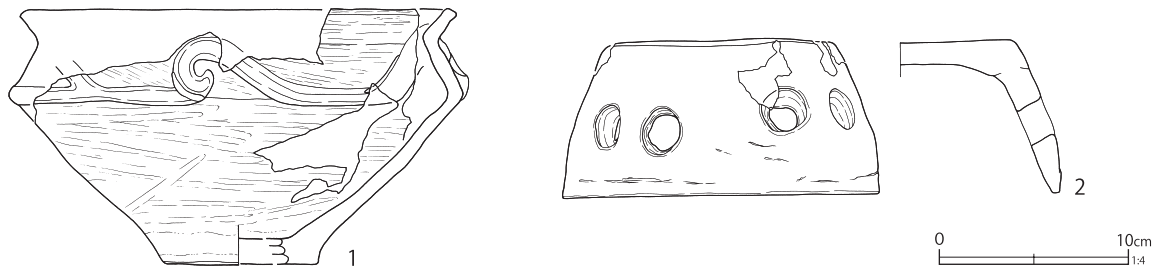
第 425 図 3 ~ 52、第 426 図 53 ~ 81、第 427 図 82 ~ 124、第 428 図 125 ~ 140 は出土した土器の破片資料である。

3 ~ 25 は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。

3 ~ 5 は阿玉台式系の土器である。

6 ~ 25 は勝坂式系である。6 ~ 10 は角押文やペン先状の三角押文が施文される新道式である。11 ~ 13・17 は隆帯脇に爪形文が施される藤内式である。14 ~ 16・18 ~ 25 は勝坂式終末の土器で、14 ~ 16・18・19 は隆帯脇に沈線が施文される。そのうち 15・16 は沈線に沿って爪形文や蓮華文などが施され藤内式の要素が残る。20 ~ 24 は沈線で文様が施文される。24 の地文は無節 L である。

26 ~ 113・121 ~ 124 は中期後葉の加曽利 E 式期の深鉢形土器である。



第 424 図 第 76 号住居跡出土遺物（1）

26～81・121～124は加曽利E式系のキャリパー形の土器である。26～47は口縁部である。文様は隆帯で渦巻文や繫弧文などが施される。37～47は隆帯に沿って施文される沈線が幅広になるもので、胴部に磨消懸垂文が施される住居跡の時期に伴う土器である。地文として26～31・33は撚糸文Lが31は縦方向に、他は横方向に施文される。34～36・38・39・43・44は単節R Lの縄文が34・36・44は横方向に、他は縦方向に施される。37は0段多条R Lの縄文が縦方向に、40・41・46は単節L Rの縄文が40は横方向に、41・46は縦方向に施文される。42は複節L R Lの縄文が縦方向に施される。48～81は頸部から胴部の破片である。48～52は文様が隆帯で施文される。48・52は渦巻文が、49～51は懸垂文が施される。地文として48～41は撚糸文Lが、52は単節R Lの縄文が縦方向に施文される。53～55は頸部から胴部で、胴部に文様は施されない。地文は53・54が単節L Rの縄文、55は撚糸文Lが縦方向に施文される。56～81は文様が沈線で施される。56・57は頸部と胴部の区画は隆帯で区画される。文様は垂下する懸垂文や蛇行懸垂文が描かれる。60・67～81は磨消懸垂文が施されるもので、住居跡に伴う土器である。地文として、56・57・61・62・64・65・67～68・71・72・74～77・79は単節R Lの縄文が、58～60は撚糸文Lが、63・66・81は無節Lの縄文が、70・78は複節L R Lの縄文が、73・80は単節L Rの縄文が施文される。77以外はすべて縦方向に施され

ている。77は斜め方向に施文される。121～124は底部で、121は隆帯で懸垂文が施される。122～124は磨消懸垂文が施文される。地文として、121は撚糸文Lが、122～124は単節R Lの縄文が施される。

82～97は連弧文系の土器である。83～86は口縁部に施文される沈線間に円形刺突文が施される。89は胴部の括れ部分に、円形刺突文が巡らされている。文様は沈線で施文されるが、磨消縄文となるものが多い。地文として82・84・85・89・93・95は単節R Lの縄文が、83・90・92は撚糸文Lが、86は無節Lの縄文が、94は単節L Rの縄文が、他は条線が施される。91は文様間を埋めるように短い条線が施文される。

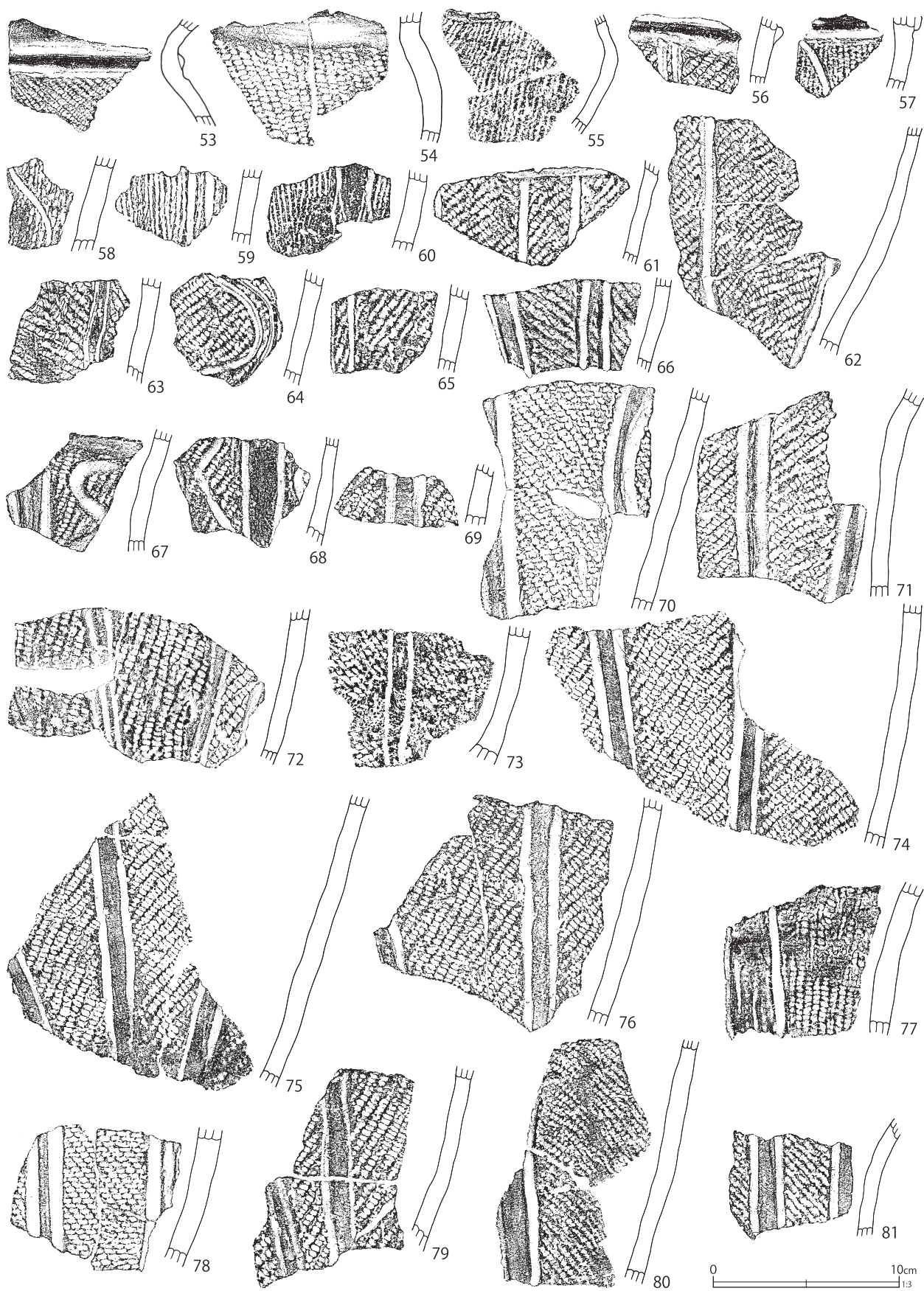
98～113は地文が条線となる曽利式系の土器である。98～108は重弧文や斜行文が施文される土器である。109～113はキャリパー形の器形である。

114～120は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。地文として114・115・120は撚糸文Lが、116・117は単節R Lの縄文が、118・119は条線が施される。

125～135は浅鉢形土器である。125は肩部に角押文で文様が施文され、新道式と考えられる。126は肩部に沈線を施文し交互刺突文が施される。胴部には撚糸文Lが地文として施文される。127は肥厚する口唇部に単節R Lの縄文が施されている。128は補修孔が残されている。129～133には、口縁と胴部を区画する沈線が巡らされている。133は胴部に条線が地文として施文される。



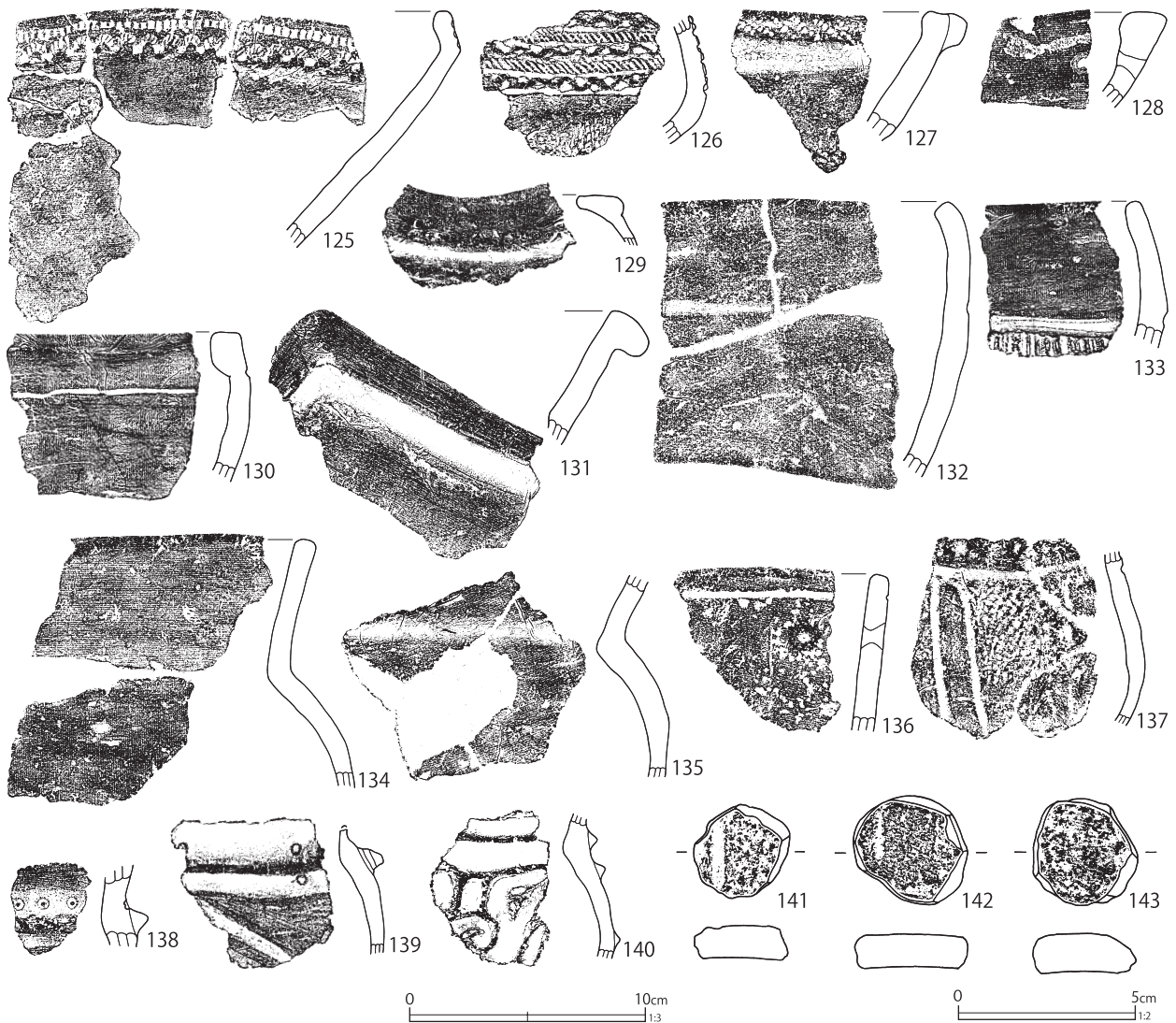
第 425 图 第 76 号住居跡出土遺物 (2)



第 426 图 第 76 号住居跡出土遺物 (3)



第 27 图 第 76 号住居跡出土遺物 (4)



第 428 図 第 76 号住居跡出土遺物（5）

赤彩は 133 の内外面に認められた。

136 は鉢形土器で、補修が残されている。孔は両面から穿孔されている。

137 は壺形土器で、胴部には沈線による磨消縄文で逆 U 字状に文様が施される。地文は単節 R L の縄文である。内面に赤彩が残されている。

138・139 は有孔罌付土器である。138 に孔は貫通せず、円形刺突文となっている。139 は罌部分に孔が貫通している。

140 は注口土器である。微隆起状の隆帯で文様が施される。

第 428 図 141 ～ 143 は土製円盤である。深鉢形土器の胴部の破片が加工されている。

第 429 図 144 ～ 163、第 430 図 164 ～ 177 は出土した石器である。

144 ～ 146 は石鏃である。いずれも無茎で、144 の基部に抉りは入らない。145 は抉りが逆 V 字状に深く入る。側縁は鋸歯状となっている。146 の抉りは浅い。

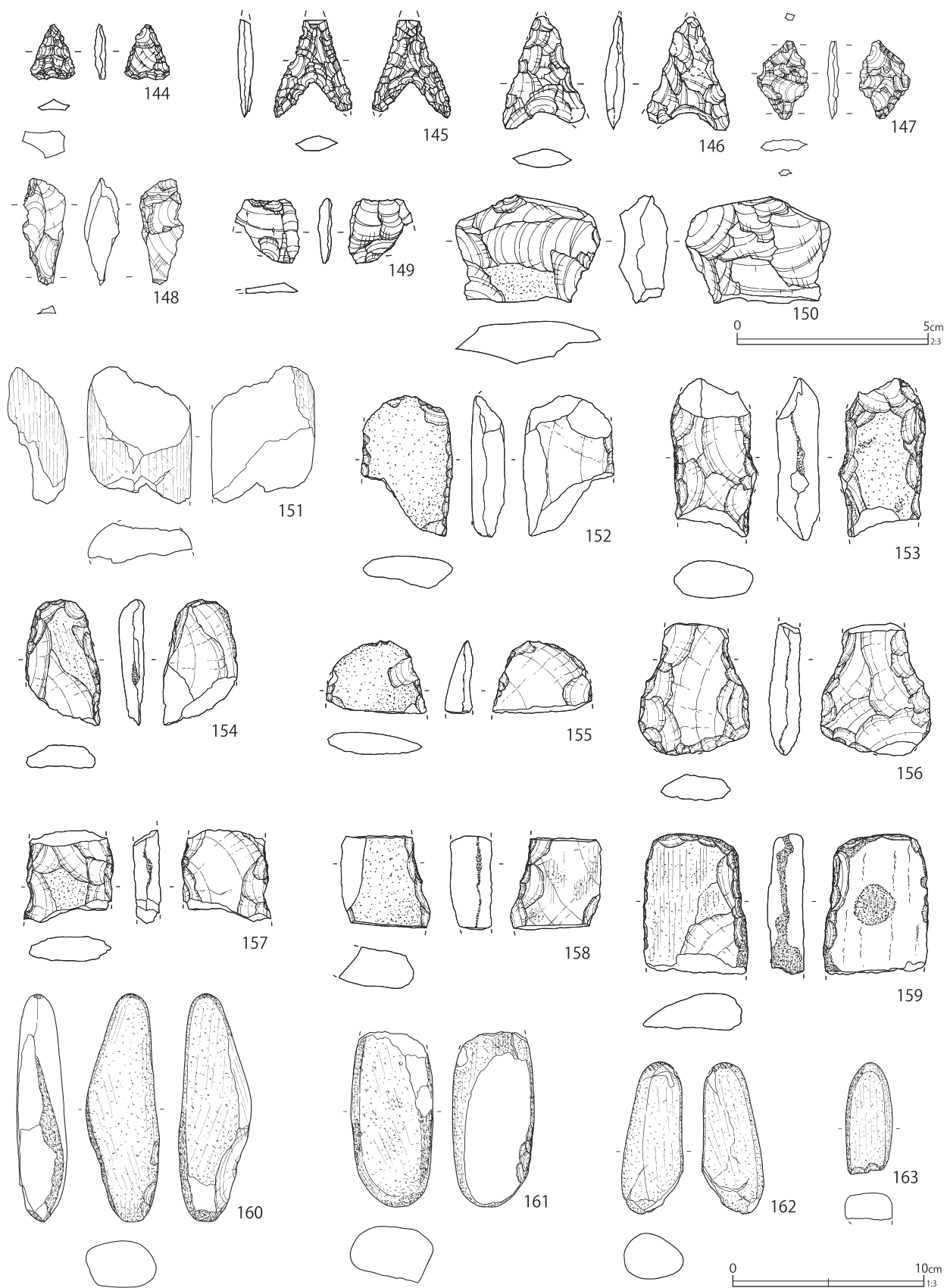
147・148 は石錐である。

149 はくさび形石器である。

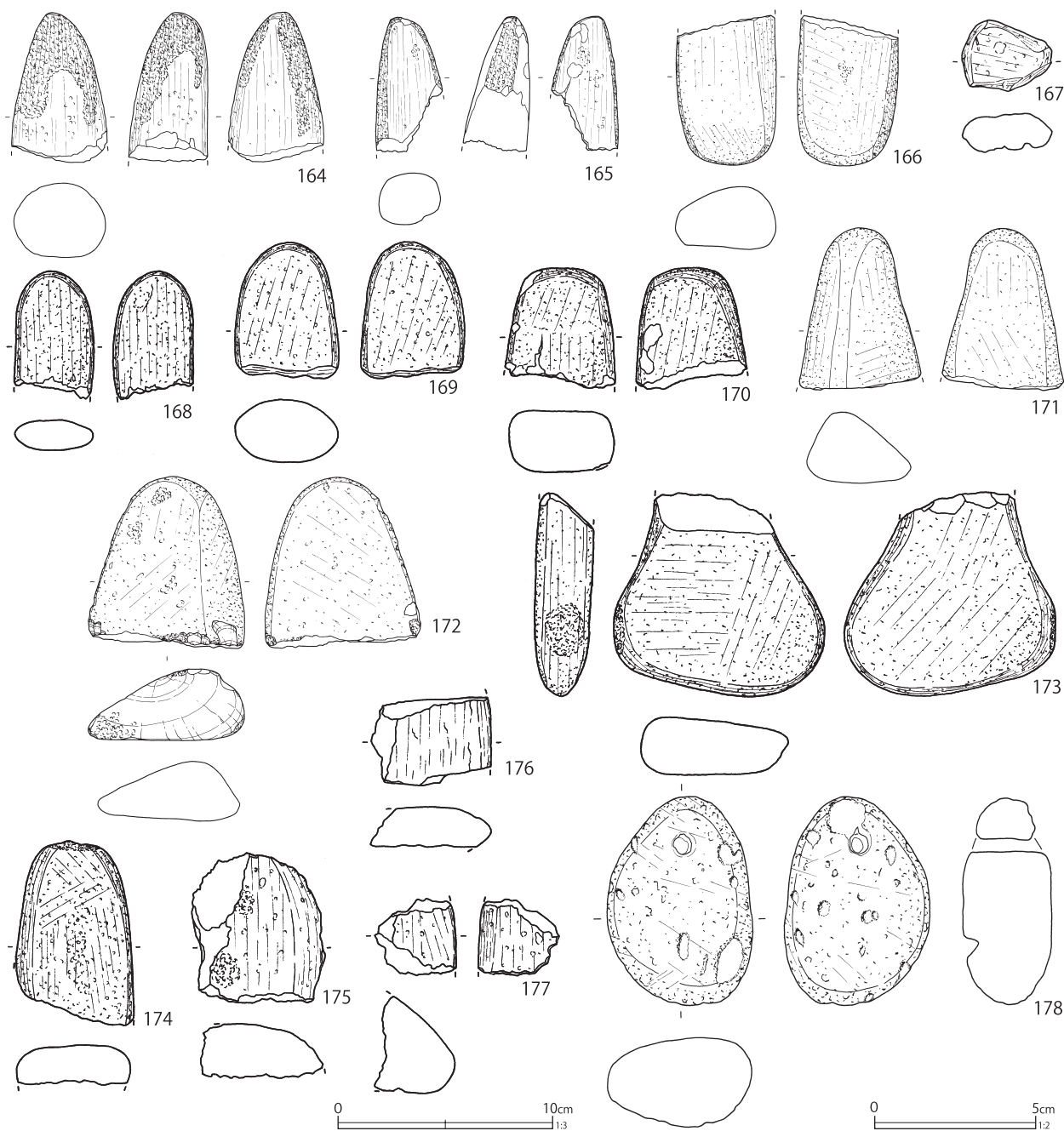
150 は使用痕を有する剥片である。

151 は磨製石斧である。ごく 1 部が残存するもので、乳棒状であると考えられる。

152 ～ 158 は打製石斧である。すべて破損品である。154・158 の器面には擦痕が認められる。



第 429 図 第 76 号住居跡出土遺物 (6)



第430図 第76号住居跡出土遺物（7）

159～166は敲石である。164・165は磨製石斧の破片が転用されたと考えられる。

167は軽石である。擦痕が認められる。

168～170・173・174は磨石である。173は側縁に敲打痕が認められる。

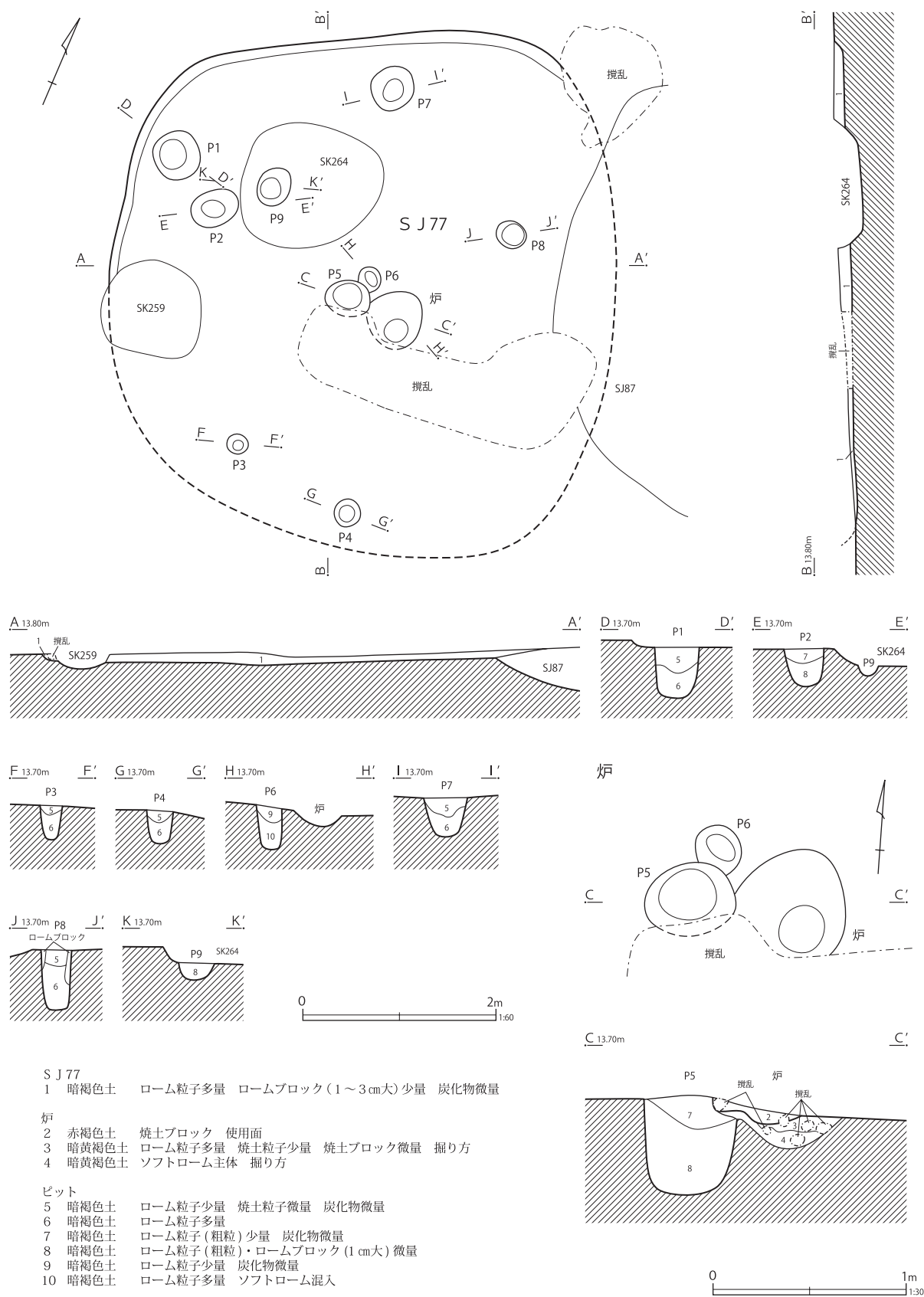
171・172はスタンプ形石器である。

175～177は石皿の小破片である。

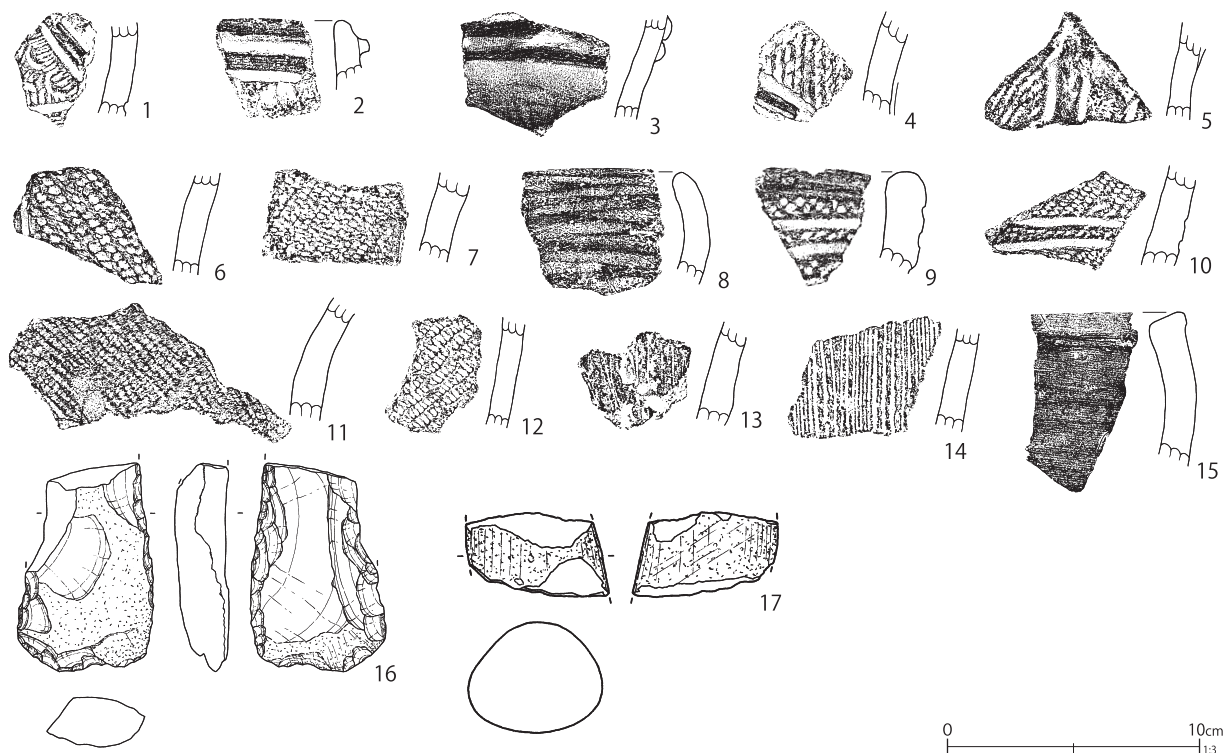
第430図178は垂飾である。楕円形状で、器面上部に円孔が貫通されている。

第77号住居跡（第431・432図）

第77号住居跡は、Z・AA－20グリッドに位置する。第87号住居跡を壊している。第259・264号土壌に壊されている。床面直上の覆土がわずかに残存しているのみで、南側の掘り込みは失われていた。残存部から平面形態は隅丸方形である。北壁を基準とした主軸方位は、N－24°－Wである。推定される規模は長径5.30m、短径5.26m、深さ0.28mである。



第 431 図 第 77 号住居跡



第432図 第77号住居跡出土遺物

第66表 第77号住居跡柱穴計測表 (第431図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	54.0	53.4	P 2	50.0	37.3	P 3	22.0	33.1	P 4	30.0	32.2	P 5	48.0	46.0
P 6	30.0	36.7	P 7	48.0	47.6	P 8	30.0	61.5	P 9	42.0	19.0			

柱穴は9本が検出された。主柱穴は不明である。
 炉はほぼ中央から検出された。地床炉で、平面不整円形である。規模は、長径0.60 m、短径0.58 m、深さ0.42 mである。

覆土がほとんど失われていたため、出土遺物はごく少なかった。住居跡の詳細な時期は不明であるが第87号住居跡よりも新しいため、中期後葉の加曽利EⅡ式期よりも新しいと考えられる。

第432図は出土した遺物である。

第432図1～15は出土した土器で、いずれも小破片であった。

1は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。爪形文や蓮華文が施文される。

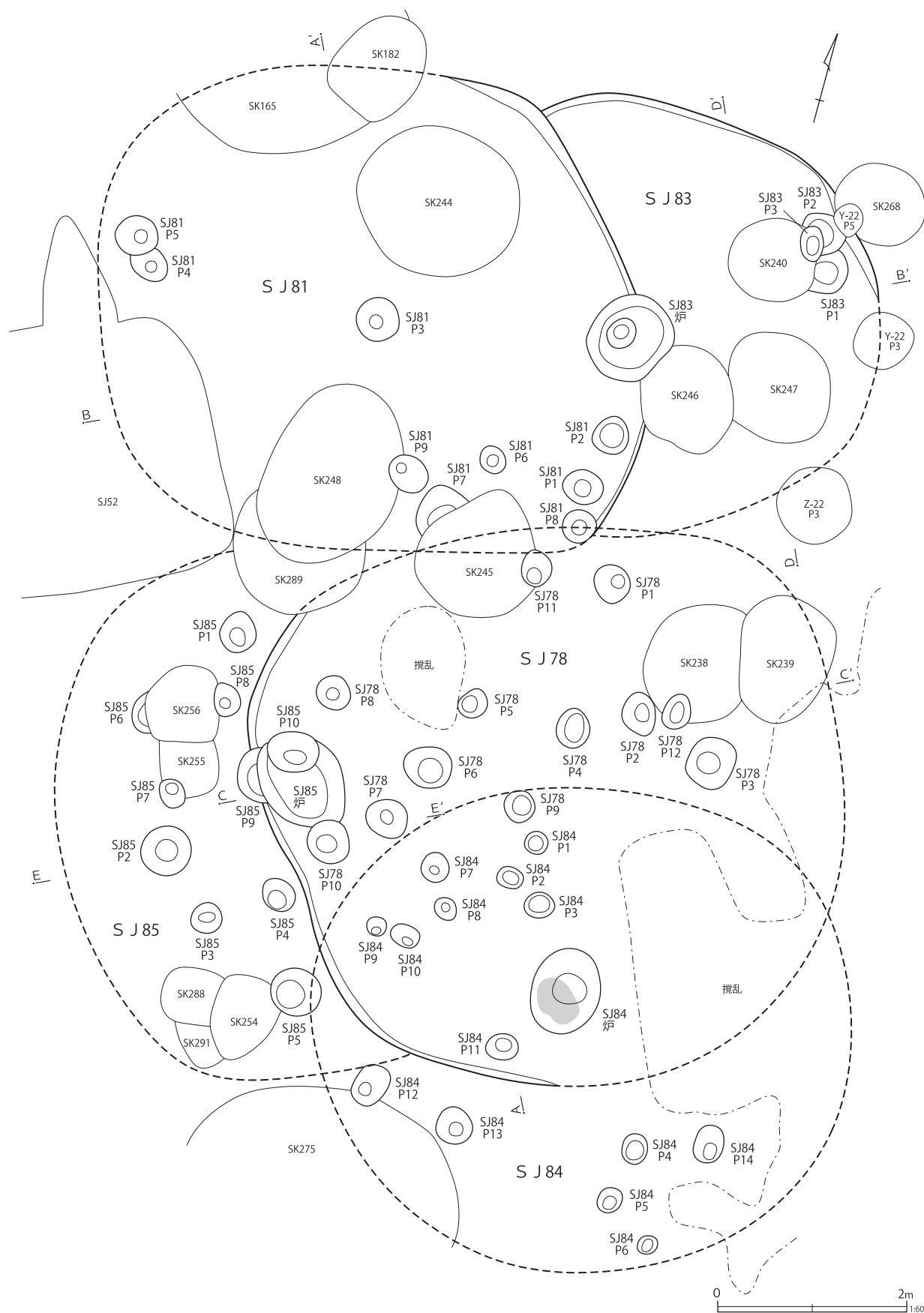
2～10は中期後葉の加曽利E式期の深鉢形土器である。2～7は加曽利E式系のキャリパー形の土器である。2は口縁部、3は頸部である。4

～7は胴部で、4は隆帯で、他は沈線で懸垂文が施される。地文として4は撚糸文Lが、5は無節Rの縄文が、6は複節LRの縄文が、7は単節RLの縄文が縦方向に施文される。8は無文の口縁部である。9は口縁部文様が施されないもので、単節RLの縄文が横方向に施文される。10は連弧文系の土器で、地文は単節RLの縄文である。

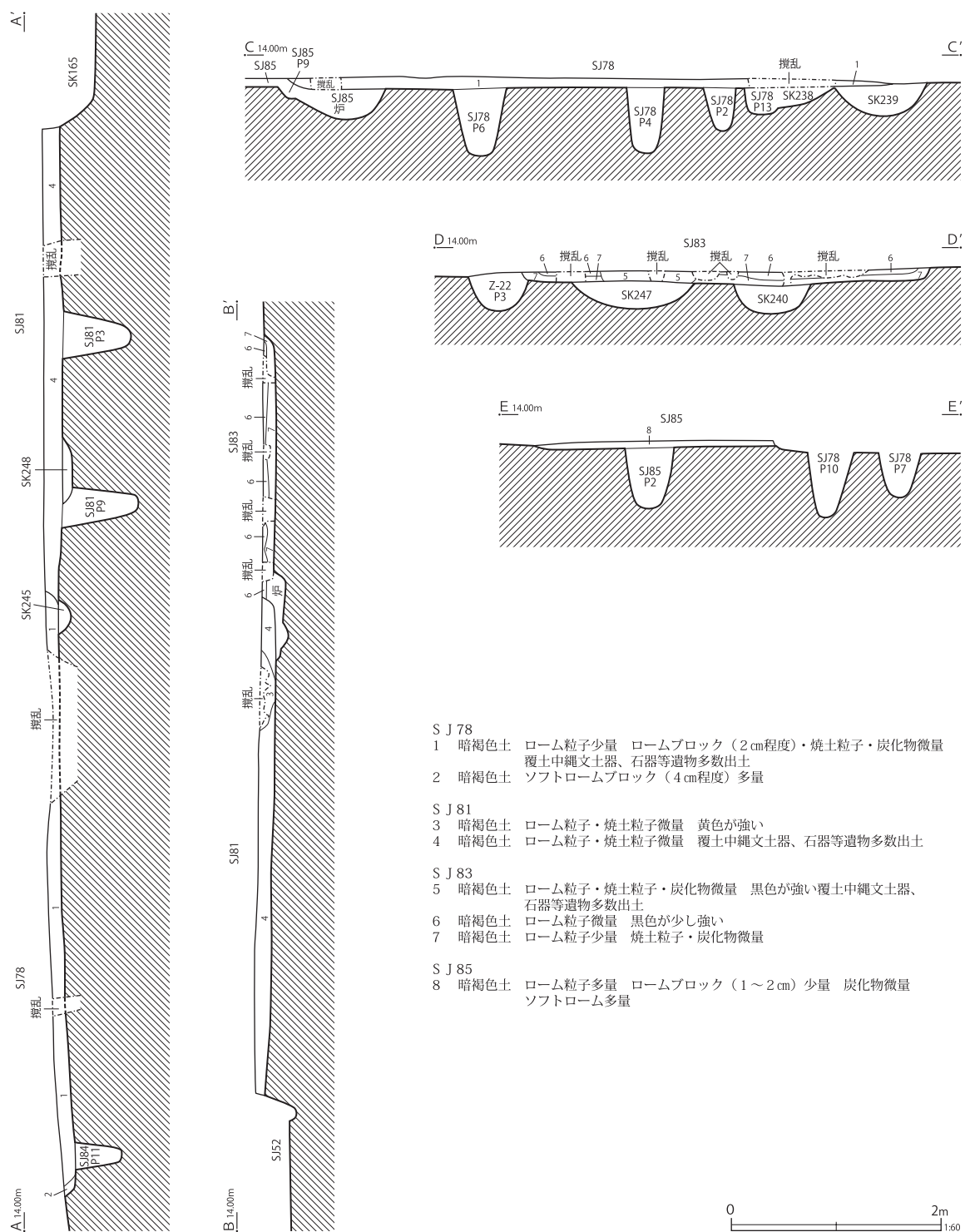
11～14は地文のみが施文される胴部で、11は単節LRの縄文が、12は単節RLの縄文が、13・14は条線が地文として施される。

15は浅鉢形土器の口縁部である。赤彩は認められなかった。

第432図16・17は出土した石器である。16は撥形の打製石斧である。両面に自然面が残る。刃部には擦痕が認められる。17は乳棒状の磨製石斧の小破片である。



第 433 図 第 78・81・83～85 号住居跡（1）

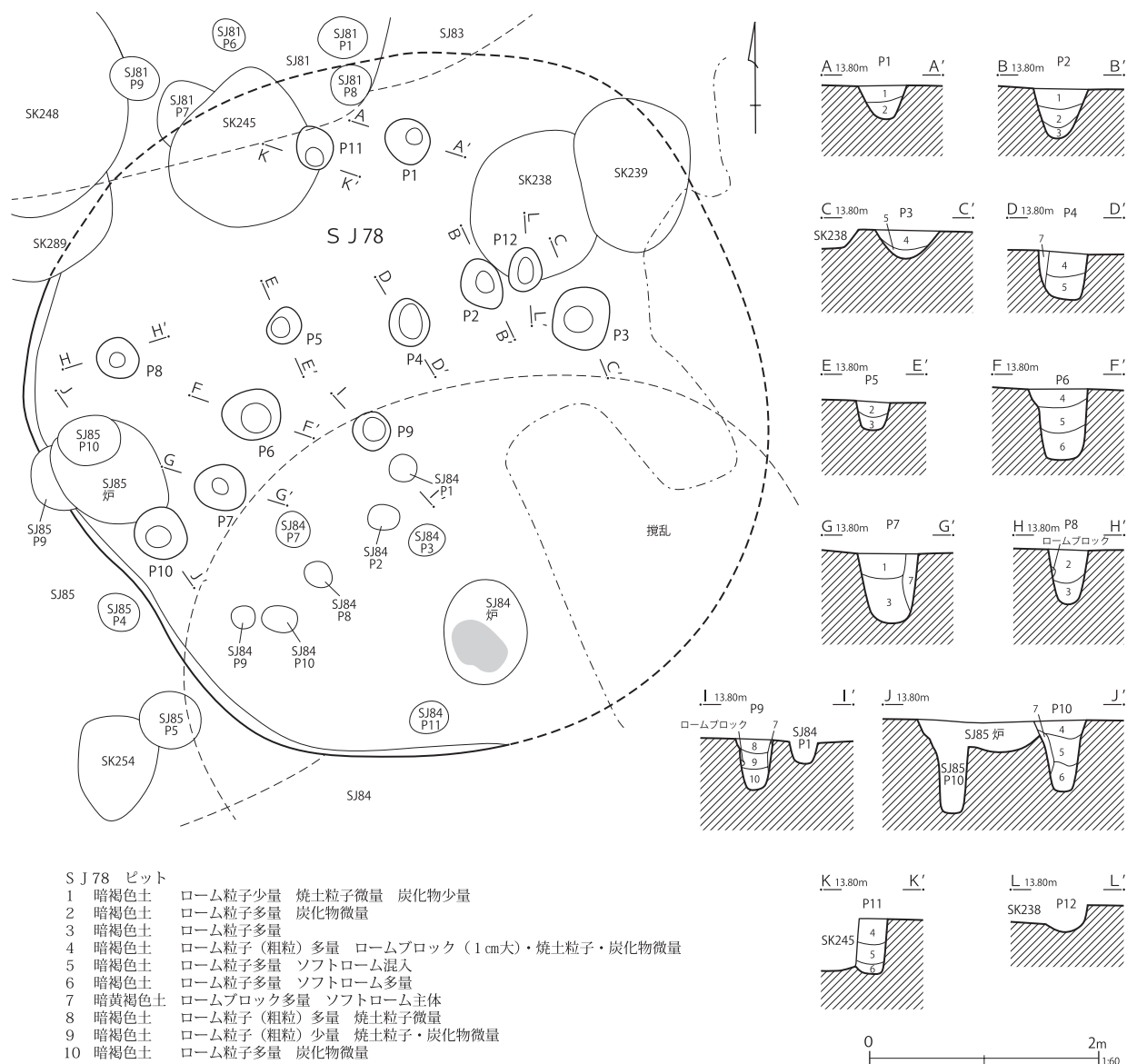


第 434 図 第 78・81・83～85 号住居跡 (2)

第 78・81・83～85 号住居跡 (第 433・434 図)

第 78・81・83～85 号住居跡の 5 軒は Y・Zー 21・22 グリッドから重複して検出された。南斜面部に位置し、覆土の上層は失われており、斜面上方よりの第 84・85 号住居跡は炉と柱穴のみ

が検出された。住居は複数の土層が重複している。土層断面から、第 78 号住居跡が最も新しい。後期初頭の出土遺物からも同様の結果が出ている。また、第 81 号住居跡は第 83 号住居跡を壊していることがわかる。



第 435 図 第 78 号住居跡

第67表 第78号住居跡柱穴計測表 (第435図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	42.0	34.6	P 2	48.0	42.4	P 3	56.0	24.1	P 4	44.0	39.4	P 5	30.0	23.9
P 6	52.0	64.2	P 7	46.0	43.4	P 8	38.0	48.0	P 9	32.0	43.2	P 10	48.0	55.1
P 11	40.0	44.6	P 12	40.0	23.9									

第 78 号住居跡 (第 433 ～ 436 図)

第78号住居跡は、Z-21・22グリッドに位置する。第238号土壌に壊され、第81・83～85号住居跡、第245号土壌を壊している。第239・289号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。時期からすると、柄鏡形住居跡と考えられるが、張り出し部が斜面下方を向き、失われている。

主体部の平面形態も明確ではない。主軸方位も不明である。残存部から推定される主体部分の規模は長径6.20m、短径5.90m、土層断面から深さ0.24mである。

柱穴は12本が検出された。多柱穴化しており、主柱穴は不明であった。

炉は検出されなかった。北側に攪乱が位置する



第 436 图 第 78 号住居跡出土遺物

ことから、壊されたと考えられる。

遺物は少量出土した。出土遺物から住居跡の時期は後期初頭の称名寺Ⅰ式期である。

第436図1～40は出土した土器の破片資料である。器形復元が可能なものは検出されなかった。

1・2は中期後葉の連弧文系の深鉢形土器で混入と考えられる。

3は加曽利Ⅴ式系の深鉢形土器である。

4～34は称名寺式系の深鉢形土器である。4は把手部分である。文様内に縄文が充填される土器が大半を占めるが、31は列点文も施される。32～34は文様内が無文で、称名寺式末葉の土器と考えられる。地文は単節LRの縄文が大半を占める。13は無節Lの縄文が、15・21・25・26は単節RLの縄文が施文されている。

35・36は加曽利Ⅴ式系の深鉢形土器である。

37・38は粗製の深鉢形土器で、37は断面三角形の隆帯を口縁部に巡らしている。

39・40は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。

第436図41はミニチュア土器と考えられるが、土鈴であった可能性がある。

第436図42～45は出土した石器である。

42・43は打製石斧である。42は基部のみが残存している。43は短冊形で、破損した刃部が再加工されている。

44は磨石で、半分が欠損するが器面に敲打による凹部が認められる。

45は石皿の小破片である。側縁を敲打し再利用されたと考えられる。裏面に複数の漏斗状の凹部が認められる。

第79号住居跡（第437・438図）

第79号住居跡は、Y・Z－19・20グリッドに位置する。第227・228・230・231号土壇に壊されている。第225・229・232・233号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。周辺の攪乱が著しく、覆土はほとんど残されていなかった。そのため、図示した平面形態は覆土の範囲を示し、本来の形状は不明である。主軸方位も不明である。残存する規模は長径6.50m、短径5.40m、深さ0.14mである。

柱穴は22本が検出された。規模も小さく、多柱穴化しており、主柱穴は不明である。

炉は中央やや西よりから検出された。5～7層は、4層を残し埋め戻したような状況であった。平面楕円形である。規模は、長径1.06m、短径0.82m、深さ0.14mである。

出土遺物から時期の特定は難しいが、柱穴が多柱穴化していることなどから、中期末葉の加曽利ⅤⅢ式期と考えられる。

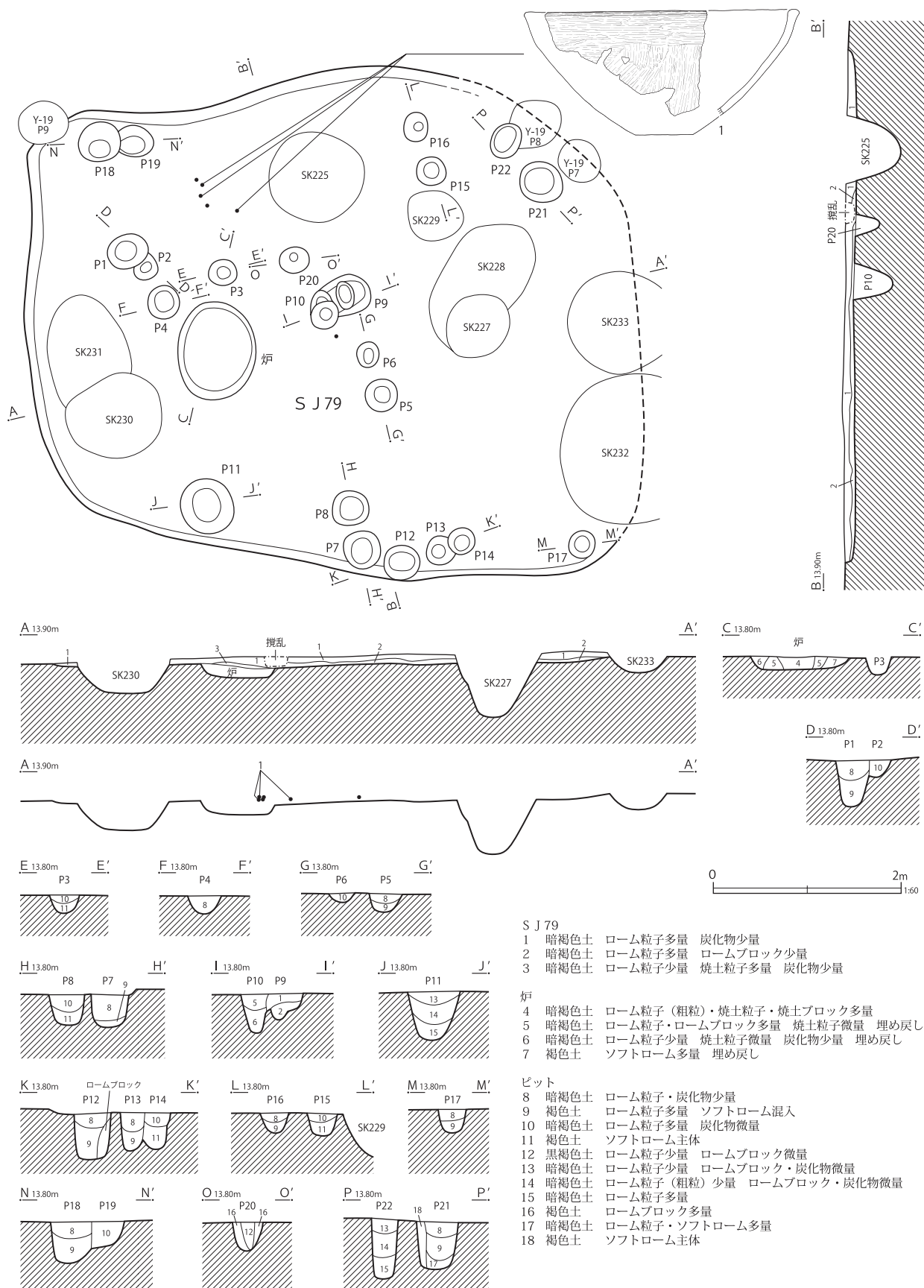
第438図1～24は出土した土器である。1は浅鉢形土器である。赤彩の痕跡はなかった。推定口径48.6cm、残存高18.6cmである。2は中期中葉勝坂式期の深鉢形土器である。3～20は中期後葉の加曽利Ⅴ式期の深鉢形土器である。3～14はキャリパー形の深鉢形土器である。15～20は連弧文系の深鉢形土器である。21は曽利式系の深鉢形土器である。22・23は地文のみが施文される深鉢形土器である。24は深鉢形土器の底部である。

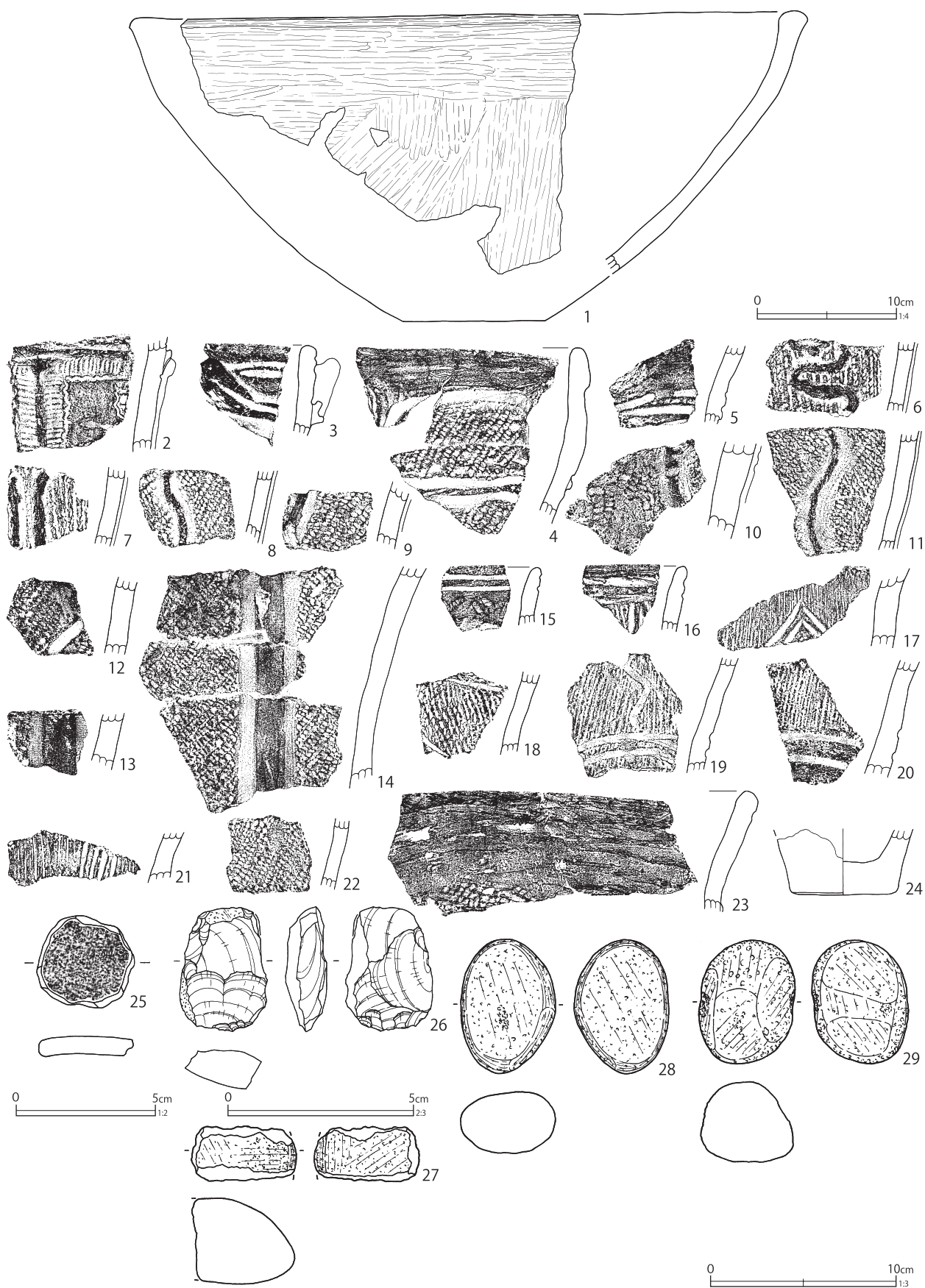
第438図25は土製円盤である。

第438図26～29は出土した石器である。26はスクレイパーで、27～29は磨石である。

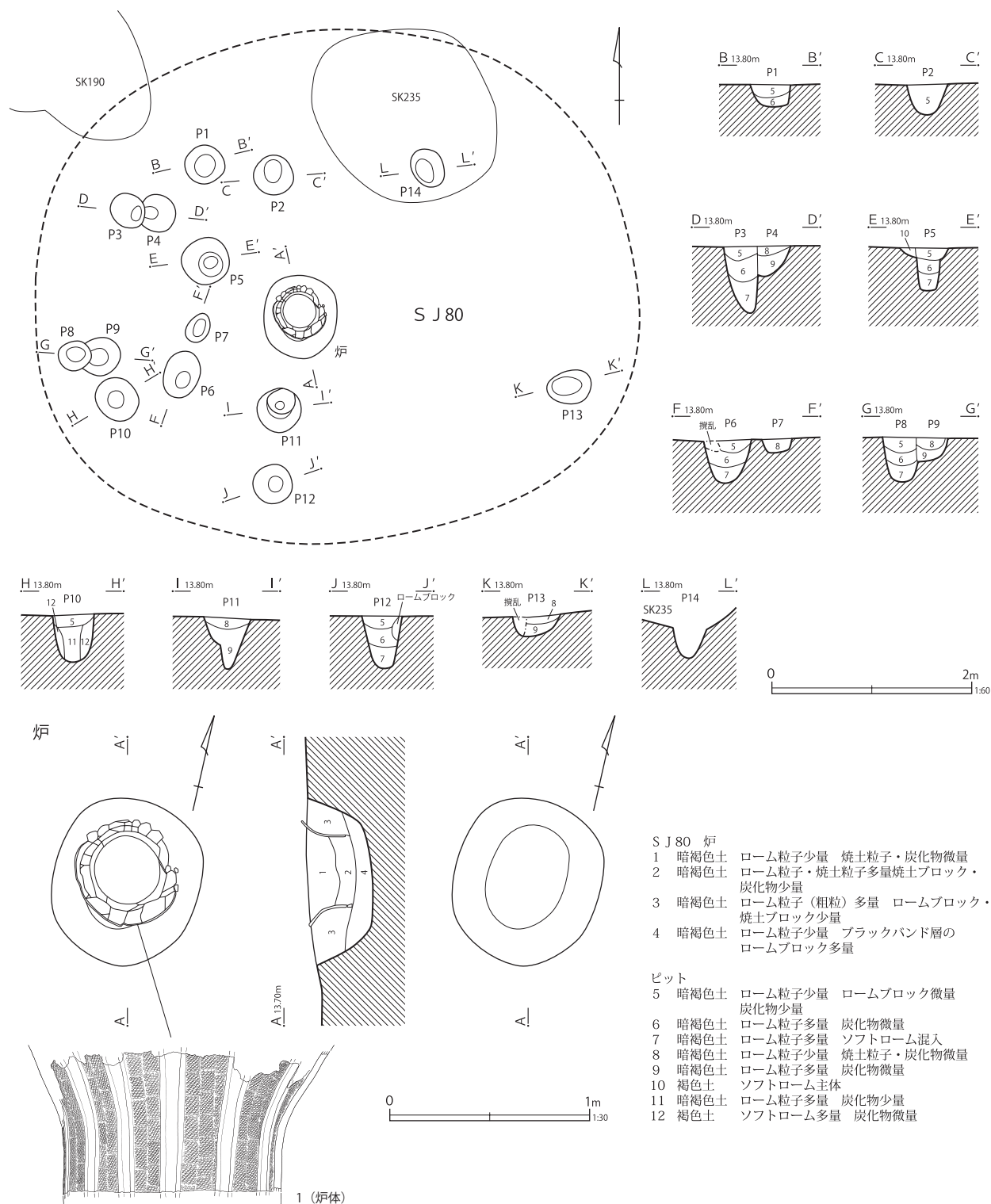
第68表 第79号住居跡柱穴計測表（第437図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	42.0	46.2	P 2	28.0	21.1	P 3	30.0	18.3	P 4	36.0	28.9	P 5	36.0	19.2
P 6	26.0	7.9	P 7	40.0	33.4	P 8	42.0	31.5	P 9	56.0	25.8	P 10	42.0	39.3
P 11	60.0	49.1	P 12	40.0	48.0	P 13	32.0	35.8	P 14	28.0	37.2	P 15	32.0	21.5
P 16	30.0	20.2	P 17	28.0	23.2	P 18	46.0	43.8	P 19	40.0	25.7	P 20	34.0	29.4
P 21	48.0	49.2	P 22	38.0	62.6									





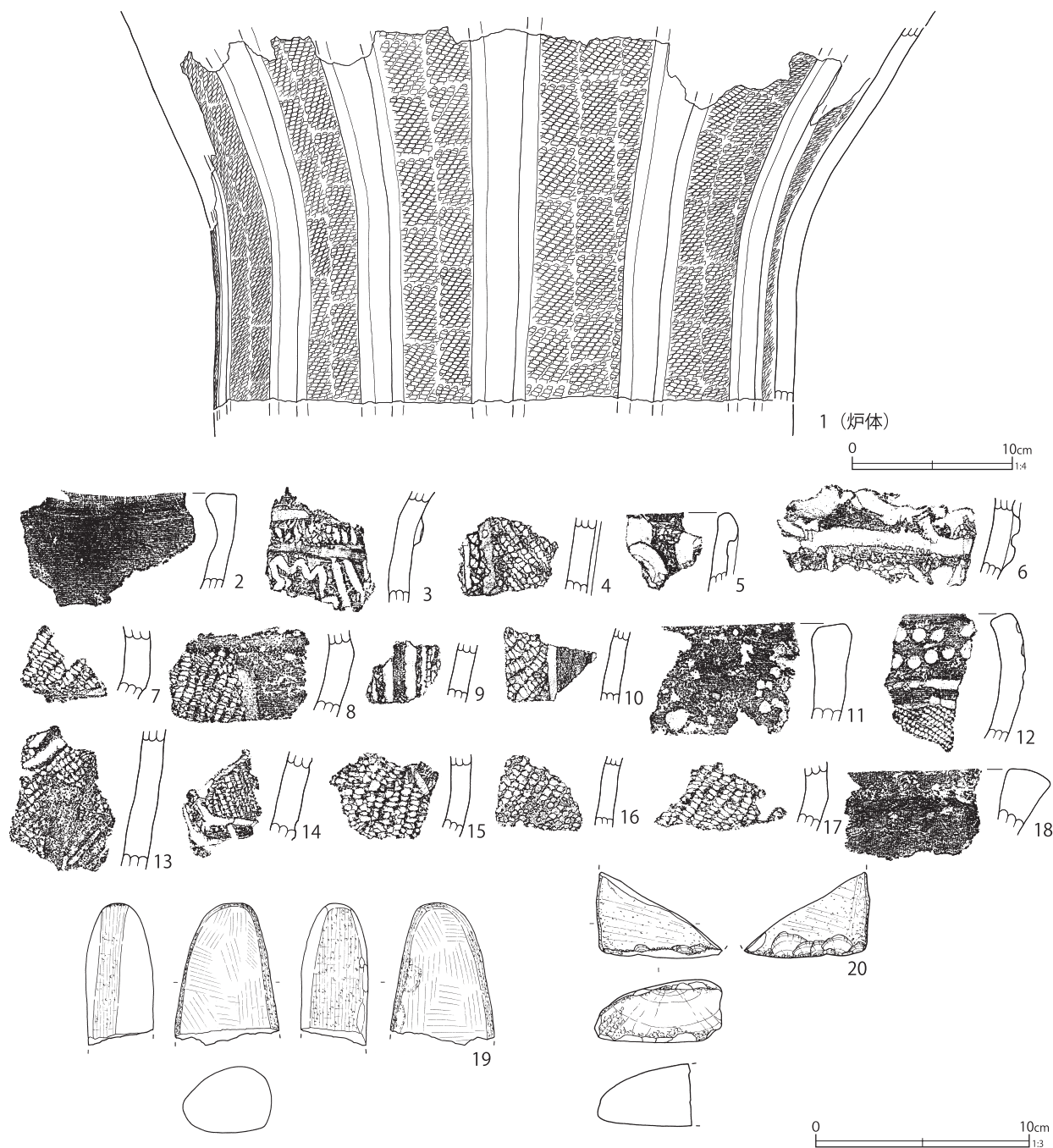
第 438 图 第 79 号住居跡出土遺物



第 439 図 第 80 号住居跡

第69表 第80号住居跡柱穴計測表（第439図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	40.0	22.6	P 2	42.0	30.8	P 3	34.0	63.2	P 4	36.0	27.9	P 5	48.0	41.6
P 6	48.0	40.9	P 7	32.0	11.9	P 8	32.0	42.0	P 9	42.0	23.5	P 10	46.0	47.2
P 11	46.0	50.2	P 12	40.0	49.9	P 13	46.0	22.2	P 14	38.5	42.0			



第 440 図 第 80 号住居跡出土遺物

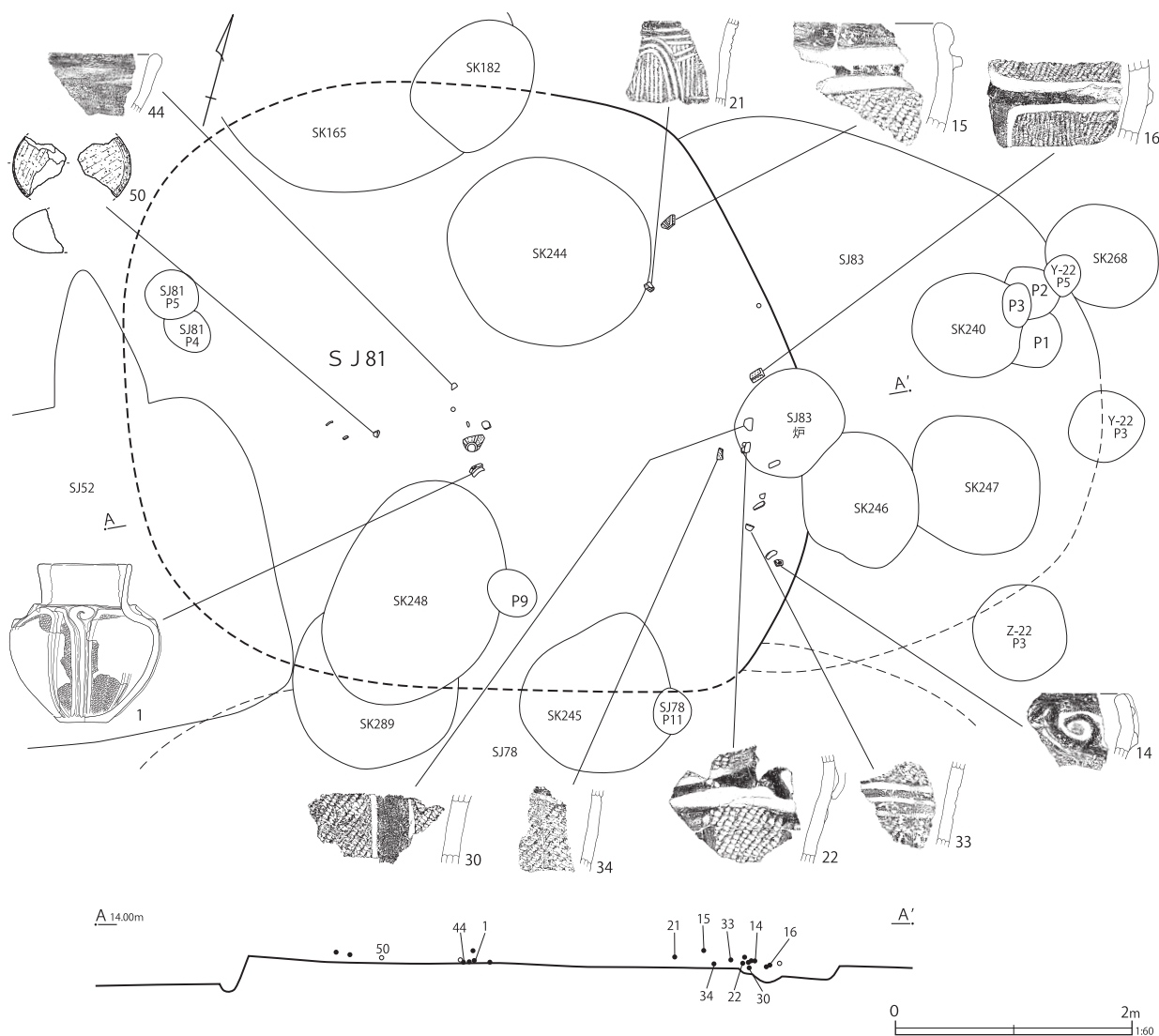
第 80 号住居跡（第 439・440 図）

第 80 号住居跡は、X・Y-18 グリッドに位置する。覆土は失われており、炉・柱穴のみが残存していた。想定される範囲内の第 190 号土壇を壊している。第 235 号土壇との新旧関係は不明である。平面形態、主軸方位も不明である。柱穴が分布する範囲内の規模は長径 6.02 m、短径

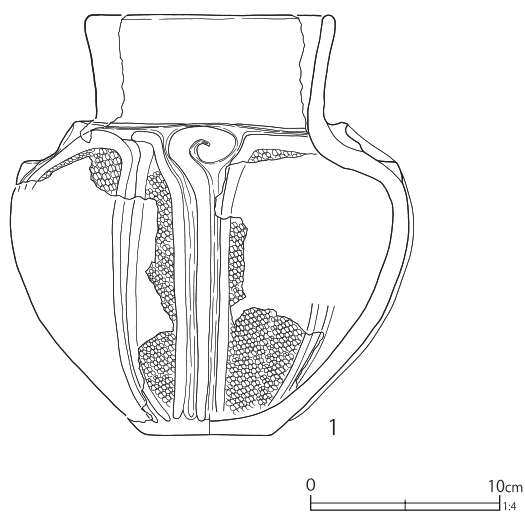
5.06 m である。

柱穴は 14 本が検出された。規模も小さく、壁柱穴化していると考えられる。

炉は想定範囲のほぼ中央から検出された。埋甕炉で、第 440 図 1 の深鉢形土器が埋設されていた。平面楕円形である。規模は長径 0.82 m、短径 0.72 m、深さ 0.33 m である。



第 442 図 第 81 号住居跡遺物出土状況



第 443 図 第 81 号住居跡出土遺物（1）

土壌に壊されている。第 182・244・245・246・289 号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土はほとんど残されておらず、平面形態、主軸方位は不明である。推定範囲の規模は長径 5.70 m、短径 5.10 m、深さ 0.20 m である。

柱穴は 9 本が検出された。壁に沿って検出されている。

炉は検出されなかった。第 244 号土壌によって壊されたと考えられる。

出土した遺物は少なかった（第 442 図）。

住居跡の時期は、出土土器から中期末葉の加曽利 E III 式期と考えられる。

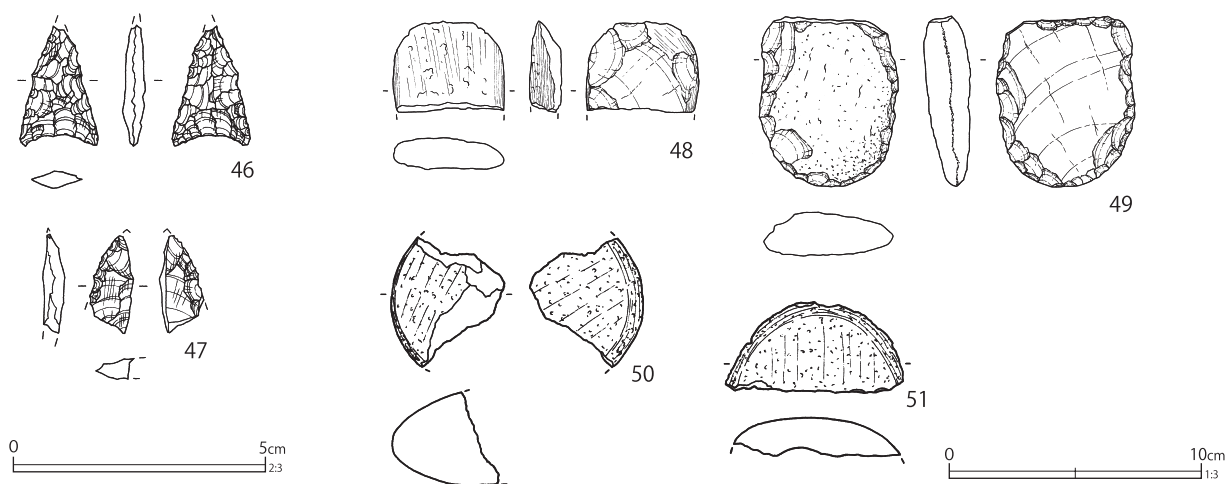


第444図 第81号住居跡出土遺物(2)

第443～445図は出土した遺物である。

第443図1は壺形土器である。口縁は直立気味に立ち上がり無文となっている。頸部には隆帯が巡らされる。膨らみを持つ肩部には隆帯で4単

位渦巻文が施文され、そこから懸垂文が垂下されている。渦巻文間には逆U字状に沈線文が施文される。地文は複節LR Lの縄文で、縦方向に施文される。口径12.6 cm、底径6.6 cm、器高22.1



第 445 図 第 81 号住居跡出土遺物（3）

cmである。

第 444 図 2 ～ 45 は出土した土器の破片資料である。

2 ～ 11 は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。2 は阿玉台式系で角押文が施文される。

12 ～ 38 は中期後葉の加曽利 E 式期の深鉢形土器である。12 ～ 30 は加曽利 E 式系のキャリパー形の土器である。12 ～ 21 は磨消懸垂文が施されない時期である。21 は頸部に半截竹管で文様が施文される。22 ～ 30 は胴部に磨消懸垂文が施される。24 ・ 25 は渦巻文が施文されている。

31 ～ 35 は連弧文系の土器である。

36 ～ 38 は、地文と条線となる曽利式系の土器である。

39 ～ 43 は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。

44 ・ 45 は浅鉢形土器である。赤彩の痕跡は認められなかった。

第 445 図 46 ～ 51 は出土した石器である。

46 ・ 47 は石鏃である。46 は無茎で基部に浅い抉りが入る。

48 は打製石斧の基部である。

49 はスクレイパーである。剥片の素材の形状を生かし、剥離調整が最小限に施されている。

50 ・ 51 は磨石である。小破片である。

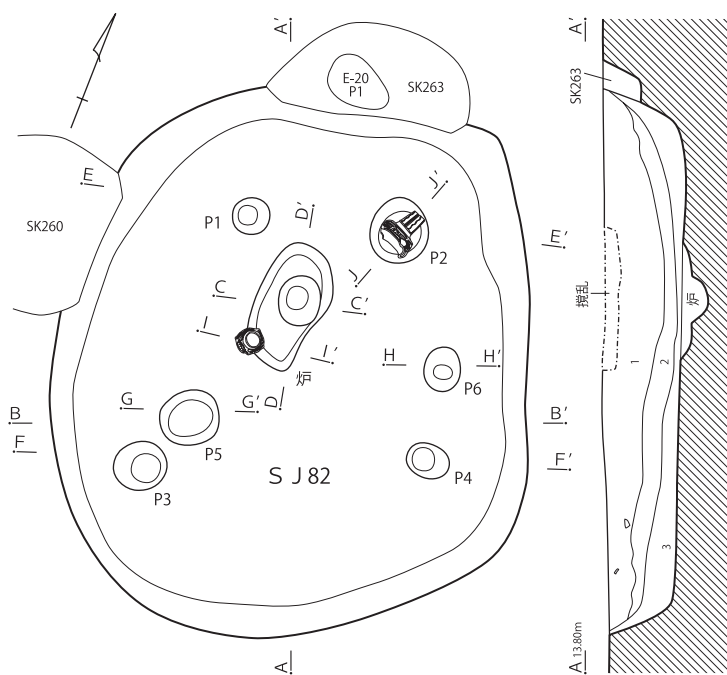
第 82 号住居跡（第 446 ～ 452 図）

第 82 号住居跡は、Z - 19 ・ 20 グリッドに位置する。第 260 ・ 263 号土壌を壊している。他の住居跡との重複はなかった。住居跡は深く掘削されており、土層から覆土がレンズ状に堆積している様子がわかる。壁もほぼ垂直に立ち上がっている。平面形態は不整楕円形である。平面形態を基準とした主軸方位は、N - 21° - W である。規模は長径 4.36 m、短径 3.30 m、深さ 0.67 m である。

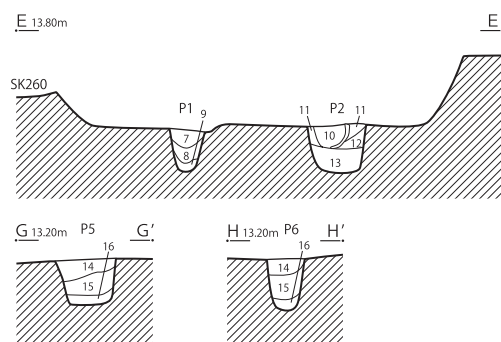
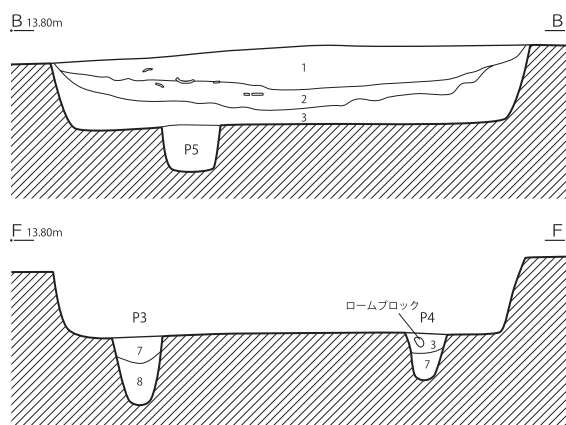
柱穴は 6 本が検出された。主柱穴は P 1 ・ P 2 ・ P 3 ・ P 4 の 4 本で、北側の柱穴間の距離がやや狭くなっている。

炉はほぼ中央から検出された。地床炉で、平面不整楕円形である。北側に落ち込みがあり、土器が埋設されていた可能性がある。規模は長径 0.96 m、短径 0.56 m、深さ 0.12 m、落ち込み部の床面からの深さ 0.22 m である。

住居跡の 2 箇所から屋内埋設土器が検出された。埋設土器 1 は第 449 図 10 の深鉢形土器で、P 2 から検出された。底部は欠損していた。横倒しの状況であったが、当初は正位であったと考えられる。柱穴を利用して土器を埋設したと考えられる。住居内から出土した底部と接合し、ほぼ完形に復元された。底部は故意に破損され、その場で廃棄されたと考えられる。土器埋設は柱穴が埋まりき

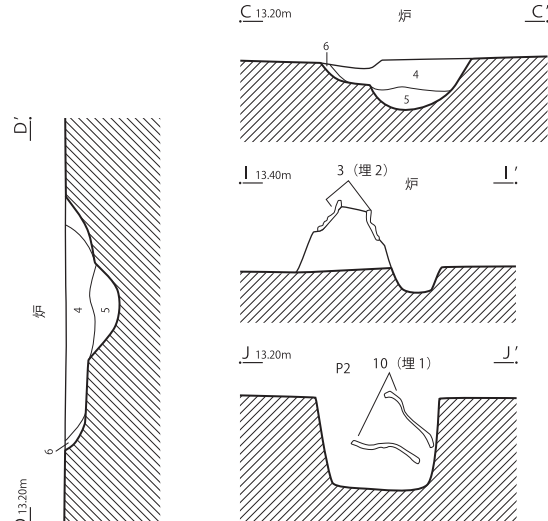
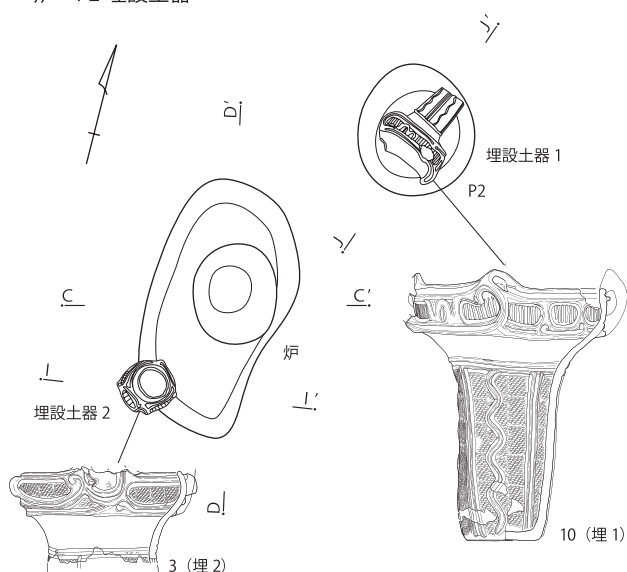


- S J 82
- | | |
|---------|---|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子多量 炭化物少量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック (1~3cm) 少量 炭化物微量 |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック (1cm大)・焼土粒子・炭化物微量 ソフトローム主体 かたくしまる |
- 炉
- | | |
|--------|--|
| 4 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒)・焼土粒子 (粗粒) 多量 焼土ブロック (1cm大) 微量 炭化物少量 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子少量 ローム粒子多量 炭化物微量 |
| 6 暗褐色土 | ブラックバンド ハードロームブロック多量 |
- ピット
- | | |
|---------|--------------------------------------|
| 7 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 少量 ロームブロック (3~5cm大)・炭化物微量 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 多量 ロームブロック (1~2cm大) 微量 |
| 9 暗褐色土 | ロームブロック多量 |
| 10 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 多量 炭化物微量 土器内埋土 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大) 微量 |
| 12 暗褐色土 | ハードロームブロック多量 (ブラックバンド) しまり強い |
| 13 暗褐色土 | ローム粒子多量 ソフトローム混入 しまり弱い 埋め戻された層 |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 多量 炭化物微量 |
| 15 暗褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック (1cm大)・炭化物微量 |
| 16 暗褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック少量 しまり弱い |



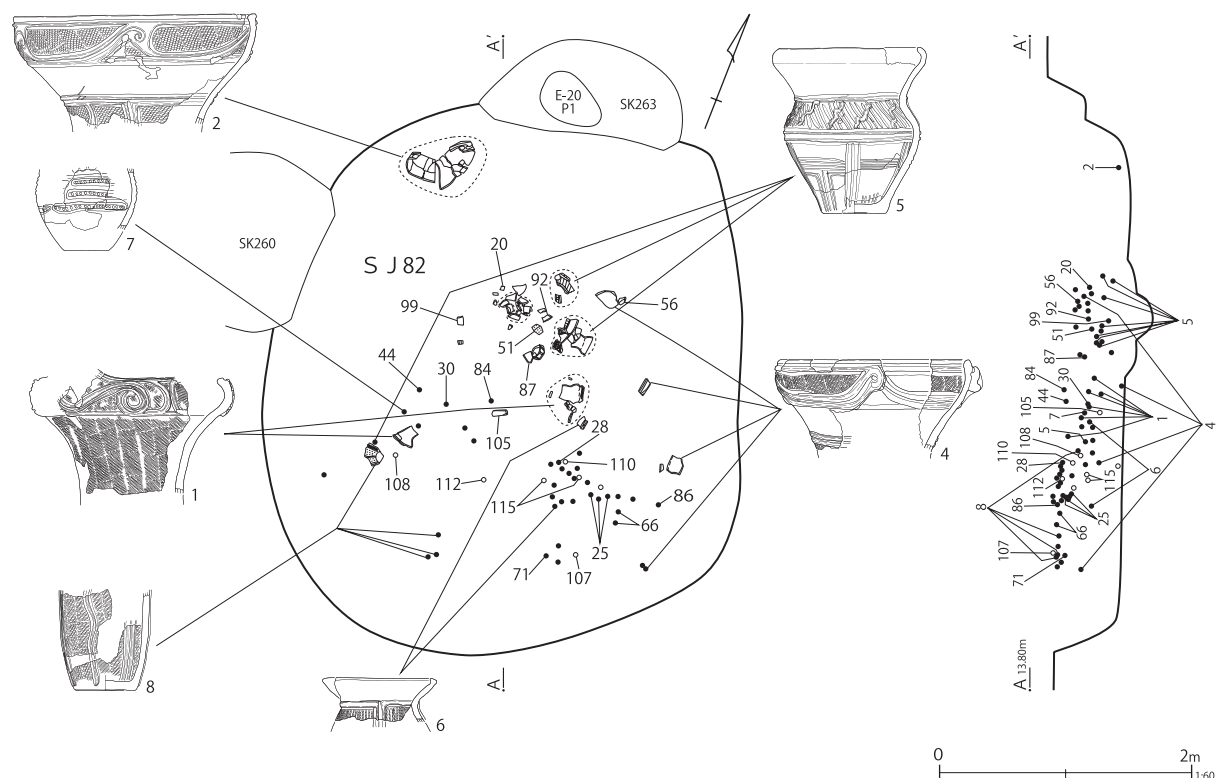
0 2m 1:60

炉・P2 埋設土器



0 1m 1:30

第 446 図 第 82 号住居跡



第 447 図 第 82 号住居跡遺物出土状況

第71表 第82号住居跡柱穴計測表（第446図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	30.0	32.3	P 2	54.0	36.3	P 3	42.0	54.8	P 4	34.0	35.6	P 5	48.0	35.6
P 6	36.0	40.4												

らない段階で行われたと考えられる。

埋設土器 2 は、第 448 図 3 の深鉢形土器で、炉の南側から検出された。逆位に埋設されたもので、出土レベルは第 3 層よりも上であった。

埋設土器 1・2 とともに住居内埋葬に関係すると考えられる。

遺物は第 1 層中から主に出土した（第 447 図）。

埋設土器の時期は加曽利 E I 式の新しい段階であった。他の出土土器も同様の時期であった。住居の廃絶と時間差がほとんどなかったとすれば、時期は中期後葉の加曽利 E I 式期である。

第 448 ～ 452 図は出土した遺物である。

第 448 図 1 ～ 9、第 449 図 10 は器形復元が可能であった土器である。

1 はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁か

ら胴部が残存する。波状口縁で、口縁部は大きく内湾する。口縁部の文様は隆帯で横 S 字状文が施され、端部は渦巻状にされている。胴部は地文のみが施文される。地文は単節 R L の縄文で口唇部直下は横方向に施され、他は縦方向に施文される。推定口径 24.0 cm、残存高 15.2 cm である。

2 は住居跡の北西隅から出土した。出土レベルも床面に近く、破片が敷かれたように検出された（第 447 図）。土壌などが掘り込まれていた可能性がある。キャリパー形の深鉢形土器である。口縁部文様帯はやや狭く頸部は無文帯となっている。口縁部は端部が渦巻く横 S 字状の隆帯が、5 単位施文される。頸部は無文で、胴部は隆帯で頸部と区画し懸垂文が施文されるが欠損のため単位などは不明である。地文は単節 R L の縄文が縦方向に

施される。口径 31.8 cm、残存高 14.4 cmである。

3は埋設土器2である。キャリパー形の深鉢形土器で、口縁から胴部が残存する。橋状把手が貼付されていた部分と考えられる口縁部の正面と裏面の2箇所が破損している。口縁部文様は隆帯で繫弧文が施文される。張り出させた波頂部には渦巻文が施される。頸部は無文で胴部文様は沈線で施文される。頸部との区画は2本沈線が巡らされ、上段の沈線の端部は渦巻文が施される。胴部には垂下する懸垂文と蛇行懸垂文が、交互に4単位ずつ施文される。地文は単節RLの縄文が縦方向に施される。口径 20.6 cm、残存高 12.5 cmである。

4はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁から頸部が残存している。口縁部は隆帯で繫弧文が4単位施文される。波頂部は張り出させて渦巻文が施される。頸部は無文で胴部とは2本隆帯を巡らして区画されるが、貼付は粗雑である。地文は単節RLの縄文が縦方向に施される。推定口径 25.0 cm、残存高 12.2 cmである。

5は曽利式系の深鉢形土器で、口縁部は無文である。肩部は単沈線を斜方向に施文後に、蛇行する短い隆帯が沈線と逆方向に12単位貼付される。貼付後に1部沈線の書き直しが行われている。胴部は3本1組の沈線が6単位施され、その内側に4本また5本の沈線で、文様が施文される。口径 18.8 cm、底径 8.5 cm、器高 21.9 cmである。

6は外反する無文の口縁部を持つ深鉢形土器である。頸部で大きく屈曲し胴部は上部で膨らみを持つ器形である。頸部と胴部は隆帯を巡らして区画される。胴部には隆帯で2本1組の懸垂文が4単位施文されると考えられる。地文は撚糸文Lである。口径は 15.0 cm、残存高 5.6 cmである。

7は鉢形土器で、胴部が残存する。沈線で細長い楕円区画文が多段に施文され、区画内に列点文が施されている。残存高 7.9 cmである。

8はキャリパー形の深鉢形土器である。胴部から底部が残存する。文様は2本1組の隆帯による

垂下する懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に施される。地文は単節RLの縄文が縦方向に施文される。底径 8.0 cm、残存高 13.3 cmである。

9はキャリパー形の深鉢形土器の胴部から底部である。半截竹管によって懸垂文が施される。地文は単節RLの縄文が縦方向に施文される。底径 8.2 cm、残存高 5.8 cmである。

10は埋設土器1としたキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部文様は曽利式的な要素を持っている。やや歪んでいる。胴部は細く長胴化されている。口縁は4単位の波状口縁で、波頂部には橋状把手が貼付されるが、2箇所が破損している。口縁部文様は、隆帯と沈線で区画文が施文される区画と、中央にW字状に隆帯が貼付される区画が2単位ずつ交互に施される。区画内には短沈線が地文として施文される。頸部は無文である。胴部は隆帯で2本1組の垂下する懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に2単位ずつ施される。口径 24.6 cm、底径 9.7 cm、器高 35.7 cmである。

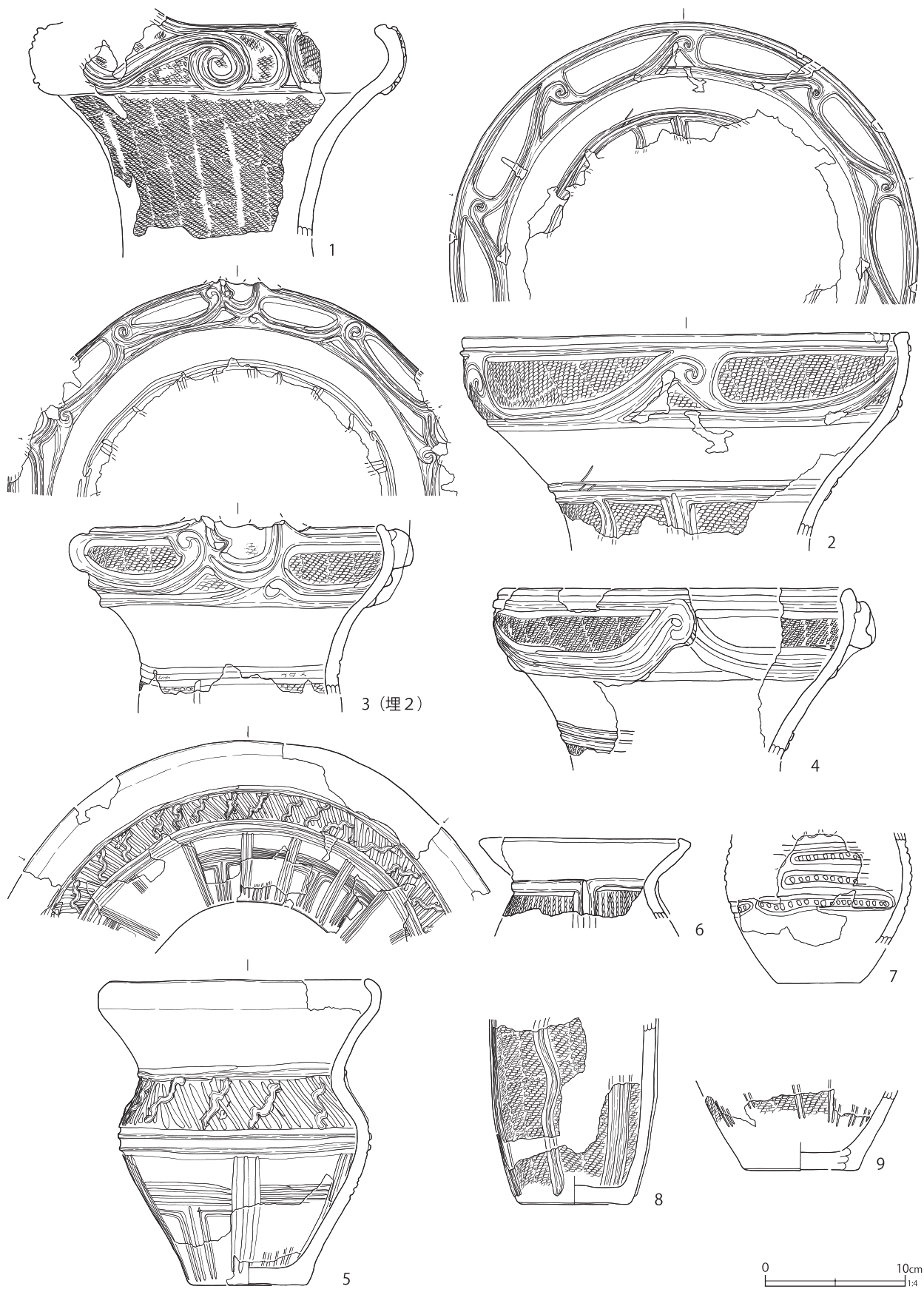
第450図11～56、第451図57～100は出土した土器の破片資料である。

11～14は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。11は爪形文が施文される。

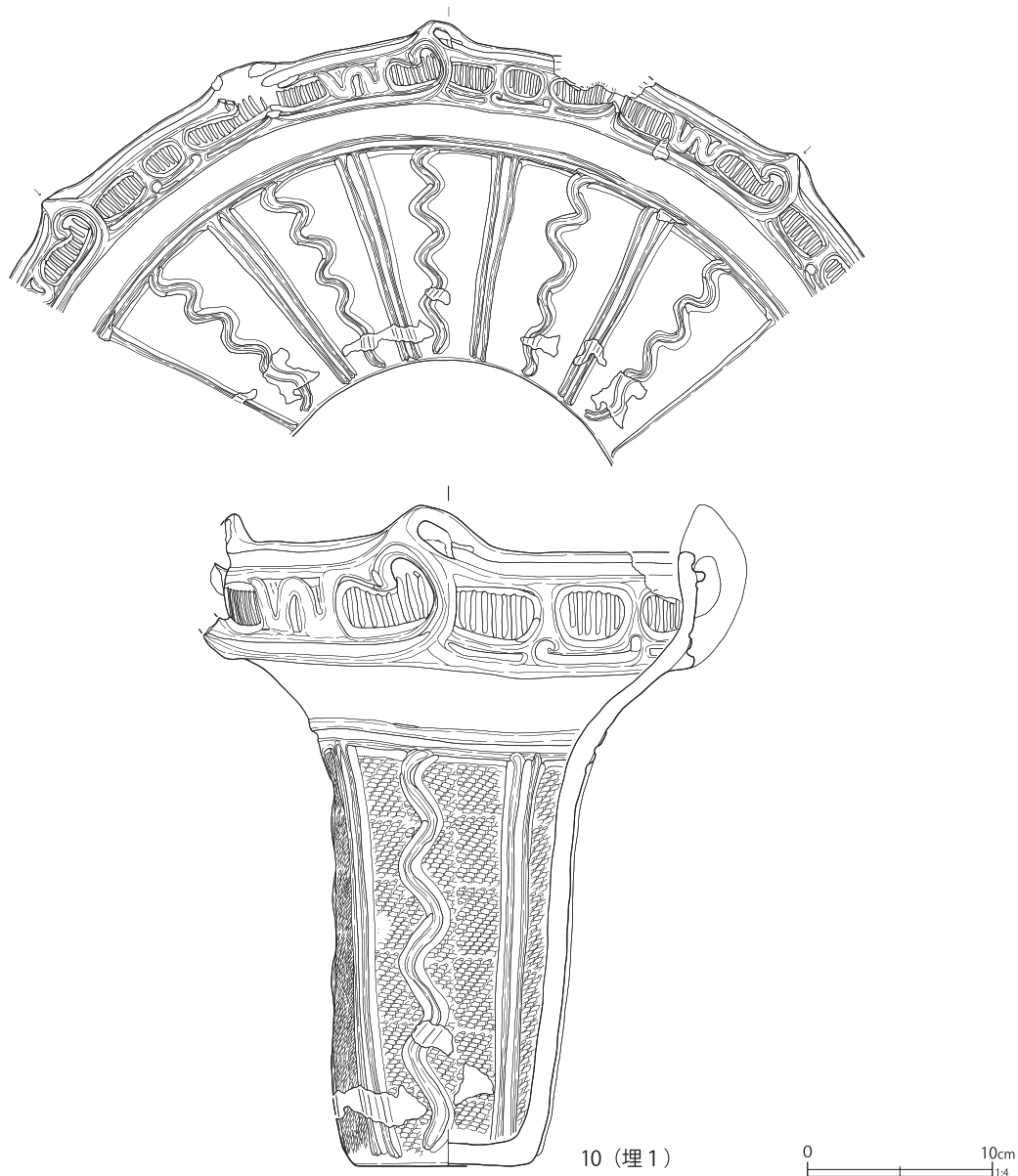
15～84・90～93は中期後葉の加曽利E式期の深鉢形土器である。

15～20は中峠式系の土器である。

21～70・90～93は加曽利E式系のキャリパー形の土器である。21～36は口縁部で、頸部は無文のものが多く、文様は隆帯で波状文や渦巻文などが施される。21・23～26は撚糸文Lが、22は単節LRの縄文が、他は単節RLの縄文が地文として施文される。37～44は頸部から胴部で、無文の頸部が主体である。45～56は胴部文様が隆帯で施される。文様は懸垂文や渦巻文などが施文される。57～70は胴部文様が沈線で施される。いずれも懸垂文が施文される。66～70は磨消懸垂文が施文される。地文は懸垂文が隆帯で施文さ



第 448 図 第 82 号住居跡出土遺物 (1)



第449図 第82号住居跡出土遺物(2)

れるものは、撚糸文Lが多く使用されている。沈線で施文されるものは単節RLの縄文が多く使用されている。90～94は底部である。地文は90が撚糸文Lで、他は単節の縄文である。

71は口縁部が無文となるもので、胴部には隆帯で懸垂文が施される。

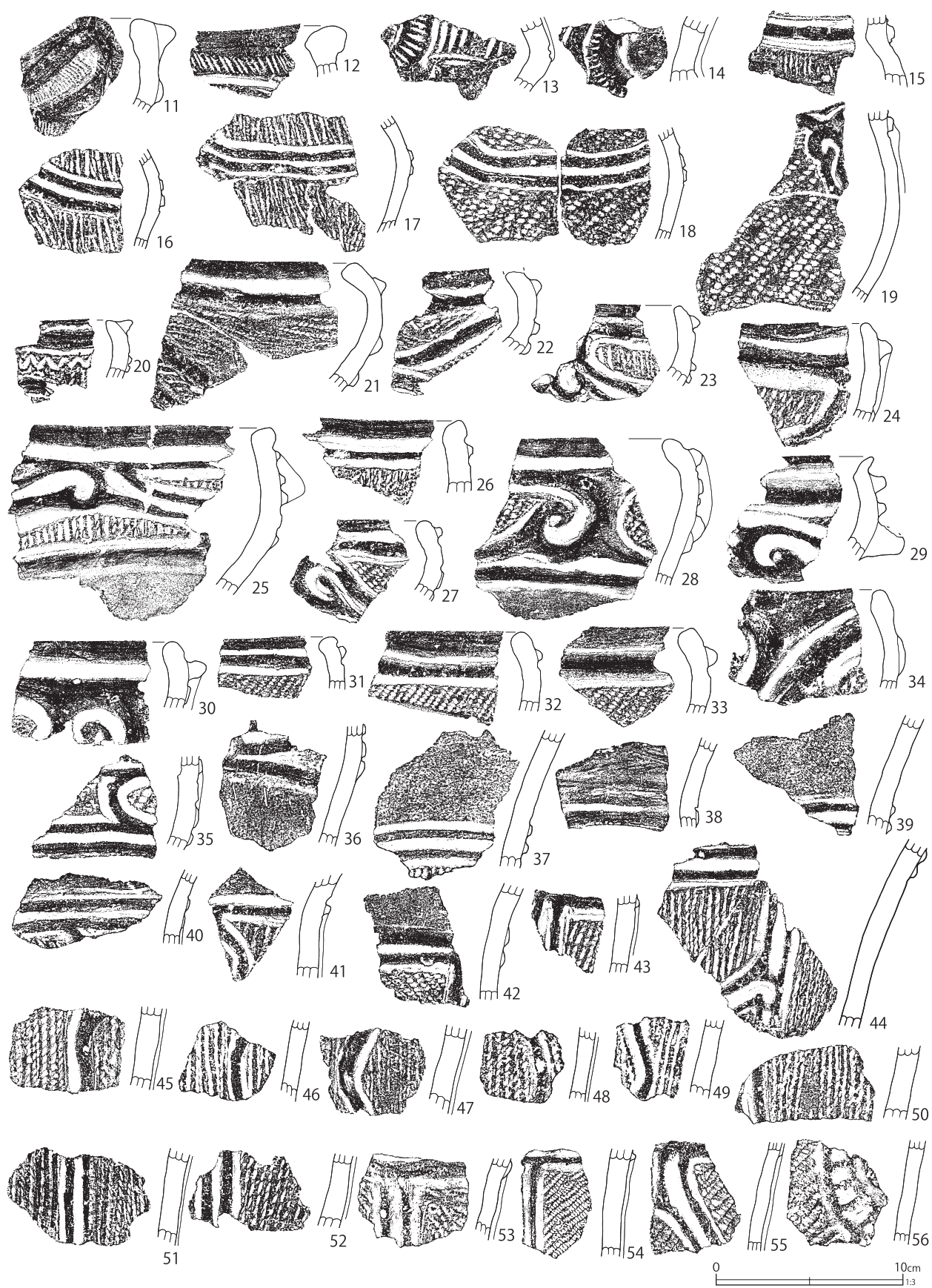
75～78は連弧文系の土器である。

79～84は地文が条線の曽利式系の土器である。

95～100は浅鉢形土器である。95は把手部分で内外面に渦巻文が施文される。98は表面に赤

彩が残されている。

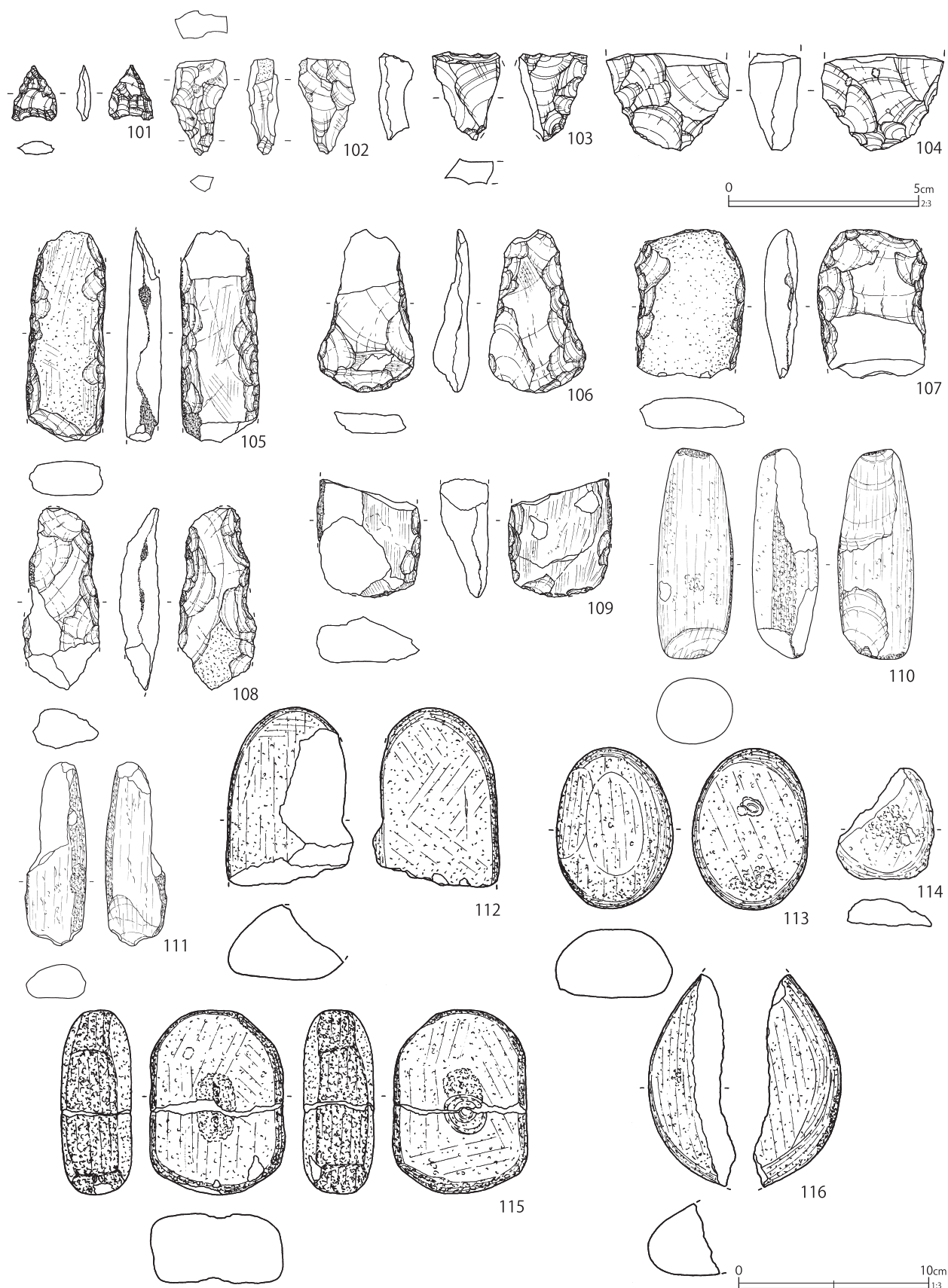
第452図101～116は出土した石器である。101は無茎の石鏃である。102は石錐である。103は使用痕を有する剥片である。104はスクレイパーである。105～109は打製石斧である。105は器面に擦痕が認められる。109は磨製石斧が再加工されている。110・111は敲石である。110は破損後も端部に敲打を加えている。112～116は磨石である。115は側縁に敲打痕が認められ、表裏面には敲打による凹部が残されている。



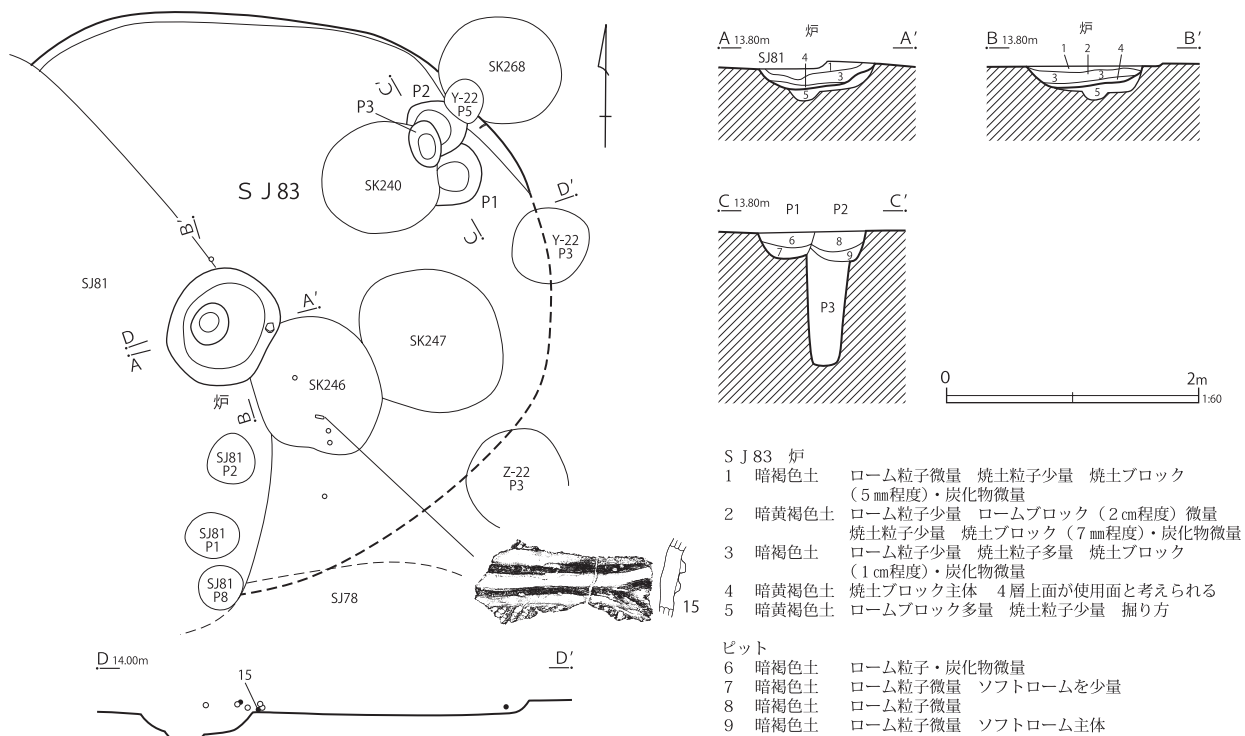
第 450 図 第 82 号住居跡出土遺物 (3)



第 451 图 第 82 号住居跡出土遺物 (4)



第 452 図 第 82 号住居跡出土遺物 (5)



第 453 図 第 83 号住居跡

第72表 第83号住居跡柱穴計測表 (第453図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	52.0	20.2	P 2	50.0	24.2	P 3	36.0	106.2						

第 83 号住居跡 (第 433・434・453・454 図)

第 83 号住居跡は、Y・Z-21・22 グリッドに位置する。第 78・81 号住居跡、第 247 号土壌に壊されている。第 78・81 号住居跡・第 240・268 号土壌を壊している。第 246 号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土の残りは悪く、傾斜する南側は掘り込みが失われていた。残存部から平面形態は円形と推測できる。主軸方位は不明である。残存する規模は長径 4.20 m、短径 4.10 m、深さ 0.12 m である。

柱穴は 3 本が重複して検出された。主柱穴は不明である。

炉は想定範囲のほぼ中央から検出された。地床炉である。平面形態は楕円形である。規模は、長径 0.96 m、短径 0.86 m、深さ 0.31 m である。

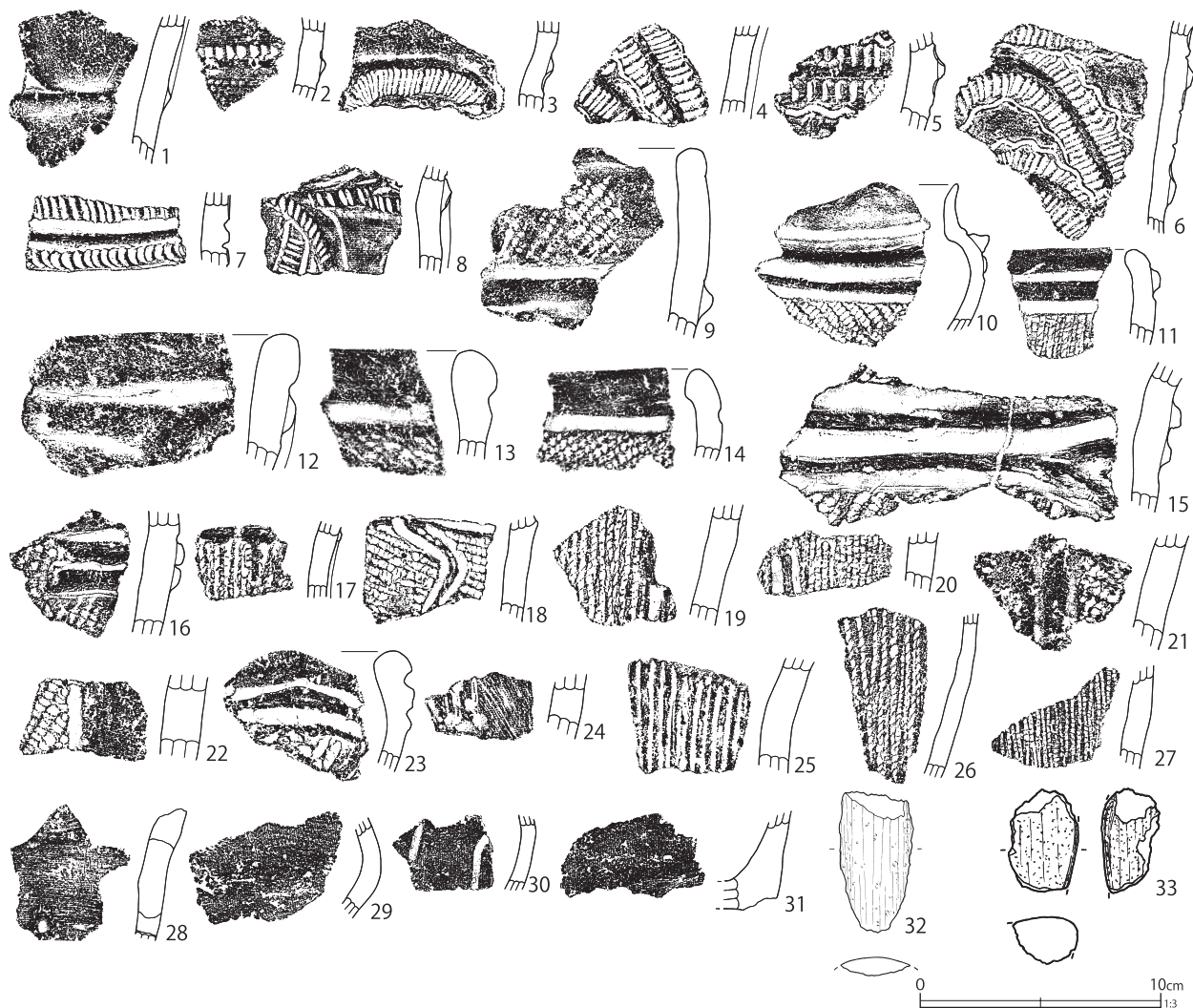
出土遺物は少量であった。いずれも破片で、時期もばらつきがあった。そのため詳細な時期は特

定できないが、中期後葉の加曽利 E 式期と考えられ、住居跡を壊している第 78 号住居跡が加曽利 E III 式期であることから、それ以前である。

第 454 図 1～31 は出土した土器の破片資料である。1～8 は中期中葉の勝坂式期、9～24 は中期後葉の加曽利 E 式期の深鉢形土器である。

1 は阿玉台式系の土器で、2 は角押文が施文される新道式である。3～6 は隆帯脇にキャタピラ状の爪形文が施される。藤内式である。7・8 は勝坂式末葉の土器で、隆帯脇に沈線が施文される。

9～22 は加曽利 E 式系のキャリパー形の土器である。9～12 は隆帯で口縁部文様が施文される。13・14 は口縁部文様が施されない。15～17 は頸部から胴部で、文様は隆帯で施文される。18～22 は胴部で、沈線で文様が施される。地文として、9・10・13・15・22 は単節 R L の縄文が、11・17・19・20 は撚糸文 L が、14 は複節 L R L の縄文



第 454 図 第 83 号住居跡出土遺物

が、18は無節Lの縄文が、21は単節LRの縄文が
10・13・14は横方向に、他は縦方向に施文される。

23は連弧文系の土器である。

24・25は曽利式系の土器である。

26・27は胴部で、地文のみが施文される。26
は撚糸文Lが、27は撚糸文Rが施される。

28・29は浅鉢形土器で、28は波状口縁で、胴
部には補修孔が貫通している。29は内面にわず
かに赤彩が残されている。

30は壺形土器の破片である。器面調整は丁寧
である。沈線で文様が施文される。

31は深鉢形土器の底部である。

第 454 図 32・33 は出土した石器である。

32は磨製石斧の表面が剥がれたものである。

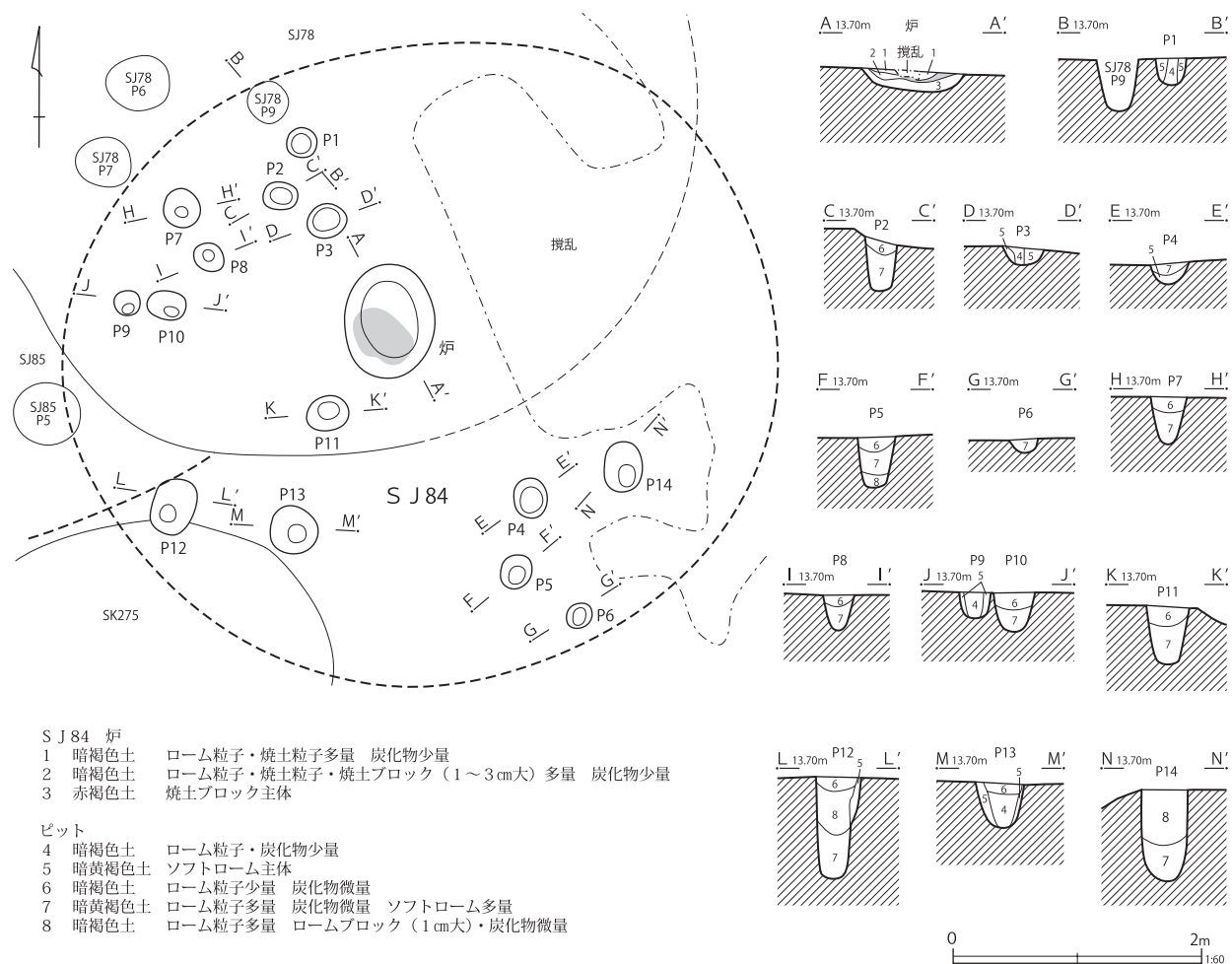
33は磨石の小破片である。側縁には敲打痕が
認められる。

第 84 号住居跡 (第 433・434・455・456 図)

第 84 号住居跡は、Z-21・22 グリッドに位
置する。第 78 号住居跡、近世の第 275 号土壇に
壊されている。第 85 号住居跡を壊している。覆
土は検出できず、炉と柱穴が検出された。平面形
態、主軸方位は不明である。柱穴から想定される
規模は長径 5.70 m、短径 5.20 m である。

柱穴は 14 本が検出された。多柱穴となるもの
で、壁に沿って巡っていたと考えられる。

炉はほぼ中央から検出された。地床炉で、平面
楕円形である。規模は、長径 0.92 m、短径 0.72
m、深さ 0.13 m である。



第 455 図 第 84 号住居跡

第73表 第84号住居跡柱穴計測表（第455図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	26.0	18.6	P 2	28.0	32.8	P 3	34.0	12.0	P 4	34.0	17.2	P 5	30.0	39.2
P 6	24.0	10.4	P 7	30.0	38.4	P 8	26.0	29.0	P 9	22.0	23.9	P 10	32.0	30.4
P 11	36.0	45.0	P 12	46.0	88.3	P 13	38.0	35.0	P 14	40.0	73.6			

遺物はごく少量出土した。重複する第 78 号住居跡の混入もあるため住居跡の詳細な時期は特定できないが、住居跡の形状から中期末葉の加曽利 E 式Ⅲ期と推定される。

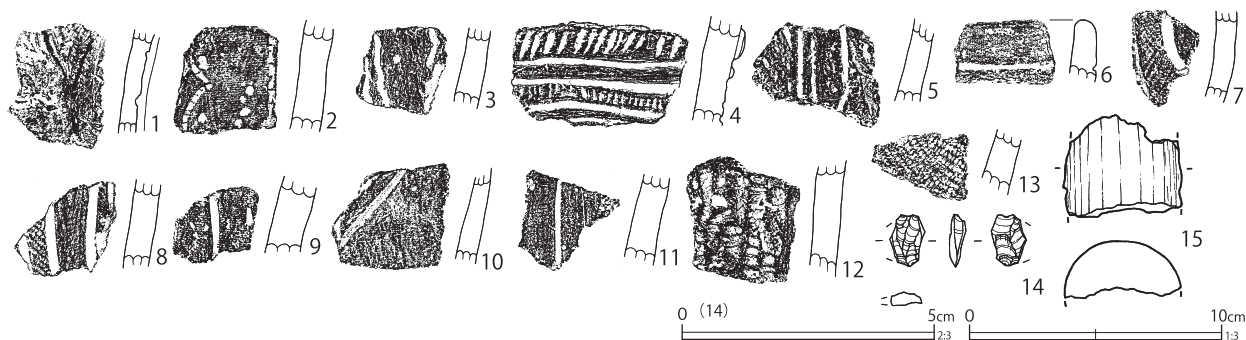
第 456 図は出土した遺物で、1～13 は土器の破片資料で、14・15 は石器である。

1～4 は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器で、1～3 は阿玉台式系の土器である。2 は角押文が施文される。4 は隆帯に刻みが入り、隆帯脇に沈線が施される勝坂式終末の土器である。

5・6・12・13 は中期後葉の加曽利 E 式期の深鉢形土器である。5 はキャリパー形の胴部である。沈線による懸垂文が施される。6 は口縁で沈線が巡らされている。12・13 は地文のみが施文される胴部である。12 は単節 R L の縄文が斜め方向に、13 は単節 L R の縄文が縦方向に施される。

7～11 は後期初頭の称名寺式期の深鉢形土器の胴部である。

14 はくさび形石器である。上下方向から剥離が施されている。15 は石棒の小破片である。



第 456 図 第 84 号住居跡出土遺物

第 85 号住居跡（第 433・434・457・458 図）

第85号住居跡は、Z-21グリッドに位置する。第78・81・84号住居跡に壊されている。第254号土壇を壊している。第255・256・288・289・291号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土は中央付近にごくわずかに残されていたが、明確な掘り込みは確認できなかった。平面形態と主軸方位は不明である。想定される規模は長径5.50mである。

柱穴は10本が検出された。主柱穴はP2・P5が相当すると考えられる。

炉は中央から検出された。1層中から遺物が多量に出土した。第457図1や第458図2の連弧文系の土器や、第458図29～33の曾利式系の土器など異系統の土器が多量に含まれていた。平面形態は不整楕円形である。規模は、長径1.16m、短径0.86m、深さ0.28mである。

住居跡の時期は出土した遺物から中期後葉の加曾利EⅡ式期である。

第457図1、第458図2～35は出土した土器である。3～5・13・20・21以外は炉から出土した土器である。1・2は器形復元が可能であった深鉢形土器で他は破片資料である。

1は連弧文系の深鉢形土器である。大型で口縁から胴部が残存している。3本1組の沈線で文様が施される。地文は条線である。器面は風化しており、地文や文様は不明瞭である。推定口径47.0cm、残存高14.1cmである。

2は連弧文系の深鉢形土器で口縁から胴部が残存している。口縁部は2本の沈線を巡らし狭い無文部となる。胴上部には2本1組の沈線で連弧文が2段施される。推定口径26.0cm、残存高11.0cmである。

3は阿玉台式で、角押文が施文される。

4～20は加曾利E式系のキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部は隆帯で文様が施文され、胴部は沈線で懸垂文が施される。18～20は磨消懸垂文となっている。地文として4・5・12・13・19は単節RLの縄文が、6は撚糸文Rが、7・8・17は単節LRの縄文が、9は無節Lの縄文が、10・16・20は複節LR Lの縄文が、11・14・15・18は撚糸文Lが縦方向に施文される。

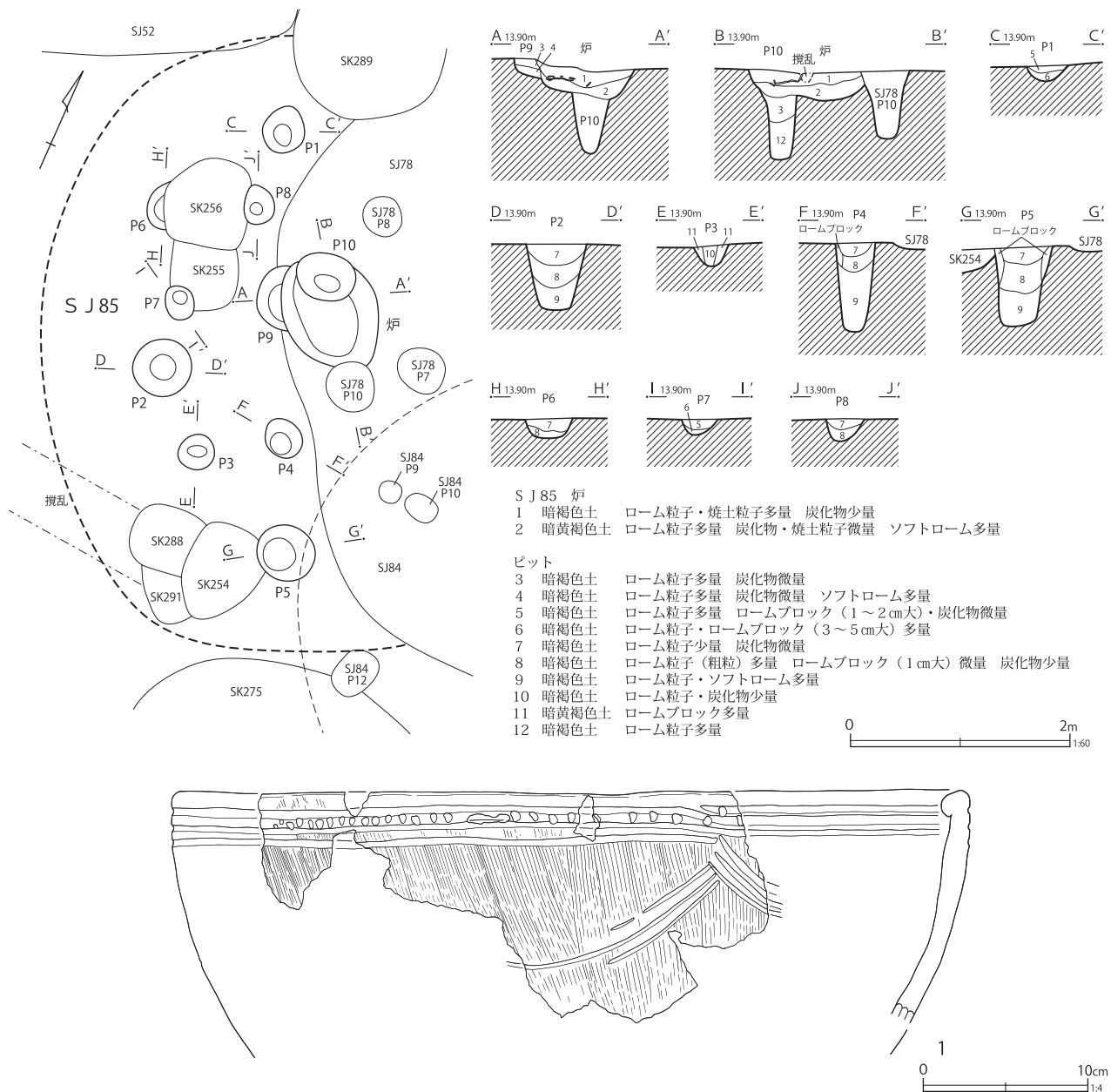
21～26・28は連弧文系の深鉢形土器である。

27・29～34は地文が条線となる曾利式系の深鉢形土器である。31～33は同一個体で、地文は単沈線状となっている。

35・36は地文のみが施文される深鉢形土器である。35は単節RLの縄文が、36は単節LRの縄文が縦方向に施される。

第 86 号住居跡（第 459・460 図）

第86号住居跡は、AA-19・20グリッドに位置する。第267号土壇を壊している。平面形態は不整円形で三角形に近い。斜面部でも覆土が残っており、当初は深く掘り込まれていたと推測される。平面形態を基準とした主軸方位は、N-5°



第457図 第85号住居跡出土遺物(1)

第74表 第85号住居跡柱穴計測表 (第457図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	46.0	16.0	P 2	54.0	59.2	P 3	32.0	20.0	P 4	40.0	79.2	P 5	54.0	72.6
P 6	42.0	16.2	P 7	34.0	15.1	P 8	36.0	18.8	P 9	60.0	11.4	P 10	56.0	79.8

一Eである。規模は長径4.40m、短径4.04m、深さ0.25mである。

柱穴は4本が検出された。主柱穴はP1・P3・P4である。

炉は重複して中央から2基が検出された。

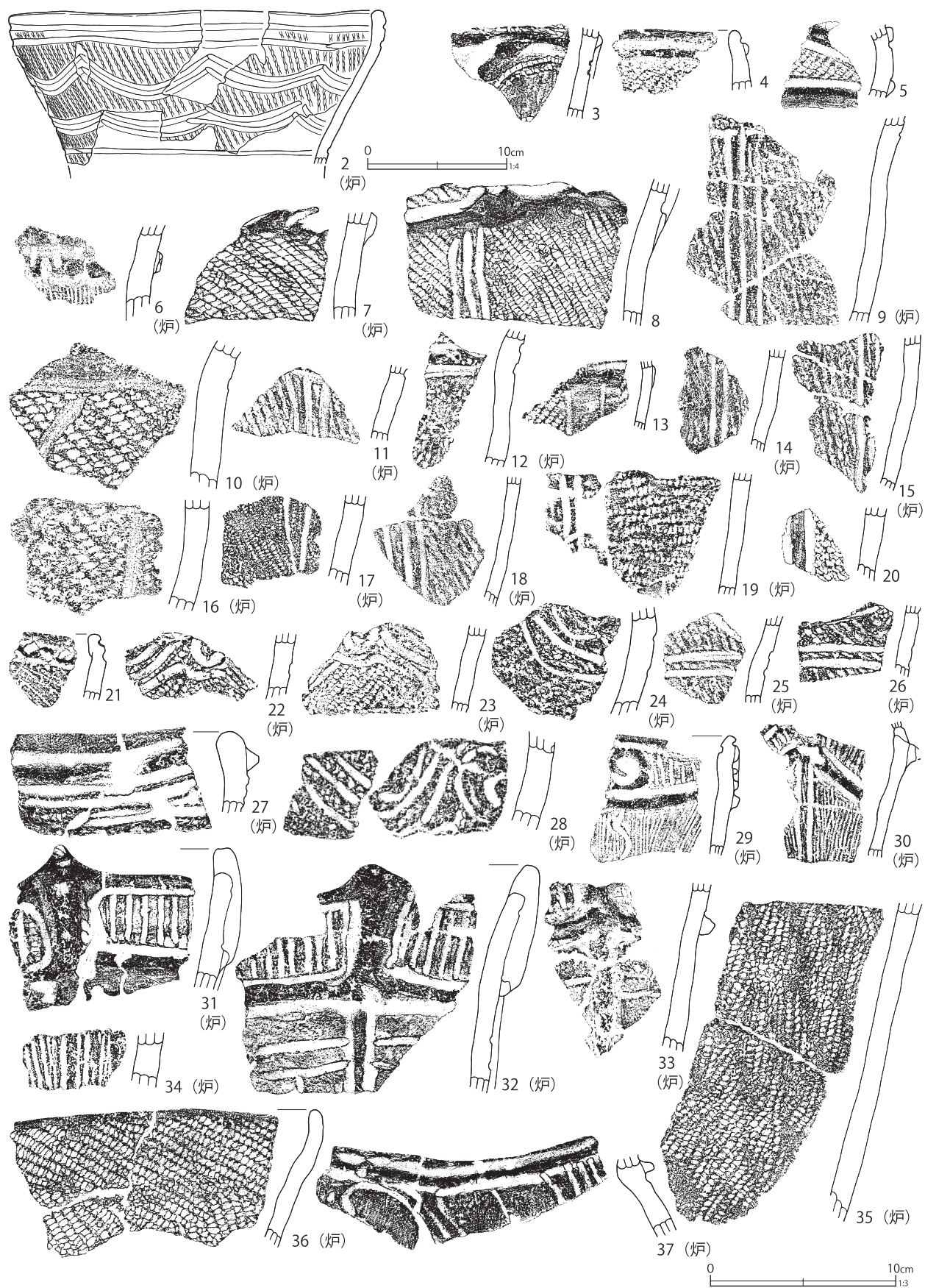
炉1は地床炉で平面形態は円形である。炉2を壊している。規模は、長径0.58m、短径0.50m、

深さ0.10mである。

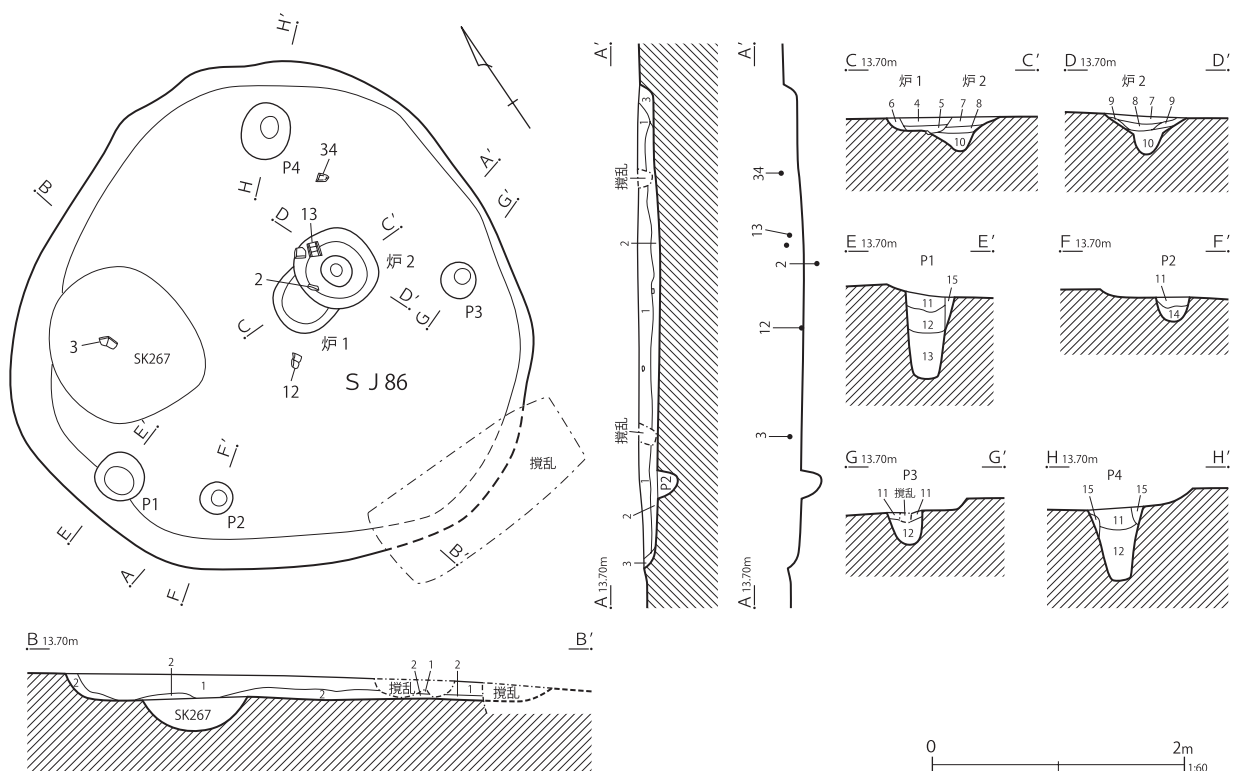
炉2は地床炉で平面形態は円形である。炉1に壊されている。規模は、長径0.68m、短径0.64m、深さ0.28mである。

遺物は炉周辺から少量が出土した。

住居跡の時期は出土土器から中期後葉の加曽利EⅡ式期と考えられる。



第 458 图 第 85 号住居跡出土遺物 (2)



- S J 86
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物微量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック（1～2cm大）少量
 3 暗黄褐色土 ソフトローム主体
- 炉 1
- 4 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 焼土粒子・炭化物微量
 5 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 焼土粒子・炭化物少量
 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック（1～3cm大）多量
- 炉 2
- 7 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）・焼土粒子少量 焼土ブロック（1cm大）微量 炭化物少量
- 8 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 ロームブロック（1～3cm大）微量 焼土粒子・炭化物少量
 9 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 ソフトローム多量
 10 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量 炭化物微量
- ピット
- 11 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 炭化物少量
 12 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
 13 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム混入
 14 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック（1～2cm大）微量
 15 暗黄褐色土 ソフトローム主体

第 459 図 第 86 号住居跡

第75表 第86号住居跡柱穴計測表（第459図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	40.0	61.0	P 2	26.0	16.2	P 3	28.0	24.9	P 4	44.0	58.9			

第 460 図は出土した遺物である。

1～30は土器の破片資料である。

1は中期中葉の勝坂式末葉の深鉢形土器で、地文は複節LRの縄文が縦方向に施文される。

2～21・23・24は中期後葉の加曽利E式期の深鉢形土器である。2～20は加曽利E式系のキャリパー形の土器である。2～4は口縁部から頸部である。5・6は頸部から胴部である。3～6の頸部は無文帯となっている。7～12は胴部文様が隆帯、13～20は沈線で施される。地文として3・5・7・9・11・12は撚糸文Lが、4・8・10・13～19は単節RLの縄文が、20は無節L

の縄文が縦方向に施文される。21は口縁部が無文となる。23・24は曽利式系の土器である。

25～27は地文が施文される深鉢形土器の胴部である。25・26は単節RLの縄文が縦方向に、27は単節LRの縄文が横方向に施文される。

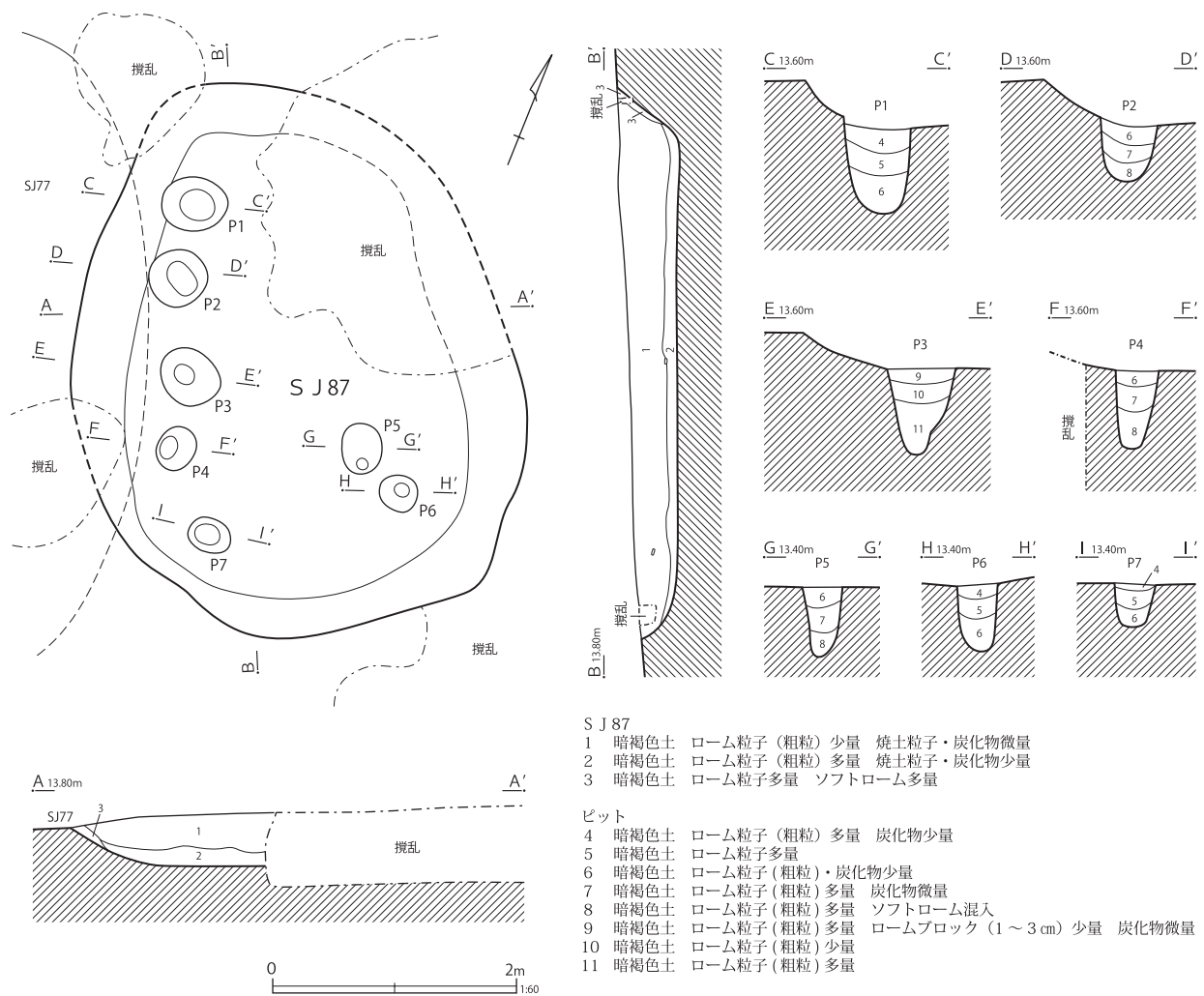
22・29・30は浅鉢形土器で、22は内面に、29は内外面に赤彩の痕跡が認められる。

31は土製円盤である。

32～36は出土した石器である。32は打製石斧で、器面に擦痕が認められる。33はつまみ部が作り出されるスクレイパーである。34はスタンプ形石器で下端面が使用されている。35・36は磨石である。



第460图 第86号住居跡出土遺物



第 461 図 第 87 号住居跡

第76表 第87号住居跡柱穴計測表（第461図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	56.0	68.8	P 2	48.0	44.8	P 3	50.0	66.7	P 4	36.0	64.1	P 5	42.0	58.2
P 6	30.0	54.0	P 7	36.0	34.5									

第 87 号住居跡（第 461 ～ 464 図）

第 87 号住居跡は、Z・AA－20・21 グリッドに位置する。北東側が攪乱によって壊されている。第 77 号住居に壊されている。深く掘り込まれており、壁面は斜めに検出され播鉢状となっている。平面形態は不整楕円形である。住居跡の形状を基準とした主軸方位は、N－22°－W である。規模は長径 4.48 m、短径 3.70 m、深さ 0.56 m である。

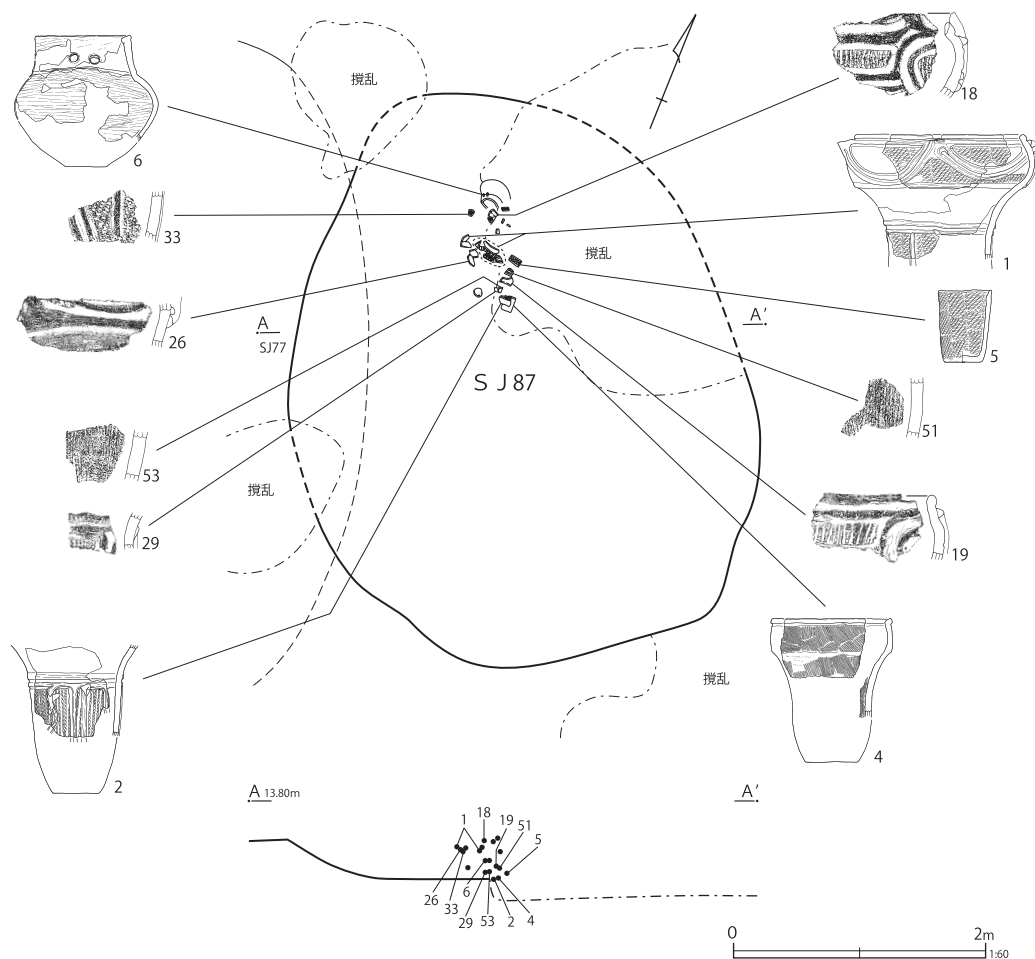
柱穴は 7 本が検出された。主柱穴は P 1・P 4・P 5 で、攪乱部分にも 1 本が存在していたと考え

られる。

炉は検出されなかった。攪乱によって壊されたと考えられる。

遺物は北側に集中して検出された（第 462 図）。炉の推定範囲周辺で、1・2・4～6 などが復元された。5 はミニチュアの深鉢形土器で完形である。住居跡内に掘り込まれていた土壌中に埋設されていたとも考えられる。

住居跡の時期は中期後葉の加曽利 E I 式期と考えられる。



第 462 図 第 87 号住居跡遺物出土状況

第 463・464 図は出土した遺物である。

第 463 図 1～6 は器形復元可能であった土器である。

1 はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部から胴部が残存している。口縁部文様帯には隆帯で繫弧文が貼付されている。繫弧文の波頂部は立体的に張り出させて面を造り出している。造り出された上面には、沈線で渦巻文が施されている。頸部は無文で、2本の隆帯が巡らされて胴部と区画されている。胴部文様は隆帯で蛇行懸垂文と垂下する懸垂文が交互に施される。地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文される。推定口径 22.0 cm、残存高 16.5 cmである。

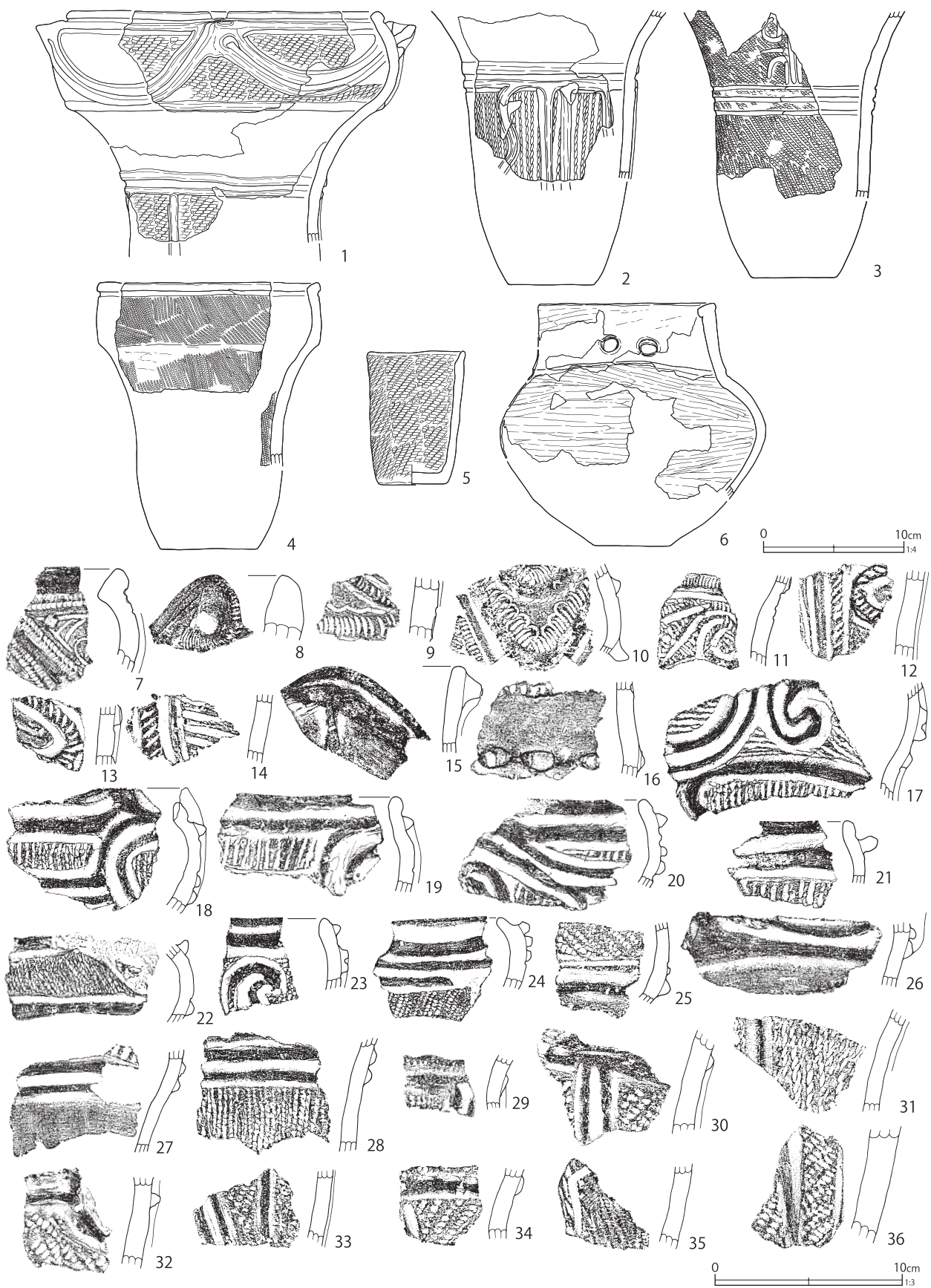
2 はキャリパー形の深鉢形土器である。無文となる頸部から胴部が残存する。頸部と胴部は2本

の隆帯で区画される。胴部は2本1組の垂下する懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に施されている。地文は撚糸文Lである。残存高 11.8 cmである。

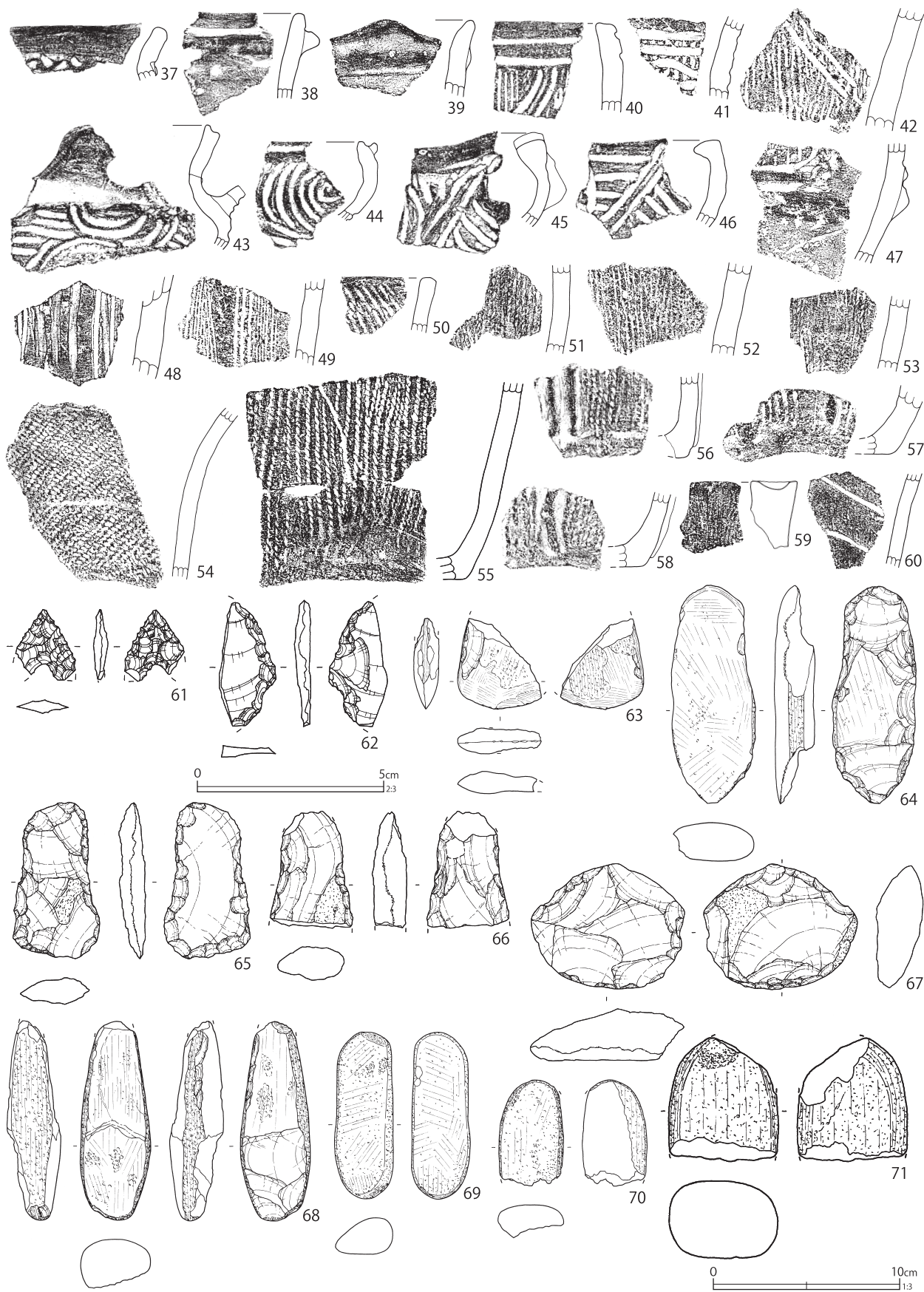
3 は連弧文系と考えられる深鉢形土器の胴部である。胴部の括れ部には、3本の沈線が巡らされて上下が区画されている。胴上部には4本の垂下する沈線が施文され、その両脇に対向渦巻文が施されている。地文は単節LRの縄文で、縦方向に施文される。残存高 13.3 cmである。

4 はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁から胴部が残存する。口縁部に文様帯はなく、口唇直下に沈線が1本巡らされる。地文は撚りが細かい撚糸文Rが施文されている。推定口径 10.5 cm、残存高 13.1 cmである。

5 はミニチュアの深鉢形土器である。コップ状



第 463 图 第 87 号住居跡出土遺物 (1)



第 464 図 第 87 号住居跡出土遺物 (2)

の形状で、丁寧に作られている。器面には地文のみが施文されている。地文は単節R Lの縄文が縦方向に施される。口径 6.6 cm、底径 4.8 cm、器高 9.4 cmである。

6は壺形土器である。やや内傾する口縁は垂直気味に立ち上がり、胴部とは浅い沈線を巡らし区画されている。口縁部には2個1組の円孔が表裏の2箇所施されている。文様はなく、器面は調整のみが行われている。器面は部分的に剥落しており、赤彩の痕跡は認められなかった。口径 12.5 cm、残存高 13.9 cmである。

第463図7～36、第464図37～60は出土した土器の破片資料である。

7～14は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。

7は角押文が施文される。新道式である。

8・9は隆帯脇に爪形文が施される藤内式である。

10～14は隆帯脇に沈線が施文される勝坂式末葉である。10は半截竹管で沈線が施され、それに沿って爪形文と蓮華文が施文される藤内式の要素が残る。11～13は隆帯上に刻みが施される。

17～49・56～58は中期後葉の加曽利E式期の深鉢形土器である。

15・16・37～39は中峠式系である。

17～36・56～58は加曽利E式系のキャリパー形の土器である。17～27は口縁から頸部で、口縁部文様は隆帯で渦巻文などが施される。25～27の頸部は無文である。地文として17・19・21・22・27は撚糸文Lが、18・20は撚糸文Rが、23～25は単節R Lの縄文が、17以外は縦方向に施文される。28～36は頸部から胴部である。29～33は隆帯で、34～35は沈線で胴部文様が描かれている。地文として28・30・33・34は単節R Lの縄文が、29・31は撚糸文Lが、32は単節L Rの縄文が、35は0段多条L Rの縄文が、36は複節R L Rの縄文が縦方向に施文される。56～58は底

部で隆帯で懸垂文が施されている。地文として56は撚糸文Rが、57・58は撚糸文Lが施文される。

40～42は連弧文系の土器で、地文として40・41は撚糸文Lが、42は撚糸文Rが施文される。

43～49は地文が条線となる曽利式系の土器である。43～46は口縁に同心円文が施される。

50～55は地文のみが施文される深鉢形土器である。50・55は撚糸文Rが、51～53は撚糸文Lが、54は単節R Lの縄文が施される。

59・60は後期初頭の称名寺式の深鉢形土器である。59は口縁部の円筒状の突起部分である。

第464図61～71は出土した石器である。

61は無茎の石鏃で、脚部の先端が欠損している。基部は逆V字状に深く抉りが入る。側縁は鋸歯状となっている。

62はスクレイパーである。側縁には剥離が施されている。左半分が欠損する。

63は磨製石斧の刃部である。

64～66は打製石斧である。64は磨製石斧を再加工したものである。

67はスクレイパーである。横長で裏面には自然面が残存している。

68～70は敲石である。棒状の素材が使用されている。68は磨製石斧の再利用と考えられる。

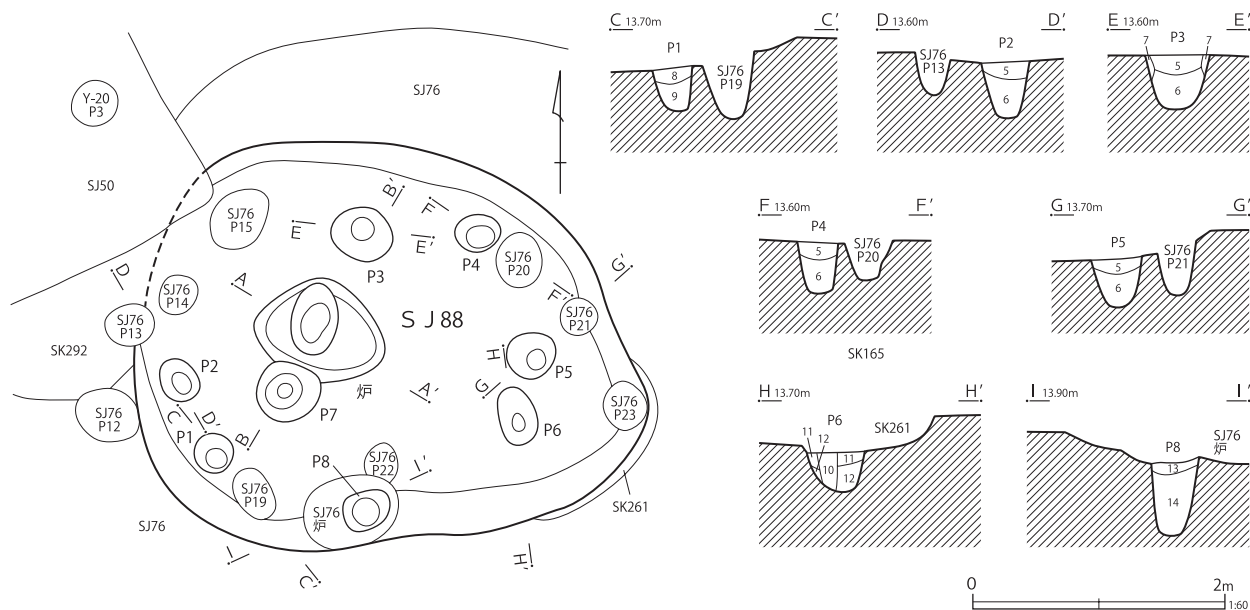
71は磨石である。器面に剥離痕が認められる。

第88号住居跡(第414・415・465・466図)

第88号住居跡は、Y-20・21に位置する。第261号土壇を壊している。第76号住居跡の床面下から検出された。第292号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形態は不整楕円形である。平面形態を基準とした主軸方位は、N-0°である。規模は長径3.90 m、短径3.20 m、深さ0.27 mである。

柱穴は8本が検出された。主柱穴はP2・P3・P5の3本であると考えられる。

炉は中央やや西側から検出された。炉内からは第466図2の浅鉢形土器が出土した。土器は炉



炉

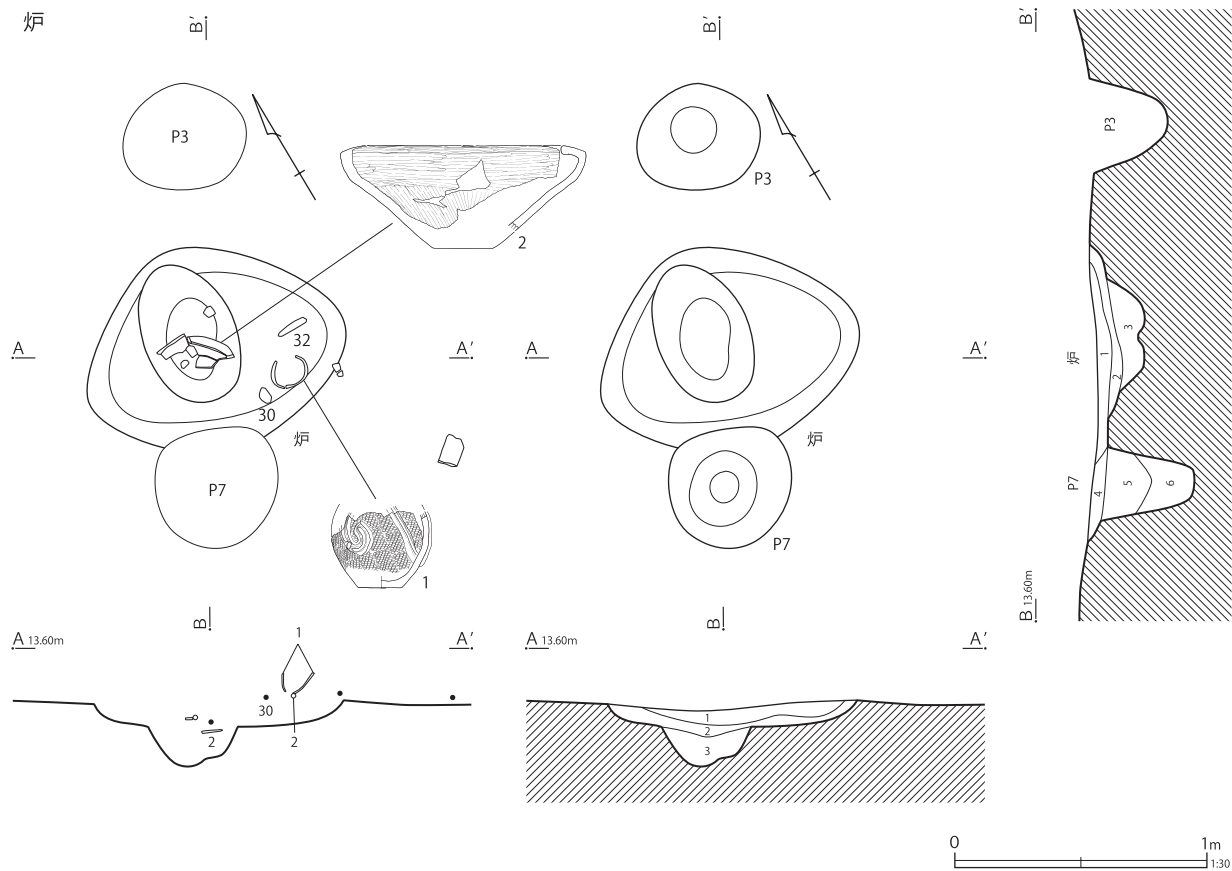
- | | | | | |
|---|------|--------------|----------------------|----------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子多量 | 焼土ブロック (1 cm大) 微量 | 炭化物少量 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1~2 cm大) 微量 | 焼土粒子・炭化物少量 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 炭化物少量 | ソフトロームブロック状に混入 |

ピット

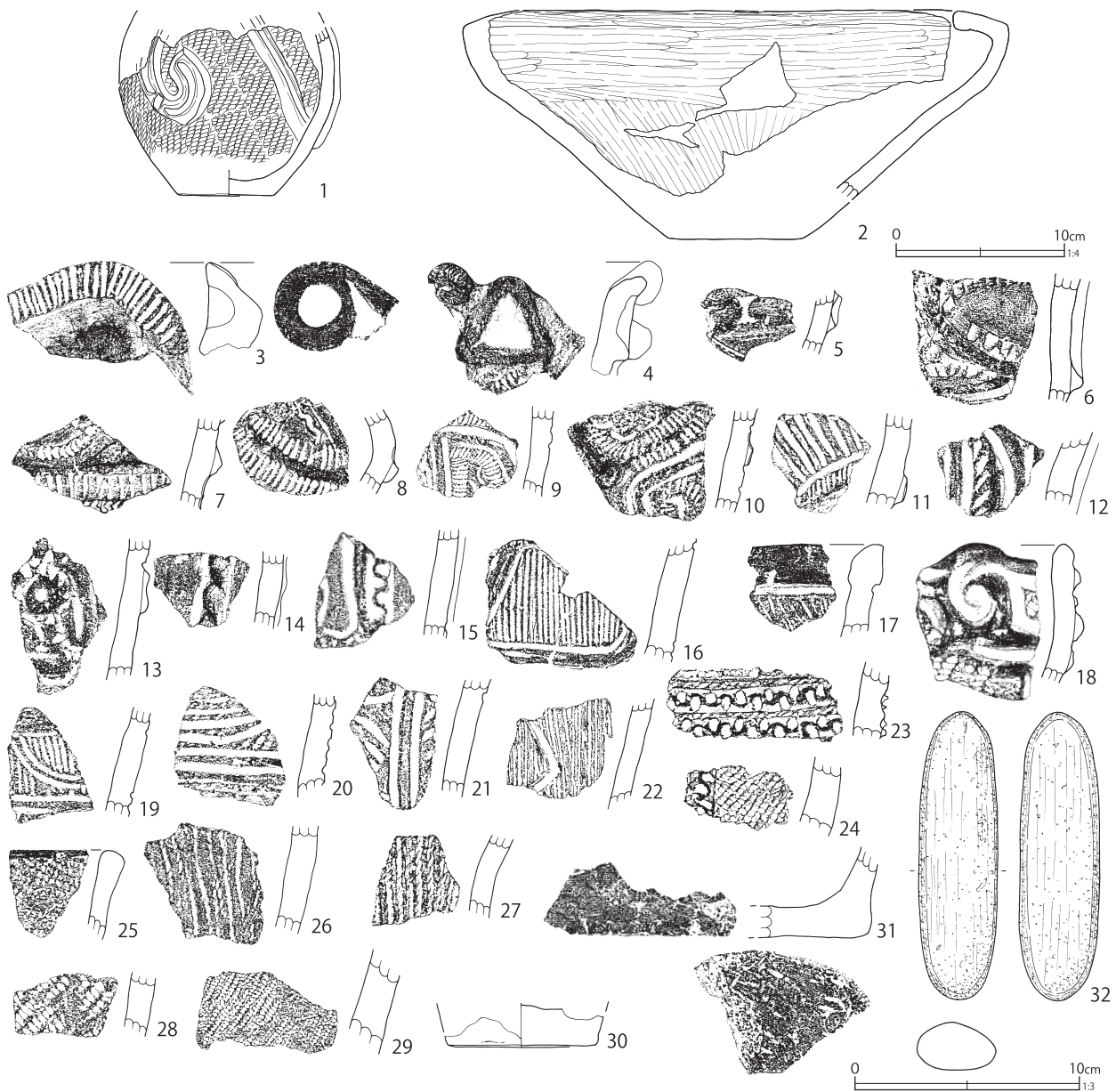
- | | | | | |
|---|------|------------------|------------|----------|
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 焼土粒子・炭化物少量 | 壁面被熱 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒)・炭化物少量 | | |
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒子少量 | 炭化物微量 | ソフトローム混入 |

- | | | | | |
|----|-------|-------------------------|--------------------|-------|
| 7 | 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒) 多量 | 炭化物微量 | |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒子・ソフトローム多量 | | |
| 9 | 暗黄褐色土 | ソフトローム主体 | | |
| 10 | 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物少量 | | |
| 11 | 暗褐色土 | ローム粒子 (粗粒)・ソフトロームブロック多量 | | |
| 12 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | ロームブロック (1 cm大) 微量 | |
| 13 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 焼土粒子少量 | |
| 14 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 | 焼土粒子微量 | しまり弱い |

炉



第 465 図 第 88 号住居跡・遺物出土状況



第 466 図 第 88 号住居跡出土遺物

第77表 第88号住居跡柱穴計測表 (第465図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	34.0	36.0	P 2	38.0	44.8	P 3	50.0	40.8	P 4	38.0	38.3	P 5	42.0	38.4
P 6	48.0	30.5	P 7	50.0	40.2	P 8	38.0	60.6						

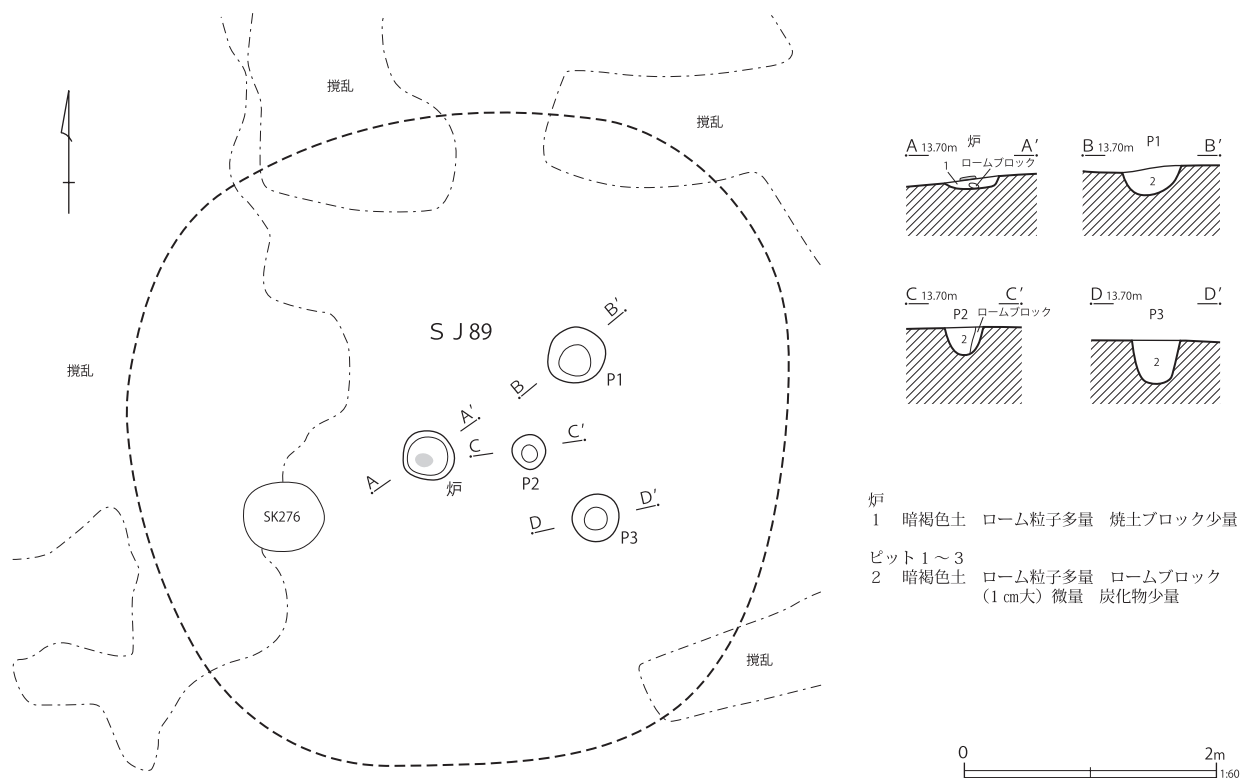
の部分的に深く掘り込まれた箇所から出土しており、2が炉体土器とすれば埋甕炉であったと考えられる。平面不整楕円形である。規模は、長径 1.06 m、短径 0.76 m、深さ 0.24 mである。

住居跡の時期は出土土器から、中期中葉の勝坂式終末と考えられる。

第 466 図は出土した遺物である。

第 466 図 1・2 は炉内から出土した器形復元が可能であった土器である。

1 は深鉢形土器で、胴部から底部が残存している。胴下半部が球状となる器形である。文様は隆帯が S 字状に貼り付けられ、隆帯の中央に沈線が施文されることで、2 本隆带状としている。地文は単節 R L の縄文が斜め方向に施されている。底



第467図 第89号住居跡

第78表 第89号住居跡柱穴計測表 (第467図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	48.0	21.9	P 2	28.0	20.5	P 3	40.0	35.5						



第468図 第89号住居跡出土遺物

径 5.7 cm、残存高 10.1 cmである。

2は炉体土器の可能性がある、浅鉢形土器の口縁から胴部である。大きく内側に口縁が屈曲する。器面は無文である。推定口径 26.0 cm、残存高 11.2 cmである。

3～31は出土した土器の破片資料である。

3～17・19は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。

7・19はペン先状の三角押文が施文される。7は隆帯脇に爪形文が施されている。19は沈線状に見える部分がすべて三角押文で施文されている。新道式である。

4～6は阿玉台式系の土器である。

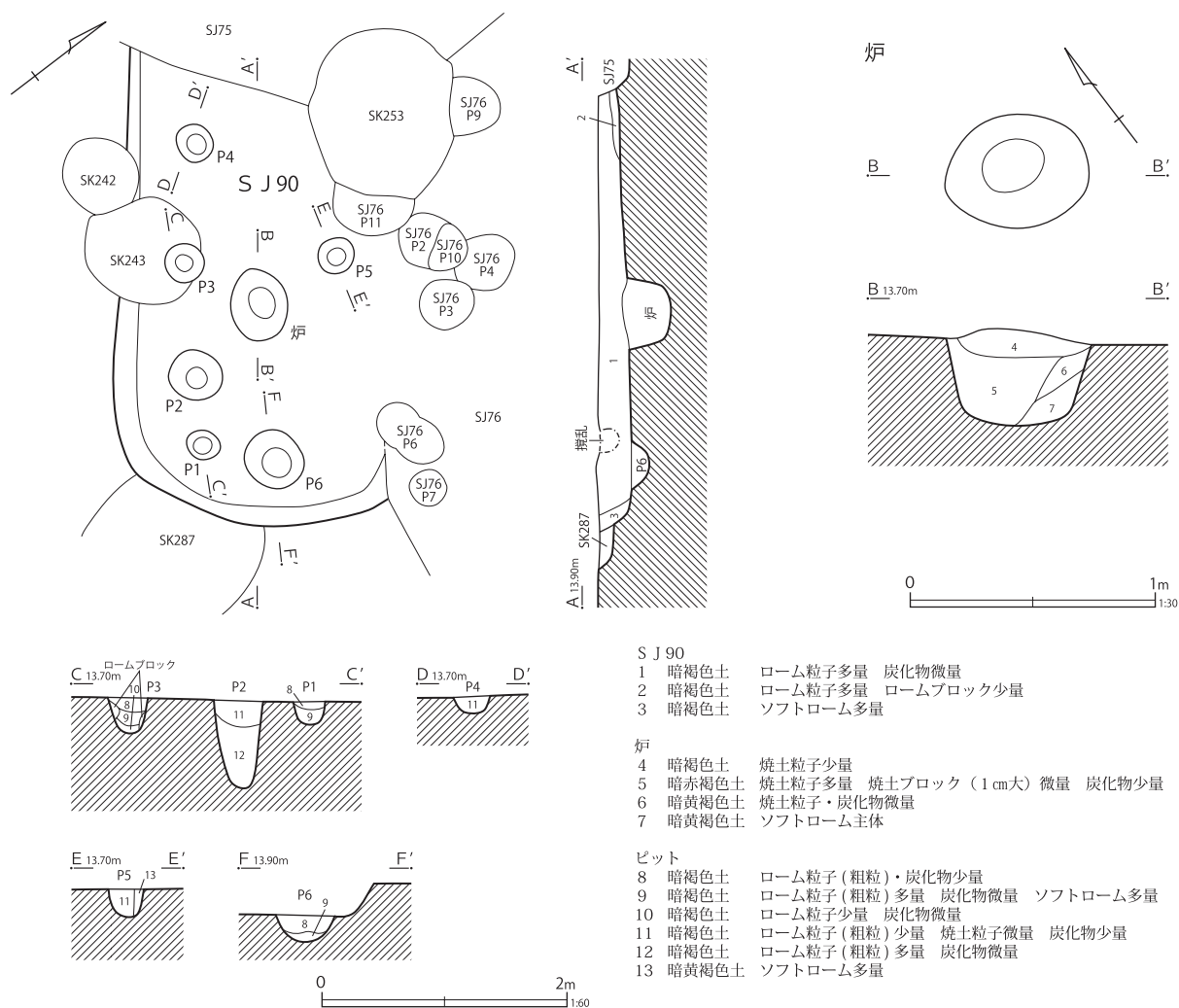
8は隆帯脇に爪形文が施文される藤内式である。

3・9～17は隆帯脇に沈線が施文されるもので、勝坂式末葉の土器である。9・10は半截竹管で沈線が施され、それに沿って爪形文や蓮華文が施文されるもので、藤内式の様相が残る。11～15は隆帯上に刻みなどが施文される。

18・20～24は中期後葉の加曽利E式期の深鉢形土器である。

18は加曽利E式系のキャリパー形で、地文は単節RLの縄文である。20は連弧文系で単節RLの縄文が地文として施文される。21・22は曽利式系の土器である。23・24は沈線に交互刺突文が施される。地文は単節RLの縄文である。

25～29は地文のみが施文される深鉢形土器である。24は単節RLの縄文が横方向に、26・27



第 469 図 第 90 号住居跡

第79表 第90号住居跡柱穴計測表（第469図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	26.0	16.2	P 2	42.0	71.2	P 3	32.0	28.4	P 4	32.0	14.5	P 5	30.0	24.8
P 6	50.0	21.6												

は撚糸文Lが、28・29は単節RLの縄文が縦方向に施される。

30・31は深鉢形土器の底部である。31の底面には網代痕が認められる。

32は磨石である。完形で、全面が磨面として使用され、表面に敲打痕が認められる。

第 89 号住居跡（第 467・468 図）

第 89 号住居跡は、Zー22 グリッドに位置する。南斜面に位置し、覆土は失われており床面も削平されていると考えられる。柱穴と炉のみが残存し

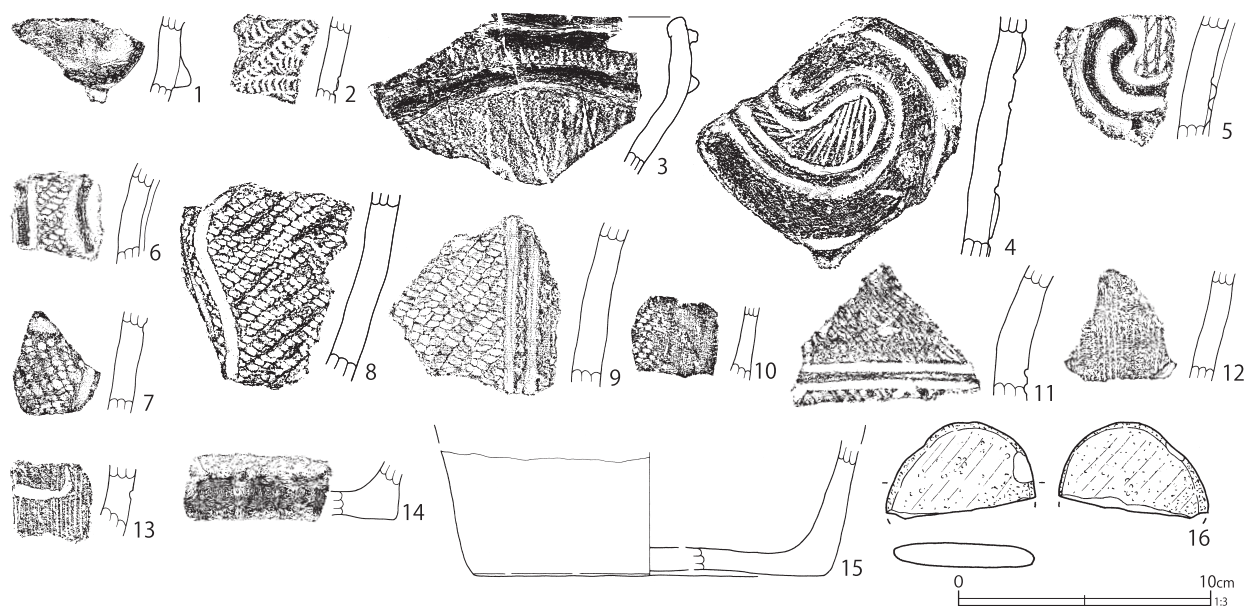
ていた。周辺は攪乱が著しい。平面形態と主軸方位、規模は不明である。

柱穴は3本が検出された。P 1・P 3が主柱穴であった可能性がある。

炉は住居跡の中央に位置していたと推測される。地床炉で、平面不整形円形である。規模は、長径 0.43 m、短径 0.41 m、深さ 0.09 mである。

住居跡は中期と考えられるが、詳細な時期は不明である。

第 468 図 1・2 は出土した土器の小破片である。



第470図 第90号住居跡出土遺物

深鉢形土器の胴部で、地文のみが施文されている。単節LRの縄文で、縦方向に施されている。

第90号住居跡（第414・415・469・470図）

第90号住居跡は、Z-20・21グリッドに位置する。第75・76号住居跡に壊されている。第242・243・253・287号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。住居跡は部分的に残るが、覆土はよく残っていた。平面形態は残存部から隅丸方形と推定される。炉の位置が中央とすれば、住居跡は小型である。平面形態を基準とした主軸方位は、N-53°-Wである。残存する規模は長径3.60m、短径2.00m、深さ0.21mである。

柱穴は6本が検出された。主柱穴はP2が相当すると考えられるが、他は不明である。

炉はほぼ中央に位置すると考えられる。平面形態は不整楕円形である。規模は、長径0.58m、短径0.44m、深さ0.65mである。

出土した土器はごく少なかった。いずれも小片で器形が復元できるものはなかった。

住居跡は小型で、同様の住居跡から勝坂式終末から加曽利EⅠ式初頭であると考えられる。

第470図は出土した遺物である。

1～15は出土した破片資料の土器である。

1・2・4は中期中葉の勝坂式期の深鉢形土器である。1は阿玉台式系の土器で、断面が三角形の隆帯が施文されている。2は爪形文が施される。胎土に金雲母が多量に含まれている。4は円筒状の土器で、半浮き彫り状に渦巻文が施文されている。

3・5～13は中期後葉の加曽利E式期の深鉢形土器である。

3・5～10は加曽利E式系のキャリパー形の土器である。3は口縁部で、隆帯が口縁部に貼付されている。地文は撚糸文Lである。5～10は胴部である。5・6は隆帯で文様が施文される。5は渦巻文が施される。地文として5は撚糸文Lが、6は単節RLの縄文が縦方向に施文される。7～10は沈線で懸垂文が施される。地文として7は単節LRの縄文が、8～10は単節RLの縄文が多方向に施文される。

11～13は連弧文系の土器である。地文として11は撚糸文Rが、12は撚糸文Lが、13は条線が縦方向に施文される。

14・15は深鉢形土器の底部である。15の胴部は無文である。

16は砥石である。偏平な素材を利用している。

第80表 住居跡出土石器一覧表（2）

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
320	149	SJ61	石鏃	チャート	2.3	1.4	0.5	1.3	磨製石斧を転用
320	150	SJ61	石鏃	黒曜石	[1.8]	[1.3]	0.4	0.7	
320	151	SJ61	石鏃	黒曜石	1.4	1.2	0.4	0.6	
320	152	SJ61	石錐	チャート	3.4	1.6	0.7	2.7	
320	153	SJ61	くさび形石器	黒曜石	1.2	0.8	0.4	0.3	
320	154	SJ61	石核	黒曜石	1.6	2.2	1.8	5.9	
320	155	SJ61	磨製石斧	砂岩	[6.8]	[3.6]	2.2	56.9	
320	156	SJ61	敲石	緑泥片岩	12.5	3.6	2.3	114.0	
320	157	SJ61	打製石斧	ホルンフェルス	9.0	4.4	1.7	79.1	
320	158	SJ61	打製石斧	ホルンフェルス	8.8	5.1	2.5	118.4	
320	159	SJ61	スクレイパー	ホルンフェルス	[8.5]	[7.1]	[2.1]	130.2	
320	160	SJ61	打製石斧	砂岩	10.1	5.1	2.4	143.7	
320	161	SJ61	打製石斧	頁岩	7.9	4.7	1.4	65.8	
320	162	SJ61	打製石斧	緑泥片岩	6.9	5.2	1.4	74.5	
320	163	SJ61	打製石斧	黒色頁岩	[5.9]	4.5	2.4	79.7	
321	164	SJ61	礫器	砂岩	8.5	6.7	3.1	240.2	
321	165	SJ61	敲石	砂岩	6.2	3.9	2.8	103.6	
321	166	SJ61	敲石	砂岩	14.4	2.7	3.2	165.6	
321	167	SJ61	敲石	黒色頁岩	10.6	3.6	3.7	179.4	
321	168	SJ61	敲石	砂岩	14.0	4.0	1.5	112.8	
321	169	SJ61	敲石	砂岩	8.3	3.8	3.6	133.2	
321	170	SJ61	磨石	砂岩	11.6	4.1	3.4	198.9	
321	171	SJ61	磨石	安山岩	[6.8]	4.5	2.9	121.7	
321	172	SJ61	磨石	安山岩	[4.8]	[6.6]	4.7	135.3	
321	173	SJ61	磨石	砂岩	[8.4]	6.3	3.8	214.5	
321	174	SJ61	磨石	砂岩	[5.3]	[3.5]	4.3	121.7	
321	175	SJ61	磨石	安山岩	[4.5]	[3.9]	1.5	31.6	
321	176	SJ61	敲石	砂岩	[4.9]	[5.6]	[4.1]	139.8	
321	177	SJ61	磨石	安山岩	[5.2]	[5.4]	[2.3]	68.1	
321	178	SJ61	石皿	安山岩	[7.6]	[3.2]	[2.8]	31.7	
321	179	SJ61	石皿	安山岩	[6.3]	[4.0]	3.9	133.0	
321	180	SJ61	石皿	多孔質安山岩	[7.7]	[5.2]	4.3	167.8	
321	181	SJ61	石皿	緑泥片岩	16.7	6.9	1.4	201.3	
330	165	SJ62	石鏃	黒曜石	[1.4]	1.5	0.3	0.6	
330	166	SJ62	石鏃	黒曜石	[1.6]	1.3	0.5	0.5	
330	167	SJ62	石錐	黒曜石	2.7	1.8	0.5	1.9	
330	168	SJ62	打製石斧	ホルンフェルス	8.8	4.4	1.2	43.9	
330	169	SJ62	打製石斧	黒色頁岩	[8.3]	4.1	1.7	61.5	
330	170	SJ62	打製石斧	ホルンフェルス	[5.2]	3.6	1.4	32.4	
330	171	SJ62	打製石斧	砂岩	[9.1]	5.8	1.4	74.5	
330	172	SJ62	打製石斧	ホルンフェルス	[7.0]	[5.2]	2.4	91.2	
330	173	SJ62	敲石	砂岩	[7.2]	[3.2]	[1.5]	44.3	
330	174	SJ62	敲石	緑泥片岩	[11.9]	[4.5]	[1.6]	102.7	
330	175	SJ62	磨石	砂岩	[4.5]	[2.4]	[2.1]	17.1	
330	176	SJ62	磨石	砂岩	[5.3]	[5.6]	1.9	76.8	
330	177	SJ62	磨石	安山岩	[7.6]	7.4	3.4	327.0	
330	178	SJ62	敲石	砂岩	[10.9]	7.2	4.1	411.5	石皿を転用
330	179	SJ62	磨石	安山岩	[6.7]	[7.9]	3.8	247.5	
330	180	SJ62	石皿	結晶片岩	[10.9]	[6.0]	[1.7]	121.4	
335	79	SJ63	石鏃	黒曜石	[1.3]	1.4	0.4	0.6	
335	80	SJ63	スクレイパー	チャート	[1.7]	2.9	0.9	3.8	
335	81	SJ63	打製石斧	砂岩	[8.5]	5.0	2.1	91.0	
335	82	SJ63	打製石斧	黒色頁岩	[7.3]	4.3	1.5	53.6	
335	83	SJ63	打製石斧	ホルンフェルス	11.5	3.3	2.0	87.7	
335	84	SJ63	打製石斧	ホルンフェルス	[4.6]	5.2	1.6	41.1	
335	85	SJ63	敲石	片岩	[12.3]	4.2	2.5	132.9	
335	86	SJ63	敲石	緑色岩	8.9	4.2	1.9	76.2	

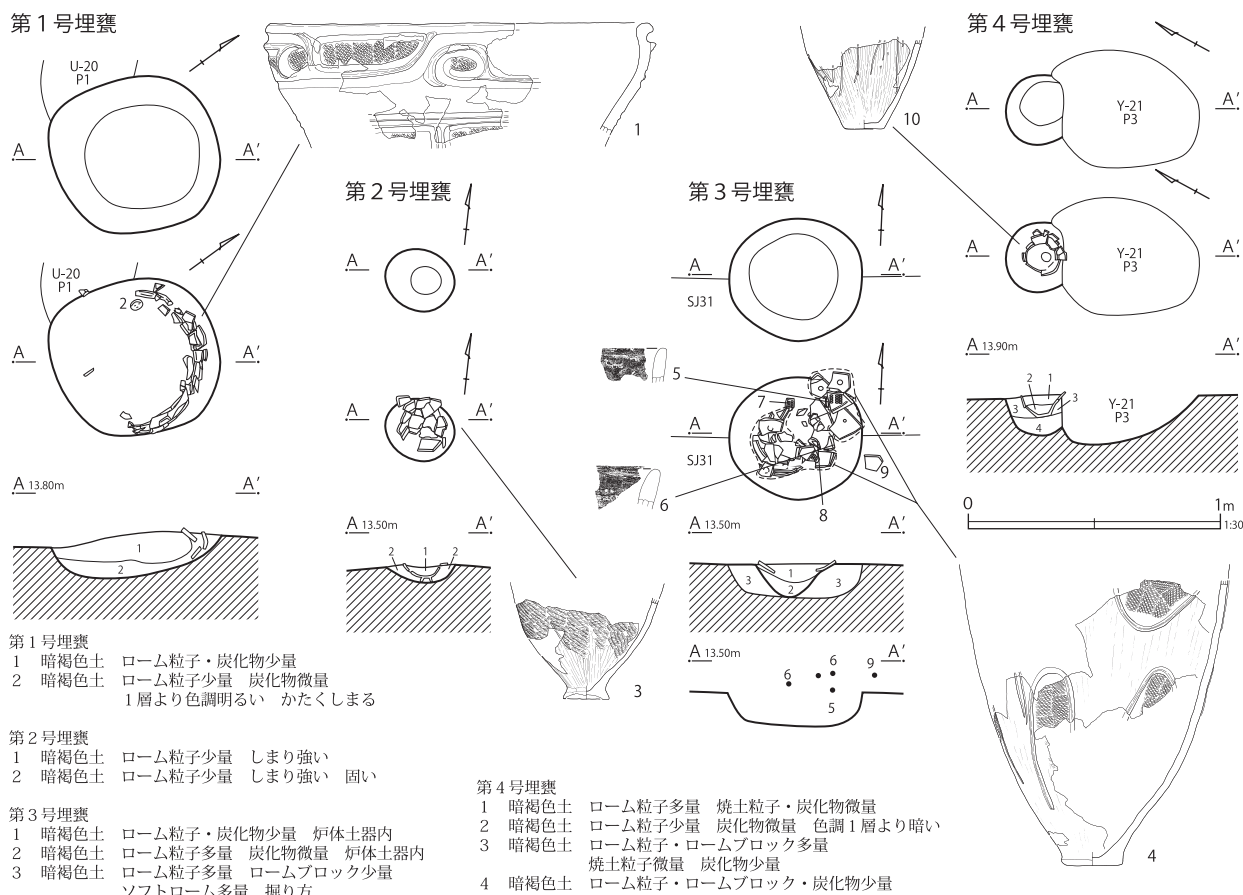
挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
335	87	SJ63	磨石	安山岩	[5.5]	6.1	3.6	154.7	
335	88	SJ63	磨石	砂岩	[2.5]	[2.6]	[0.6]	4.3	
335	89	SJ63	磨石	安山岩	[4.4]	[6.5]	[3.2]	77.2	
335	90	SJ63	磨石	安山岩	[3.4]	[5.1]	3.9	63.9	
335	91	SJ63	石皿	緑泥片岩	[9.5]	[3.4]	2.1	82.1	
348	194	SJ65	石鏃	チャート	[2.2]	1.6	0.4	1.0	
348	195	SJ65	石鏃	黒曜石	[1.6]	1.5	0.4	0.7	
348	196	SJ65	石鏃	黒曜石	[1.5]	[1.2]	0.3	0.5	
348	197	SJ65	石鏃	黒曜石	[1.8]	[1.3]	0.3	0.4	
348	198	SJ65	石鏃	黒曜石	[1.5]	[1.6]	0.4	0.9	
348	199	SJ65	石錐	黒曜石	1.8	1.2	0.4	0.5	
348	200	SJ65	くさび形石器	黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.7	
348	201	SJ65	スクレイパー	チャート	3.1	2.4	0.9	7.1	
348	202	SJ65	磨製石斧	緑色岩	7.2	3.5	1.6	62.3	
348	203	SJ65	磨製石斧	ホルンフェルス	14.0	5.6	2.8	282.5	敲石に転用
348	204	SJ65	磨製石斧	砂岩	[6.9]	5.5	3.6	233.7	
348	205	SJ65	磨製石斧	緑色岩	13.2	3.7	2.3	167.1	敲石に転用
348	206	SJ65	打製石斧	砂岩	7.3	4.6	2.0	105.1	
348	207	SJ65	打製石斧	ホルンフェルス	10.4	4.1	1.7	100.0	
348	208	SJ65	打製石斧	ホルンフェルス	9.1	4.5	1.6	69.7	
348	209	SJ65	打製石斧	ホルンフェルス	8.9	5.1	2.1	101.3	
348	210	SJ65	打製石斧	頁岩	6.4	4.1	1.5	40.3	
348	211	SJ65	打製石斧	砂岩	5.2	4.3	1.6	45.5	
348	212	SJ65	打製石斧	ホルンフェルス	[4.8]	4.2	1.9	41.1	
348	213	SJ65	打製石斧	ホルンフェルス	7.1	5.3	1.3	55.7	
348	214	SJ65	打製石斧	ホルンフェルス	5.2	5.1	1.1	37.4	
349	215	SJ65	打製石斧	緑泥片岩	[7.2]	4.1	2.3	100.0	
349	216	SJ65	スクレイパー	雲母片岩	8.1	6.7	1.4	89.2	
349	217	SJ65	敲石	緑色岩	[8.7]	3.2	2.2	98.9	
349	218	SJ65	敲石	緑色岩	[6.1]	[3.9]	2.6	104.0	
349	219	SJ65	敲石	砂岩	9.8	2.5	2.2	89.8	
349	220	SJ65	敲石	緑色岩	5.3	3.0	2.0	31.4	
349	221	SJ65	砥石	砂岩	[4.4]	3.7	0.9	17.1	
349	222	SJ65	磨石	砂岩	10.2	2.5	2.2	77.1	
349	223	SJ65	磨石	緑色岩	[8.8]	[2.8]	[3.1]	90.8	
349	224	SJ65	磨石	安山岩	[6.9]	[4.2]	2.7	86.2	
349	225	SJ65	磨石	安山岩	[6.6]	6.3	4.6	227.2	
349	226	SJ65	磨石	砂岩	[7.0]	4.6	3.2	142.2	
349	227	SJ65	磨石	砂岩	[6.2]	4.4	1.7	62.9	
349	228	SJ65	磨石	安山岩	[6.7]	[4.4]	3.1	108.1	
349	229	SJ65	磨石	安山岩	[3.6]	[4.1]	3.0	50.4	
349	230	SJ65	磨石	安山岩	[5.3]	[4.5]	[5.1]	98.0	
349	231	SJ65	磨石	砂岩	[6.0]	7.1	4.5	230.7	
349	232	SJ65	磨石	片岩	[3.1]	[5.1]	[3.5]	77.1	
349	233	SJ65	磨製石斧	砂岩	[3.7]	[4.7]	[1.4]	27.7	
349	234	SJ65	軽石	軽石	7.0	5.5	4.3	52.4	
349	235	SJ65	石皿	安山岩	[8.5]	[3.8]	[4.5]	128.5	
358	175	SJ66	石鏃	チャート	3.1	2.1	0.8	5.4	
358	176	SJ66	石鏃	チャート	[2.7]	1.9	0.4	1.4	
358	177	SJ66	石鏃	黒曜石	[1.9]	[1.3]	0.3	0.4	
358	178	SJ66	石錐	黒曜石	2.8	1.5	1.3	4.2	
358	179	SJ66	くさび形石器	黒曜石	1.8	1.7	0.5	1.1	
358	180	SJ66	Uフレ	黒曜石	3.2	1.7	0.6	1.2	
358	181	SJ66	Uフレ	チャート	4.1	2.4	1.3	12.5	

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
358	182	SJ66	石核	チャート	3.7	3.3	3.7	68.2	SJ48 と接合
359	183	SJ66	磨製石斧	砂岩	6.4	4.0	3.5	110.3	
359	184	SJ66	磨製石斧	砂岩	4.8	4.0	1.4	35.5	
359	185	SJ66	磨製石斧	緑色岩	[13.8]	[3.0]	[1.6]	73.5	
359	186	SJ66	打製石斧	頁岩	[6.1]	4.8	0.8	29.2	
359	187	SJ66	打製石斧	ホルンフェルス	[4.4]	5.6	1.6	39.6	
359	188	SJ66	敲石	結晶片岩	11.5	3.9	2.7	131.8	
359	189	SJ66	敲石	砂岩	7.5	2.4	2.3	55.8	
359	190	SJ66	砥石	緑泥片岩	[9.9]	5.3	0.9	64.5	
359	191	SJ66	磨石	安山岩	[6.7]	[4.7]	4.7	207.5	
359	192	SJ66	磨石	安山岩	[8.5]	5.3	3.3	186.2	
359	193	SJ66	磨石	安山岩	[5.6]	[6.5]	3.4	176.7	
359	194	SJ66	石皿	安山岩	[6.6]	[6.1]	[5.6]	193.6	
359	195	SJ66	石皿	安山岩	[4.7]	[4.3]	3.5	86.9	
359	196	SJ66	石皿	緑泥片岩	[6.4]	[10.8]	[2.2]	192.6	
366	67	SJ67	石鏃	黒曜石	[1.4]	[1.4]	0.3	0.6	石皿を転用
366	68	SJ67	打製石斧	ホルンフェルス	8.5	5.2	2.0	120.9	
366	69	SJ67	打製石斧	緑泥片岩	10.4	8.3	2.5	286.3	
366	70	SJ67	敲石	砂岩	[9.2]	3.5	2.2	117.9	
366	71	SJ67	敲石	緑色岩	[6.8]	[3.2]	2.2	66.5	
366	72	SJ67	敲石	緑色岩	[5.7]	3.6	2.6	80.2	
366	73	SJ67	磨石	緑色岩	[8.2]	4.0	2.1	99.7	
366	74	SJ67	磨石	砂岩	[6.1]	[3.0]	[3.5]	89.7	
366	75	SJ67	磨石	砂岩	[5.4]	5.9	3.1	126.5	
366	76	SJ67	磨石	砂岩	[5.7]	6.6	3.2	131.2	
366	77	SJ67	石皿	安山岩	[8.0]	[6.5]	5.0	284.1	
366	78	SJ67	石皿	安山岩	[6.0]	[6.3]	[4.6]	192.3	
375	107	SJ68	スクレイパー	チャート	3.6	2.2	1.0	7.7	
375	108	SJ68	磨製石斧	緑色岩	[6.6]	2.8	1.4	40.3	
375	109	SJ68	磨製石斧	緑色岩	8.4	5.1	3.0	136.9	
375	110	SJ68	磨製石斧	緑色岩	[10.1]	3.7	2.5	122.5	
375	111	SJ68	打製石斧	頁岩	[5.4]	3.4	1.7	39.0	
375	112	SJ68	礫器	ホルンフェルス	8.8	5.6	2.8	198.5	
375	113	SJ68	磨石	安山岩	8.6	5.5	3.7	232.8	
375	114	SJ68	磨石	安山岩	5.5	4.0	2.8	81.9	
375	115	SJ68	磨石	砂岩	[5.4]	[5.7]	1.0	43.1	
375	116	SJ68	敲石	黒色頁岩	11.6	4.2	1.9	96.4	
375	117	SJ68	スタンプ形石器	安山岩	6.6	5.7	3.8	194.9	
383	104	SJ69	石鏃	黒曜石	[2.1]	1.6	0.5	1.0	敲石に転用 敲石に転用 敲石に転用
383	105	SJ69	石錐	黒曜石	2.7	1.7	0.8	1.9	
383	106	SJ69	Uフレ	黒曜石	2.1	0.9	0.4	0.4	
383	107	SJ69	磨製石斧	緑色岩	10.0	5.3	3.6	282.1	
383	108	SJ69	磨製石斧	緑色岩	10.4	3.9	3.0	154.6	
383	109	SJ69	磨製石斧	砂岩	[10.4]	5.1	3.4	211.0	
383	110	SJ69	磨製石斧	安山岩	6.6	5.4	2.8	140.4	
383	111	SJ69	磨製石斧	黒色頁岩	[4.9]	[3.8]	[3.1]	63.2	
383	112	SJ69	打製石斧	ホルンフェルス	9.4	4.3	1.4	63.4	
383	113	SJ69	打製石斧	ホルンフェルス	10.6	4.2	2.4	122.9	
383	114	SJ69	打製石斧	緑泥片岩	[14.1]	3.6	1.4	90.1	
383	115	SJ69	打製石斧	砂岩	[9.0]	4.8	1.9	85.0	
383	116	SJ69	打製石斧	砂岩	[9.1]	5.5	1.9	121.3	
383	117	SJ69	打製石斧	ホルンフェルス	[5.1]	3.9	1.5	35.3	
383	118	SJ69	打製石斧	ホルンフェルス	[7.6]	4.5	2.0	86.4	
383	119	SJ69	打製石斧	ホルンフェルス	[6.9]	4.4	1.2	42.7	
383	120	SJ69	打製石斧	ホルンフェルス	[7.7]	5.1	2.5	122.5	
384	121	SJ69	敲石	砂岩	9.3	2.5	1.6	58.3	

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
384	122	SJ69	磨石	砂岩	[7.2]	4.9	3.3	145.6	
384	123	SJ69	磨石	安山岩	[8.1]	6.9	3.8	269.5	
384	124	SJ69	磨石	安山岩	6.1	5.0	3.1	106.6	
384	125	SJ69	磨石	安山岩	[5.4]	[6.4]	4.2	166.8	
384	126	SJ69	磨石	安山岩	[4.1]	4.8	4.3	91.1	
384	127	SJ69	石皿	多孔質安山岩	[10.8]	[8.3]	3.3	360.8	
384	128	SJ69	石皿	緑泥片岩	[11.1]	[6.1]	1.6	135.7	
384	129	SJ69	石皿	緑泥片岩	[12.7]	[8.2]	[2.3]	338.8	
384	130	SJ69	石皿	雲母片岩	[10.9]	[7.1]	[2.3]	189.7	
384	131	SJ69	石皿	安山岩	[7.8]	[6.2]	[4.7]	268.1	
384	132	SJ69	石皿	緑泥片岩	[6.3]	[9.6]	[2.1]	158.3	
391	83	SJ70	Uフレ	黒曜石	[3.3]	[2.3]	0.7	3.2	敲石に転用
391	84	SJ70	磨製石斧	砂岩	12.6	4.4	[1.8]	133.4	
391	85	SJ70	打製石斧	雲母片岩	9.8	4.9	2.0	126.4	
391	86	SJ70	打製石斧	雲母片岩	16.2	[5.6]	2.2	202.6	
391	87	SJ70	磨石	砂岩	[5.3]	[4.8]	2.8	87.2	
391	88	SJ70	磨石	砂岩	[6.3]	4.4	3.1	145.4	
391	89	SJ70	磨石	安山岩	[5.6]	[3.6]	[3.9]	72.7	
391	90	SJ70	磨石	安山岩	[3.2]	[5.6]	2.7	53.9	
391	91	SJ70	軽石	安山岩	[7.2]	[3.8]	[3.1]	46.0	
391	92	SJ70	石皿	緑泥片岩	[7.2]	[12.3]	[2.4]	259.0	
394	55	SJ71	敲石	雲母片岩	12.6	3.5	1.3	82.9	
394	56	SJ71	磨石	緑泥片岩	[7.2]	4.4	[2.3]	56.7	
394	57	SJ71	石皿	安山岩	[7.0]	[7.2]	[3.2]	138.2	
394	58	SJ71	石皿	緑泥片岩	[9.5]	[7.3]	1.5	127.3	
403	108	SJ73	石鏃	チャート	[1.6]	1.7	0.3	0.8	
403	109	SJ73	石錐	黒曜石	[1.7]	[1.5]	0.3	0.7	
403	110	SJ73	石錐	黒曜石	2.1	1.8	0.9	2.6	
403	111	SJ73	Uフレ	黒曜石	3.3	1.7	1.1	6.8	
403	112	SJ73	磨製石斧	砂岩	[4.9]	[5.6]	[2.5]	67.2	
403	113	SJ73	打製石斧	砂岩	10.4	6.3	2.3	176.0	
403	114	SJ73	打製石斧	ホルンフェルス	[5.3]	4.0	1.8	43.6	
403	115	SJ73	敲石	砂岩	5.9	3.4	2.9	80.5	
403	116	SJ73	敲石	砂岩	[5.7]	2.8	2.0	36.6	
403	117	SJ73	軽石	軽石	4.5	4.4	3.4	16.4	
412	145	SJ74	石鏃	玉髄	2.8	1.9	0.7	3.3	
412	146	SJ74	石鏃	チャート	[1.6]	2.1	0.4	1.1	
412	147	SJ74	石錐	黒曜石	1.7	1.0	0.7	1.0	
412	148	SJ74	Uフレ	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.6	
412	149	SJ74	Uフレ	黒曜石	2.9	1.9	0.7	2.8	
412	150	SJ74	Uフレ	黒曜石	[1.8]	2.2	0.5	1.1	
412	151	SJ74	石核	黒曜石	2.0	3.0	1.9	10.9	
412	152	SJ74	石核	黒曜石	2.3	2.4	1.8	8.2	
412	153	SJ74	磨製石斧	緑色岩	8.8	3.6	2.3	133.7	
412	154	SJ74	磨製石斧	砂岩	[7.3]	4.8	2.9	146.5	
412	155	SJ74	磨製石斧	砂岩	[6.2]	[3.0]	[0.9]	15.6	
412	156	SJ74	打製石斧	頁岩	[9.2]	5.6	2.1	128.6	
412	157	SJ74	砥石	緑泥片岩	[14.2]	[5.8]	[1.8]	194.3	
412	158	SJ74	敲石	砂岩	[8.9]	[4.1]	[2.2]	111.2	
412	159	SJ74	敲石	頁岩	[8.5]	2.9	2.2	78.0	
412	160	SJ74	敲石	片岩	11.4	4.1	2.6	151.2	
412	161	SJ74	敲石	緑色岩	[6.6]	3.0	[1.6]	36.5	
412	162	SJ74	敲石	緑色岩	[9.4]	[2.2]	2.3	62.6	
412	163	SJ74	磨石	軽石	6.7	4.6	3.5	18.7	
413	164	SJ74	磨石	砂岩	9.2	[5.2]	1.9	129.2	
413	165	SJ74	磨石	安山岩	[7.5]	[5.5]	[3.3]	159.5	

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
413	166	SJ74	磨石	安山岩	[6.5]	[6.5]	3.5	211.0	
413	167	SJ74	石皿	多孔質安山岩	[6.8]	[9.1]	5.1	373.0	
413	168	SJ74	石皿	緑泥片岩	[7.7]	[8.1]	[1.6]	111.7	
421	111	SJ75	石鏃	黒曜石	2.6	1.5	0.8	2.3	
421	112	SJ75	石鏃	チャート	[3.0]	[1.8]	0.5	1.9	
421	113	SJ75	石鏃	黒曜石	[1.2]	0.9	0.5	0.4	
421	114	SJ75	石鏃	チャート	2.3	[1.5]	0.3	0.5	
421	115	SJ75	Uフレ	黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.5	
421	116	SJ75	石核	黒曜石	2.6	1.9	1.7	7.4	
421	117	SJ75	石核	黒曜石	1.4	4.9	1.9	9.3	
421	118	SJ75	打製石斧	砂岩	5.0	5.1	1.6	42.0	
421	119	SJ75	打製石斧	砂岩	2.7	4.8	2.0	24.8	
421	120	SJ75	打製石斧	緑色岩	[5.1]	4.9	1.7	50.2	
421	121	SJ75	敲石	砂岩	9.9	4.3	3.5	181.1	
421	122	SJ75	磨石	安山岩	[4.5]	6.6	3.2	99.1	
421	123	SJ75	磨石	砂岩	[3.9]	[3.6]	3.2	52.1	
421	124	SJ75	磨石	安山岩	[3.3]	[5.3]	3.0	53.7	
421	125	SJ75	磨石	安山岩	[5.3]	[4.2]	4.5	118.3	
421	126	SJ75	磨石	安山岩	[8.3]	[5.3]	[5.4]	177.4	
421	217	SJ75	軽石	多孔質軽石	4.6	3.9	3.0	13.3	
429	144	SJ76	石鏃	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.4	
429	145	SJ76	石鏃	チャート	[2.5]	2.0	0.4	1.4	
429	146	SJ76	石鏃	ホルンフェルス	3.0	2.2	0.5	2.4	
429	147	SJ76	石錐	黒曜石	2.1	1.3	0.3	0.8	
429	148	SJ76	石錐	黒曜石	2.8	1.1	0.9	2.1	
429	149	SJ76	くさび形石器	黒曜石	1.7	[1.7]	0.3	0.7	
429	150	SJ76	Uフレ	チャート	2.8	3.8	1.3	14.5	
429	151	SJ76	磨製石斧	安山岩	[7.2]	[5.5]	[3.2]	91.5	
429	152	SJ76	打製石斧	ホルンフェルス	[7.3]	4.7	1.7	64.4	
429	153	SJ76	打製石斧	ホルンフェルス	8.4	4.7	2.2	99.2	
429	154	SJ76	打製石斧	緑泥片岩	[6.5]	3.8	1.3	40.4	
429	155	SJ76	打製石斧	ホルンフェルス	[3.8]	[5.2]	1.4	27.2	
429	156	SJ76	打製石斧	ホルンフェルス	[6.9]	5.8	1.7	73.4	
429	157	SJ76	打製石斧	ホルンフェルス	[4.6]	[4.9]	1.4	37.8	
429	158	SJ76	打製石斧	安山岩	4.8	4.9	2.2	63.5	
429	159	SJ76	敲石	緑泥片岩	[7.8]	5.5	1.9	118.6	
429	160	SJ76	敲石	緑色岩	12.0	3.8	2.6	153.9	
429	161	SJ76	敲石	砂岩	9.3	4.3	4.3	185.9	
429	162	SJ76	敲石	砂岩	8.0	3.2	2.4	76.4	
429	163	SJ76	敲石	緑色岩	5.9	2.5	[1.7]	40.3	
430	164	SJ76	敲石	砂岩	[7.0]	4.5	3.7	150.6	磨製石斧を転用
430	165	SJ76	敲石	緑色岩	[6.3]	[3.1]	3.1	70.1	磨製石斧を転用
430	166	SJ76	敲石	砂岩	[7.0]	4.7	3.0	163.3	
430	167	SJ76	軽石	多孔質軽石	[3.3]	[4.2]	[2.0]	5.9	
430	168	SJ76	磨石	砂岩	[5.9]	3.6	1.4	51.5	
430	169	SJ76	磨石	安山岩	[6.2]	4.9	2.9	133.8	
430	170	SJ76	磨石	安山岩	[5.6]	[5.1]	2.9	128.8	
430	171	SJ76	スタンプ形石器	砂岩	7.6	5.7	3.8	173.7	
430	172	SJ76	スタンプ形石器	安山岩	8.0	7.3	3.3	234.8	
430	173	SJ76	磨石	砂岩	9.4	9.8	2.7	325.7	
430	174	SJ76	磨石	安山岩	[8.5]	5.4	[1.9]	140.4	
430	175	SJ76	石皿	安山岩	[7.0]	[6.2]	[2.6]	135.4	
430	176	SJ76	石皿	雲母片岩	[4.1]	[5.5]	[1.9]	75.2	
430	177	SJ76	石皿	安山岩	[3.6]	[3.8]	[4.5]	52.4	
430	178	SJ76	垂飾	軽石	6.5	4.5	2.8	23.3	
432	16	SJ77	打製石斧	ホルンフェルス	[8.2]	5.4	2.2	113.1	

挿図	番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
432	17	SJ77	磨製石斧	安山岩	[3.4]	[5.7]	4.3	97.2	
436	42	SJ78	打製石斧	ホルンフェルス	[4.0]	4.1	1.3	22.0	
436	43	SJ78	打製石斧	砂岩	11.4	4.9	2.1	148.4	
436	44	SJ78	磨石	安山岩	[6.0]	5.5	6.0	214.2	
436	45	SJ78	石皿	安山岩	[10.8]	[9.2]	6.5	513.8	
438	26	SJ79	スクレイパー	チャート	3.3	2.4	1.1	10.7	
438	27	SJ79	磨石	安山岩	[2.9]	[5.6]	4.6	97.6	
438	28	SJ79	磨石	安山岩	7.2	5.1	3.3	162.5	
438	29	SJ79	磨石	安山岩	6.6	5.1	4.4	164.7	
440	19	SJ80	磨製石斧	砂岩	[6.7]	[4.9]	3.2	143.4	
440	20	SJ80	スタンプ形石器	砂岩	[4.1]	[6.0]	[3.0]	68.1	
445	46	SJ81	石鏃	チャート	[2.4]	1.5	0.4	1.2	
445	47	SJ81	石鏃	黒曜石	[1.9]	[0.9]	[0.4]	0.6	
445	48	SJ81	打製石斧	ホルンフェルス	[3.6]	4.4	1.3	28.4	
445	49	SJ81	スクレイパー	ホルンフェルス	6.7	5.5	1.9	88.9	
445	50	SJ81	磨石	安山岩	[5.1]	[4.5]	[3.7]	63.3	
445	51	SJ81	磨石	砂岩	[3.6]	[7.0]	[1.7]	39.7	
452	101	SJ82	石鏃	黒曜石	1.5	1.2	0.4	0.5	再加工
452	102	SJ82	石錐	黒曜石	2.6	1.5	0.8	2.5	
452	103	SJ82	Uフレ	黒曜石	2.3	1.8	0.9	2.9	
452	104	SJ82	スクレイパー	ガラス質黒色安山岩	[2.5]	3.2	1.4	10.5	
452	105	SJ82	打製石斧	チャート	11.0	4.1	1.9	134.5	
452	106	SJ82	打製石斧	ホルンフェルス	8.5	5.0	1.9	59.3	
452	107	SJ82	打製石斧	ホルンフェルス	7.8	5.8	1.8	107.0	
452	108	SJ82	打製石斧	ホルンフェルス	9.5	4.1	2.1	82.9	
452	109	SJ82	磨製石斧	ホルンフェルス	[6.2]	5.4	2.5	85.9	
452	110	SJ82	敲石	緑色岩	11.1	4.0	3.5	238.8	
452	111	SJ82	敲石	緑泥片岩	9.7	3.2	2.4	75.7	
452	112	SJ82	磨石	砂岩	[9.4]	[6.6]	[4.3]	306.8	
452	113	SJ82	磨石	安山岩	8.4	6.1	3.6	254.3	
452	114	SJ82	磨石	安山岩	[5.9]	[5.1]	[1.6]	28.2	
452	115	SJ82	磨石	安山岩	9.7	7.1	3.7	429.7	
452	116	SJ82	磨石	緑色岩	[10.0]	[4.6]	[3.7]	202.2	
454	32	SJ83	磨製石斧	ホルンフェルス	[5.8]	[3.1]	[0.8]	15.9	
454	33	SJ83	磨石	安山岩	[4.3]	[2.9]	[2.4]	28.9	
456	14	SJ84	くさび形石器	黒曜石	1.0	[0.7]	0.3	0.2	
456	15	SJ84	石棒	砂岩	[4.0]	4.7	[2.2]	52.7	
460	32	SJ86	打製石斧	頁岩	9.8	4.7	2.3	117.6	
460	33	SJ86	スクレイパー	砂岩	8.6	8.3	2.1	121.2	
460	34	SJ86	スタンプ形石器	安山岩	8.8	6.2	4.5	349.0	
460	35	SJ86	磨石	砂岩	[7.1]	[5.8]	[4.6]	192.1	
460	36	SJ86	磨石	砂岩	[3.7]	[3.4]	[3.3]	37.9	
464	61	SJ87	石鏃	チャート	[1.9]	[1.6]	0.4	0.9	磨製石斧を転用
464	62	SJ87	スクレイパー	チャート	[3.3]	[1.5]	0.4	2.0	
464	63	SJ87	磨製石斧	砂岩	[5.9]	[4.5]	1.3	31.8	
464	64	SJ87	打製石斧	砂岩	11.7	4.5	2.2	142.8	
464	65	SJ87	打製石斧	ホルンフェルス	8.3	4.6	1.4	55.6	
464	66	SJ87	打製石斧	ホルンフェルス	[6.2]	[4.4]	1.9	57.8	
464	67	SJ87	スクレイパー	ホルンフェルス	6.7	8.2	2.8	150.4	
464	68	SJ87	敲石	緑色岩	10.7	3.8	2.9	157.6	
464	69	SJ87	敲石	砂岩	8.9	3.1	2.2	89.2	
464	70	SJ87	敲石	緑色岩	[5.7]	3.5	1.8	49.0	
464	71	SJ87	磨石	安山岩	[6.6]	5.9	4.3	232.5	
466	32	SJ88	磨石	砂岩	12.9	3.5	2.3	157.4	
470	16	SJ90	砥石	安山岩	[3.8]	5.9	1.1	29.5	



第471図 第1～4号埋甕

(2) 埋甕

埋甕は4基検出された。時期は中期中葉の加曽利EⅢ式期から後期初頭の称名寺Ⅱ式期までである。いずれも深鉢形土器が埋設されていた。第1号埋甕からは、石製の垂飾が出土しており土壌墓の可能性を持つものもあったと考えられる。

第1号埋甕（第471・472図）

第1号埋甕は、U-20グリッドに位置する。第7号住居跡が西側に近接している。平面形態は円形である。規模は、長径0.67m、短径0.61m、深さ0.16mである。第472図1の大型の深鉢形土器が逆位に埋設されていた。2層上に設置されており、南側は壊されていた。土器は脆くなっており、風化が著しい。北側からは第472図2の石製の垂飾が出土した。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

1は埋甕に埋設されていた大型の深鉢形土器で

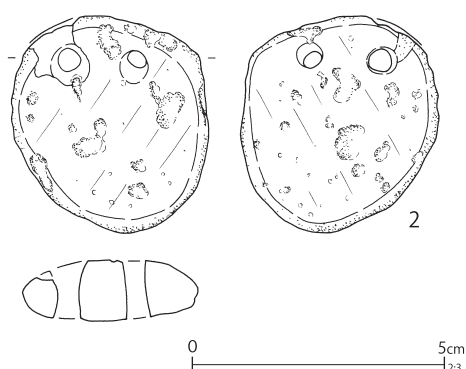
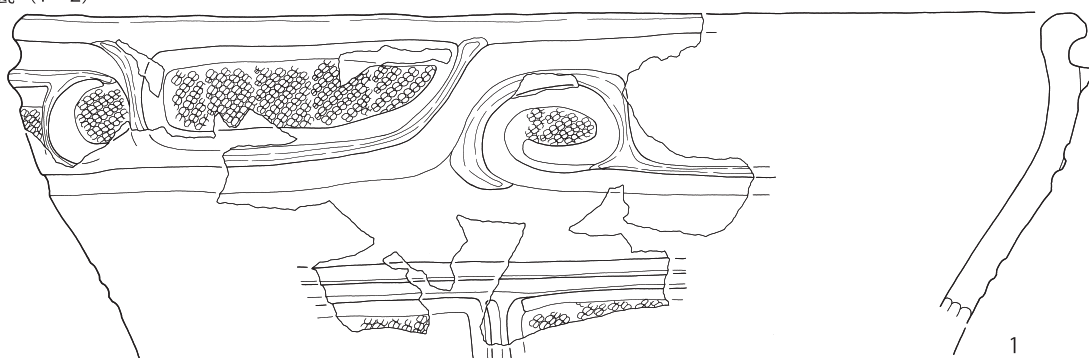
ある。キャリパー形で、口縁から胴部が残存していた。口縁部は隆帯で渦巻文や区画文が施文される。隆帯には幅広の沈線が沿わされる。沈線は撫で返されており、隆帯が削り取られている。頸部には狭い無文部が残されている。頸部と胴部は3本の沈線で区画される。胴部文様は沈線で懸垂文が施されている。地文は複節LRLの縄文で、口縁部は横方向に施文される。わずかに残る胴部も横方向に施文されている。推定口径48.0cm、残存高17.6cmである。

2は軽石製の垂飾である。楕円形で上部に2箇所並行する円孔が穿たれている。長さ6.1cm、幅5.3cm、厚さ1.7cm、重さ15.0gである。

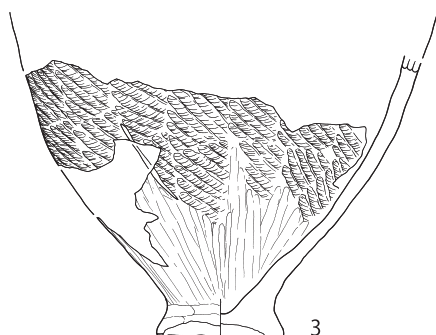
第2号埋甕（第471・472図）

第2号埋甕は、T-18グリッドに位置する。周辺に遺構は検出されていない。ごく浅いもので、削平されたと考えられる。平面形態は円形で

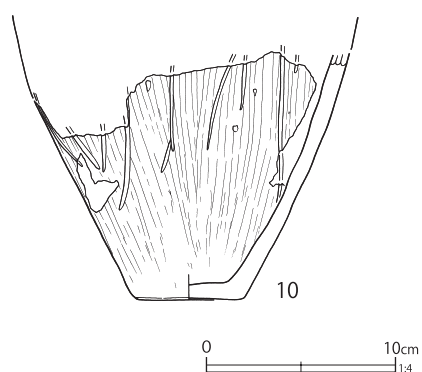
1号埋甕 (1・2)



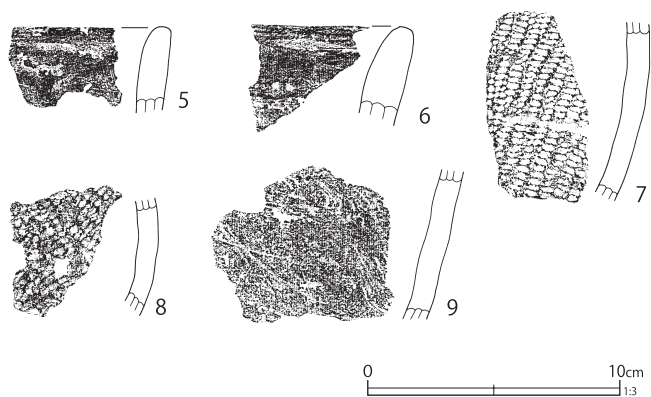
2号埋甕 (3)



4号埋甕 (10)



3号埋甕 (4~9)



第 472 図 第 1 ~ 4 号埋甕出土遺物

ある。規模は、長径 0.28 m、短径 0.25 m、深さ 0.07 m である。第 472 図 3 の深鉢形土器が正位で埋設されていた。胴部の下半から底部が残存する。上部は欠損していた。時期は土器の形状から中期終末の加曽利 E IV 式期と考えられる。

3 は埋甕に使用された深鉢形土器である。胴下半から底部が残存している。台付きに見えるが、底面を打ち割って加工されているものである。器面には沈線文が部分的に残存するが、文様かは不明である。地文として無節 L が縦方向に施文される。胴下部から底部はミガキ状の調整が行われている。底径 6.7 cm、残存高 14.5 cm である。

第 3 号埋甕（第 471・472 図）

第 3 号埋甕は、T-17 グリッドに位置する。上部は削平されたと考えられる。第 31 号住居跡を壊している。平面形態は円形である。規模は、長径 0.52 m、短径 0.49 m、深さ 0.13 m である。第 472 図 4 は埋設されていた深鉢形土器である。正位に埋設されていたと考えられる。確認段階で土器は破損された状態で、胴部から底部が残存し、口縁は失われていた。時期は中期終末の加曽利 E IV 式期である。

第 472 図 4～9 は埋甕から検出された土器である。

4 は埋甕として使用された深鉢形土器である。胴上部は失われている。胴部に括れはなく、バケツ状の器形となっている。文様は上下に分かれており、上部は部分的に残るため波状文か単位文かは不明である。下部の文様は逆 U 字状文が施文される。文様は微隆起線状の隆帯で施文されている。地文は文様内に充填されている。地文は単節 L R の縄文が、縦方向に施文されている。底径 8.6 cm、残存高 41.2 cm である。

5～9 は遺構内から出土した深鉢形土器の破片である。5・6 は無文の口縁部で、4 の口縁部であった可能性がある。7～9 は 4 とは別個体で、混入と考えられる。7・8 は地文のみが残る胴部

で、地文として 7 は単節 R L の縄文が縦方向に施文されている。8 は単節 L R の縄文が縦や横方向に施文されている。9 は無文の胴部である。

第 4 号埋甕（第 471・472 図）

第 4 号埋甕は、Y-21 グリッドに位置する。上部は削平されたと考えられる。南側の 1 部がグリッドピットに壊されている。平面形態は隅丸方形である。規模は、長径 0.28 m、短径 0.22 m、深さ 0.16 m である。第 472 図 10 は埋設されていた深鉢形土器である。正位に埋設されており、胴部の下半から底部が残存する。上部は欠損していた。時期は後期初頭の称名寺 II 式期と考えられる。

10 は埋甕に使用された深鉢形土器である。胴下半から底部が残存している。胴部には沈線文様が施文される。末端部が残るもので、文様は不明である。地文はなく縦方向の器面調整が施されている。底部周辺は被熱のためひび割れており、内面にも黒い筋が観察される。底径 5.6 cm、残存高 13.1 cm である。

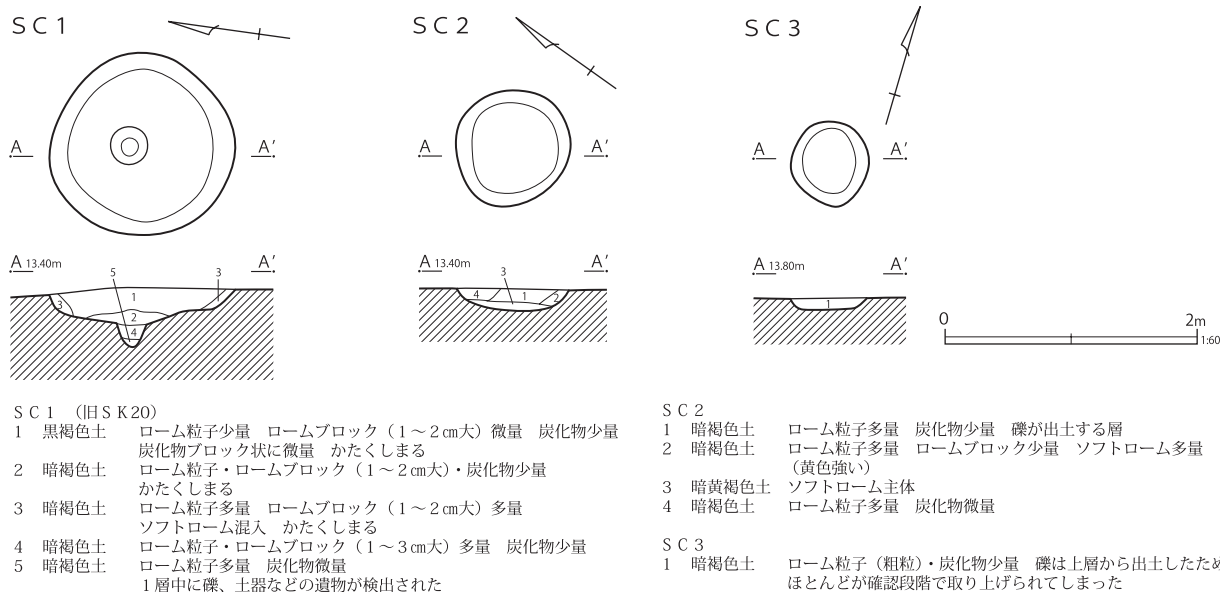
（3）集石土壇

集石土壇は、3 基が検出された。焼礫が出土した土壇は 3 基のみであったが、住居内には、多量の焼礫が廃棄されている。それらの中には破碎された石器も多量に含まれていた。焼礫が発生する行為が日常的に行われていたと考えられるが、それらの量に相当する遺構はなく、廃棄された住居内で調理などが行われていた可能性がある。

第 1 号集石土壇（第 473・474 図）

第 1 号集石土壇は Q-11 グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形で、長径 1.50 m、短径 1.47 m、深さ 0.50 m、小穴の深さ 0.75 m である。底面の中央付近に認められた小穴を含めて、遺構内の壁面や底面に焼土や炭化物の残存など、明確な被熱痕跡は認められない。時期は出土土器から前期と考えられる。

出土遺物は、覆土 1 層中から一括遺物を含め礫



第 473 図 集石土壌

は 54 点である。礫には、明瞭な赤化と付着物が
高い割合で認められ、熱破碎による 8 例の接合資
料がある。

土器は図示が可能なものは 4 点で、他に小片が
数点出土した。第 474 図 1~4 は出土した深鉢
形土器の破片である。2~4 は風化しており、胎
土に繊維が含まれる。前期初頭の花積下層式で
ある。1 は風化しておらず、覆土一括で出土した。

第 2 号集石土壌 (第 473・474 図)

第 2 号集石土壌は S-12 グリッドに位置する。
平面形態はほぼ円形で、長径 1.55 m、短径 1.50 m、
深さ 0.35 m である。遺構内の壁面や底面に焼土
や炭化物の残存など、明確な被熱痕跡は認められ
ない。時期は出土土器から中期中葉と考えられる。

出土遺物は、一括遺物を含め礫は 32 点である。
礫に淡い赤化と付着物が認められるものの、残さ
れた資料間で接合関係はまったく認められなかつ
た。

土器は 1 点のみが出土したが風化が著しい。第
474 図 5 は出土した土器である。深鉢形土器で、
風化が著しいため詳細は不明だが、隆帯と沈線で

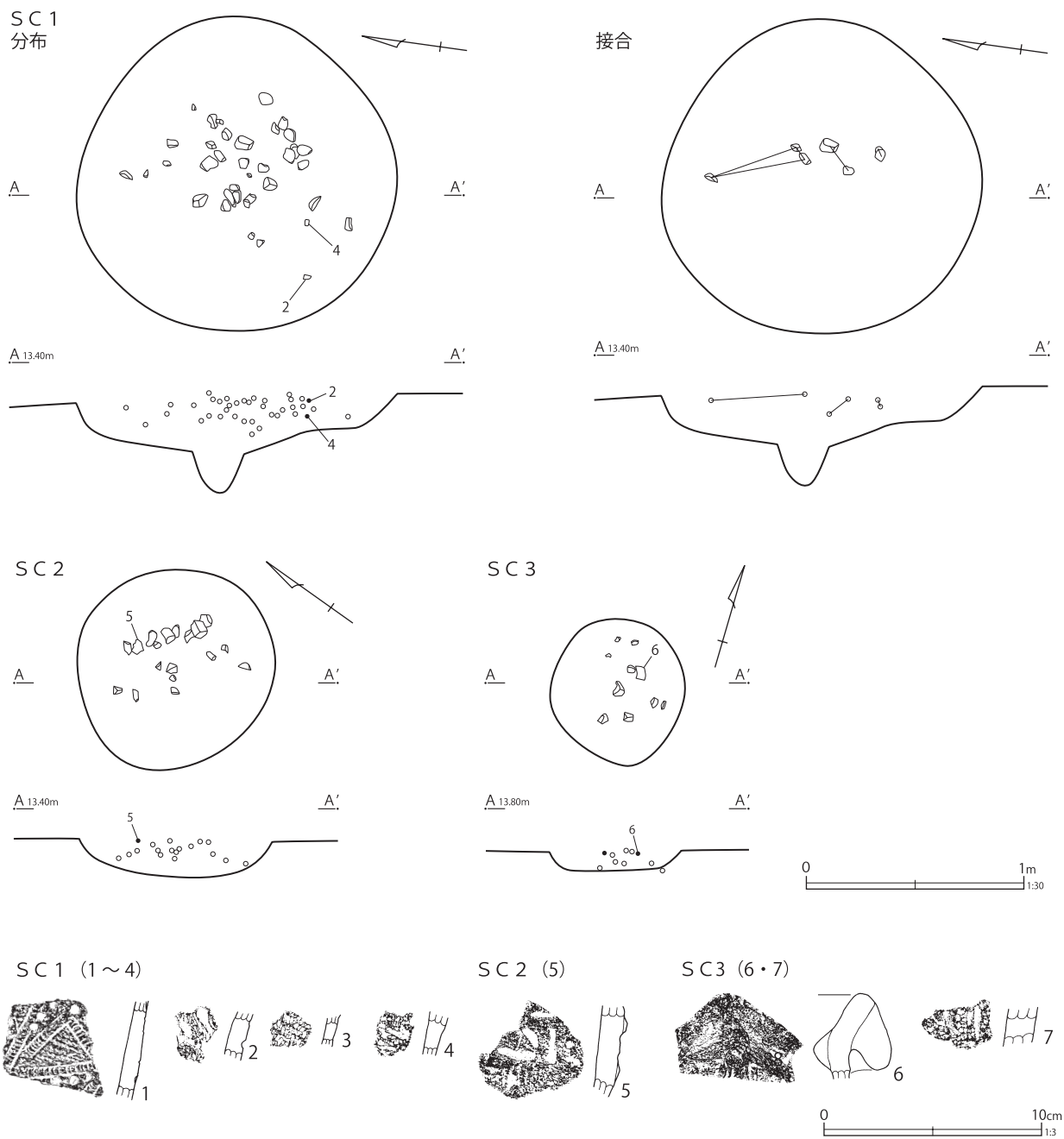
文様が施文されている。中期中葉の勝坂式期と考
えられる。

第 3 号集石土壌 (第 473・474 図)

第 3 号集石土壌は U-19 グリッドに位置す
る。平面形態は円形で、長径 0.69 m、短径 0.6
m、深さ 0.33 m である。遺構内の壁面や底面に
焼土や炭化物の残存など、被熱痕跡は認められな
い。時期は中期中葉の勝坂式期と考えられる。

出土遺物は、一括遺物を含め礫は 16 点である。
ただし、遺構確認段階で取り上げられた遺構上層
の礫は含まれていない。礫に赤化や付着物が認め
られず、4 例の接合資料も熱破碎とは考えられず、
自然礫のほかに、人為的な加工の痕跡が不明瞭な
礫石器の破片が含まれていると推定される。

土器は図示できたものが 2 点である。ごく小片
の土器が 1 点出土している。いずれも風化が著し
く文様が不明瞭である。第 474 図 6・7 は出土
した深鉢形土器の破片である。6 は口縁の把手部
分である。隆帯が貼付されている。7 は胴部の破
片である。風化が著しいが、時期は中期中葉の勝
坂式期末葉と考えられる。



第 474 図 集石土壌遺物出土状況・出土遺物

第81表 礫の属性集計表

集石\属性	点数 (総重量・平均重量) (g)	石質 (点数)				完形度 (点数)					赤化 (点数・割合)		付着物 (点数・割合)	
		砂岩	チャート	頁岩	ホルンフェルス	A	B	C	D	E	○ (%)	× (%)	○ (%)	× (%)
1号集石 (接合前)	54 (3072.9・56.9)	33	21			11	5	2	13	23	41 (76)	13 (24)	48 (89)	6 (11)
1号集石 (接合後)	42 (3289.0・78.3)	28	14			11	7		8	16	33 (79)	9 (21)	38 (90)	4 (10)
2号集石	32 (862.9・26.9)	26	3	2	1	1		1	8	22	16 (50)	16 (50)	12 (38)	20 (63)
3号集石 (接合前)	16 (519.0・32.4)	15		1					10	6	なし (0)	なし (0)	なし (0)	なし (0)
3号集石 (接合後)	11 (519.9・47.3)	10		1					10	1	なし (0)	なし (0)	なし (0)	なし (0)

第82表 集石土壌出土遺物観察表

集石	出土位置	注記番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	完形度	赤化	付着物	備考
SC1	1	1	礫	砂岩	7.3	3.3	2.3	53.2	D	○	○	接合 01
SC1	2	2	礫	砂岩	4.4	2.6	2.2	24.2	E	○	○	
SC1	3	3	礫	砂岩	3.5	2.4	1.9	14.8	E	○	○	
SC1	4	4	礫	砂岩	6.4	4.4	2.3	68.1	B	○	○	
SC1	5	5	礫	砂岩	2.9	2.0	1.2	3.9	E	○	○	接合 02
SC1	6	6	礫	砂岩	5.2	3.8	2.6	59.5	D	○	○	
SC1	7	7	礫	チャート	5.3	4.3	3.2	99.7	B	×	○	接合 03
SC1	8	8	礫	チャート	6.8	6.3	3.5	200.8	B	×	×	
SC1	9	9	礫	砂岩	5.1	3.7	2.3	28.6	D	○	○	接合 01
SC1	10	10	礫	砂岩	7.2	5.1	3.2	130.7	A	○	○	
SC1	11	11	礫	砂岩	6.3	3.4	2.5	60.8	D	○	○	
SC1	12	12	礫	砂岩	4.0	3.5	0.9	18.9	E	○	○	
SC1	13	13	礫	チャート	7.2	5.0	4.4	156.6	B	○	○	接合 05
SC1	14	14	礫	チャート	7.8	4.6	4.6	167.9	A	×	○	
SC1	15	15	礫	砂岩	4.6	4.4	2.7	94.4	A	○	○	
SC1	16	16	礫	砂岩	5.9	3.8	3.2	94.3	B	○	○	
SC1	17	17	礫	砂岩	8.2	2.7	3.2	101.0	A	○	○	接合 04
SC1	18	18	礫	砂岩	3.5	2.3	1.3	14.6	D	○	○	
SC1	19	19	礫	砂岩	8.5	3.9	2.4	103.3	A	○	○	
SC1	20	20	礫	チャート	3.4	3.0	1.9	23.2	E	○	×	
SC1	21	21	礫	チャート	4.4	3.3	1.9	22.5	E	×	×	接合 03
SC1	22	22	礫	砂岩	6.5	4.1	4.3	131.3	A	○	○	
SC1	23	23	礫	砂岩	6.8	5.1	3.2	151.3	A	○	○	
SC1	24	24	礫	砂岩	5.5	2.3	3.3	44.9	D	○	○	
SC1	25	25	礫	チャート	4.9	2.3	3.4	35.5	D	×	○	接合 05
SC1	26	26	礫	砂岩	4.4	2.4	2.5	27.1	D	○	○	
SC1	27	27	礫	チャート	7.4	4.6	4.3	155.3	A	○	○	
SC1	28	28	礫	チャート	6.8	4.5	3.6	173.2	A	○	○	
SC1	29	29	礫	チャート	5.0	4.0	3.3	94.2	A	×	○	接合 06
SC1	30	30	礫	砂岩	2.1	1.9	9.0	3.4	E	○	○	
SC1	31	31	礫	チャート	2.5	2.3	1.2	6.3	E	×	○	
SC1	32	32	礫	チャート	6.0	2.8	2.5	53.1	D	×	○	
SC1	33	33	礫	砂岩	5.2	4.0	1.9	43.8	D	○	○	第474図 4
SC1	34	34	土器	-	-	-	-	-	-	-	-	
SC1	35	35	土器	-	-	-	-	-	-	-	-	
SC1	36	36	礫	砂岩	5.9	5.0	1.9	79.3	C	○	○	
SC1	37	37	礫	砂岩	4.5	3.3	2.5	29.9	D	○	○	接合 07
SC1	38	38	礫	砂岩	4.6	2.0	1.7	16.2	E	○	○	
SC1	一括	39	礫	砂岩	7.1	5.4	5.3	231.0	C	○	○	接合 02
SC1	一括	40	礫	砂岩	3.3	1.5	1.3	5.1	E	○	○	
SC1	一括	41	礫	砂岩	6.5	5.3	2.4	76.6	D	○	○	接合 02
SC1	一括	42	礫	砂岩	6.7	3.6	2.4	46.0	D	○	○	
SC1	一括	43	礫	砂岩	4.8	3.4	3.4	64.8	A	×	○	接合 02
SC1	一括	44	礫	砂岩	3.7	1.0	2.6	8.1	E	○	○	
SC1	一括	45	礫	砂岩	3.3	1.7	2.0	8.9	E	○	○	接合 08
SC1	一括	46	礫	チャート	2.2	1.9	1.9	7.1	E	○	○	
SC1	一括	47	礫	チャート	3.9	1.9	2.3	15.0	E	×	○	
SC1	一括	48	礫	チャート	3.9	1.5	1.0	6.0	E	×	○	
SC1	一括	49	礫	チャート	2.4	1.6	1.0	3.3	E	○	×	接合 06
SC1	一括	50	礫	砂岩	2.0	1.9	0.9	3.9	E	○	○	
SC1	一括	51	礫	チャート	2.2	1.4	0.8	2.8	E	○	×	接合 05
SC1	一括	52	礫	チャート	2.8	1.9	1.1	5.7	E	×	○	
SC1	一括	53	礫	チャート	1.7	1.4	0.8	1.5	E	×	○	
SC1	一括	54	礫	チャート	1.1	0.9	0.7	0.7	E	○	○	
SC1	一括	55	礫	チャート	1.2	1.0	0.3	0.3	E	○	×	接合 04
SC1	一括	56	礫	砂岩	0.9	0.7	0.3	0.3	E	○	○	
SC1	接合 01		礫	砂岩	10.7	3.9	3.3	114.3	D	×	○	接合 02
SC1	接合 02		礫	砂岩	11.4	7.1	5.3	418.3	B	○	○	
SC1	接合 03		礫	チャート	9.3	6.6	3.4	223.8	B	×	×	接合 04
SC1	接合 04		礫	チャート	3.5	3.0	1.8	237.5	E	○	×	

集石	出土 位置	注記 番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	完形度	赤化	付着物	備考
SC1	接合	05	礫	チャート	5.5	4.2	3.5	52.7	D	×	○	第474図 5
SC1	接合	06	礫	チャート	6.0	2.7	2.6	59.4	D	×	×	
SC1	接合	07	礫	砂岩	5.7	5.2	2.5	109.3	B	○	○	
SC1	接合	08	礫	砂岩	2.7	2.3	1.4	7.9	E	×	×	
SC2	1	1	土器	-	-	-	-	-	-	-	-	
SC2	2	2	礫	砂岩	5.5	2.8	2.8	49.4	D	×	×	
SC2	3	3	礫	砂岩	6.2	4.6	2.6	84.5	D	○	○	
SC2	4	4	礫	砂岩	6.6	3.8	2.6	69.9	D	○	○	
SC2	5	5	礫	砂岩	7.1	4.9	4.0	140.3	D	×	○	
SC2	6	6	礫	砂岩	5.4	4.1	3.1	46.3	D	×	×	
SC2	7	7	礫	砂岩	7.8	5.6	2.0	114.7	A	○	○	
SC2	8	8	礫	砂岩	5.3	3.4	1.8	38.2	C	○	×	
SC2	9	9	礫	砂岩	3.3	2.5	1.8	19.3	E	○	○	
SC2	10	10	礫	ホルンフェルス	4.6	2.7	2.3	23.8	E	○	○	
SC2	11	11	礫	砂岩	5.2	4.0	2.5	53.6	D	×	×	
SC2	12	12	礫	砂岩	3.3	2.0	1.2	8.2	E	○	×	
SC2	13	13	礫	砂岩	3.9	2.8	1.4	15.7	E	×	○	
SC2	14	14	礫	砂岩	4.1	2.9	2.1	21.3	E	○	×	
SC2	15	15	礫	砂岩	3.5	2.2	1.7	14.6	E	○	○	
SC2	16	16	礫	砂岩	3.6	3.0	1.3	17.4	E	×	×	
SC2	17	17	礫	チャート	2.7	1.6	1.0	6.4	E	×	×	
SC2	18	18	礫	砂岩	3.9	2.9	2.8	35.9	D	○	○	
SC2	一括	19	礫	砂岩	4.3	2.8	2.5	34.5	D	○	○	
SC2	一括	20	礫	砂岩	2.7	2.1	2.6	9.7	E	×	○	
SC2	一括	21	礫	砂岩	2.0	2.0	2.0	7.0	E	○	×	
SC2	一括	22	礫	砂岩	3.1	1.1	1.4	4.2	E	○	×	
SC2	一括	23	礫	砂岩	2.0	1.2	1.8	3.9	E	○	×	
SC2	一括	24	礫	チャート	3.0	1.4	2.2	12.2	E	×	×	
SC2	一括	25	礫	頁岩	2.0	2.0	2.1	9.8	E	×	×	
SC2	一括	26	礫	砂岩	2.1	1.6	1.5	5.0	E	○	○	接合 01
SC2	一括	27	礫	チャート	1.8	1.3	1.0	2.3	E	×	×	
SC2	一括	28	礫	頁岩	2.7	1.4	0.9	2.1	E	×	×	
SC2	一括	29	礫	砂岩	1.8	1.1	1.7	3.6	E	×	×	
SC2	一括	30	礫	砂岩	1.8	2.1	0.6	2.2	E	×	×	
SC2	一括	31	礫	砂岩	1.7	1.7	1.3	3.6	E	×	×	
SC2	一括	32	礫	砂岩	1.1	1.3	7.4	1.3	E	×	×	
SC2	一括	33	礫	砂岩	1.4	1.0	0.7	1.4	E	○	×	
SC3	1	1	礫	砂岩	1.7	1.3	1.9	3.8	E	×	×	
SC3	2	2	礫	砂岩	3.1	2.3	1.4	9.9	E	×	×	
SC3	3	3	土器	-	-	-	-	-	-	-	-	第474図 6
SC3	4	4	礫	砂岩	4.6	3.5	3.0	25.6	D	×	×	
SC3	5	5	土器	-	-	-	-	-	-	-	-	
SC3	6	6	礫	砂岩	7.4	5.4	2.5	79.2	D	×	×	
SC3	7	7	礫	砂岩	5.0	3.1	2.9	51.1	D	×	×	
SC3	8	8	礫	砂岩	3.7	3.5	1.9	33.6	D	×	×	
SC3	9	9	礫	砂岩	4.1	2.0	2.9	23.6	E	×	×	
SC3	10	10	礫	砂岩	4.8	3.4	2.7	38.3	D	×	×	
SC3	一括	11	礫	砂岩	5.6	4.6	3.0	62.0	D	×	×	
SC3	一括	12	礫	砂岩	4.2	2.7	2.6	36.9	E	×	×	
SC3	一括	13	礫	砂岩	4.3	2.2	2.7	25.2	D	×	×	
SC3	一括	14	礫	頁岩	4.9	3.7	2.5	41.6	D	×	×	接合 02
SC3	一括	15	礫	砂岩	4.7	3.6	3.1	53.3	D	×	×	
SC3	一括	16	礫	砂岩	2.9	3.2	3.4	31.9	D	×	×	接合 01
SC3	一括	17	礫	砂岩	1.9	1.4	1.0	2.4	E	×	×	
SC3	一括	18	礫	砂岩	1.0	1.0	0.8	0.6	E	×	×	接合 03
SC3	接合	01	礫	砂岩	6.0	3.5	3.8	89.3	D	×	×	
SC3	接合	02	礫	砂岩	6.6	5.0	2.8	60.4	D	×	×	接合 04
SC3	接合	03	礫	砂岩	5.9	4.8	2.8	64.9	D	×	×	
SC3	接合	04	礫	砂岩	5.0	2.4	2.6	26.0	D	×	×	

完形度：A（完形）、B（9割以上）、C（5割以上）、D（5割以下）、E（小破片）

赤化・付着物（スス・タール）：○（あり）、×（なし） ※接合資料は、割れ面の属性を示している。

(4) 土壌

縄文時代の土壌は245基検出された。土壌は住居跡の分布範囲外からも検出され、調査区全体に分布していた。時期は前期から後期前葉までで、住居跡の時期と同様に中期中葉から後葉が主体となって検出された。ここでは、特徴的な土壌や、遺物が出土した土壌について記載した。また、土壌の形状や規模については第83表に記した。石器の計測値は第84表に記した。土製品の計測値は第87表に記した。

第4号土壌 (第475・478図)

第4号土壌はN・O-14グリッドに位置する。第478図1～4は出土した深鉢形土器の胴部片である。5は磨石の破片である。時期は中期後葉の加曽利E式期である。

第5号土壌 (第475・478図)

第5号土壌は、O-14グリッドに位置する。壁が垂直に近く立ち上がる円筒状の土壌である。

第478図19～38の深鉢形土器片が出土した。19・20は勝坂式期で、他は加曽利E式期である。磨消懸垂文が胴部に施文されている。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第6号土壌 (第475・478図)

第6号土壌は、O-14グリッドに位置する。壁が垂直に近く立ち上がる円筒状の土壌である。器形復元が可能な土器が床面直上近くから出土した。

第478図12～17は出土した土器である。12はキャリパー形の深鉢形土器で口縁から胴部が残存する。口縁部は波状で文様帯には隆帯が施文されるが、それに沿う沈線は幅広で沈線によって文様が描出される。文様は渦巻文が波頂下にくるように入れ子状に施されている。胴部は2本1組の沈線による磨消懸垂文が垂下される。地文は単節LRの縄文が口縁は横方向、胴部は縦方向に施文される。推定口径24.0cm、残存高12.3cmである。13～16は深鉢形土器、17は浅鉢形土器の破片である。18は敲石である。時期は12の土器から、

中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第7号土壌 (第475・478図)

第7号土壌は、O-14グリッドに位置する。

第478図6～10は出土したキャリパー形の深鉢形土器片である。時期は中期後葉の加曽利E式期である。

第8号土壌 (第475・478図)

第8号土壌は、N・O-14グリッドに位置する。

第478図11はキャリパー形の深鉢形土器片である。時期は中期中葉の加曽利E式期である。

第9号土壌 (第475・478図)

第9号土壌は、N-13グリッドに位置する。北側からピット状の落ち込みが検出された。

第478図39～42はキャリパー形の深鉢形土器片である。41・42の胴部には磨消懸垂文が施されている。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第10号土壌 (第475・478図)

第10号土壌は、P-14グリッドに位置する。北側からピット状の落ち込みが検出された。

第478図43～53は出土した深鉢形土器の破片で、43～49は加曽利E式系のキャリパー形の土器で、胴部片には磨消懸垂文が施されている。50・51は連弧文系の土器である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第11号土壌 (第475・479図)

第11号土壌は、P-13グリッドに位置する。

第479図1は出土した深鉢形土器の無文の口縁部である。中期後葉の加曽利E式期である。

第12号土壌 (第475・479図)

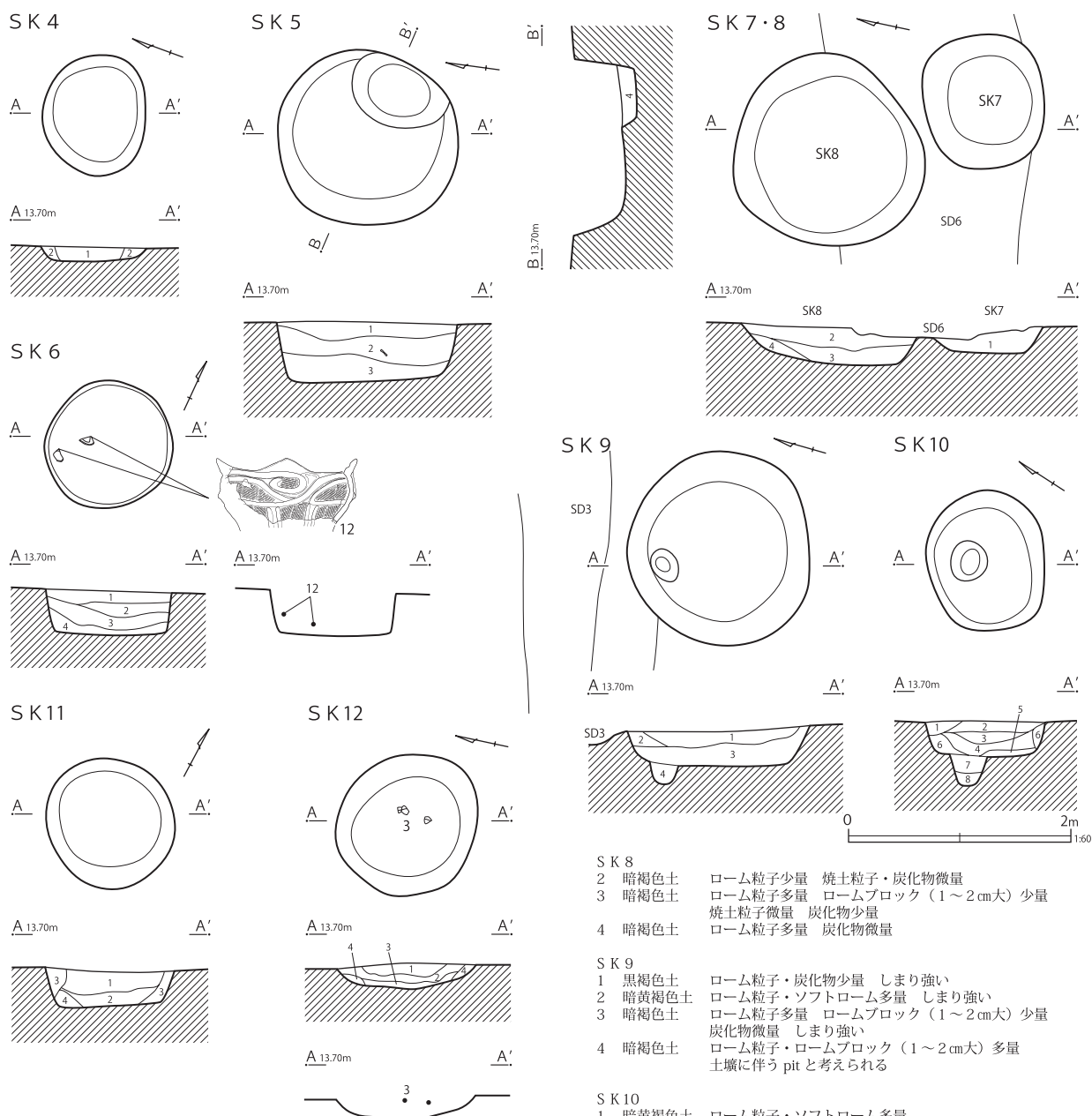
第12号土壌は、O・P-14グリッドに位置する。

第479図2・3は出土した土器片で、2はキャリパー形の深鉢形土器で、3は浅鉢形土器である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第13号土壌 (第476・479図)

第13号土壌は、P-13グリッドに位置する。

第479図7～26は出土した土器片である。7～17はキャリパー形の深鉢形土器で、9・10は



SK 4
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強い
2 暗黄褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物微量 しまり強い

SK 5
1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物微量
ソフトロームブロック状に微量
2 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (0.5 cm大)・
焼土粒子微量 炭化物少量
3 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック (2~3 cm大) 多量
4 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (0.5~1 cm大)
微量 炭化物少量

SK 6
1 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 炭化物多量 しまり強い
3 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量 しまり強い
遺物を含む層
4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2 cm大) 少量
炭化物微量 覆土はしまりが強かたくしまっている

SK 7
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2 cm大) 少量
焼土粒子微量 炭化物少量

SK 8
2 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2 cm大) 少量
焼土粒子微量 炭化物少量
4 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量

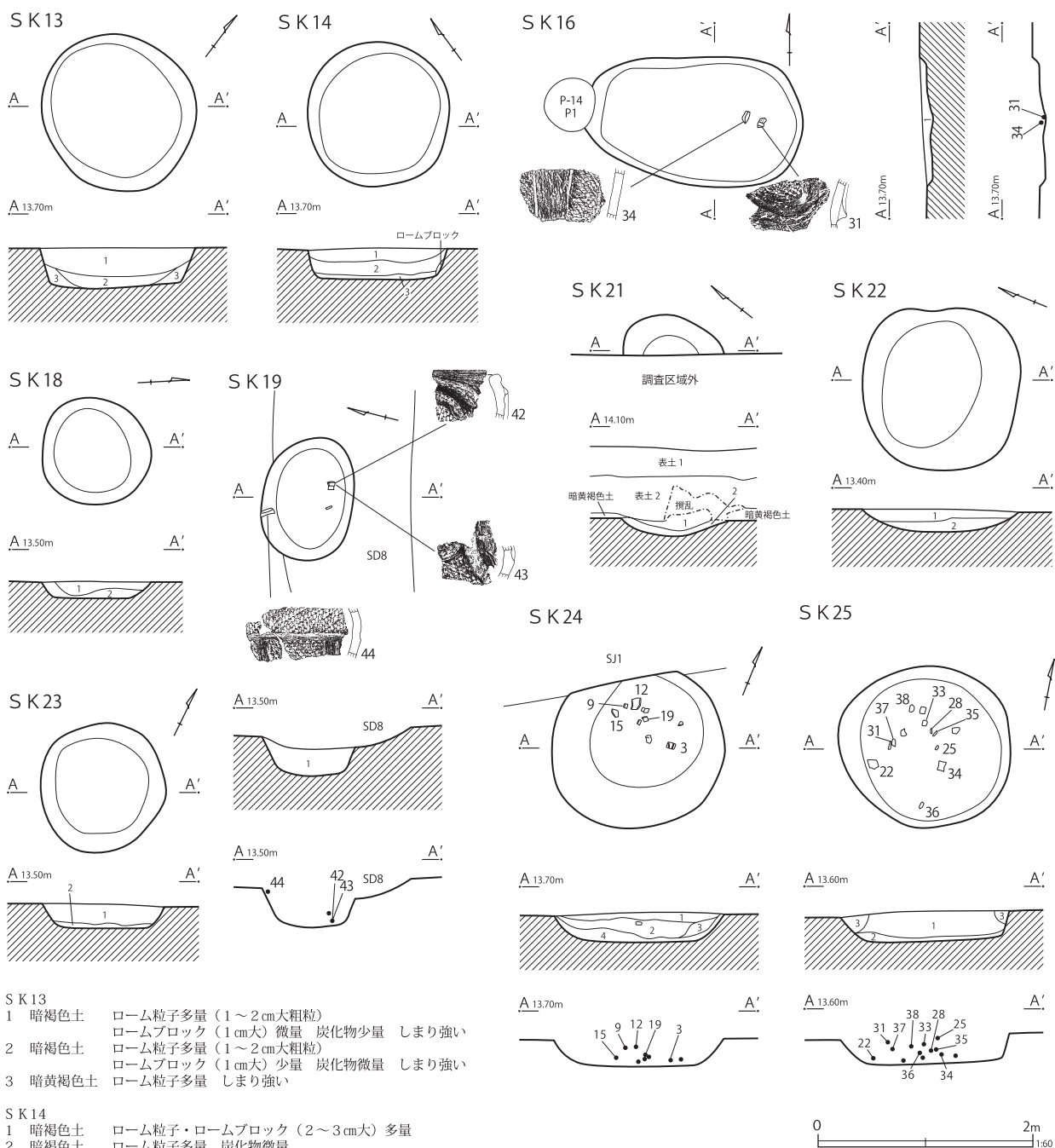
SK 9
1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物少量 しまり強い
2 暗黄褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 しまり強い
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2 cm大) 少量
炭化物微量 しまり強い
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2 cm大) 多量
土壌に伴う pit と考えられる

SK 10
1 暗黄褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
2 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量
3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物多量 しまり強い
4 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量 しまり強い
遺物を含む層
5 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2 cm大)
少量 炭化物微量
6 暗黄褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
覆土はしまりが強かたくしまっている
7 黒褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 かたくしまる
8 暗褐色土 ローム粒子多量 かたくしまる
土壌に伴う pit と考えられる

SK 11
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2 cm大) 少量
炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
3 暗黄褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム混入
4 暗褐色土 ローム粒子多量

SK 12
1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック多量 炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量 炭化物微量
3 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量
4 暗褐色土 ローム粒子多量 1層中より遺物出土
1層の焼土ブロックは埋め土に入っていたものと考えられる

第 475 図 土 壌 (1)



SK13
1 暗褐色土 ローム粒子多量 (1~2cm大粗粒)
2 暗褐色土 ローム粒子多量 (1~2cm大粗粒)
3 暗褐色土 ローム粒子多量 (1~2cm大粗粒)

SK14
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (2~3cm大) 多量
2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量

SK16
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量

SK18
1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物微量 しまり強い
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量

SK19
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~3cm大) 少量
炭化物微量 かたくしめる 遺物含む層
SD8内精査後に検出

SK21
表土1
表土2
1 暗褐色土 (黒に近い) ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量

SK22
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色土 1層より明るい色調 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量 ソフトローム多量に混入

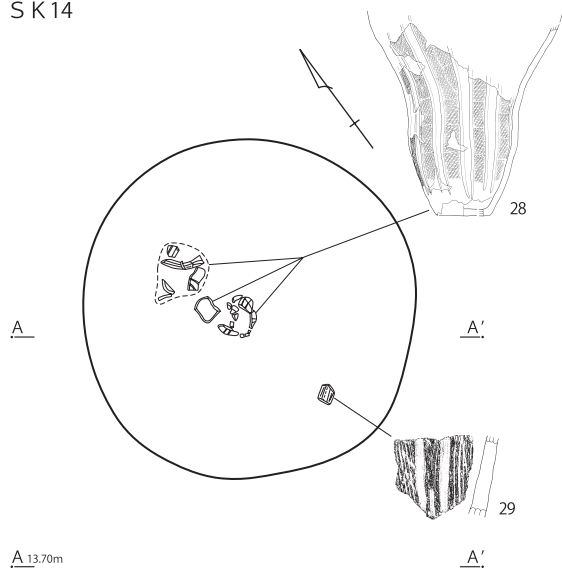
SK23
1 暗褐色土 (黒みつよい) ローム粒子・白色粒子・炭化物少量
2 暗褐色土 ガラス質の粒子入る かたくしめる
ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量 炭化物微量

SK24
1 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量 固くしめる
2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量 固くしめる 遺物を含む層 (黒みがかかる)
3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量 ソフトローム混入

SK25
1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック微量 炭化物少量 固くしめる層
2 暗褐色土 遺物含む (黒色強い)
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
ソフトローム多量 ブロック状に残る層

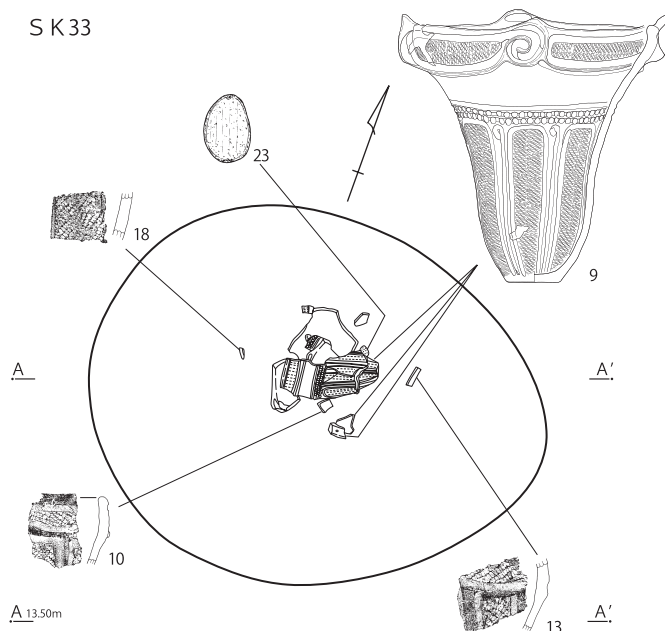
第476図 土壌 (2)

SK14



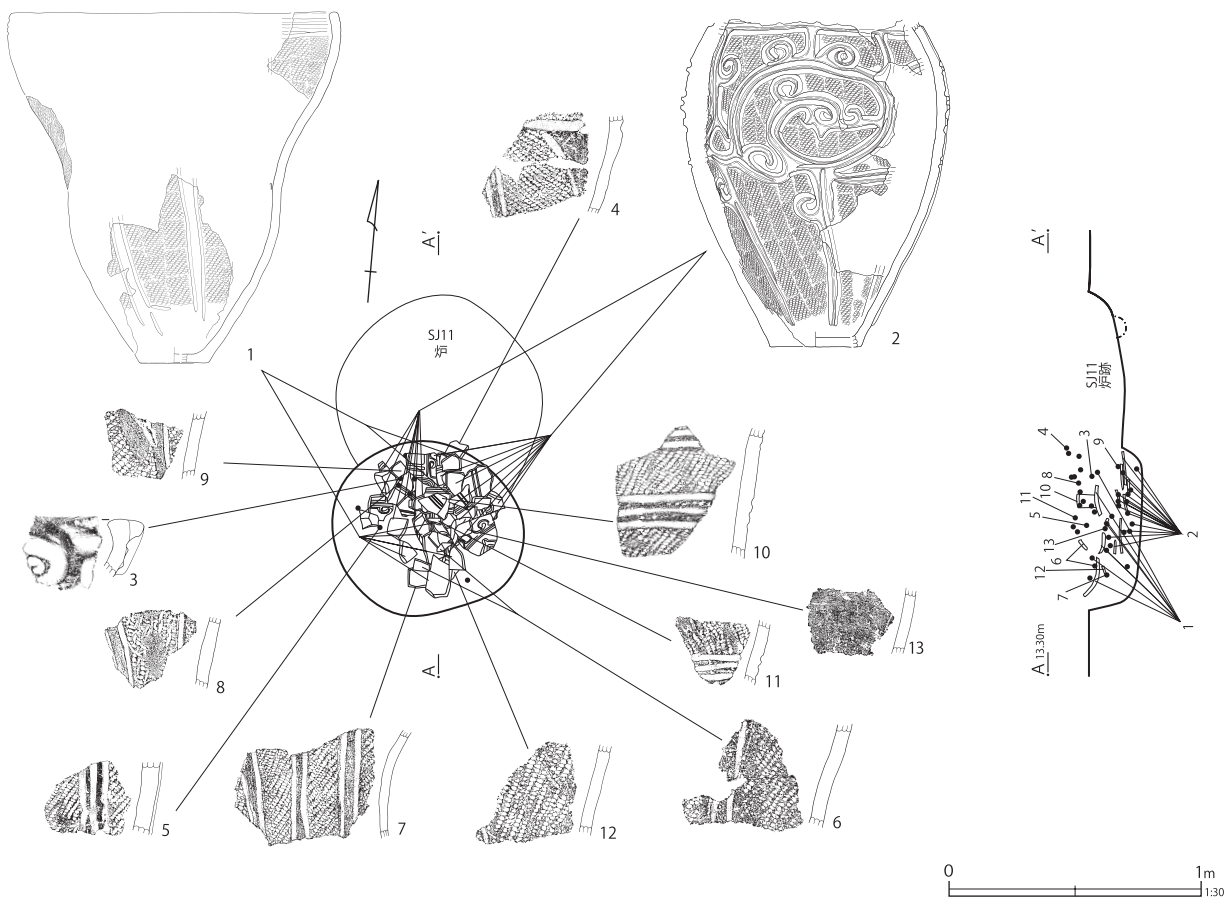
A 13.70m

SK33



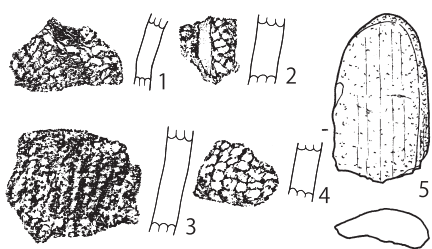
A 13.50m

SK69

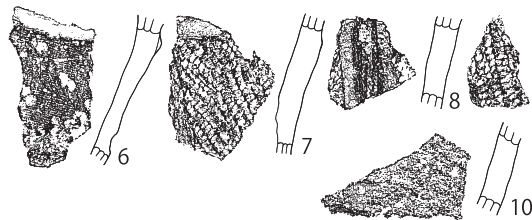


第 477 図 土壙遺物出土状況 (1)

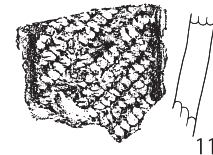
SK 4 (1~5)



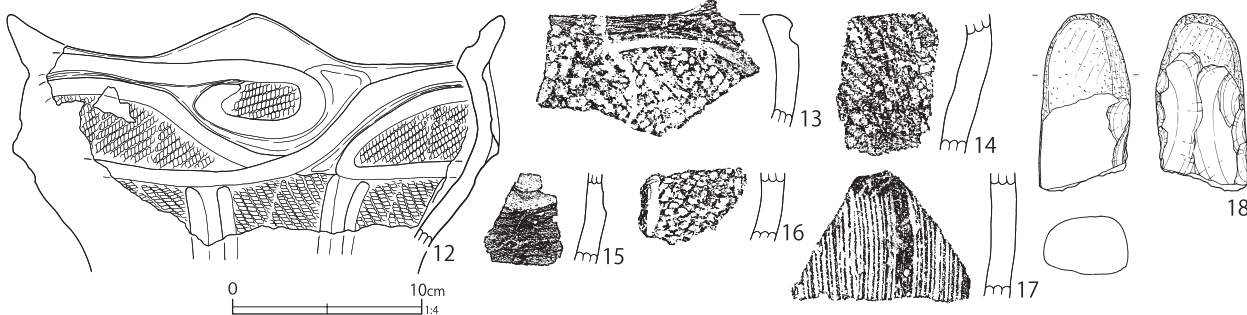
SK 7 (6~10)



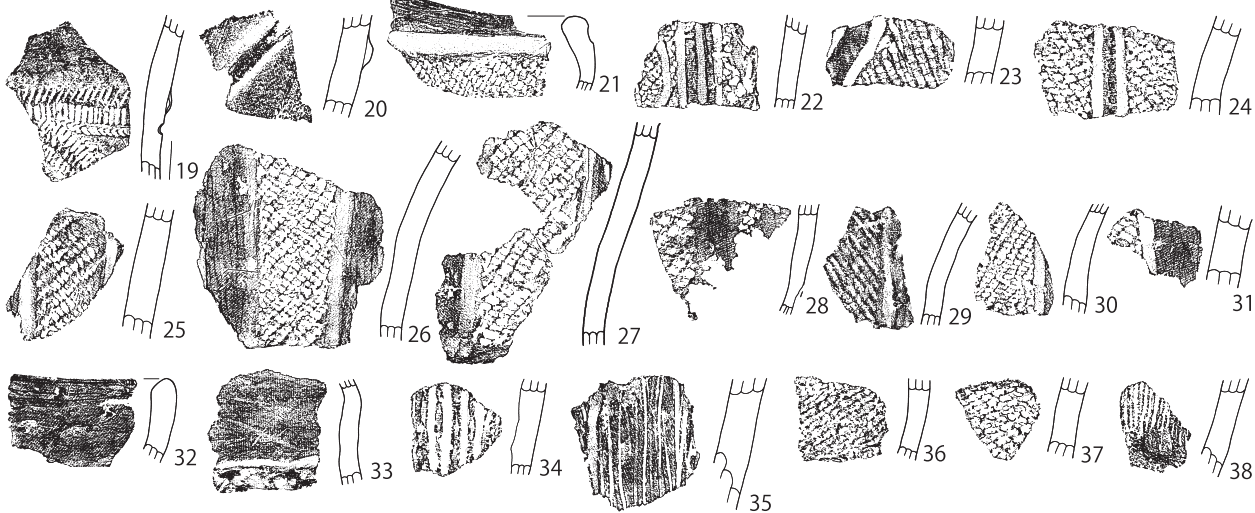
SK 8 (11)



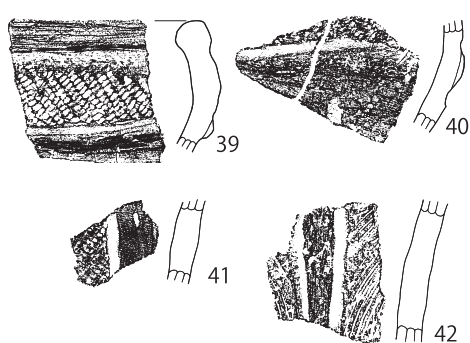
SK 6 (12~18)



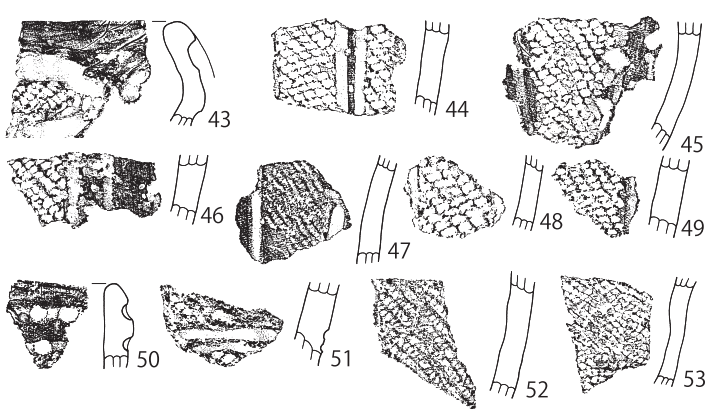
SK 5 (19~38)



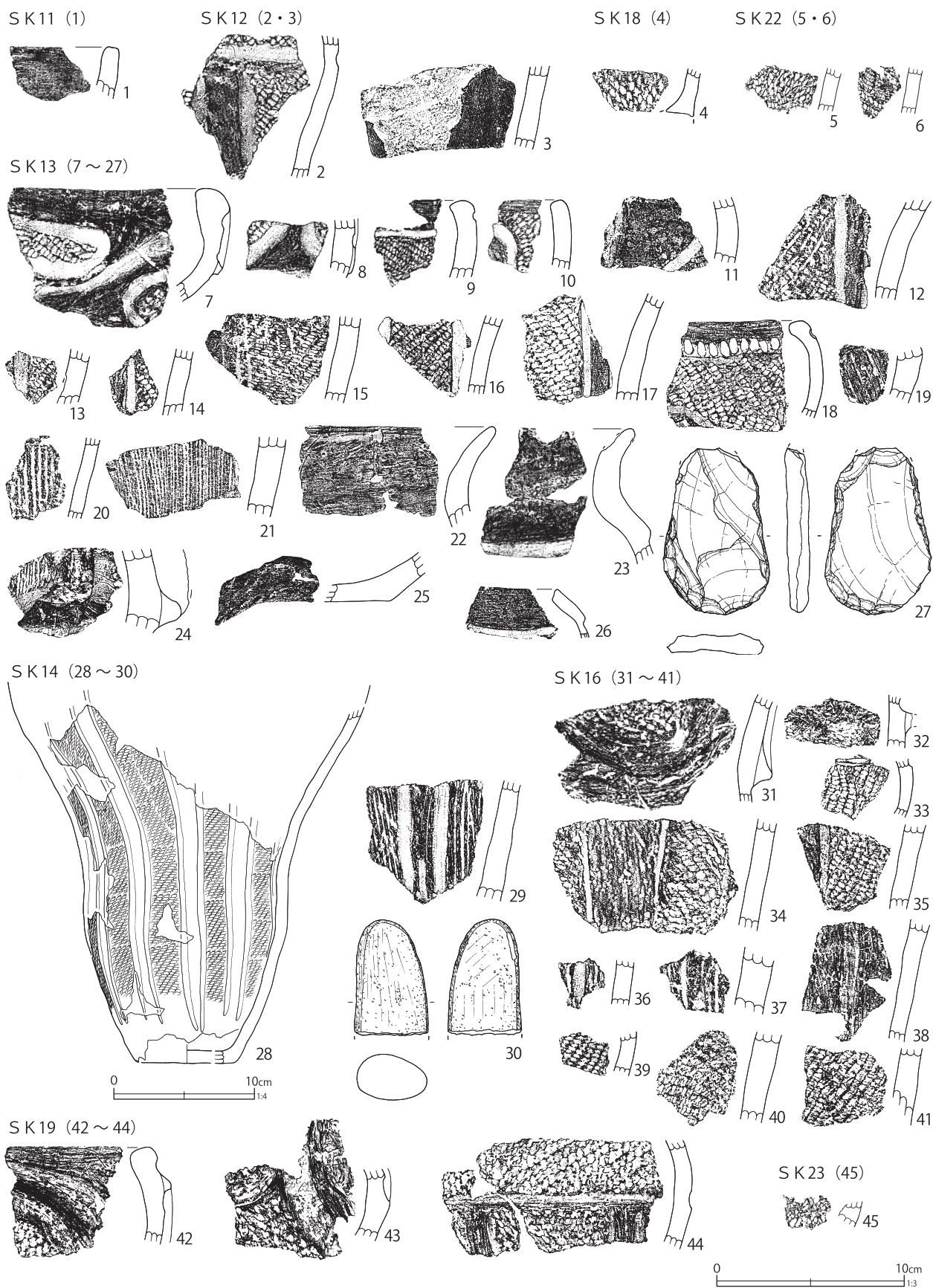
SK 9 (39~42)



SK 10 (43~53)



第 478 図 土壙出土遺物 (1)



第 479 図 土壇出土遺物 (2)

口縁部文様帯が施文されない土器である。胴部には磨消懸垂文が施される。18は連弧文系の土器である。19～21は地文のみが施文される深鉢形土器である。22～25は浅鉢形土器で、25は注口土器の口縁部である。27は打製石斧である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第14号土壙（第476・477・479図）

第14号土壙は、P－14グリッドに位置する。壁が直立気味に立ち上がっている。第479図28の深鉢形土器が北側よりに埋設されていた。

第479図28～30は出土した遺物である。28はキャリパー形の深鉢形土器で口縁部が欠損する。胴部には12単位の懸垂文が描かれるが、2本1組の沈線による磨消懸垂文が11単位施され、1単位のみ1本沈線が垂下されている。地文は単節RLの縄文で縦方向に施文される。底径6.8cm、残存高25.4cmである。29は条線が地文の曽利式系の土器で、磨消懸垂文が施されている。30は敲石である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第16号土壙（第476・479図）

第16号土壙は、P－14グリッドに位置する。

第479図31～41は出土した深鉢形土器の破片である。31～38はキャリパー形の土器で、胴部片には磨消懸垂文が施されている。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第18号土壙（第476・479図）

第18号土壙は、Q－11グリッドに位置する。

第479図4は深鉢形土器の底部に近い小片である。地文は撚糸文Lである。時期は中期後葉の加曽利E式期である。

第19号土壙（第476・479図）

第19号土壙は、Q－13グリッドに位置する。

第479図42～44はキャリパー形の深鉢形土器の破片である。同一個体である。近世の第8号溝跡に上部が壊されていることから、埋設されていた土器の残骸である可能性がある。土器は磨消懸垂文が施されている。時期は中期末葉の加曽利

EⅢ式期である。

第22号土壙（第476・479図）

第22号土壙は、R－10グリッドに位置する。

第479図5・6は出土した深鉢形土器の小片である。5は中期で、6の胎土には繊維が含まれており前期である。土壙の時期は不明である。

第23号土壙（第476・479図）

第23号土壙は、Q－13グリッドに位置する。

第479図45は中期の深鉢形土器の小片である。土壙の時期は不明である。

第24号土壙（第476・482図）

第24号土壙は、O－14グリッドに位置する。

第482図1～19は出土した深鉢形土器の破片である。1～14はキャリパー形の土器で、胴部には磨消懸垂文が施されている。15は口縁部文様帯がなくなっている。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第25号土壙（第476・482図）

第25号土壙はQ・R－14グリッドに位置する。

第482図20～40は出土した土器片である。26～32・38はキャリパー形の土器で、胴部には磨消懸垂文が施されている。33は連弧文系、34～37は曽利式系の土器である。39は浅鉢形土器、40は壺形土器の破片である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第26号土壙（第480・482図）

第26号土壙は、R－11グリッドに位置する。

第482図41～47は出土した土器片である。41～44は深鉢形土器、45～47は浅鉢形土器である。時期は中期後葉の加曽利E式期である。

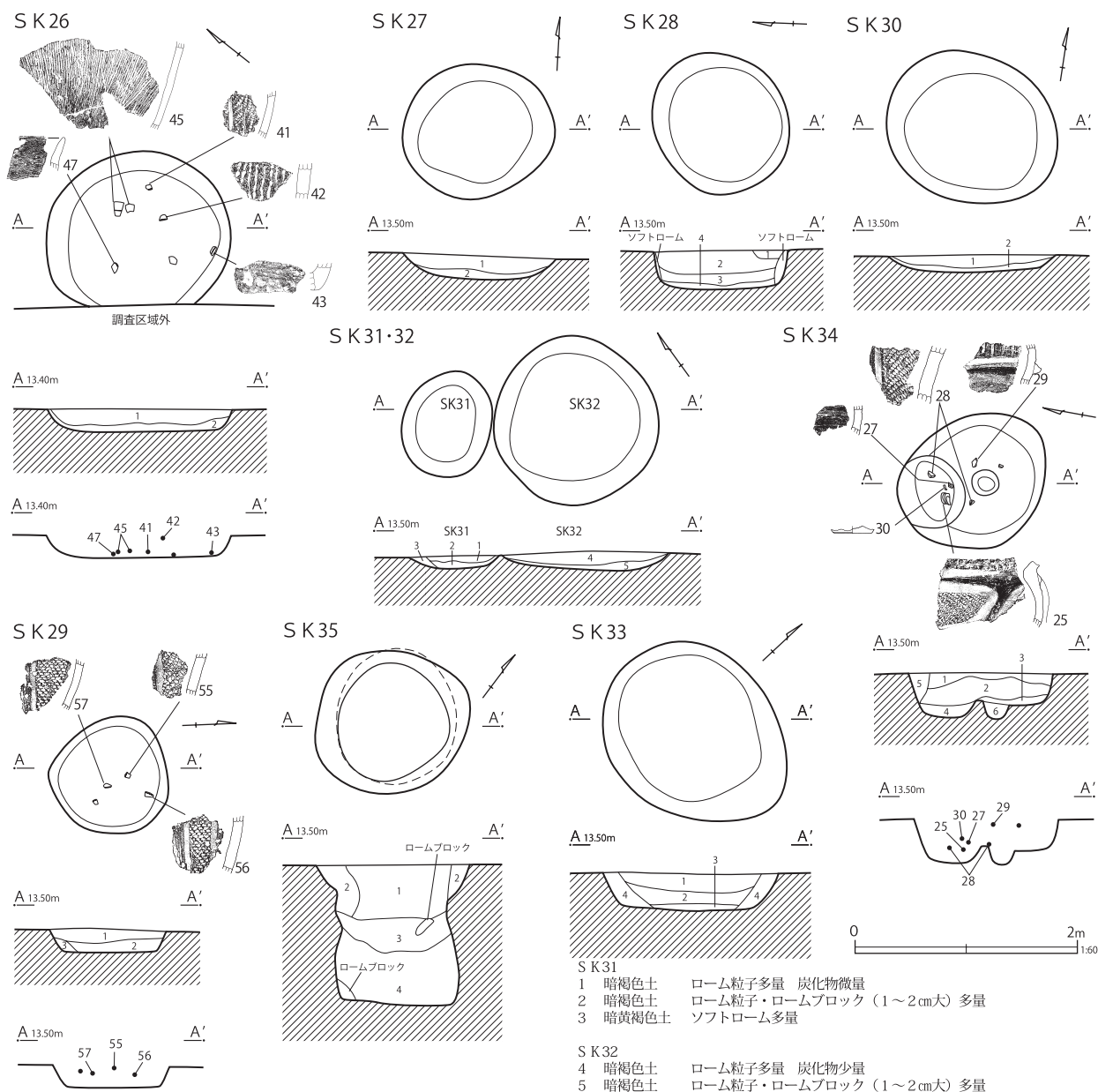
第28号土壙（第480・482図）

第28号土壙は、R－13グリッドに位置する。

第482図48～50は出土したキャリパー形の深鉢形土器の小片である。時期は中期後葉の加曽利E式期である。

第29号土壙（第480・482図）

第29号土壙は、R－12グリッドに位置する。



S K 26
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物少量 遺物含む層 固くしめる
2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大)・炭化物少量

S K 27
1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大) 微量 炭化物少量
黒み強く固くしめる
2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量

S K 28
1 暗褐色土 ソフトローム多量 炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物少量 固くしめる層で遺物含む
3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 ソフトロームブロック状に微量
固くしめる層 遺物含む
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~3cm大) 多量

S K 29
1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大) 微量 炭化物少量
遺物含む層
2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量 炭化物微量
3 暗黄褐色土 ロームブロック・ソフトローム多量

S K 30
1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大) 微量 炭化物少量
2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量

S K 31
1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量
3 暗黄褐色土 ソフトローム多量

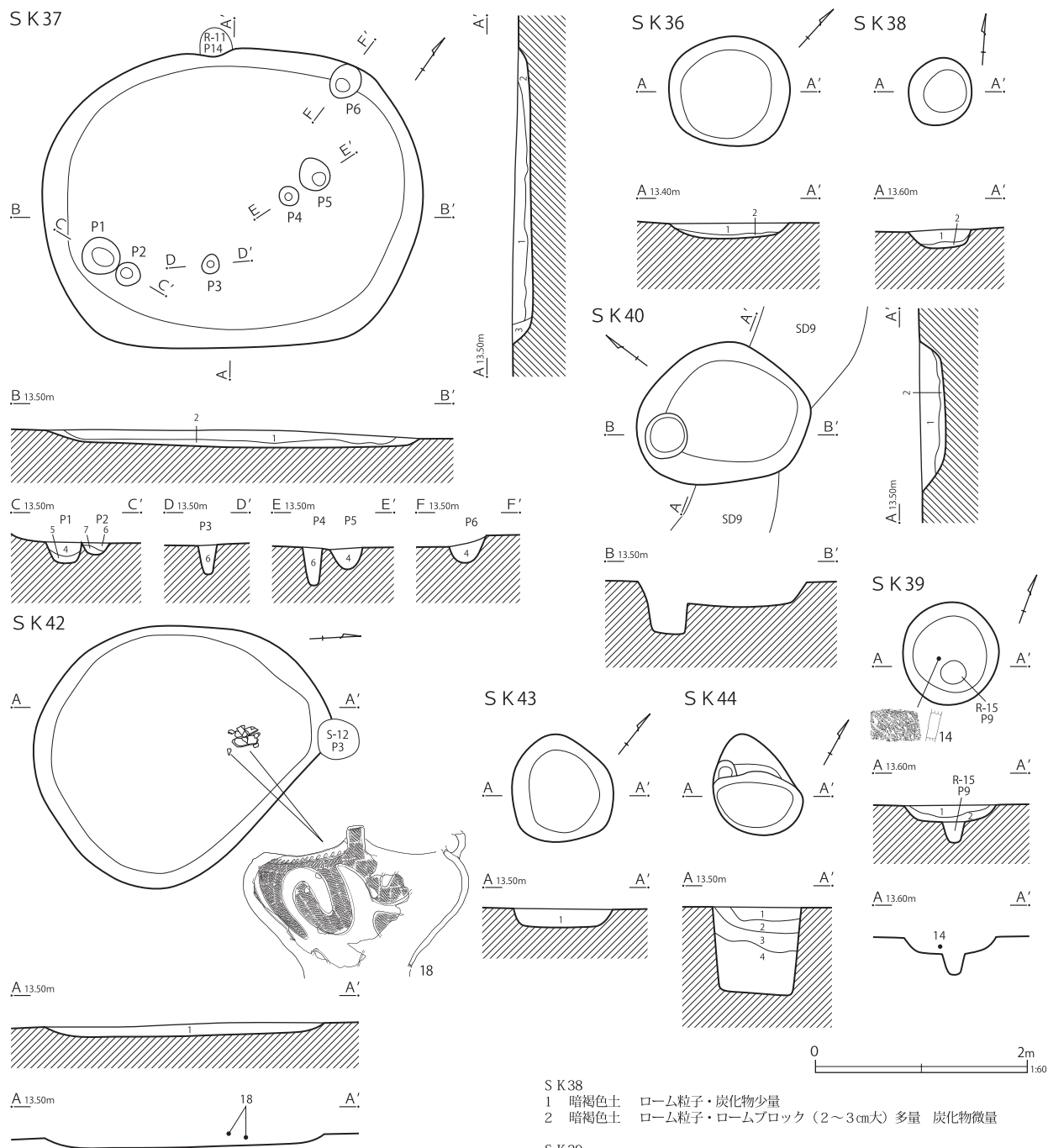
S K 32
4 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量

S K 33
1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 破片土器混入 固くしめる層
2 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大) 微量 炭化物少量
固くしめる層 深鉢形土器1個が底面に横たわって検出
3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量
4 暗褐色土 ソフトローム多量に混入する層

S K 34
1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック・炭化物微量 遺物含む層 固く
しめる
2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物少量 遺物含む層 固くしめる
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量
4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量 炭化物微量
5 暗黄褐色土 ロームブロック、ソフトローム主体
6 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大)・ソフトローム少量
土壌に伴う pit *出土土器は破片のみ

S K 35
1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量 固くしめる (黒みが強い)
2 暗褐色土 ソフトローム多量 壁が崩れたもの
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 少量 炭化物微量
固くしめる (黒みが強い)
4 暗褐色土 ローム粒子少量 粘性あり 1、3層の固いしめりが弱くなっている
*遺物は1、3層より主に出土するが土器は破片でごく少量
黒曜石剥片含むが細かい剥片や破片はみあたらない

第 480 図 土 壌 (3)

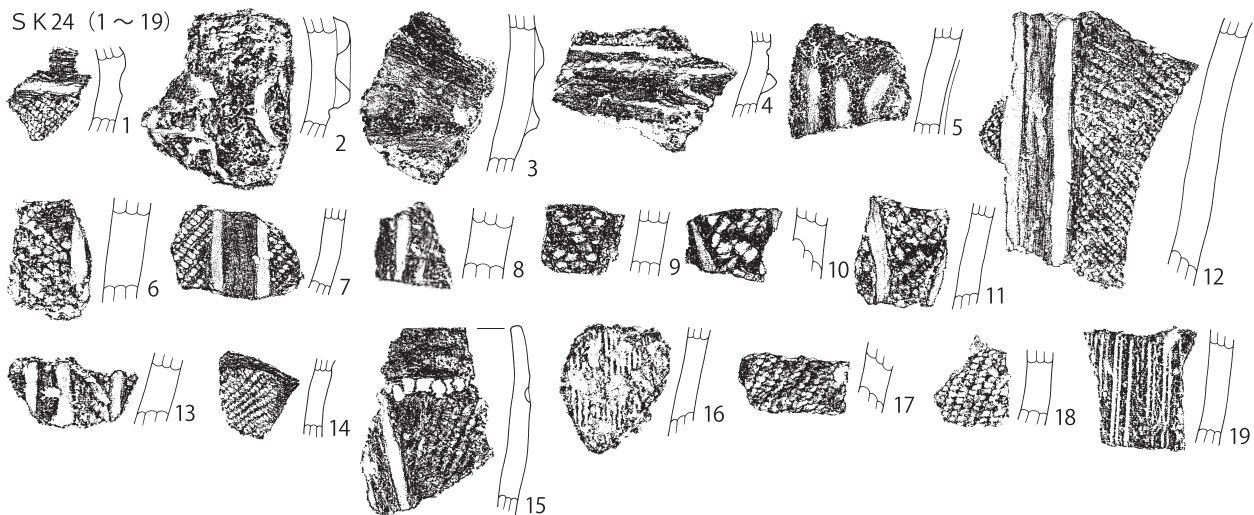


- S K 36
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量 炭化物微量
- S K 37
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物少量 ロームブロック (1~2cm大) 微量 固くしめる 黒みがつよい 遺物を含む層だが土器などの少破片のみ
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 ロームブロック (1~2cm大) 多量 ソフトローム多量 壁面が崩れたものと考えられる
 3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 ソフトローム少量
 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量
 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 少量 炭化物微量
 6 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 多量
 7 暗褐色土
 *SK37 は他の縄文の土壌の覆土と同じ黒みが強く固くしめる層が 1 層であった 遺物は 1 層中より出土するが少量である 住居の可能性もあったが規模が小さく好跡も検出されなかった。 SK37 に伴う pit は検出された小竪穴状の遺構である。

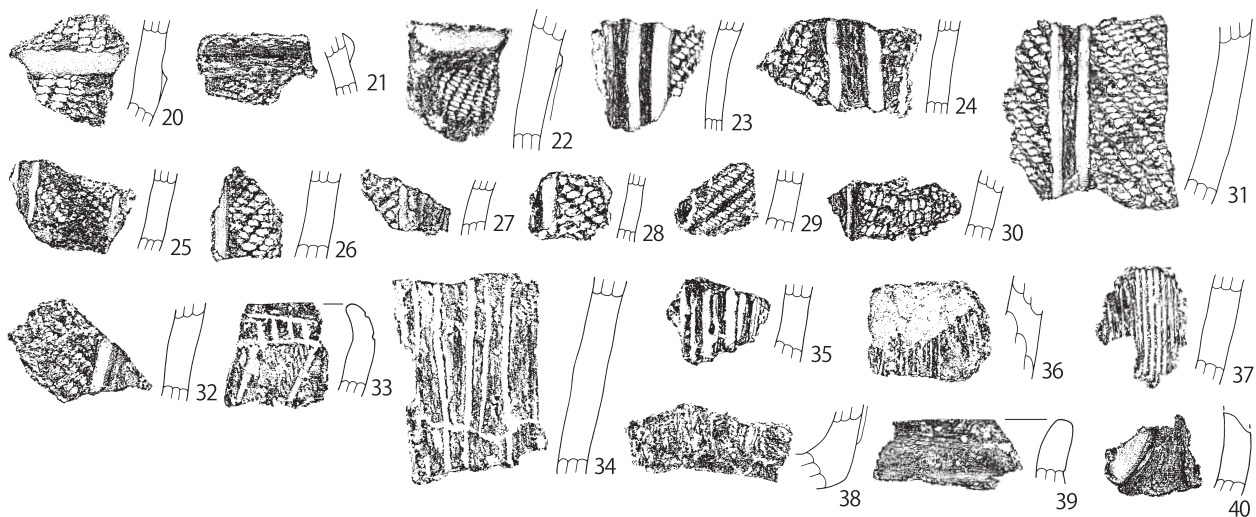
- S K 38
 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (2~3cm大) 多量 炭化物微量
- S K 39
 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (2~3cm大)・ソフトローム少量
- S K 40
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大)・炭化物微量 固くしめる
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1~2cm大) 多量 炭化物微量
 *遺物は 1 層中より少量出土する 土器はいずれも小破片である
- S K 42
 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
- S K 43
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 かたくしめる
- S K 44
 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量 炭化物少量 かたくしめる
 2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 かたくしめる
 3 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大) 微量 かたくしめる
 4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1cm大) 少量

第 481 図 土 壇 (4)

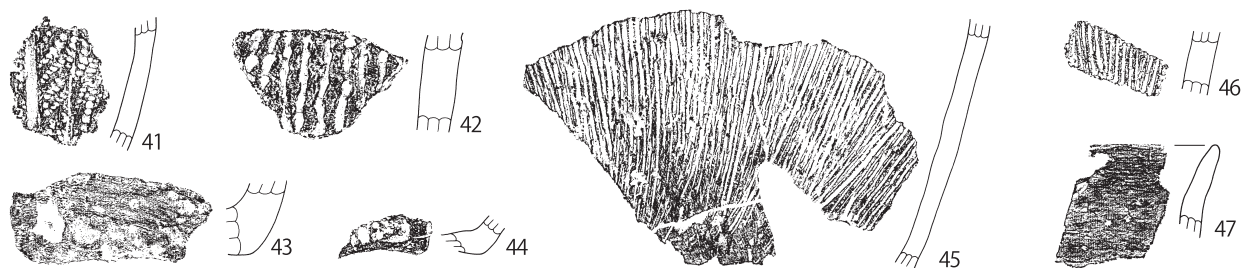
S K24 (1 ~ 19)



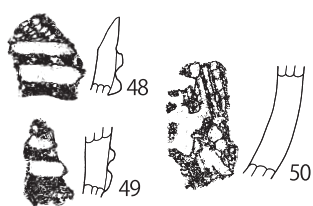
S K25 (20 ~ 40)



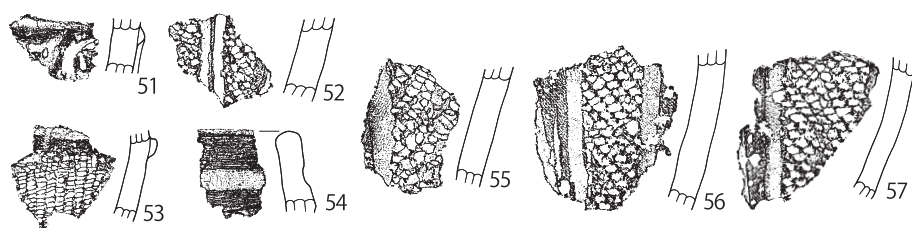
S K26 (41 ~ 47)



S K28 (48 ~ 50)



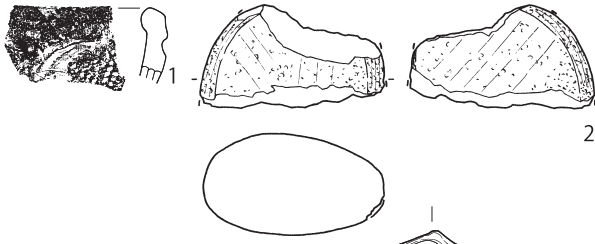
S K29 (51 ~ 57)



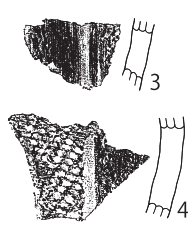
0 10cm
1:3

第 482 図 土壙出土遺物 (3)

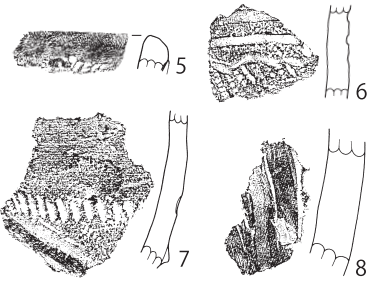
SK30 (1・2)



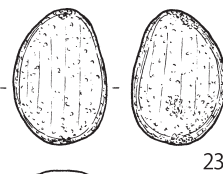
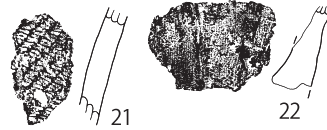
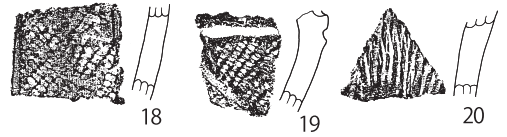
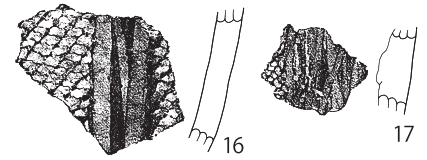
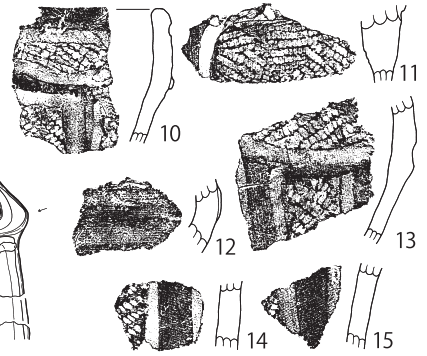
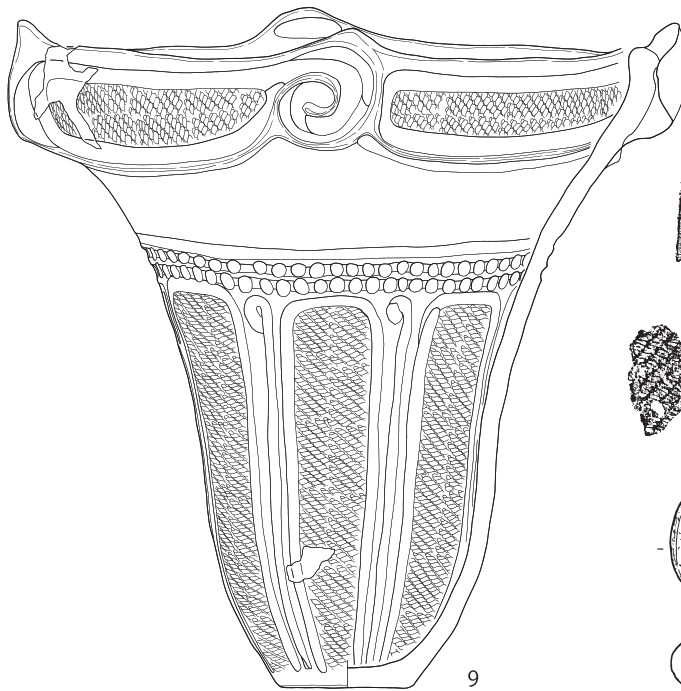
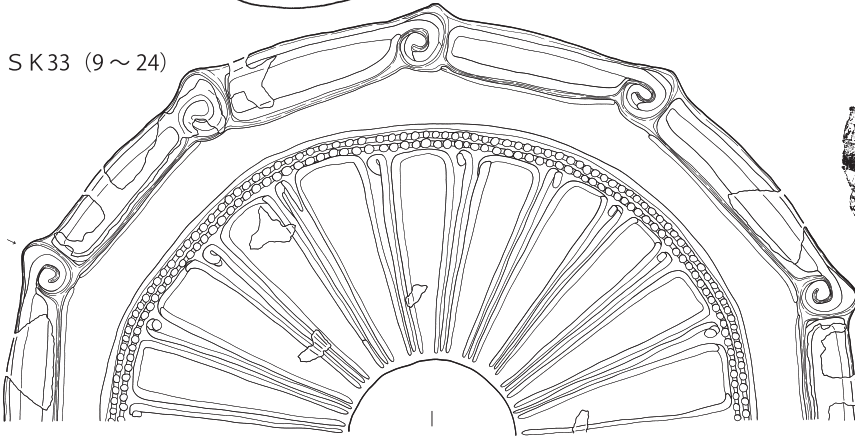
SK31 (3・4)



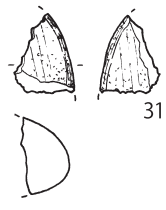
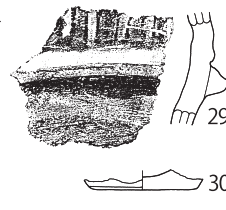
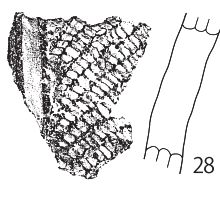
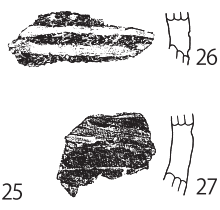
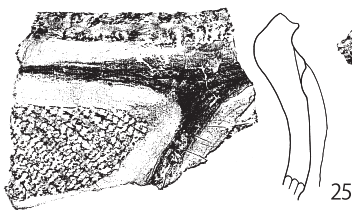
SK36 (5~8)



SK33 (9~24)



SK34 (25~31)



0 10cm
1:4

0 10cm
1:3

第 483 図 土壙出土遺物 (4)

第482図51～57は出土した土器片である。55～57の胴部には磨消懸垂文が施されている。時期は中期後葉の加曽利EⅢ式期である。

第30号土壙（第480・483図）

第30号土壙は、S－14グリッドに位置する。

第483図1はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部片で、2は磨石の破片である。1の時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第31号土壙（第480・483図）

第31号土壙は、R－14グリッドに位置する。

第483図3・4はキャリパー形の深鉢形土器の胴部片である。磨消懸垂文が施されている。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第33号土壙（第477・480・483図）

第33号土壙は、S－12グリッドに位置する。土壙中央から第483図9の横倒しの状況で深鉢形土器が出土した。9の下からは23の磨石が出土した。土壙墓の可能性が考えられる。

9はキャリパー形の深鉢形土器である。頸部の括れはほとんどなくなっている。口縁は4単位の波状口縁である。口縁部は隆帯で楕円形状に4単位の区画され、波状突起下では渦巻文が施文されている。頸部は無文で胴部とは3本の沈線が巡らされて胴部と区画される。施文された沈線のうち下2本内には、円形刺突文が施されている。胴部には逆U字状文とわらび手文が8単位ずつ交互に施文されている。わらび手の向きは一定ではなく、右向きが3本、左向きが5本である。地文は単節RLの縄文で、口縁は横方向に、胴部は縦方向に施文される。口径35.7cm、底径10.0cm、器高34.6cmである。第483図10～22は覆土から出土した土器片である。24は敲石である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第34号土壙（第480・483図）

第34号土壙は、R－14グリッドに位置する。

第483図25～31は出土した遺物である。25～28・30は深鉢形土器である。29は浅鉢形土器

である。31は磨石の破片である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第35号土壙（第480・487図）

第35号土壙は、P・Q－12グリッドに位置する。フラスコ状の土壙で、貯蔵穴の可能性はある。

第487図1～9は出土した土器である。1～6は覆土に繊維が含まれている。1は側面圧痕文が施文される花積式である。2～6は黒浜式である。7～9は諸磯式である。10は磨石である。深く掘り込まれていたが、出土遺物はごく少なかった。土壙の時期は前期と考えられる。

第36号土壙（第481・483図）

第36号土壙はT－21グリッドに位置する。

第483図5～8は出土した深鉢形土器片である。時期は中期である。

第37号土壙（第481・487図）

第37号土壙はR・S－11グリッドに位置する。

第487図11・12は出土した阿玉台式系の深鉢形土器である。時期は中期中葉の勝坂式期である。

第38号土壙（第481・487図）

第38号土壙は、R－15グリッドに位置する。

第487図13は深鉢形土器の小破片である。時期は中期と考えられる。

第39号土壙（第481・487図）

第39号土壙は、R－15グリッドに位置する。

第487図14は深鉢形土器の胴部片である。時期は中期と考えられる。

第40号土壙（第481・487図）

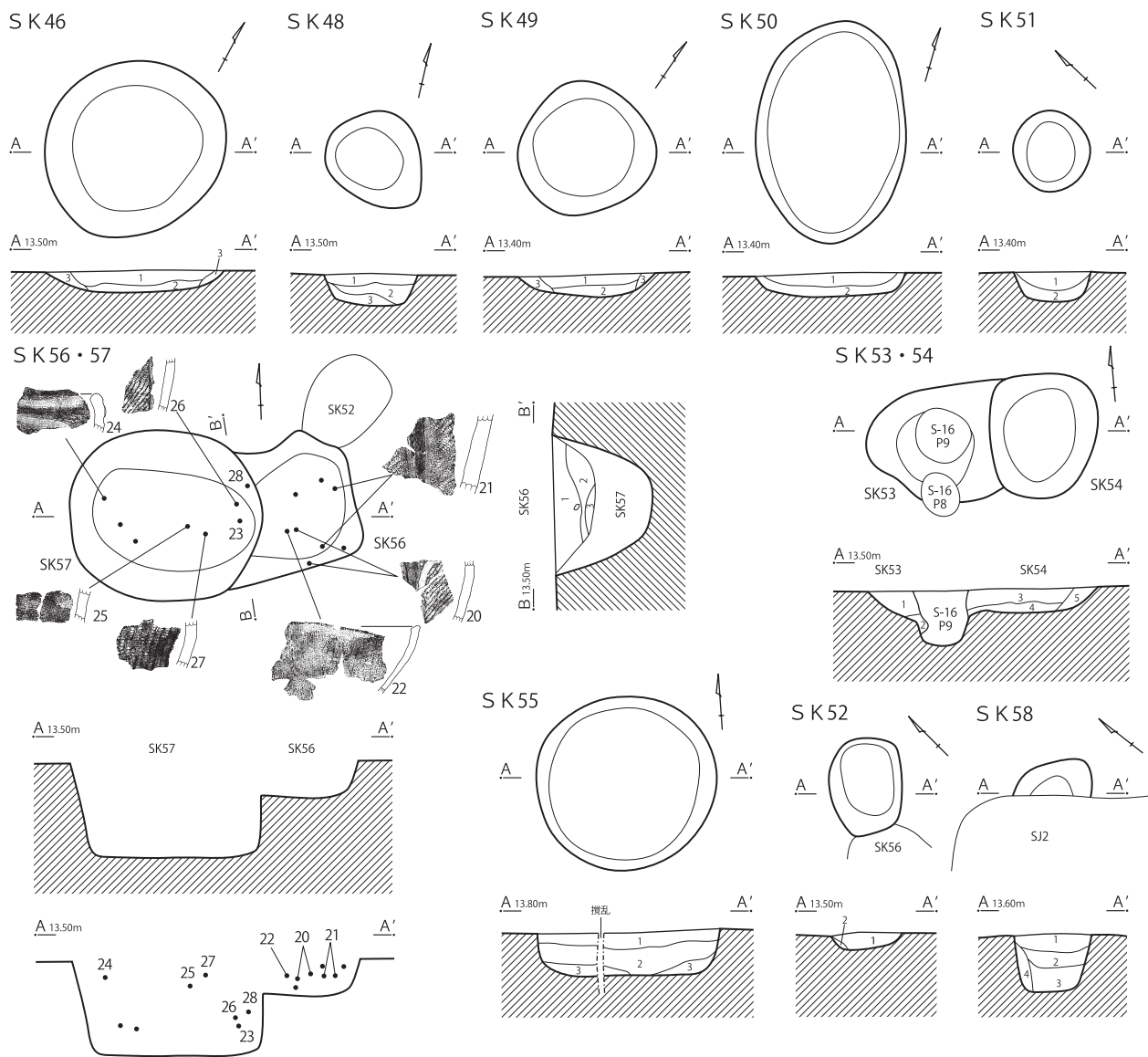
第40号土壙は、Q－16グリッドに位置する。

第487図15～17は深鉢形土器の胴部片である。中期後葉の加曽利E式期と考えられる。

第42号土壙（第481・487図）

第42号土壙は、S－12グリッドに位置する。

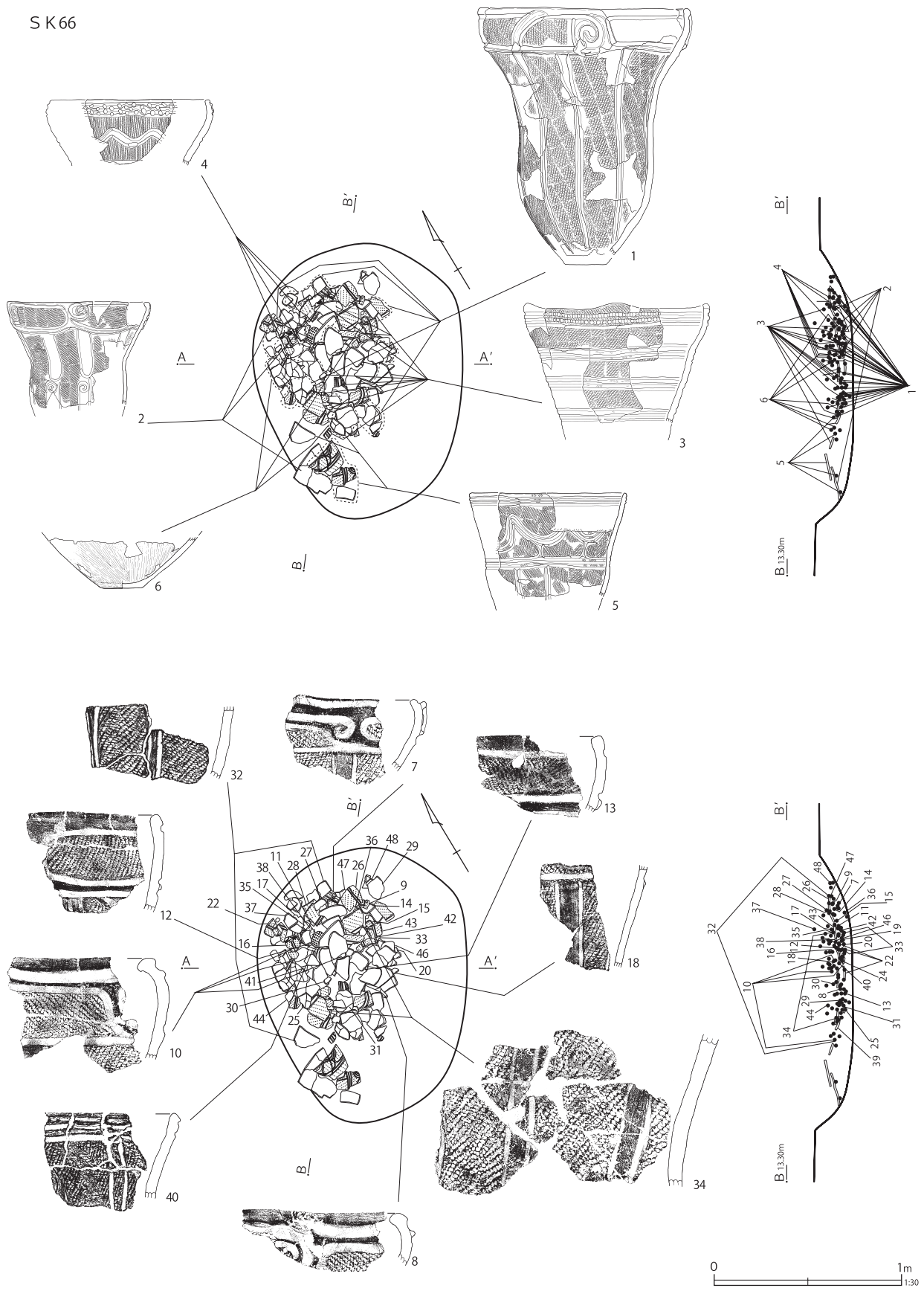
第487図18の深鉢形土器が、北側から検出された。まとまって出土しており、埋設されていたと考えられる。18は口縁から胴部が残存している。口縁部は深く内湾し、胴中央で大きく括れて



- 0 2m 1:60
- S K 46**
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子微量 炭化物少量 かたくしまる
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量
 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物微量
 ソフトロームが多量に混入する層
- S K 48**
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 かたくしまる
 2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量 かたくしまる
 3 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~3cm大) 少量
 炭化物微量 かたくしまる
- S K 49**
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1cm大) 少量
 炭化物微量
 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム多量に混入
- S K 50**
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック微量 炭化物微量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量 ソフトローム
 多量に混入
- S K 51**
 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 かたくしまる
 2 暗黄褐色土 ソフトロームが多量に混入 炭化物微量
- S K 52**
 1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量
 2 暗黄褐色土 ソフトローム多量
 * 1層上面の遺構確認面上から遺物が検出される
- S K 53・54**
 1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (3~4cm大) 少量
 2 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
 3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
 4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量
 5 暗褐色土 ソフトローム多量に混入
- S K 55**
 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
 2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 1層より色調暗い
 3 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1~2cm大) 微量
- S K 56**
 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (1cm未満) 多量 白色粒子微量
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック (0.5cm未満) 少量 白色粒子微量
 1層に比べ粘性強い
 3 暗褐色土 攪乱層 ローム粒斑状に多く混じる 白色粒子微量
 木の根による攪乱か 1~2層は覆土 自然堆積
- S K 58**
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 かたくしまる
 2 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物少量 かたくしまる
 3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 ロームブロック (1cm大) 微量
 かたくしまる
 4 暗黄褐色土 ロームブロック
 * 1層中より遺物わずかが出土

第484図 土壌 (5)

SK66



第 486 図 土壙遺物出土状況 (2)

いる。口縁は波状で1箇所波頂部に橋状把手が貼付される。口縁は微隆起状の隆帯で区画し、それに沿って刺突列が施される。胴部は括れを境に上下に分かれて文様が施文される。上部は口縁と連結し、渦巻文などの曲線的な文様が描かれる。括れより下部分は逆V字状の文様が施される。地文は単節LRの縄文で、文様内に充填されている。口縁直下は横方向、他は縦方向に施文される。推定口径28.6cm、残存高21.3cmである。第487図19～25は出土した土器片である。25は両耳壺の把手部分である。時期は加曽利EⅣ式土器の新段階で、後期初頭に降ると考えられる。

第43号土壙（第481・487図）

第43号土壙は、R－17グリッドに位置する。

第487図26・27は深鉢形土器の口縁部片である。時期は中期中葉の勝坂式期である。

第44号土壙（第481・487図）

第44号土壙は、R－16グリッドに位置する。

第487図28～32は出土した遺物である。28～31は深鉢形土器の胴部片である。28は磨消懸垂文が施文される。30は微隆起状の隆帯が施される。32は磨石である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第48号土壙（第484・487図）

第48号土壙は、R－17グリッドに位置する。

第487図33～36はキャリパー形の深鉢形土器片である。34・35は沈線で懸垂文が施されている。時期は中期後葉の加曽利E式期である。

第51号土壙（第484・487図）

第51号土壙は、T－14グリッドに位置する。

第487図37は深鉢形土器の口縁部で、半截竹管によって文様が施文される。時期は前期後葉の諸磯b式期である。

第52号土壙（第484・487図）

第52号土壙は、S－17グリッドに位置する。重複する第56号土壙と新旧関係は不明である。

第487図40・41は出土した浅鉢形土器で同一

個体である。40は口縁から肩部、41は胴部の破片である。肩部に隆帯で文様が施文される。文様は楕円区画文が施され、区画間に渦巻文が描かれる。区画内は2段の円形刺突文が施文される。胴部は逆U字状の区画文と区画内に円形刺突文が施される。推定口径41.0cm、残存高14.5cmである。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第55号土壙（第484・488図）

第55号土壙は、U－19グリッドに位置する。

第488図1～19は出土した遺物である。1～18は土器の破片で、1～14は深鉢形土器、15～18は浅鉢形土器である。1～8はキャリパー形の土器である。9は連弧文系、10・11は曾利式系の土器である。19は石錐である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

第56号土壙（第484・488図）

第56号土壙は、S－17グリッドに位置する。第57号土壙を壊している。

第488図20～22は出土した土器片である。22は浅鉢形土器である。23は敲石である。時期は中期終末の加曽利EⅣ式期である。

第57号土壙（第484・488図）

第57号土壙は、S－16・17グリッドに位置する。第56号土壙に壊されている。

第488図24～28は出土した土器片である。24～27は中期後葉の加曽利E式、28は堀之内2式の深鉢形土器である。時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期と考えられる。

第58号土壙（第484・488図）

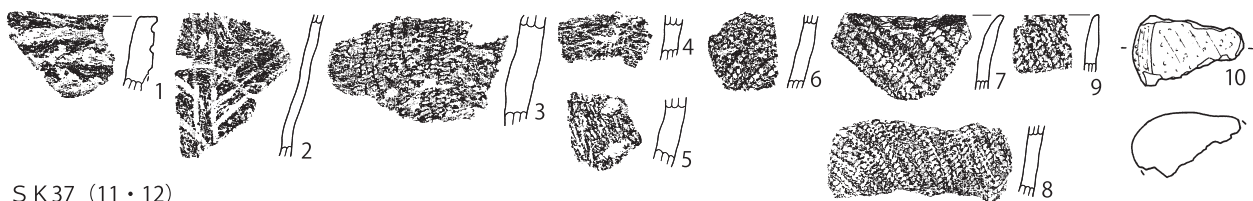
第58号土壙は、S－13グリッドに位置する。古墳時代の第2号住居跡に壊されている。

第488図29～32は出土したキャリパー形の深鉢形土器の胴部片である。磨消懸垂文が施されており、時期は中期末葉の加曽利EⅢ式期である。

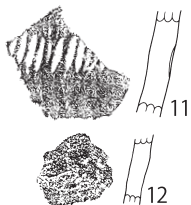
第59号土壙（第485・487図）

第59号土壙は、U・V－20グリッドに位置する。第62号土壙を壊している。

S K 35 (1 ~ 10)



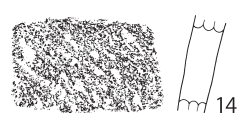
S K 37 (11 ~ 12)



S K 38 (13)



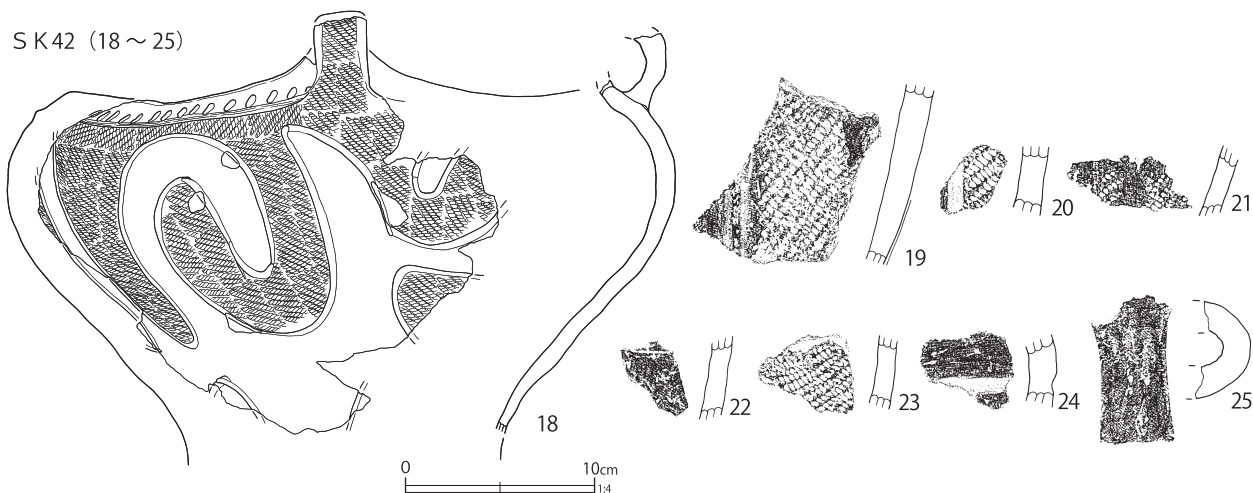
S K 39 (14)



S K 40 (15 ~ 17)



S K 42 (18 ~ 25)



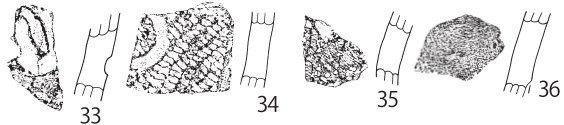
S K 43 (26 ~ 27)



S K 44 (28 ~ 32)



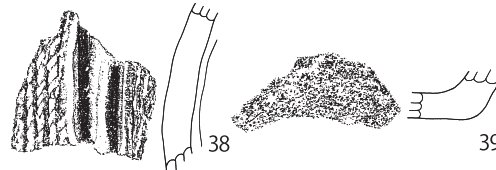
S K 48 (33 ~ 36)



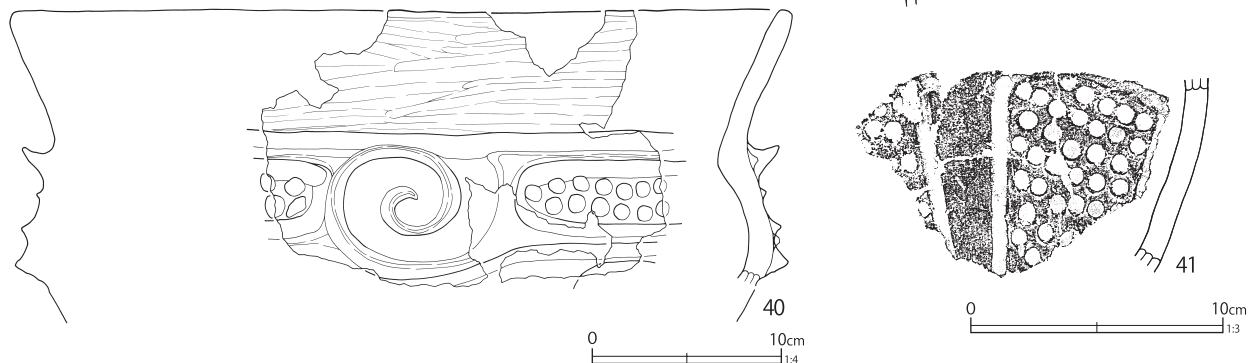
S K 51 (37)



S K 59 (38 ~ 39)

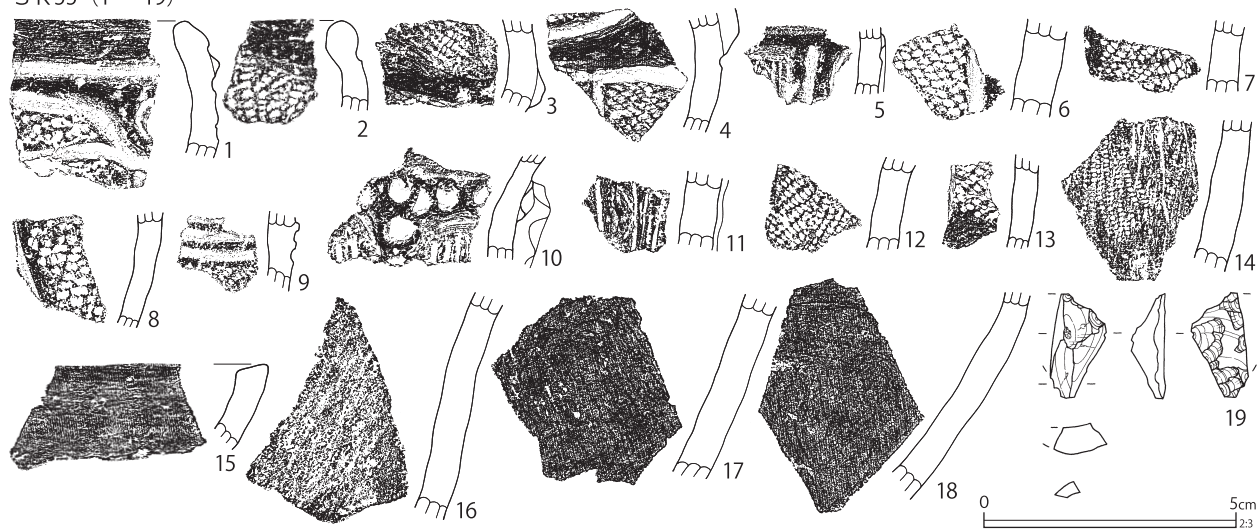


S K 52 (40 ~ 41)

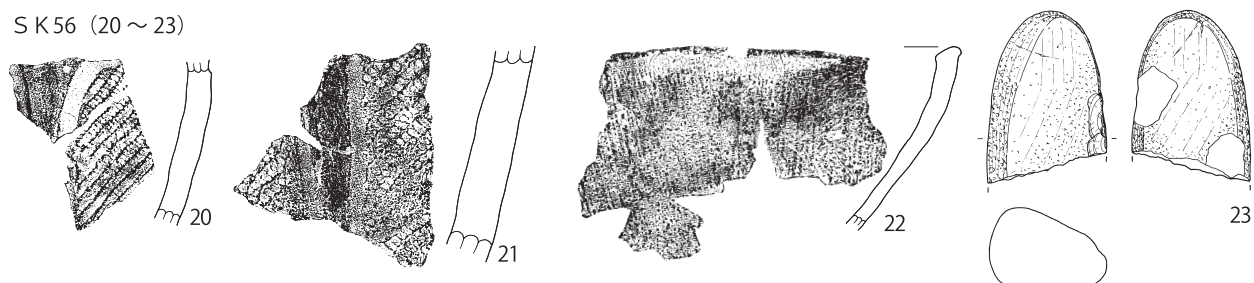


第 487 図 土壙出土遺物 (5)

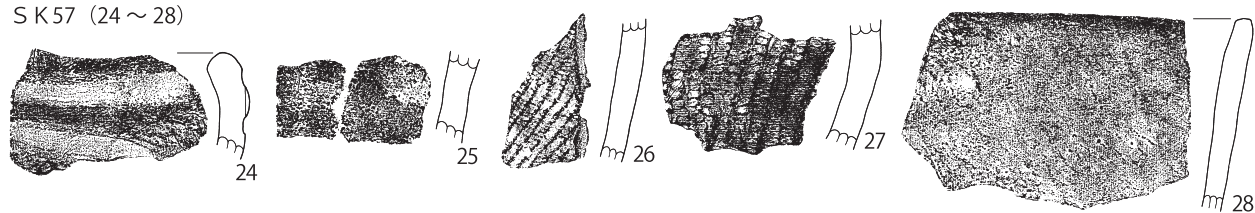
S K 55 (1 ~ 19)



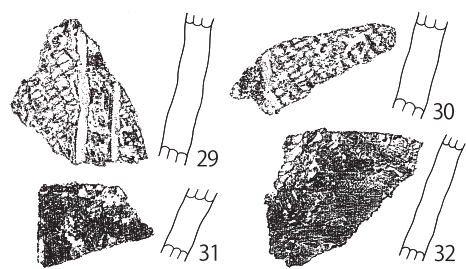
S K 56 (20 ~ 23)



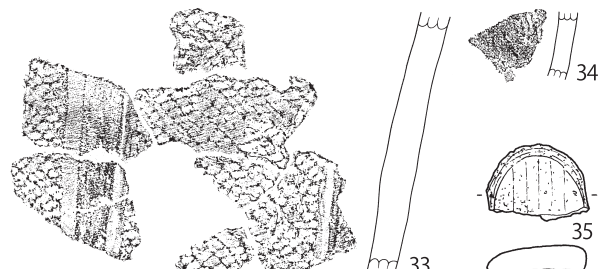
S K 57 (24 ~ 28)



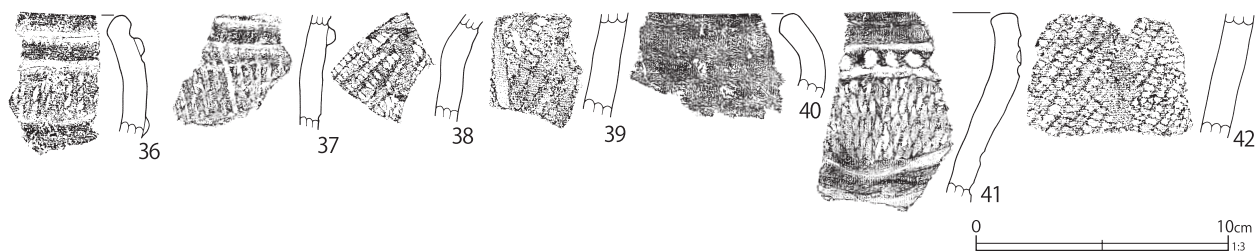
S K 58 (29 ~ 32)



S K 60 (33 ~ 35)

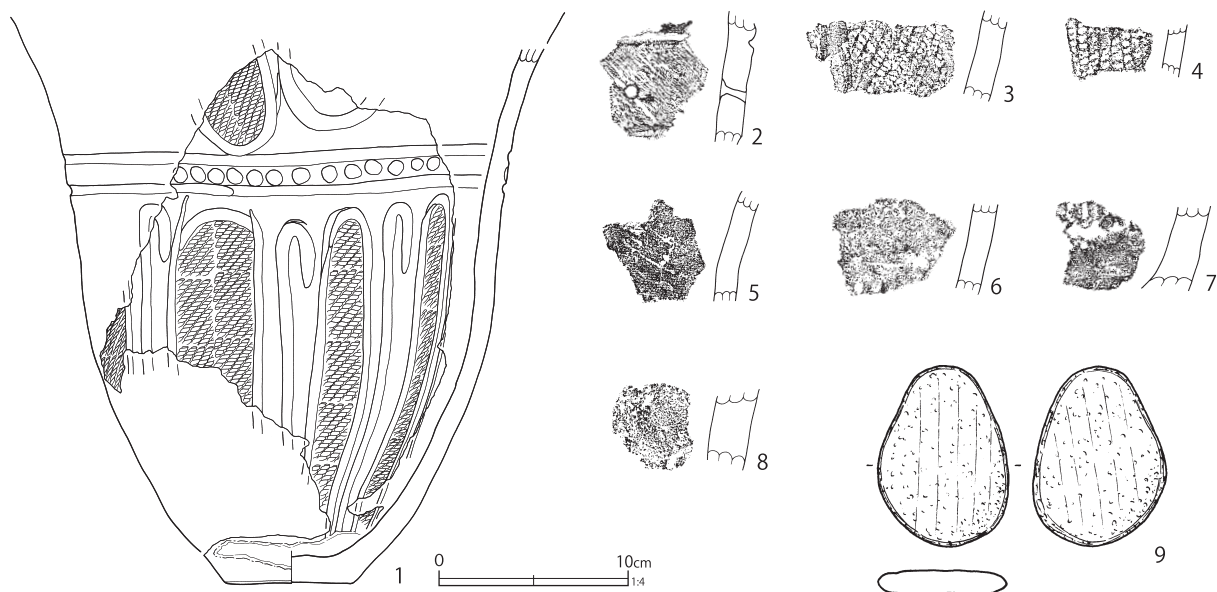


S K 61 (36 ~ 42)



第 488 図 土壙出土遺物 (6)

S K64 (1 ~ 9)



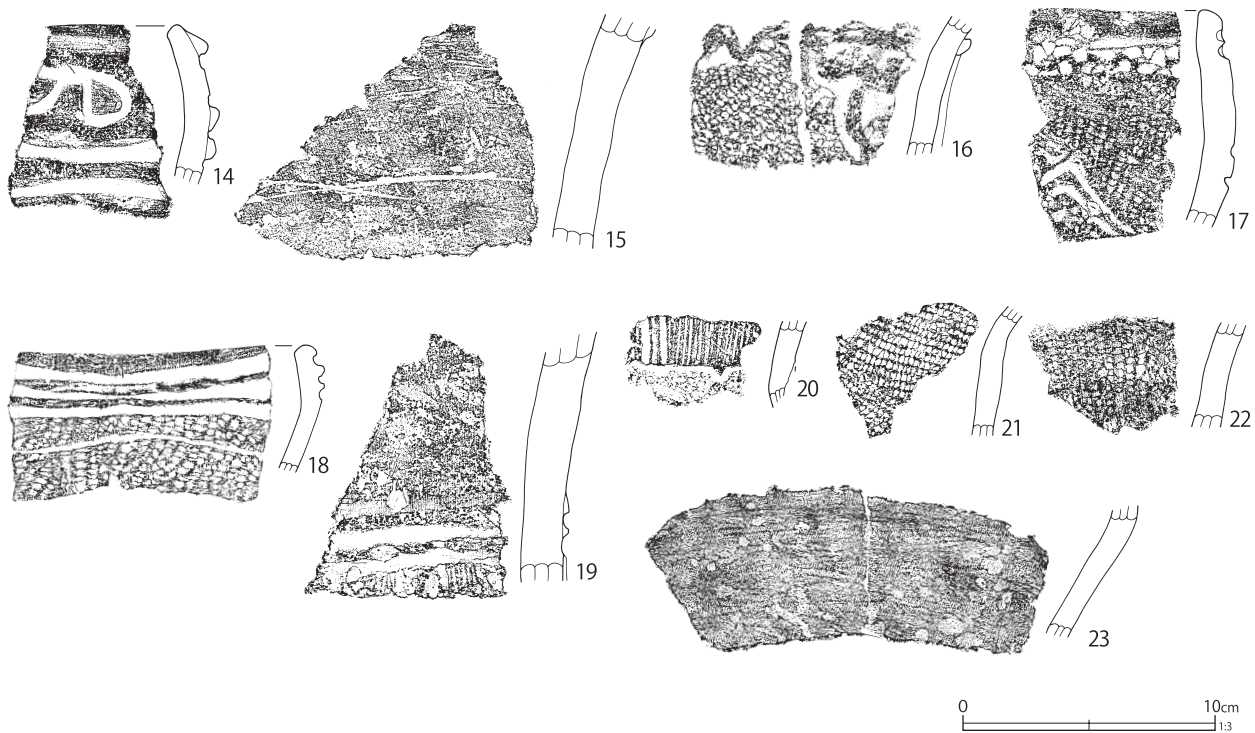
S K63 (10・11)



S K67 (12・13)

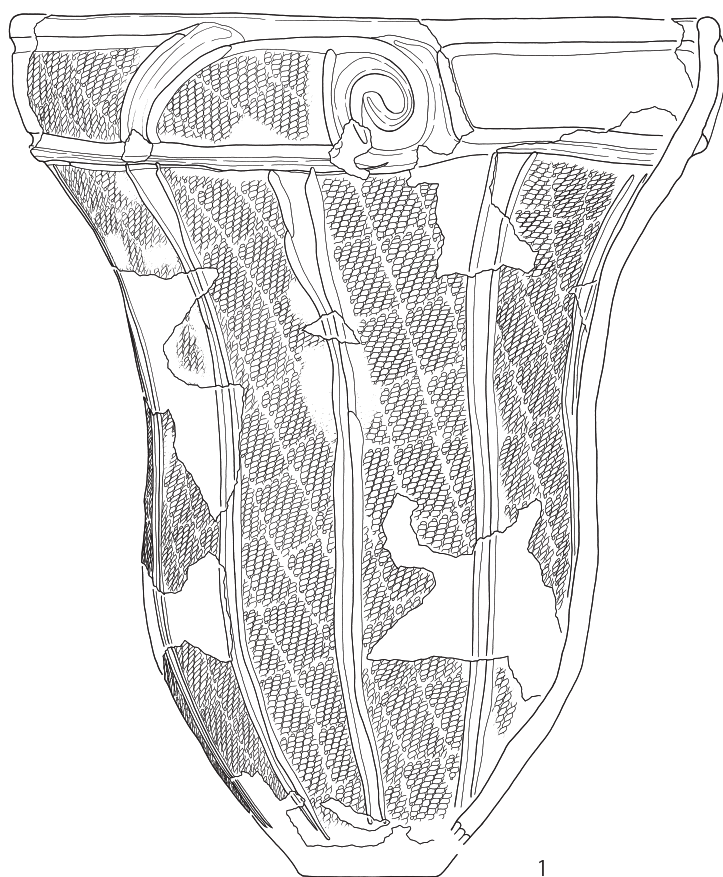
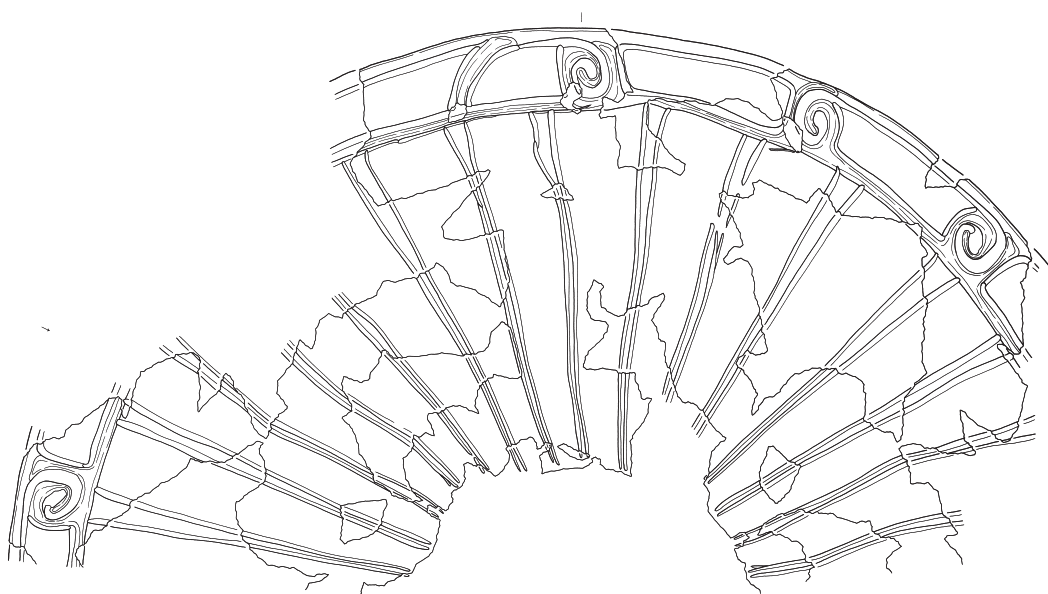


S K68 (14 ~ 23)



第 489 図 土壙出土遺物 (7)

S K66 (1 ~ 48)

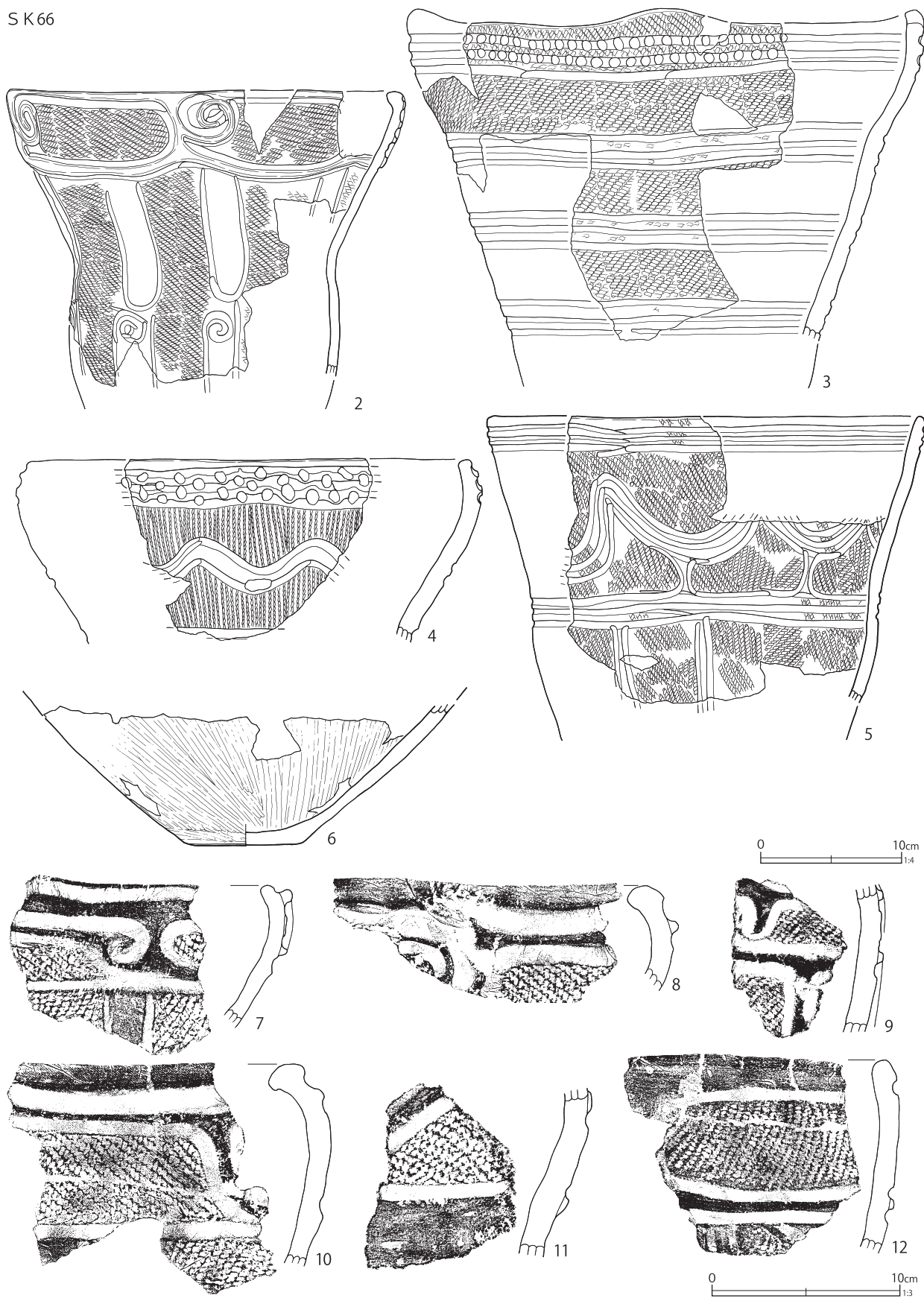


1

0 10cm
1:4

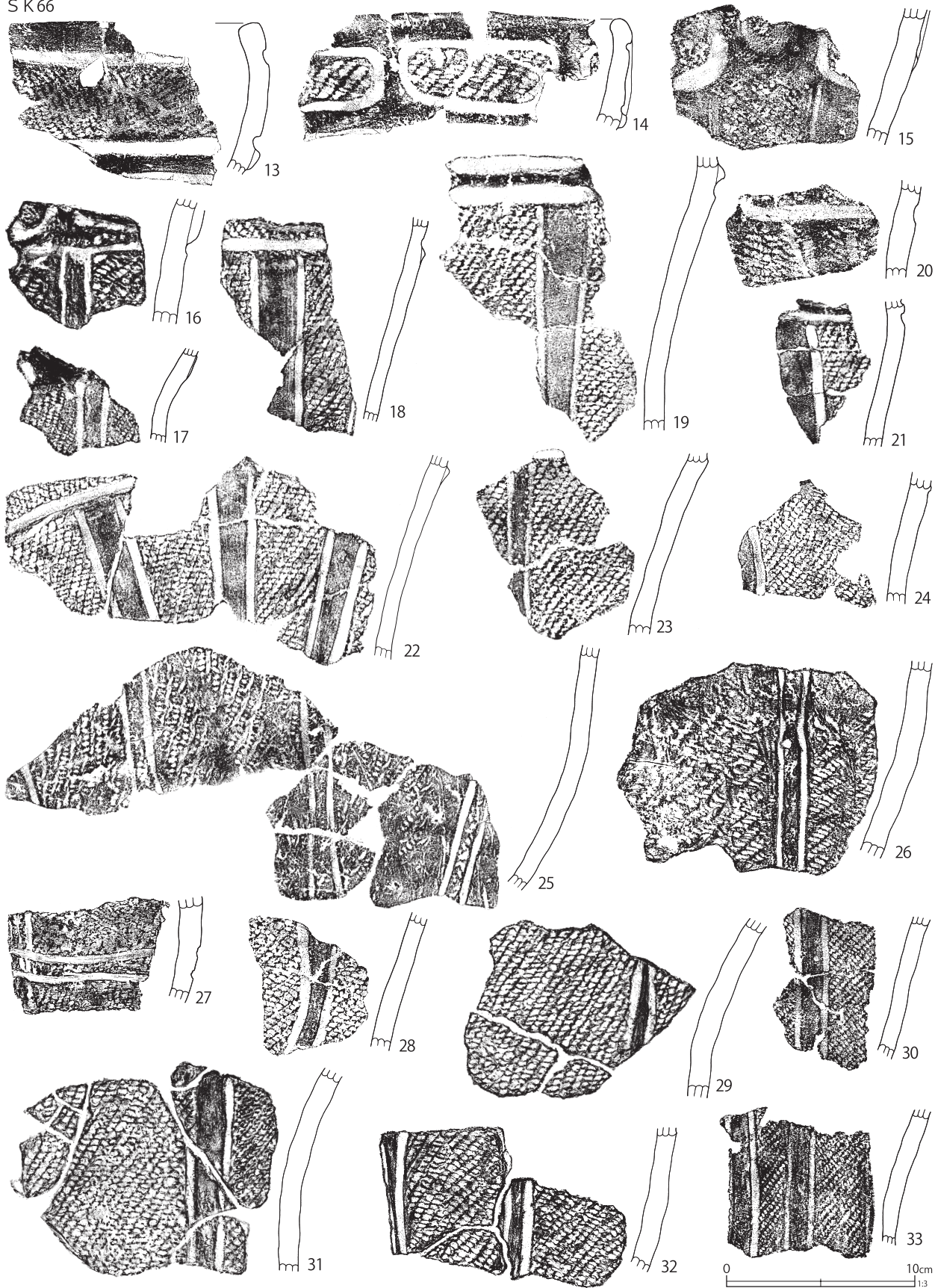
第 490 図 土壙出土遺物 (8)

SK66



第 491 図 土壙出土遺物 (9)

S K 66



第 492 図 土壙出土遺物 (10)